

金沢城跡石川門前土橋(通称石川橋)
発掘調査報告書Ⅰ

1997年3月

石川県立埋蔵文化財センター

金沢城跡石川門前土橋(通称石川橋)
発掘調査報告書Ⅰ

1997年3月

石川県立埋蔵文化財センター



1 金沢御堂の土橋と池の堆積

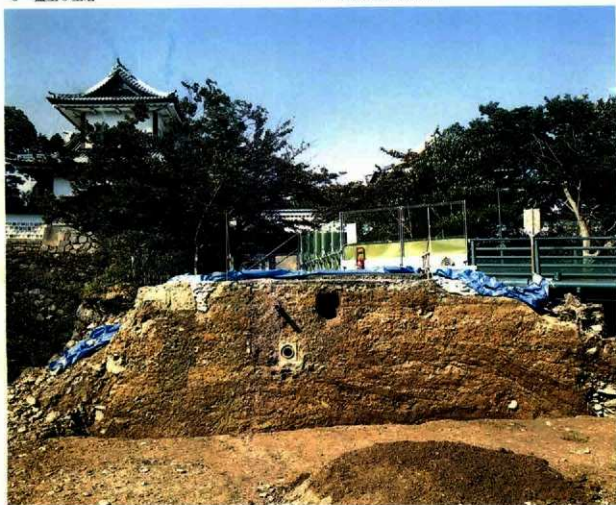
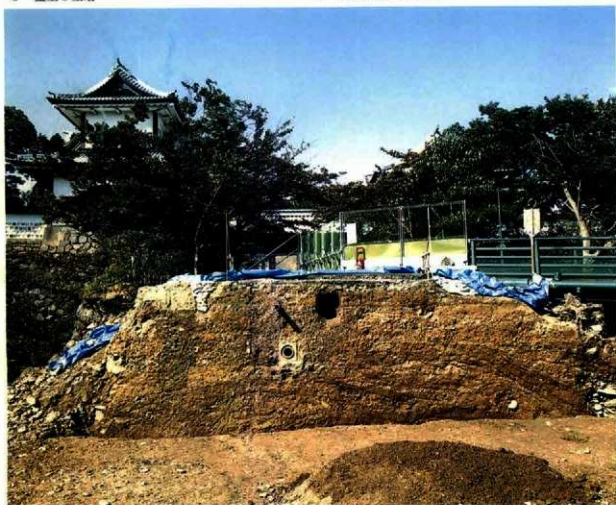
2 江戸後期の土橋





3 盛土3土層

4 石川門調査区土層

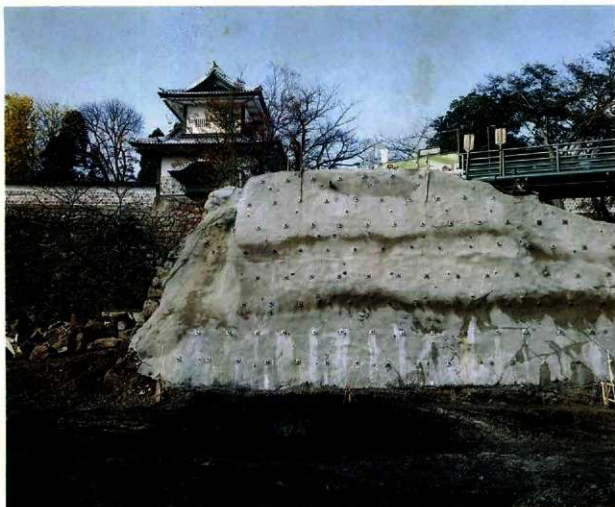




5 木桶と石川門調査区土層

6 石垣根石と盛土





7 盛土6と石川門

8 兼六園調査区の盛土6



例 言

- 1 本書は、金沢城跡石川門前の発掘調査報告書 第1分冊である。
- 2 発掘調査は、シンボルロード寺町今町線道路整備事業にともなうもので、平成4年度から同6年度の三ヶ年度にわたっておこなった。発掘調査や試掘調査等の埋蔵文化財調査は、石川県土木部の依頼を受けて石川県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 分布調査や試掘調査、立会調査は、石川県立埋蔵文化財センター 企画調整課が主に担当し、発掘調査は調査第一課が担当した。平成4年度は、調査第一課長 平田天秋の指導の下に主事 伊藤雅文と嘱託 四柳正彦が担当した。平成5年度は、調査第一課長 中島俊一の指導の下に伊藤と主事 金山哲哉が担当した。平成6年度は、伊藤と主任主事 澤田まさ子が担当した。
- 4 通常であると、それぞれの年度で調査回数を数えるが、本調査の場合、調査担当が発掘調査と試掘調査、立会調査など全てに係わっており、その成果を含んだ調査報告内容となっているので、調査年次で調査を区分することにする。それぞれの調査期間は、第1章第2節を参照。
- 5 現地調査に際し、石川県土木部には街中の調査ということもあって種々の便宜をはかっていたが、工事並行の発掘調査なので工事側との調整もおこなっていた。また、工事請負業者にも発掘調査にご協力をいただいた。ともに深く感謝致します。
- 6 遺物等の資料整理の多くは、社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会に委託した。担当は河村裕子を班長として小林直子、黒田和子、竹内弘美、川崎由紀子、小屋玲子、耕西由美子である。河村班長には、伊藤の無理な注文をいろいろ聞いていただいて感謝致します。また、直営作業には、藤重啓、中村繁和、洪仲子、海野美香子、島崎博美の諸氏諸嬢の補助を得て伊藤が統括した。
- 7 本書の作成は、伊藤が執筆及び編集をおこなった。本事業にかかる発掘調査報告書は、2ヶ年度にわたって報告し、それぞれ第1分冊、第2分冊とする。
第1分冊として17世紀以降の近世・近代編として編集している。第1分冊で報告する遺物は基本的な事実の確認にぞとめて分類のための基礎とし、詳しい分類などの作業は第2分冊で一括しておこう。同報告書の第2分冊は、戦国時代・分析研究編として平成9年度に刊行予定である。また、第2分冊には、第1分冊で載せることのできなかった遺物写真や計測データなど、あるいは遺漏したものを補遺としてまとめることとする。
- 8 石川門前土橋発掘調査に関する概要報告書を平成6年3月に刊行している。概報の記述内容と本報告の内容と異なるところは、本報告をもって訂正するものとする。
- 9 シンボルロード整備事業に係る発掘調査として、平成6年度に金沢城車橋門跡発掘調査もおこない、平成8年3月に報告書を刊行しているので、あわせて参考にしていただきたい。
- 10 現地調査や資料整理・本報告書作成にあたり、以下の方々にご教示あるいはお世話になりました。深く感謝致します。(敬称略・順不同)
久保 智康・小野 正敏・中井 均・加藤 理文・木戸 雅寿・松井 一朗・青木 治夫
福田 弘光・寒川 旭・中野 節子・垣内 光次郎・藤田 邦雄・増山 仁・滝川 重徳
本田 秀生・布尾 和史・浜岡 伸也・荒木 澄子・田村 昌弘・宮江 伸一・木立 雅朗
藤沢 良祐・戸潤 幹夫・下郷 稔・藤 則雄・北垣 聡一郎・宮本 直哉・宮田 進一

目 次

序 文		
例 言		
第 1 章	調査にいたる経緯と経過	1
第 1 節	調査の契機と経過	1
a)	調査の原因	1
b)	埋蔵文化財調査の経緯	2
第 2 節	調査日誌抄録	16
第 2 章	試掘調査と事前調査	32
第 1 節	試掘調査と立会調査の概要	32
第 2 節	百間堀通りの試掘調査	32
第 3 節	飯橋の調査	34
第 4 節	平成 4 年度の発掘調査	36
第 5 節	水道管切り直し調査	38
第 3 章	金沢御堂以前の考古学的遺物	40
第 4 章	近代以降の遺構と遺物	42
第 1 節	石川橋建設の落ち込み遺構	42
第 2 節	導水・排水遺構	42
a)	溝と溜め井	42
b)	S D 01 と白鳥堀近代石垣	46
第 3 節	近代遺構等の出土遺物	47
a)	表土及び流土	47
b)	石川橋建設落ち込み遺構	47
c)	S D 01 ~ 04	50
d)	表土近代遺構出土瓦等	50
第 5 章	沈床圃調査区	73
第 1 節	基本土層と調査の概要	73
第 2 節	堀の堆積層と出土遺物	73
a)	江戸後期の百間堀	73
b)	江戸前期の百間堀	77
c)	金沢御堂の池	81
第 6 章	石川門調査区	88
第 1 節	基本土層と調査の概要	88
第 2 節	盛土 1	88
a)	盛土の状況	88
b)	瓦たまり 1	94
c)	盛土 1 出土遺物	94
d)	瓦たまり 1 出土遺物	94
第 3 節	盛土 2	104
a)	盛土の状況	104
b)	出土遺物	105
第 4 節	盛土 3	105
a)	盛土の状況	105

b)	遺物の出土状況	108
c)	出土遺物	111
第5節	盛土4	172
a)	盛土の状況	172
b)	出土遺物	175
第6節	盛土4に伴う土橋の構築	177
第7節	盛土5	178
a)	盛土の状況	178
b)	出土遺物	181
第8節	盛土6	182
a)	盛土の状況	182
第7章	石川門調査区出土木樋と辰巳用水石管	187
第1節	木樋	187
a)	木樋の構造	187
b)	出土木樋の観察	191
c)	出土遺物	197
第2節	辰巳用水石管	198
a)	石管の構造と排水溝	198
b)	石管設置以前の遺構	200
第8章	兼六園調査区	203
第1節	盛土の構成	203
第2節	辰巳用水石管と木樋遺構	212
第9章	石川門前土橋の石垣	213
第1節	石垣調査の方法	213
第2節	百間堀の石垣	213
a)	石垣の構成	213
b)	根石の構築	220
c)	調査区断面で確認した百間堀石垣補修痕跡	224
第3節	白鳥堀近世石垣	225
a)	石垣の埋上状況	225
b)	石垣の構造	225
第4節	近代の石垣	227
a)	白鳥堀近代石垣	227
b)	兼六園側石垣	228
第10章	まとめ	230
第1節	土橋の復元	230
a)	土橋復原の方法	230
b)	土橋築成年代と4つの様相	230
c)	旧地形と金沢御堂	236
d)	小結	238
第2節	寛永9年敷設の辰巳用水をめぐって	240
a)	木樋と石管の土橋上における比較	240
b)	木樋の年代と土橋	242

図 版 目 次

表紙 石川橋欄干

- P L 1 石垣 1 : 百間堀石垣 / 百間堀石垣 / 白鳥堀石垣
- P L 2 石垣 2 : 百間堀石垣 (部分)
- P L 3 石垣 3 : 百間堀石垣 (部分) / 百間堀石垣 (部分) / 白鳥堀石垣 (部分) / 白鳥堀石垣 (部分)
- P L 4 石垣 4 : 百間堀石垣 (部分) / 百間堀石垣 (部分) / 白鳥堀石垣
- P L 5 沈床園調査区 1 : 調査前の状況 / 第 4 層除去 / 第 4 層除去と土樋
- P L 6 沈床園調査区 2 : 第 5 層除去 / 第 5 層除去
- P L 7 沈床園調査区 3 : 第 7 層除去 / 第 7 層除去全景 / 第 7 層除去全景
- P L 8 沈床園調査区 4 : 第 7 層出土遺物 / 沈床園の堆積と金沢城
- P L 9 沈床園調査区 5 : 調査区土層 / 百間堀石垣と石垣外の状況 / 百間堀石垣根固め
- P L 10 石川門調査区 1 : S X 01 と S D 01 / S X 01 と S D 01 / S X 01 と S D 02、04
- P L 11 石川門調査区 2 : 白鳥堀近代石垣 / S D 03 と S D 06 / S D 06 (左) 同蓋石除去 (右)
- P L 12 石川門調査区 3 : 盛土 1、2 全景 / 瓦たまり 1 出土状況 / 盛土 2 の土層
- P L 13 石川門調査区 4 : //
- P L 14 石川門調査区 5 : 石管敷石状況 / S X 02 と 04 / 漆喰製土管の半切り
- P L 15 石川門調査区 6 : S X 02 全景 / S X 04 / S X 02 土層 (左) 漆喰土管 (右)
- P L 16 石川門調査区 7 : 盛土 3 上面全景 / 盛土 3 上面 (部分) / 盛土 3 上面 (部分)
- P L 17 石川門調査区 8 : 盛土 3 瓦たまり全景 / 盛土 3 瓦たまり (部分) / 盛土 3 瓦たまり (部分)
- P L 18 石川門調査区 9 : 盛土 3 瓦たまり (部分) / 盛土 3 瓦たまり (部分) / 盛土 3 瓦たまり (部分)
- P L 19 石川門調査区 10 : 盛土 4 上面と盛土 3 堆積状況 (1 アゼ) / 盛土 4 上面 / 盛土 4 上面
- P L 20 石川門調査区 11 : 盛土 4 全景 / 白鳥堀石垣と盛土 3 / 白鳥堀石垣と石垣外の堆積
- P L 21 石川門調査区 12 : 白鳥堀石垣全景 / 白鳥堀石垣 (上から) / 白鳥堀石垣 (上から)
- P L 22 石川門調査区 13 : 白鳥堀石垣 (部分) / 白鳥堀石垣 (部分) / 白鳥堀石垣 (部分)
- P L 23 石川門調査区 14 : 土樋断面 / 土樋断面 (白鳥堀石垣部分) / アゼ 1 断面 (盛土 4)
- P L 24 石川門調査区 15 : 木樋出土状況 / 木樋全景 / 木樋全景
- P L 25 石川門調査区 16 : 木樋掘り方 / 木樋と土樋 1 / 木樋と土樋 2 / 盛土 4 / 掘り方遺物出土状況
- P L 26 石川門調査区 17 : 支持受け / 支持受け組み合わせ状況(1) / 支持受け組み合わせ状況(2) / 木樋 1 底面 / 木樋 2 底面
- P L 27 石川門調査区 18 : 継ぎ手の状況 1 / 継ぎ手の状況 2 / 継ぎ手 1 / 継ぎ手下の敷石
- P L 28 石川門調査区 19 : 木樋下の支持受けと枕木 / 木樋 2 下の枕木 / 木樋 1 継ぎ手周辺
- P L 29 石川門調査区 20 : 百間堀石垣根石 / 百間堀石垣根石 / 根石付近裏込め (左) 同木 (右)
- P L 30 石川門調査区 21 : 調査区壁面 / 盛土 6 上面 / あぜ 1 盛土 4、5
- P L 31 石川門調査区 22 : 百間堀石垣裏込め (部分) / 盛土 5 下部 (部分) / 盛土 5 下部 (部分) / 盛土 5 下部 (部分)
- P L 32 石川門調査区 23 : 盛土 6 / 盛土 6 / 盛土 6 石垣下 / 盛土 6 / 盛土 6 (拡大)
- P L 33 石川門調査区 24 : 盛土 6 / 盛土 6 と基盤層 / 谷の堆積土と基盤層 / 谷の堆積土と基盤層
- P L 34 兼六園調査区 1 : 土層断面 1 / 土層断面 2 / 土層断面 3
- P L 35 兼六園調査区 2 : 土層断面 4 / 土層断面 5 / 兼六園調査区掘削状況
- P L 36 兼六園調査区 3 : 土層断面 6 / 土層断面 7 / 百間堀石垣相当部分 / 出土同木
- P L 37 兼六園調査区 4 : 土層断面 8 / IH 地形の状況 / 基盤層と盛土 6
- P L 38 兼六園調査区 5 : 基盤層 1 / 基盤層 2 / 基盤層 3
- P L 39 平成 4 年度調査 1 : 調査区遠景 / 断ち割り 2 土層 / 瓦たまり
- P L 40 平成 4 年度調査 2 : 盛土と瓦たまり / 16 世紀包含層と盛土 / 仮橋台 3
- P L 41 水道管切り直し調査 : 辰巳用水石管 / 石垣 (雨より) / 石垣 (北より)

挿 図 目 次

原 石川橋欄干碑の拓本

Fig. 1	旧石川橋から石川門望む	1
Fig. 2	堀削前の旧石川橋	1
Fig. 3	石川橋調査地点と車橋門調査地点(1/5000)	2
Fig. 4	堀削前の沈床園調査区	3
Fig. 5	堀削前の兼六園側調査区	3
Fig. 6	調査区の位置と調査区土層断面位置(1/1000)	4
Fig. 7	谷底より石川門を見る	5
Fig. 8	沈床園に建てたプレハブ	6
Fig. 9	沈床園調査風景	6
Fig. 10	石川橋解体と兼六園	6
Fig. 11	石川橋解体と石川門	6
Fig. 12	白鳥堀調査区壁面崩落状況	7
Fig. 13	調査未了区の上事堆削	7
Fig. 14	平成石川橋建設に伴う石垣積み直し範囲(1/200)	8
Fig. 15	発掘ニュース 第1号	9
Fig. 16	発掘ニュース 第2号	10
Fig. 17	発掘ニュース 第3号	11
Fig. 18	発掘ニュース 第4号	12
Fig. 19	発掘ニュース 第5号	13
Fig. 20	発掘ニュース 第6号	14
Fig. 21	発掘ニュース 第7号	15
Fig. 22	平成4年度調査風景	16
Fig. 23	平成4年度検出の16世紀代包含層	16
Fig. 24	瓦たまりと石川門	17
Fig. 25	調査風景	19
Fig. 26	調査風景	19
Fig. 27	盛土6にシートで保護する	21
Fig. 28	石垣解体作業	22
Fig. 29	調査風景	23
Fig. 30	調査風景	23
Fig. 31	辰巳用水を守る会の人々の調査	24
Fig. 32	調査風景	24
Fig. 33	木樋出土現場の様子	25
Fig. 34	木樋と工事	25
Fig. 35	調査風景	25
Fig. 36	調査風景	25
Fig. 37	土橋の旧地形	27
Fig. 38	百間堀通り試堀位置と土層柱状図	33
Fig. 39	仮橋橋台調査区位置図(1/1000)	34
Fig. 40	仮橋橋台トレンチ土層図(1/80)	35
Fig. 41	平成4年度調査区(上図平面図1/200、下図断ち割り2土層図1/80)	36
Fig. 42	明治の石川橋工事と石垣、盛土との関係(1/80)	37
Fig. 43	水道管切り直し調査位置図(1/400)	38

Fig. 44	水道管切り直し調査土層断面図 (1/80)	39
Fig. 45	調査で出土した旧石器等 (1/2)	40
Fig. 46	調査で出土した城郭以前の土器 (1/3)	41
Fig. 47	辰巳用水石管内部	42
Fig. 48	石川門調査区近代の遺構 (1/100) S X 01模式断面図 (1/50)	43
Fig. 49	近代再敷設の石管	44
Fig. 50	近代導水管と排水溝および白鳥堀近代石垣 (1/400)	44
Fig. 51	近代の遺構	45
Fig. 52	S X 01のS D 04側で穴を塞いでいる	45
Fig. 53	S D 01に散乱する石材	45
Fig. 54	S D 06と石栓	45
Fig. 55	石川門調査区S D 06実測図 (1/60)	46
Fig. 56	石川門調査区白鳥堀近代石垣図 (1/100)	46
Fig. 57	石川門調査区表土出土土器	48
Fig. 58	石川門調査区流土・落ち込み遺構出土土器	49
Fig. 59	石川門調査区白鳥堀流土出土土器	50
Fig. 60	石川門調査区近代遺構出土土器	51
Fig. 61	石川門調査区表土出土軒丸瓦	53
Fig. 62	石川門調査区表土出土軒丸瓦・軒平瓦	54
Fig. 63	石川門調査区表土出土丸瓦	55
Fig. 64	石川門調査区表土出土平瓦	56
Fig. 65	石川門調査区表土出土隅切瓦・石臼	57
Fig. 66	石川門調査区表土出土石瓦	58
Fig. 67	石川門調査区白鳥堀流土1出土瓦	59
Fig. 68	石川門調査区白鳥堀流土2～3出土瓦	60
Fig. 69	石川門調査区白鳥堀流土3～5出土瓦	61
Fig. 70	石川門調査区北側表土出土軒丸・軒平瓦	62
Fig. 71	石川門調査区北側表土出土丸瓦	63
Fig. 72	石川門調査区北側表土出土平瓦	64
Fig. 73	石川門調査区石川橋建設落ち込み遺構出土軒丸・軒平瓦	65
Fig. 74	石川門調査区石川橋建設落ち込み遺構出土丸瓦(1)	66
Fig. 75	石川門調査区石川橋建設落ち込み遺構出土丸瓦(2)	67
Fig. 76	石川門調査区石川橋建設落ち込み遺構出土平瓦・隅切瓦	68
Fig. 77	石川門調査区S D 01出土軒丸・軒平瓦	69
Fig. 78	石川門調査区S D 01出土丸・平瓦	70
Fig. 79	石川門調査区S D 04出土軒丸・軒平・棧瓦	71
Fig. 80	石川門調査区S D 04出土棧瓦	72
Fig. 81	沈床園調査区土層断面図 (1/80)	74
Fig. 82	沈床園調査区江戸初期(第4・5層除去後)の堀底実測図 (1/200)	75
Fig. 83	沈床園調査区2～4層出土土器	76
Fig. 84	沈床園調査区第4層出土土器	77
Fig. 85	沈床園調査区第4層出土生産遺物	78
Fig. 86	沈床園調査区第4層出土軒丸瓦	78

Fig. 87	沈床園調査区第5層出土土器	79
Fig. 88	沈床園調査区第5層出土土器	79
Fig. 89	沈床園調査区16世紀の堆積土・地形実測図 (1/200)	80
Fig. 90	沈床園調査区第7層、第7層下遺物出土状況 (1/40)	81
Fig. 91	沈床園調査区第6、7層出土遺物土器	82
Fig. 92	沈床園調査区第6層出土土器	83
Fig. 93	沈床園調査区第7層出土漆器 (1/3)・木器 (1/4)	84
Fig. 94	沈床園調査区第7層出土土器 (1/4)	86
Fig. 95	遺物整理風景	87
Fig. 96	盛土1上面旧表上	88
Fig. 97	石川門調査区と沈床園調査区七層全体図 (1/100)	89・90
Fig. 98	石川門調査区と白鳥塚調査区土層全体図 (1/100)	91・92
Fig. 99	土管出土状況	93
Fig. 100	土管の兼目	93
Fig. 101	土管の半截	94
Fig. 102	白鳥塚近代石垣の根石	94
Fig. 103	石川門調査区盛土1関係土層図 (1/80)	95・96
Fig. 104	石川門調査区盛土1・2上面図 (1/200)	95・96
Fig. 105	石川門調査区盛土1出土土器	97
Fig. 106	石川門調査区瓦溜まり1出土軒丸瓦	98
Fig. 107	遺物整理風景	98
Fig. 108	石川門調査区瓦溜まり1出土軒平瓦	99
Fig. 109	石川門調査区瓦溜まり1出土丸瓦(1)	100
Fig. 110	石川門調査区瓦溜まり1出土丸瓦(2)	101
Fig. 111	石川門調査区瓦溜まり1出土平瓦(1)	102
Fig. 112	石川門調査区瓦溜まり1出土平瓦(2)	103
Fig. 113	石川門調査区盛土2と白鳥塚表土系土層図 (1/80)	104
Fig. 114	石川門調査区盛土2出土遺物	105
Fig. 115	石川門調査区盛土3土層図 (1/80)	106
Fig. 116	石川門調査区盛土3上面(上)、遺構配置(中)、盛土除去(下)図 (1/200)	107
Fig. 117	石川門調査区盛土3遺物取り上げ地区割り (1/200)	109
Fig. 118	石川門調査区盛土3遺物出土状況 (1/200)	110
Fig. 119	石川門調査区盛土3出土土器(染付け)	111
Fig. 120	石川門調査区盛土3出土土器(唐津1)	114
Fig. 121	石川門調査区盛土3出土土器(唐津2)	115
Fig. 122	石川門調査区盛土3出土土器(唐津3、瀬戸美濃他)	116
Fig. 123	石川門調査区盛土3出土土器(瀬戸美濃他2、焼塩壺)	117
Fig. 124	石川門調査区盛土3出土土器(土師器皿1、1~5区)	118
Fig. 125	石川門調査区盛土3出土土器(土師器皿2、5~6区)	119
Fig. 126	石川門調査区盛土3出土土器(土師器皿3、6~7区)	120
Fig. 127	石川門調査区盛土3出土土器(土師器皿4、7~8区)	121
Fig. 128	石川門調査区盛土3出土土器(土師器皿5、8区)	122
Fig. 129	石川門調査区盛土3出土土器(土師器皿6、8区)	123

Fig. 130	石川門調査区盛土3出土土器(土師器皿7、8~10区)	124
Fig. 131	石川門調査区盛土3出土土器(土師器皿8、アゼ1)	125
Fig. 132	石川門調査区盛土3出土土器(土師器皿9、アゼ1)	126
Fig. 133	石川門調査区盛土3出土土器(土師器皿10、アゼ1、2)	127
Fig. 134	石川門調査区盛土3出土土器(土師器皿11、石垣外等)	128
Fig. 135	石川門調査区盛土3出土軒丸瓦(1)	130
Fig. 136	石川門調査区盛土3出土軒丸瓦(2)	131
Fig. 137	石川門調査区盛土3出土軒丸瓦(3)	132
Fig. 138	石川門調査区盛土3出土軒丸瓦(4)	133
Fig. 139	石川門調査区盛土3出土軒丸瓦(5)	134
Fig. 140	石川門調査区盛土3出土軒丸瓦(6)	135
Fig. 141	石川門調査区盛土3出土軒平瓦(1)	137
Fig. 142	石川門調査区盛土3出土軒平瓦(2)	138
Fig. 143	石川門調査区盛土3出土軒平瓦(3)	139
Fig. 144	石川門調査区盛土3出土軒平瓦(4)	140
Fig. 145	石川門調査区盛土3出土軒平瓦(5)	141
Fig. 146	石川門調査区盛土3出土丸瓦(1)	142
Fig. 147	石川門調査区盛土3出土丸瓦(2)	143
Fig. 148	石川門調査区盛土3出土丸瓦(3)	144
Fig. 149	石川門調査区盛土3出土丸瓦(4)	145
Fig. 150	石川門調査区盛土3出土丸瓦(5)	146
Fig. 151	石川門調査区盛土3出土丸瓦(6)	147
Fig. 152	石川門調査区盛土3出土丸瓦(7)	148
Fig. 153	石川門調査区盛土3出土丸瓦(8)	149
Fig. 154	石川門調査区盛土3出土丸瓦(9)	150
Fig. 155	石川門調査区盛土3出土丸瓦00	151
Fig. 156	石川門調査区盛土3出土平瓦(1)	152
Fig. 157	石川門調査区盛土3出土平瓦(2)	153
Fig. 158	石川門調査区盛土3出土平瓦(3)	154
Fig. 159	石川門調査区盛土3出土平瓦(4)	155
Fig. 160	石川門調査区盛土3出土平瓦(5)	156
Fig. 161	石川門調査区盛土3出土平瓦(6)	157
Fig. 162	石川門調査区盛土3出土平瓦(7)	158
Fig. 163	石川門調査区盛土3出土平瓦(8)	159
Fig. 164	石川門調査区盛土3出土特殊瓦(1)	160
Fig. 165	石川門調査区盛土3出土特殊瓦(2)	161
Fig. 166	石川門調査区盛土3出土特殊瓦(3)	162
Fig. 167	石川門調査区盛土3出土特殊瓦(4)	163
Fig. 168	石川門調査区出土鬼瓦	164
Fig. 169	石川門調査区盛土3石垣外出土軒丸瓦	165
Fig. 170	石川門調査区盛土3石垣外出土軒平瓦・特殊瓦(1)	166
Fig. 171	石川門調査区盛土3石垣外出土特殊瓦(2)	167
Fig. 172	石川門調査区盛土3石垣外出土特殊瓦(3)	168

Fig.173	石川門調査区盛土3石垣外出土丸瓦	169
Fig.174	石川門調査区盛土3石垣外出土平瓦	170
Fig.175	石川門調査区出土瓦刻印集成	171
Fig.176	石川門調査区盛土4上層図(1/80)	173
Fig.177	石川門調査区盛土4出土土器	174
Fig.178	石川門調査区盛土4出土土器	175
Fig.179	石川門調査区盛土3、4出土金属器	176
Fig.180	石川門調査区盛土2～4と白鳥塚石垣(1/100)	177
Fig.181	石川門調査区盛土5土層図(1/80)	179・180
Fig.182	石川門調査区盛土5出土土器	182
Fig.183	石川門調査区盛土6上層図(1/80)	183・184
Fig.184	石川門調査区木樋出土位置図(1/200)	187
Fig.185	石川門調査区木樋出土状況(1/20)	189・190
Fig.186	木樋設置推定位置図(平面図1/400、断面図高低1/200)	191
Fig.187	木樋堀り方遺物出土状況	192
Fig.188	継ぎ手2下	192
Fig.189	木樋3切断状況	192
Fig.190	木樋継部	192
Fig.191	石川門調査区木樋1実測図(1/8)	193
Fig.192	石川門調査区木樋2実測図(1/8)	194
Fig.193	石川門調査区木樋3と継ぎ手1、2実測図(1/8)	195
Fig.194	石川門調査区木樋の枕木実測図(1/8)	196
Fig.195	石川門調査区木樋遺構出土遺物	197
Fig.196	石川門調査区辰巳用水石管出土位置図(1/100)	198
Fig.197	辰巳用水石管設置推定位置図(平面図1/400、断面図高低1/200)	199
Fig.198	石川門調査区辰巳用水石管出土状況(上1/40)と土層関係(下1/80)	200
Fig.199	石川門調査区辰巳用水石管下のSX02とSX04(1/80)	201
Fig.200	兼六園側水道管調査石垣出土部分土層区分図(1/40)	202
Fig.201	遺物整理風景	202
Fig.202	兼六園調査区土層全体図(1/100)	205・206
Fig.203	兼六園調査区盛土4関係土層図(1/80)	207・208
Fig.204	兼六園調査区盛土5上層図(1/80)	209・210
Fig.205	兼六園調査区盛土6土層図(1/80)	211
Fig.206	石材上に掘られたホゾ穴	214
Fig.207	石材上に掘られたホゾ穴	214
Fig.208	石垣 百間堀石垣1(1/100)	215・216
Fig.209	石垣 百間堀石垣2(1/100)	217・218
Fig.210	百間堀石垣積み石状況(1/200)	219
Fig.211	百間堀石垣刻印の種類と分布(1)	221
Fig.212	百間堀石垣刻印の種類と分布(2)	222
Fig.213	普請当時の百間堀石垣と胴木(1/80)	223
Fig.214	百間堀石垣の胴木の枕	223
Fig.215	百間堀石垣の胴木の接続	223

Fig. 216	石川門調査区白鳥堀近世石垣屈曲部と石垣外の堆積合成図 (1/80)	224
Fig. 217	石川門調査区白鳥堀近世石垣図 (1/50)	226
Fig. 218	白鳥堀近代石垣 (1/100)	228
Fig. 219	石垣 兼六園側石垣 (1/100)	229
Fig. 220	石川門前土橋と現地形合成図 (1/400)	231・232
Fig. 221	金沢御堂の土橋と江戸初期の土橋 (1/400)	233
Fig. 222	江戸前期の土橋 (1/400)	234
Fig. 223	寛政十一年大地震の被害状況	235
Fig. 224	旧地形と金沢御堂・金沢城 (1/5000)	237
Fig. 225	土橋から見た旧地形 (1/200)	238
Fig. 226	石川門調査区出土木橋連結復原 (1/16)	239
Fig. 227	木橋と辰巳用水石管の平・断面図 (1/400、断面図の高さのみ1/100)	241

表 目 次

Tab. 1	沈床園調査区第5層出土木器計測表	81
Tab. 2	沈床園調査区第6層出土木器計測表	85
Tab. 3	沈床園調査区第7層出土木器計測表	85

調 查 報 告

石川橋

明治三十四年三月架

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査の契機と経過

a) 調査の原因

金沢城石川門と兼六園をつなぐコンクリート製橋梁を「石川橋」という。明治43年に起工され、明治44年に完成している。当該箇所は、それまでは百間堀と白鳥堀を区分けする土手であった。つまり、百間堀と白鳥堀の水を抜いて、土手に石川橋というトンネルを作って道をつけたのである。この道は現在県道寺町今町線といい、通称「百間堀通り」と呼ばれ、兼六園下交差点から広坂交差点へ抜ける主要な幹線道路として激しい交通量がある。さらに、人間もまた、観光客をはじめとして徒歩で広坂に通勤する人々、あるいはそこを通過して通学する生徒の主要な交通路でもあるが、歩道がないという構造的欠陥がある。歩道については、明治に作られた道であるので致し方ない部分はある。このような点から、危険な道であり、渋滞を引き起こす道でもあることが、かねてより指摘されていた。

現在は金沢大学跡地を県が買い取ってしまったが、当時は平成7年度に金沢城内にあった金沢大学の角間キャンパスへの移転完了に伴い、国が所有している金沢大学跡地を買い取る方向にあった。そして、金沢城跡の土地利用に絡んで、兼六園を中心とした「兼六園文化ゾーン」として整備していく必要が認められている。一方、先にするした交通路としての問題点が存在し、いわゆる「金沢の顔」にふさわしい道、すなわち「シンボルロード」にする必要があった。具体的な改良内容は、1)交差点の改良、2)車道拡幅、3)自転車・歩行者道の整備、4)バスベイの設置、という4点であった。

平成元年度に有識者による「寺町今町線シンボルロード整備協議会」、「同幹事会」が土木部都市計画課内に組織され、道路整備計画の大枠が決められ、翌2年度に「石川橋基本デザイン検討研究会」が組織されて新石川橋の基本計画を練った。これらの予備的な検討をへて、平成3年度に石川橋の予備設計を組むと同時に、事業計画の認可を同年11月29日付けで受けている。平成4年度には詳細な工程が組まれている。

このように、県民の顔である石川橋付替工事は、土木部にとっても大きな事業であると認識され、入念な準備をおこなっている。その主たる計画の重点は、平成にかける新石川橋のデザインである。これによって、新しい道の評価が大きく左右されると認識されていた。

なお、石川橋は歴史的にも、コンクリート構造の近代建築として非常に価値があり、その構造を知ることは建築史上でも非常に価値のあることである。そこで、土木部でも、民間と共同で構造調査をおこなっている。



Fig. 1 旧石川橋から石川門望む



Fig. 2 掘削前の旧石川橋

b) 埋蔵文化財調査の経緯

土木側との確認

本県における県事業に対する埋蔵文化財調査の調整は、前年度に翌年度の開発事業を照会し、「埋蔵文化財取り扱い協議会」という場を開いて、翌年度の開発で遺跡がかかるかどうかあるいは分布調査、発掘調査が必要かどうかなどの問題点を開発側と確認している。そして、その結果を踏まえて県土木部側からの依頼を受けて当埋蔵文化財センターが発掘調査を実施している。

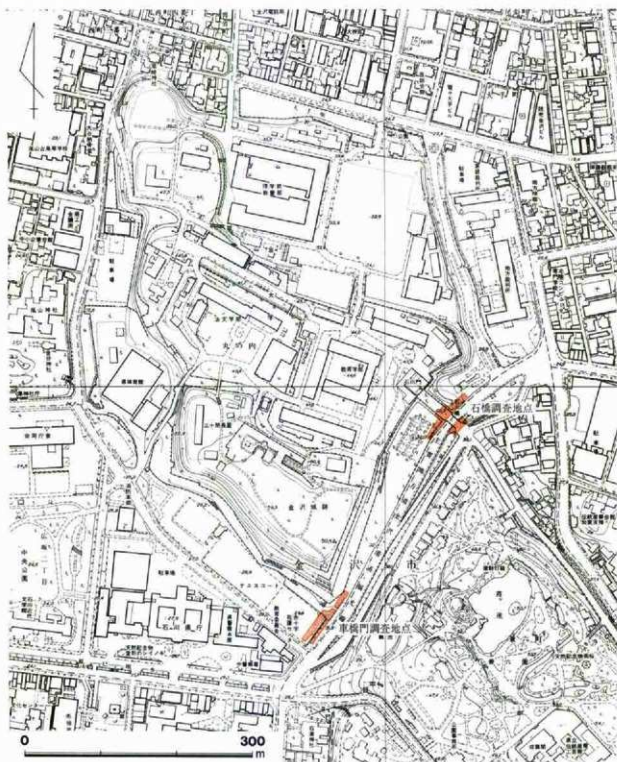


Fig. 3 石川橋調査地点と車橋門調査地点 (1/5000)

シンボルロード事業とともに石川橋付替工事については、平成3年度におこなわれた埋蔵文化財取り扱い協議会でも協議され、石川門前土橋を破壊することになるので当然発掘調査の必要性を確認している。また、土木部は百間堀通りの土質ボーリング調査をおこなっており、沈床園から白鳥堀側に向かって、標高28.1m付近で厚さ0.8m～1.9mの堀の堆積物のような黒色の粘性土（シルト）を確認しており、これが堀の堆積物であるとするとは非常に調査労力にのり、発掘調査の方法に関しても、また土木部工事工程に関しても、大きな問題となってくる。この土は、発掘調査で谷の堆積土と考えた土に該当する。これまで百間堀は兼六園と城側を掘りきって作ったと信じられていたのので、非常に驚きであり、むしろ本当だったらどうなるだろうという気持ちが大きかったのではないかと思う。

平成4年度

本年度は、土木部側の事業が本格的に始動する年であるが、埋蔵文化財調査の扱いが前年度の取り扱い協議会にはば決まった。そして土木部がおこなう事業地の中でどれほどの埋蔵文化財調査の仕事量があるか、すなわち黒色の粘性土（シルト）の正体がわからないこと、発掘調査範囲やその期間の確保、あるいは土木部側工事工程と発掘調査の進め方など未確定な事項が多々あった。したがって、年度当初の土木部の発掘調査の依頼の中に本調査は含まれていなかった。

まず、企画開発部（金沢大学移転対策室）、土木部（技術管理課、都市計画課、公園緑地課、金沢土木事務所）と教育委員会（文化課、埋蔵文化財センター）の3者で細かな事業の進める事業計画の確認をおこない、事業を進めるにあたっての問題点をそれぞれの立場から出し合った。教育委員会としては、当該地が金沢城という史跡級の周知の遺跡の範囲内にあること、そして金沢城を国から買い取った後の史跡に向けての基礎資料ともなり得ることから、どのような工事についてもなんらかの埋蔵文化財調査が必要であるとした。さしあたって、埋蔵文化財分布調査と石垣の現況測量の必要を申し入れた。

7月13日に重機を用いて、堀の深さと石垣の様子を知るために百間堀石垣際にトレンチを入れ、沈床園中に3段の石垣と根固め石、石垣普請のための地盤強化の版築層（発掘調査の結果、盛土6に相当する）を確認した。その結果金沢御堂の頃に堀切（土橋）を想定し、現在の土橋の下に問題の黒色粘性土が金沢御堂の頃のものかどうかで、それを発掘調査の対象となるかならないかになる。しかし、試掘調査が1ヶ所のトレンチのみであったので、発掘調査の期間、方法、費用をきめることは難しく、より細かい試掘調査の必要性を、7月16日の打ち合せで確認した。さらに、発掘調査が当初の予測よりも大幅に上回る可能性も合わせて強調した。8月18日に土橋表面に重機で試掘トレンチを入れているが、詳しいデータは得られなかった。

このような試掘調査と並行して、発掘調査をおこなうための打ち合せも同時におこなっている。当初から土木部側も発掘調査が必要であろうことは予測しており、事業工程に埋蔵文化財調査もある程度予定していた。それによると、早くも8月に調査に着手あるいは、遅くとも翌年2月に着手すると、平成6年度の「百万石まつり」までに「石川橋」を完成して供用したいという工程であった。しかし、先の分布調査の結果などから、見積りよりも発掘期間が上回る可能性が高く、し



Fig. 4 掘削前の沈床園調査区



Fig. 5 掘削前の兼六園調査区

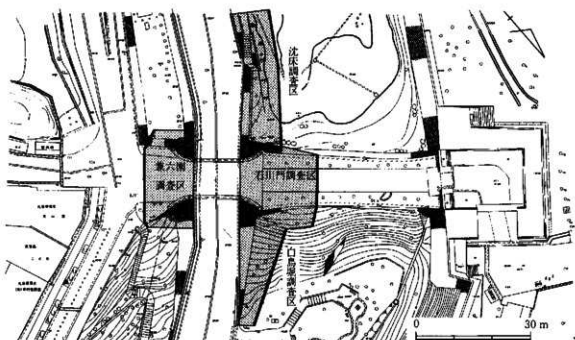


Fig. 6 調査区的位置と調査区土層断面位置 (1/1000)

しかも工事と並行する調査となることから、そのような工程に合わせられないというのが、埋文センター側の立場であった

工事工程と発掘調査の工程をすりあわせて、仮設ヤード（白鳥路と沈床園で計500㎡）と仮橋橋台（4ヶ所計100㎡）の調査をおこなわないと石川橋本体工事ができないということになるので、平成4年度の発掘調査の対象の候補となった。埋文文化財センターの調査班は、既に発掘調査を年間スケジュールにしておこなっており、石川橋の発掘をおこなうには、いずれかの調査を中断するしかない。土木部側の調整によって、内々に、シンボルロードの事業は都市計画課が主幹となっていたので、同じ課の事業の発掘調査を担当していた調査班を回すことになり、発掘調査に入る時期を10月中とした。

8月26日には、発掘調査の担当に決まった伊藤が発掘調査実施案を作成した。それによると、それぞれの調査対象地の面積は小さいが、金沢城ばかりでなく金沢御堂の遺構の存在も考慮するとかなり立体的な調査となり、手間のかかる発掘となることが予想された。白鳥路ヤードで3.8ヶ月、沈床園ヤードで3.2ヶ月、仮橋橋台で0.4ヶ月の合計7.4ヶ月の調査期間を試算した。また、土砂の搬出や石垣解体、安全管理上の問題などを土木部側に提示した。

土木部側は、石川橋本体工事の取り掛かりがかなり遅れることから難色を示したが、平成4年度にどうしても必要な白鳥路と仮橋に関する調査をおこなうことに両者が合意した。土木側は、冬の1～3月に沈床園の発掘に期待し強い要請があったが、センターはできないと断った。この時点で発掘調査の具体的な打ち合わせや調査にかかる準備を始めることになった。石垣の現況測量は写真測量でおこなうことになっていたが、これも伊藤が担当することとなった。

白鳥路ヤードの発掘調査は10月21日からおこなったが、植栽の植え替えにともなって立会調査も断続的におこなっている。また、現道下の路盤の厚さを調べる土木側の調査にも、企画調整課によって立会調査をおこなった。これらは、交通量が多いところにあるために、夜間工事であった。作業員の必要な発掘調査は12月25日に概ね終了した。翌年1月7日には、白鳥路水飲み場の水道管を仮配管する掘削工事の立会調査をおこない、掘削が表土におさまることを確認した。11日から仮橋橋台の調査にかり、13日までおこなっている。

平成4年度の発掘調査の最大の成果は、大鼠の瓦を包含する盛土層が、寛永8年(1631)の金沢の大火層の可能性に指摘できたことであった。これによって、白鳥路ヤードの発掘調査は、完全に終了することができなくなり、翌年度あらためて土橋盛土構成全体の中に位置付けをおこないなが

ら発掘する必要がでてきた。しかし、土木側でも白鳥路ヤードは絶対必要であり、その範囲を確保するために、最低限の面積を渡すこととなって、1月14日から21日にかけて急速調査をおこなった。重機で土橋盛土を掘り下げ、土橋横断面図作成の調査であったが、調査員の一人が掘削面から瓦を拾ったので、ためしに精査した。すると金沢御堂の堀の堆積土かといわれた黒色粘性土（シルト）から遺物と、建物の土台石のような遺構を確認し、26日にその範囲を確定するために企画調整課とともに分布調査をおこなった。これによって、黒色粘性土（シルト）まで発掘調査の対象となることが判明した。

翌5年度は、石川橋の本体工事にかかり、長期にわたる夜間通行止めとなってしまうので、その警察への申請などの工程的なことから、それをいつにするかというのが大きな問題となってきた。埋文センター側でも、黒色粘性土（シルト）の扱いをめぐって発掘調査の方法を検討し、発掘計画を煮詰める必要があった。

3月に翌年度の調査についての打ち合せをもった。4月に沈床園側の調査に入っても石川門土橋の調査にかかれるのは早くて6月であり、年内に調査を終わらせるのは極めて難しい。冬期間の調査はおこなえないので、調査の仕残しは再来年度の春に調査にかかることになる。このようなセンターの申し入れに土木側は難色を示し、意見の統一を見なかった。

平成5年度

工事側の細かな工程は、前年度に打ち合せを済まし、本年度の調査は、まず前年度12月におこなった石垣写真測量の校正に伴う現地の補足調査であった。そして県民の目に触れやすい所での発掘調査なので、普及啓発の意味から「金沢城跡 発掘調査ニュース」を6月から毎月発行した。センターとして初めての試みであり、反響の大きさに少々戸惑ったものの、発掘調査や金沢城に興味をもっている人が非常に多いということを実感できた。

工事作業が実質的に入ってくることから、土木と工事側、そしてセンターの3者による毎月の打ち合せを定期的にもつことによって、お互いの工程のロスを少なくすると同時に、現場での問題点の早急な解決をおこなうこととなった。そして、今年度の発掘面積は3,100㎡である。センターの調査工程は、3月に提示した案でいくこととなった。

この案では、沈床園から石川門側、兼六園側という流れだが、工事業者をまじえた三者で詳しい工程の打ち合せをおこなうことのようなことがわかってきた。落橋までの土砂の搬出は、土橋全体でおこなうために調査を分けることはできないことや、土橋の土木掘削が深さ2mずつおこなうこと、白鳥堀ヤードが最悪の場合機能しなくても支障のないことなど、発掘調査の工程を考えるにあたって幾つかの重要な点が確認された。

調査担当者の個人的な考え方もかもしれないが、次のような点に留意した。本調査は工事掘削と同時並行の本県にあっては異例の現場であり、しかも金沢城という県民の興味の対象となる遺跡の発掘調査でもある。これによって、埋蔵文化財側が主体となれる面と共に、工事工程という見えない壁に我慢しなければならぬことも多々ある。しかし、多大の発掘成果が要求されており、その成果を受け入れてもらえる素地がある。したがって、如何に調査中における土木側の譲歩と共に調査側の妥協をするのか、というのが調査中の軋轢を防いでスムーズに調査をおこなうことであり、調査側のおこなわねばならぬことを土木側に納得してもらうために、如何に一般県民に理解してもらうか、そのためには報道機関の協力がいる、ということ考えた。



Fig. 7 谷底より石川門を見る



Fig. 8 沈床園に建てたプレハブ



Fig. 9 沈床園調査風景

4月26日に沈床園の石垣の解体をはじめ、28日には沈床園の表土除去にかかり、春の大型連休明けには作業員による発掘作業を開始した。5月12日には金箔土師器皿が出土し、調査内で大いに沸いた。文化課とその扱いを協議し、しばらく新聞発表を見合わせることにした。それは、発表の準備が沈床園調査中に整わないこと、遺物の出土が2次的な移動を伴っており歴史の評価を与えにくいこと、からである。しかし、報道機関の知るところとなって、5月25日には、新聞にのった。

沈床園調査区で確認した盛土6（当時は謎の盛土といっていた）の調査が期間内にできないことや、石垣がのっている関係で非常に危険であること、石川門調査区の調査中の排土を沈床園調査区にしか搬出できなかったことから、盛土6の調査を断念せざるを得なかった。シートや土嚢で盛土表面を保護しても、工事掘削の中では無力であって、盛土6の池端部の断面調査ができなかった。なお、百間堀堆積土や池堆積土でほとんど無遺物層の部分は、重機によって掘削した。

土橋の表土掘削は、6月8日からおこなった。6月25日には、百間堀石垣の解体について、工事施工業者と打ち合せをおこなっている。解体工事は土木側の仕事で、調査側は石垣記録の作成という役割分担が既に決められているからである。そこで解体の範囲とその方法について工事側の話聞いた。調査は、前年度に作成した石垣実測図で石垣断面で、石材の控え（裏側）がない状態なのでそれを完結させる断面図作成にすることとなった。

7月1日には、土木部（都市計画課、金沢土木事務所）と教育委員会（文化課、埋蔵文化財センター）による協議をおこなった。埋蔵文化財発掘調査の進捗状況と、道路改築に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての協議である。1点目について、工事工程とのすりあわせが大きな目的で、現石川橋を落とす時には夜間通行止めにならなければならない、そのためには少なくとも50日前までに県民に周知する必要がある。土木側の希望は10月10日からの通行止めが可能かどうか、である。埋文センターでは、近世盛土部分の調査はそれまでに完全に終了することはできず、明治の石川橋の掘削範囲が予想以上に大きく、橋取り壊し工事がその範囲内での重機の稼働であるならば了承できるとした。これは工程の多少の変更をようするが両者合意して、10月25日の落橋の日程が組まれた。また、雨天日も調査できるように仮設テントの申し入れがあったが、本調査では雨天による調査の中止はほとんどなく、その必要はないと断った。



Fig. 10 石川橋解体と兼六園



Fig. 11 石川橋解体と石川門

また2点目は、道路改良に伴ってどのような調査とするかが主な焦点である。工事内容から、大きく3つに分けられた。①現在の車道部分について。工事は、現在の道路路盤内におさまり、部分的に舗装がオーバーレイであるので、慎重工事となった。②沈床園歩道部分について。歩道には、電力や電話の地下ケーブル埋設のために地下2mの掘削をとまうので基本的に発掘調査が必要であるが、堀の中なので遺物の出土がほとんど予想されないが、本丸下が地形が高くなっているので、当該箇所調査が必要になる。ここは削平を受けているので、試掘調査で対応することとなった。③裁判所前や兼六園テニスコート部分の分布調査とその見通しについて。テニスコート部分は、車橋門石垣台のあったところであり、分布調査をおこなわなくても発掘調査が必要である。裁判所前は、白鳥堀外側の石垣や土手がかかる部分であるが、地下ケーブル埋設と歩道の工事なので、実質的な発掘調査は無理であり立会調査とする。以上のようなことが確認された。

土橋の掘削工事は、2～3mずつ重機で削った後に金網をはりつけアンカーボルトを打ち込んでコンクリートを吹きつけ壁面保護をおこなうとした。このような作業があるので、断面調査に取り掛かってもいろいろ問題があった。つまり、高さ2～3m、長さ20m以上の断面調査をおこなうにしても、日数をかけることができないことであり、また引き渡しの日程を組むと容易にずらせないことであった。そして、大きな工程を組んだ時に、断面調査にかけることのできる最大限の作業量は、壁削り、精査、写真撮影で1日、実測図作成で1日、土色記入と補足調査で1日の計最大3日しか確保できなかった。

石川門調査区の断面調査は、10月25日からおこなった。それで、発掘調査の対象となる谷の堆積土の黒色粘性土（シルト）までの比高差14mに及ぶ壁面調査は、翌年1月13日までかかっている。

12月はじめには、白鳥堀調査区にとりかかることとなったが、面積わずか300㎡足らずしかないのでかわらず、16世紀代の建造遺構群が存在し、遺構遺物とも密な状態であった。しかも整地土の把握が非常に難しく、複数の面を確認しながら、どの面とどの面が対応するかなどという細かな調査ができなかった。それは、調査の技術的な問題ではなくて、12月以降の時雨によって遺構面の状態が悪い時に調査をおこなわねばならないという、季節的な問題であった。平成5年度の発掘調査は、白鳥堀調査区の発掘調査をもって終了することとなり、翌年度3月までの調査となってしまった。これは、工事と同時並行で調査をおこなっているのでも、致し方ない選択であった。

なお、1月20日から降り続いた雪のために平地部で約50cmも積もったが、そのために調査区壁面が崩落して調査区が完全に埋まってしまう事故があった。この崩落は、1月23日（日曜日）の夜に起こったらしく、幸い人的そして物損被害がなかった。調査担当が立会いの下の片付けおよび復旧に2月9日までかかる。

このような発掘調査と並行して、7月1日に土木側と確認した埋蔵文化財の立会・試掘調査が、埋蔵文化財センター企画調整課の担当でおこなわれた。発掘調査担当者もその調査に立会った。

5月13日に沈床園内の歩道部分の試掘調査をおこない、百間堀の旧地形の大方の把握をおこなった。このデータをもとに7月1日の会議に臨んだのである。また、8月18日には現道下の路盤の厚さをはかるために試掘をおこなった。さらに、20日には電柱の立会調査や、9月6日には地下ケーブルの迂回工事をおこなっている。このように、工事の進捗に合わせて度重なる立会調査をおこな



Fig.12 白鳥堀調査区壁面崩落状況



Fig.13 調査未了区の工事進捗

ている。

平成6年度

本年度の発掘調査は、前年度に調査をできなかった兼六園調査区の壁面調査と、テニスコート部分（車橋門跡）の発掘調査の予定であった。兼六園調査区には、4月5日に調査に入っている。4月25日の掘削で、谷の堆積土層下まで及び、かねてより基盤層の状態を観察したいと申し出ていた、金沢大学教授 藤則雄先生が27日に現場見学された。この時の断面は、谷の堆積土層である黒色粘性土（シルト）がある状態の時で、そこから花粉分析用のサンプルをもっていかれた。次の先生の見学は、5月7日であった。

基盤層の状態を見て、断層があるという先生の指摘があり、さっそく新聞にのるところとなった。橋台部分に断層があるなどと大問題である、と土木側がさらに詳しい調査をおこなっている。その結果については、埋蔵文化財の扱う範囲ではないので知りえないが、平成6年の阪神大震災以後の活断層研究をはじめとする地質学的な研究の深まりがあり、金沢の地質研究に大きな期待がもたれる。

4月25日の調査中に調査未了区域で工事掘削がおこなわれたことを確認し、早速事実関係について土木側に経緯の説明を求めた。それによると、道路に面する石垣躯体の設計ミスによって、掘削幅が足りないことになり、やむを得ず掘り広げたことである。当該場所は遺構の密集区域であり、厳重注意をおこなって、削りのこされた約100㎡の発掘が急遽追加された。埋蔵文化財センター側都合によって、調査は7月上旬からということになった。

兼六園調査区は5月30日に完了し、7月8日に追加分の調査区の調査に入った。前年度の調査では遺構面が2面程度の把握しかできなかったが、今回は良好な天候および小面積ということで、4枚の遺構面を確認できた。特に、前年度調査区で作業面とした堅い面の続ききあたる部分に炉跡を確認し、年代的な位置付けをおこなうのにより対比資料となる。そして、8月4日に作業を終了している。

本年度のシンボルロード寺町町御道道路整備事業の試掘調査は、前年度7月の会議で確認された事項の継続である。それは、沈床閣本丸下の試掘調査と裁判所前の立会調査である。6月6～7日におこなった本丸下の立会調査では、地下ケーブル埋設部分の掘削に先立ち、当該部分に細長いトレンチを入れるものである。明治以降の石列などを確認している。裁判所前の立会調査は、11月11日におこない、谷の黒色土と共に白鳥塚堆積土も確認している。

この他に実施した調査は、前年度報告した車橋門跡の発掘調査である。これに係る発掘調査の経緯と経過については、平成7年度刊行の報告書を参照されたい。

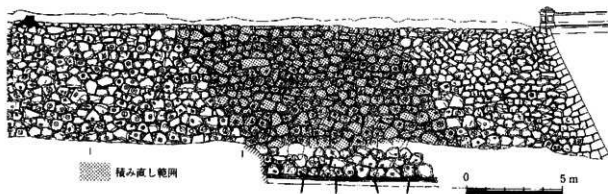


Fig.14 平成石川橋建設に伴う石垣積み直し範囲 (1/200)

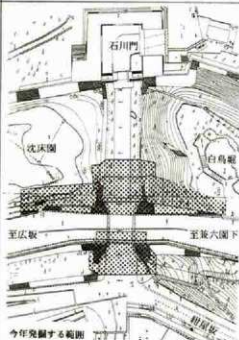
金沢城跡 発掘調査ニュース

No. 1 平成5年6月10日
発行 石川県立歴史文化財センター

石川県民の皆さんに、私たちが行っている発掘調査を理解して頂きたい、このようなニュースを発行することになりました。毎月発行が目標です。楽しみにしてください。(編)

今年も石川門前の土橋を

発掘します



今年発掘する範囲

瓦葺の調査区から葦箔を貼り付けたかわらけが出しました。かわらけとは、土師器という土器(うわ葉の掛かっているもの)土器土皿のことです。現在でも神棚や神社などで使われています。かわらけはこのような形に焼成に使われていますが、釘をともす皿にも使われています。このように土師器土皿を総称してかわらけといいますが、はっきりとした用途はわかっていません。今回沈床園から出土した金酒かわらけは、打明皿という釘をともす皿に使われています。

金酒かわらけ 出土

皿とは、皿の中に油を入れて灯芯を寝しその先に火を点けます。江戸時代には、かなり一般的な明りです。興味を引くのは、金酒かわらけはもともと違った用途(蓋等)があって、不要になったので打明皿に使ったものようです。当時の金酒葺りの製品は、簡単に個人が次手可能なものでありません。どのような経緯でそれが作られ、どのような経過で捨ててしまったかを考えると、興味があります。

全国的に金酒葺りが盛られたかわらけは、山口県美内氏館跡や福田利長を支えた家康で有名な自由都市の藤田城跡(藤田城跡)、大阪城跡など数例が知られています。横山時代には、金酒葺り研瓦が有名です。このようなきざりやかさは、横山時代から江戸時代初期に特に見られます。

最後に、この金酒葺り土師器皿に注目することも大切ですが、その他多くの遺物とこの遺物を総合的にとらえて、その時代の様子を理解することが非常に重要で、

昨年11月から今年1月にかけて白鳥城の土手を発掘調査しました。今年は、沈床園側と土橋部分(石川門前と至狭六園側)を調査することになりました。合計約1,500㎡の広さがあります。沈床園側の調査は6月7日に作業員の手によって開始されました。発掘調査は、今年の12月頃までかかろうです。その理由は、大きな調査面積でありませんが、田んぼの中を調査するのと違って、いろいろ技術的に難しいものがあり、また、土橋は盛土で造られているのでそれを取り除く土の量が非常に大きいからです。

今年の発掘で何がわかるかわかりませんが、私たちの目的としていることが四つあります。一つは、昨年確認した「寛永大火」(1632年)の後の土橋の作り替えを、さらに詳しく調査することです。二つは、辰巳川家の海軍管の出土が予想されます。その築造年代や構造を詳しく調査して、辰巳川家の土に少しでも通りたいです。三つは、藤田利家築城の痕跡を探ることです。現在の金沢城の築城は、前田利家仕立の築山石造が作られたといわれています。四つは、伝説のようにある土の多い加賀の二回掘の拠点であった築山石造の痕跡を探ることです。

これらの事を調べることによって、金沢の歴史をより深く理解できるようになると思います。そのためには、綿密な発掘調査が必要ですが時間が掛かります。そのために皆さんにご迷惑をかけるかも知れませんが、御理解のほどお願いいたします。

沈床園調査区からの発掘から

- 1) 習習「堀はもともと築城で、その埋戻しを確認。17世紀前半(前田利長の頃)の埋戻し土から多くの遺物が出土。主に、中国製の陶磁器や漆塗りの皿などです。
 - 2) もっとも古い堀の埋戻し土から、多量の木器が出土しました。下駄や容器・箸・漆塗り細な。竹で編んだ浅い皿やわらじなどです。16世紀末ごろ(前田利家の金沢城入城ごろ)かと予想しています。
 - 3) 文禄元年に前田利家の命を受けた前田利長築造の石垣を確認。現在の石垣より1mほど外側にありました。
 - 4) その石垣は土手のような盛土の土に築かれています。この盛土は非常に丁寧な作りです。現在の土橋の原型になるものです。
- いったん遺構面を蓋して、秋ごろ再び詳しく調べる予定です。その時は先に石垣を取除く予定なので、よりはっきりと当時の様子がわかることでしょう。



出土金酒かわらけ

Fig.15 発掘ニュース 第1号

金沢城跡 発掘調査ニュース

№. 2 平成5年7月12日
発行 石川県立歴史文化財センター
住所 金沢市米泉町4-133 Ⅲ 43-7692

今年も梅雨の季節になりました。発掘調査に適当な湿度が必要ですが、あまり多くの雨が降ると、当時の地面を痛めてしまうので調査ができません。何事も、ほどほどが肝心ですね。
(編)

沈床園調査区の発掘から(2)

シロの粘土を築瓦

沈床園の調査区の発掘成果を、発掘調査ニュース№. 1で報告しました。その中で、私たちが特に興味を惹いたことをもう少し詳しく紹介します。それは「謎の盛土」と名づけた土手のような遺構(45)のことです。

石の園は、沈床園調査区の土の堆積(私たちはこれを「土層」と呼んでいます)を模式的に表したものです。この園からいくつかがわかります。

一つは、百間堀(別名が護池(むかひ)堀)の堆積した土で、江戸時代前葉(堀堆積土2)とそれ以降明治43年まで(堀堆積土1)の2層を確認しました。堀堆積土2から金箔がわらけや中国製磁器が多出土しています。そして、現在の石垣は、さらに百間堀を一部分理立てて作っています。

もう一つは、江戸時代前葉の堀の堆積土の下にまた堀の堆積土らしい粘土を確認しました(堀堆積土3)。この層は、前号で藤田利家が金沢城に入った頃と予想しましたが、必ずしもそうに考えることができなくなりました。つまり、問題となるこの層の厚さが1m以上もあるからです。

16世紀〜17世紀初期の金沢城をめぐる年表です。

- 天文15年(1546) 金沢御殿(おしろ)成立?
- 天文 8年(1580) 佐久間盛政により金沢御殿陥落
- 天文11年(1583) 前田利家が金沢城に入る
- 文禄元年(1592) 利家が利長に石川晋清を命ず
- 慶長 4年(1602) 藩政によって天主閣炎上
- 慶長15年(1610) 二の丸の高石垣普請

出土遺物の年代から、堀の堆積土2の下にある埋立土は、文禄元年におこなった石垣普請(おしろ)の時に足場を敷いた土のようです。つまり、問題となる堀の堆積土3は、それ以前に堆積した土となります。もし金沢城を造った佐久間盛政や前田利家に関係するものならば、10年足らずで1mもの粘土が堆積しなければなりません。自然の状態では考えにくいことです。もしかすると金沢御殿にあったといわれている

、「護池」からみれば、あるいはまた、それ以前の可能性もあります。

堆積土3は、現在の土層の盛土の下に存在している「謎の盛土」によって堆積した土です。「謎の盛土」は、少なくとも4m近くあります。これは、黄色や黒色の粘土と砂質土を交互に重ねて叩き締めるという版築(おけ)という技術で盛られています。このような技術は、寺院の基礎とか城郭関係や土塁などの大規模な土木工事によく使われます。なぜかということ、よく解るからです。

さらに、1mの厚さで戸室石などの緑い石を盛土の基礎にしています。石川門から第六岡突交差点付近にかけて容が入っていたらしい、厚くたまった砂の堆積土(粘土)の上に盛土しなければならなかったために、あらかじめ土を置きかえたものだった。

このような大規模な工事をいつ、誰が何のためにやったのでしょうか。この答は、今わかりませんが、これからの調査によって明らかになるかもしれません。



沈床園調査区の堆積土層の模式図

石川門前の土橋調査区の発掘から(1)

6月16日から石川門前の土橋部分(石川門側調査区)の発掘調査を行っています。明治時代以降の土(厚さ約80cm)を取り除くと江戸時代の地層になります。二百数十年間踏み続けられているので非常に堅い地層です。

発掘調査によって、明治44年の石川橋工事後、辰巳用水の石管をもう一度敷設(おけ)していることがわかりました。つまり、第六岡の方から来る水を溜め貯(ため)して(貯水)に流して白鳥堀の方に流しています。少なくとも石川門側調査区に存在したはずの江戸時代の辰巳用水は、明治時代以降完全なまでに破壊されてしまったことがわかりました。



石川門側調査区の辰巳用水の石管について

写真の中央に見えるのは辰巳用水の石管です。約120cmの長さの石管を繋いでいます。これは石川橋完成後敷設し直したもので、モルタルを塗って水漏れを防いでいます。石管はレンガで造られた溜めますに接続し白鳥堀の方に水を流す構造です。石管周囲に栗石をおいて動かさないようにしています。余談ですが、明治45年まで辰巳用水を使っていました。

Fig.16 発掘ニュース 第2号

金沢城跡 発掘調査ニュース

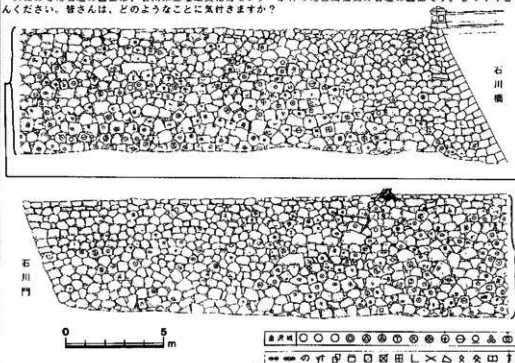
No. 3 平成5年8月11日

発行 石川県立埋蔵文化財センター
住所 金沢市米町4-133 電 43-7692

7月18日から石垣の取り外しの調査をおこないました。巧みな石垣の組みかたや、すばらしい土構の盛土を見て、江戸時代生きた先人の偉大さを感ずることができました。(文)

金沢城の石垣の歴史を知っていますか？

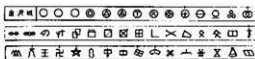
7月18日から23日にかけて百間堀側の石垣の一部を取り外し、石川橋築造時に壊されて埋め戻された土も取り除きました。今回は、発掘調査に関連する石垣調査の成果を報告します。石川門前土構の石垣復原調査は、昨年12月に写真測量をおこない、今年1～4月に校正や現地での補足実測をおこないました。このニュースにのせた石垣の図面は、石川県立埋蔵文化財センターが作った百間堀側の石垣の図面です。じっくりご覧ください。皆さんは、どのようなことに気づきますか？



金沢城の石垣は、文禄元(1592)年に築かれたといわれています。しかし、現在の金沢城のどこかの石垣が築かれたか分かっていません。前田利家が豊臣秀吉による朝鮮征伐のために九州の名護屋城(1597)に赴く時に、前田利長に石垣を築くように命じました。また、高山右近が石垣普請(1599)に参画(参画)していたとも再考されています。

編年の歴史を再考しています。「三堂問書(1597)」に次のような逸話を載せています。高山右近が参画したために築(石)を責められた利長が、石垣を築くために、高山右近に頼り、豊臣利家と不仲になったとのことです。どこまで事実かわかりませんが、石垣普請が大規模な工事であることが、そのために専門の知識が必要であったことがわかります。

加賀藩では、どのような人々が石垣普請に携わっていたのでしょうか。上の図面をよく見てください。石の裏面にいろいろな記号が見られます。「中・甲」に似たものや矢印のようなもの、JFOを連想するものなどたくさんあります。これは、石川門前の石垣ばかりでなく、金沢城の石垣ならばほとんどに見られます。この刻印は、石を切出した家臣のマークと言われます。家臣と言っても、その階級の異なる人々です。どれほど種類があるか探ってみてはどうですか？50種類近くが確認されています。



金沢城の石垣刻印(これ以外にもあると思います)

実際に石垣を組むのは、専門の技術者です。穴太(779)氏と後藤氏という家臣で、100石以下の積高しかありません。両氏の祖先は、近江(現在の滋賀県)出身だと言っています。この近江には、石を積む技術者が多く住んでいました。この人々が使う石積技法は穴太(779)積みといえます。古くは横穴式石室から井戸の石積み、団扇の石垣に見られます。この技術は、朝鮮半島から1500年前に渡ってきた渡来人によって伝えられました。この石工集団は、西日本各地を点々として石を積んで作業(197)していました。その技術者の何人かを前田利家が家来としたのでしょうか。加賀藩の石垣築造の技術の高さには非常に有名であったようです。江戸城をはじめ名古屋城や大坂城などの石垣修築に参加し、高い評価を得ているようです。

最後に、金沢城の石垣は、医王山の予前にある戸家山から産出する戸家石(安山岩の一種)を使っています。この石は、熱に対して強いという性質があるので、金沢城の石垣に採用されたといわれています。戸家石を使い始めたのが前田氏の支配となっていたからなのか、それとも金沢御堂の頃から使われていたものかよく判りません。今後の調査に期待したいですね。

Fig.17 発掘ニュース 第3号

金沢城跡 発掘調査 ニュース

No. 4 平成5年9月13日
発行 石川県立埋蔵文化財センター
住所 金沢市米泉町4-133 電 43-7682

今年の夏は気温が上がりず雨の日が続いたので、農作物に大きな被害を与えました。発掘調査も順調に仕事ができます。「予定が立たない」と困っている現場が多くあります。この異常気象はあちこちで被害を与えていますね。(伊)

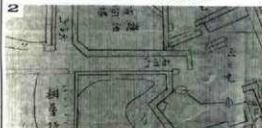


今回出土した石垣



1

「慶長古図」(金沢市立図書館蔵)



2

「金沢城之図」(金沢市立図書館蔵)



3

「金沢城中地割図」(金沢市立図書館蔵)



4

「金城探秘録」付属地図

白鳥堀の石垣の一部を発見

— 石川門前の土構の形の変遷 —

7月下旬に、石川門調査区で明治43年の石川橋建設工事で壊された部分に埋め戻した土を取り除きました。その工事は広い範囲に及んでいるので、江戸時代の土構の形を残している部分は少ししかありませんでした。しかしいろいろ重要なことがわかってきました。

まず18世紀代の盛土を調査しました。その盛土は、叩き締められたように、非常に堅くなっていました。そしてその盛土を取り除くと、昨年報道された「寛永の大火」(163年)直後の盛土になりました。

18世紀代の盛土を掘っていくと、土構の表面の土も同時に崩ることがわかってきました。そして土構を拡張したために、その盛土が非常に堅く叩き締められた土になっているのです。

一方「寛永の大火」直後の盛土は、あまり叩き締められていないので、土手を形成するものと考えられます。この違いは、またして絵図を中心とする文献資料に見られるのでしょうか。

左の絵図を見て下さい。1は元和頃(17世紀初頭)の金沢城を描いたといわれる「加州金沢城図(慶長古図)」です。現存する金沢城の絵図の中で最も古いものです。よく見て下さい。土構が直線的に描かれ、通路は石川門を入ると左側に曲るようになっています。2の絵図は、元禄年間(1688~1704)頃を描いたとされる「金沢城之図」です。土構は直線的に描かれていますが、石川門は現在と同じように右に曲るようになっています。

3の絵図は、元禄元(1688)年から宝暦9(1759)年にかけて作られた「金沢城中地割図」です。この絵図は、城内各所を縮尺150分の1で描いたもので、「石川御門口リ御旗本・新衣御門迄」の巻です。この図では、土構の形状が中ほどで広がったようになっています。4の絵図は、「金城探秘録」付録の図で、19世紀初頭頃でしょうか。これを見ると「金沢城中地割図」と同じ構成であることがわかります。18世紀以降、土構が安定した形状となるようです。

つまり、元禄年間頃の土構は、直線的に作られていましたが、いつの頃にか途中で広がるような鉤(ㄱ)状の形に変わっていることがわかります。これを発掘成果とあわせれば、18世紀代の盛土がこの土構の拡張に伴うものと推定されます。また、「寛永の大火」直後の盛土は、石垣をせる土手を形成する目的であった、必要以外の部分があった石垣は、高さ4m、高さ2mの小規模なもので、戸室石の切石は隅石と横石のみで、他は自然石を用いています。金沢城の中にあつては、ちょっと変わった石垣です。さていつ頃作られたのでしょうか。実は、まだよくわからないというのが正直なところです。

「金沢城中地割図」に、各部分の長さが記入してあるので、それを基に鉤(ㄱ)状に広がる部分を算定すると、この石垣あたりになります。しかも、石垣の石川門側の溝が隅石となつて、さらに上に向かつて伸びるようです。また、現在の白鳥堀石垣の下に「寛永の大火」直後の盛土を掘り込んだ石垣があるので、ここに疑くもと考えられます。

つまりこの石垣は、鉤(ㄱ)状に広がった部分で構成する石垣で、18世紀代の盛土施工時に造られた可能性が高いと考えています。

Fig.18 発掘ニュース 第4号

金沢城跡 発掘調査 ニュース

№. 5 平成5年10月13日
発行 石川県立埋蔵文化財センター
住所 金沢市末富町4-153 電 43-7692

17世紀前半の盛土中から、遺物用で約300の大量の瓦が出ました。しかし城の建設のほんの一部の瓦です。木製品などはほとんど残って残りません。もし、当時の物が全て残っていたらどんな調査になるかな? (麗)

辰巳用水の石管が出土した



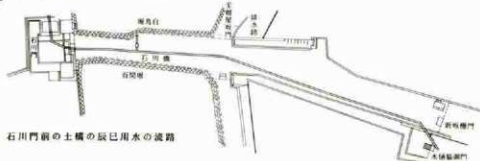
出土した辰巳用水の石管

江戸時代に据えられた石管は3本のみ残っていました。明治44年の現在の石川橋建設の時に石管の上面が破壊されたので、写真では石樋のように見えます。石管の周囲に栗石が置かれています。



石管と敷石

石管の接合部分の下に石を敷いて安定させています。敷石には石管を置く時のセンターを示す線(割付け線)が刻まれ、同時に石管側にもセンターを示すマークが刻まれています。



石川門前の土橋の辰巳用水の水路

辰巳用水は、寛文9年(1662)に前田利常が城内に水を引き入れるために作ったといわれています。設計と工事監督は、小松の町人「板屋兵四郎」であったといわれています。しかし、「板屋兵四郎」について詳しいことがわかっていません。能登地方を中心に新田開発、用水工事をおこなっている「下村兵四郎」と同一人物であると言っている研究もあります。余談ですが、金沢市東山寺院群の中の建栄寺に「板屋兵四郎墓」と言い伝えられている墓があります。

辰巳用水は岸川上流の辰巳で取水しています。そこは、川岸の岩壁に横穴を掘って大釜までトンネルにして、用水を通っています。そして小立野台から天徳院の前を通り、六圃に水を流し、城内に水を引き入れています。水を流すのに木製の樋管(木管)を用いているようで、昭和56年に石引地内の道路工事でも木管が出土しています。

木管から石管に変わったのは、天保年間(1829-1843)であるといわれています。石管は、凝灰岩(火山灰が堆積してできた石で柔らかく加工しやすい)でつくられています。高山県黒部地方に産する金屋石であるといわれています。

今までも工事中に石管の出土がありました。どのよう埋設されていたかわかりませんでした。今回の発掘調査の結果の一つは、辰巳用水の石管の構造がわかったことです。

石管の長さにはばらつきがあります。長いもので120cm、短いもので80cmです。そしてその継ぎ目は木漏れをふせぐために噛み合わせるように作り、マツタニを塗って接着剤としているようです。継ぎ目の下には、厚さ約30cmの平い石を置き、さらに周囲に栗石を敷いて安定させています。

注目は平い敷石に石管を置く際のセンターを示す割付け線を刻んでいることです。しかもよく観察すると、石管を置く部分のその石の表面が1.2cm傾り込まれています。これは、石管を置く時の水平の最終調整と考えられます。このように、精密な設計図を基に正確に作られたもので、当時の技術の高さを示すものとして理解できると同時に、先人の偉大さに敬意を表します。

Fig.19 発掘ニュース 第5号

金沢城跡 発掘調査 ニュース

№. 6 平成5年11月22日
発行 石川県立埋蔵文化財センター
住所 金沢市米泉町4-133 電話 43-7692

11月1日から石川橋が壊されています。石川橋は、約80年前に当時の最高の技術で駆使して造られました。それ以後、長い年月にわたって我々県民を見守ってきた橋の壊れゆく姿を見ると、感慨深いものがあります。(文)

寛永8年の辰巳用水の木樋が出土

《寛永8年の辰巳用水について》
辰巳用水は城内に水を引き入れるために、寛永8年(1632)に作られました。3代藩主前田利常の治世です。そして、利常の命により小松の町人「板屋兵四郎」が作ったといわれています。辰巳用水の石管は有名ですが、天保年間に木樋から石管に替えられたと考えられています。発掘ニュース第5号も参照頂ければ幸いです。



出土した木樋の全景



木樋調査中の風景

I 木樋が出土した経緯

土樋表面から約5m下で木樋が出土しました。私たちは全く予想していませんでした。正直なところ、木樋が出土したと聞いて「まさか辰巳用水か!」と思いました。

現在の作業は、工事側で土樋を2-3m機械で掘り下げた後、私たちが掘り下げられた壁面の調査をおこなっています。この壁面の調査とは、土がどのように堆積したかを調べます。そしてまた工事側の掘り下げというように、この工程を繰り返していきます。

木樋の出土は、11月3日午前10時ごろ、工事側の掘り下げ中に出土しました。その日は城内の一般開放の日で、奇妙な縁を感じます。



木樋の磨ぎ手部分

II 木樋の構造

木樋は3本出土しました。3本目はさらに石川門の方に伸びています。木樋1本の長さが約1.8mで、幅が24cmあります。そして、蓋・底板・側板の計4枚から作られ、釘を21cm間隔で打込んで固定しています。木樋材の厚さは、6.5cmもあるので、実際に水が流れる堅牢な作りです。

二つの木樋を「継ぎ手」にはめ込むことによって接合しています。その構造は、横長の部材の中央に木樋をはめ込む四角い穴をあけています。継ぎ手と木樋をはめ込む部分も、薄い板(約0.5cm)を下に敷いている部分もあります。木樋れ防止のバッキン石を置いている部分です。継ぎ手の下には、20cm前後の平な石を置いて沈み込みを防止しています。ともかく、この部分が一番腐食の激しいところなので、詳しい構造はよくわかりません。

木樋の設置にも工夫が見られます。木樋の両側に杭を打込んでいますが、その杭に棒を打込んで「H」形の受けとしています。その受けの上に木樋を置き、不均衡に沈み込むのを防いでいます。

III 木樋出土の重要性

木樋が出土したことによって、今までの私の理解のいくつかが間違っていたことがわかりました。木樋の出土意義を述べるとともにこのニュースで間違いを訂正したく思います。

1 木樋の直下から陶磁器の破片が出土しました。唐津焼の皿で、寛永(1630年前後)の頃のものです。つまり、この木樋が最初の辰巳用水のものかと判断できます。

2 木樋の約50cm上から溝を掘ってそこに木樋を置いていました。つまり、それより上には違う盛土が施されています。木樋よりも上の盛土は、寛永8年(1632)よりも少し新しいものになり、瓦葺まりの年代も寛永の大火(1631年)より少し新しくなりそうです。

3 この盛土から、金沢城が造られてから辰巳用水を引き入れる頃までは、石川門前の土樋が現在よりも5m近く低かったことがわかります。今と全く違う風景のようですね。

4 これ以外にも、昭和56年に石引町内で木樋が発掘されています。木樋の長さが4mもあり、「コ」字に差のつく構造で、継ぎ手も縦長という相違点があります。今回出土した木樋に続くのでしょうか?

金沢城跡 発掘調査 ニュース

№ 7 (最終号) 平成5年12月9日
 発行 石川県立埋蔵文化財センター
 住所 金沢市米原町4-133 電 43-7692

調査は最後の段階になってきました。工事併行の発掘調査という特殊な状況から、悔いの残らない成果を上げることができたか不安になります。得た、金沢城の発掘担当者がこのニュースを続けてくれたら素晴らしいですね。(編)

江戸時代の 土橋の造り方が わかりました



石川横門前土橋の横断面図

最下層に時期不明の盛土(盛土6)があります。これはニュースNo.2で紹介した「謎の盛土」にあたります。白鳥堀側は、黄色粘質土と黒色シルト土の層(非常に厚い土にするための盛土の技法)です。つまり、白鳥堀の水が白鳥堀側に流けないようにしています。盛土6の上には、寛永9年(1632)に作られた辰巳用水の木橋を埋めた盛土5があります。これもいつ盛られたかわかりませんが、矢印で示したところが寛永堀の地表面であることがわかりました。現在の土橋より約5mも下になるので、現在と全く違う発掘ですね。辰巳用水の木橋が敷設されて間もないころ(17世紀中頃)に土が盛られたようです(盛土4)。盛土4の厚さも同時期に概ね上がっています(石組b)。盛土3中の瓦葺まりの年代は、陶磁器から17世紀後半に求められます。つまり、17世紀中頃に土橋の改修が相次いで行われたと考えられます。18世紀頃に盛土1が盛られ明治時代を迎えます。この時の石垣(石組a)は根石土で残っています。元来その高さとなり、土橋に資する現在の白鳥堀石垣と同じような規模と考えられます。

発掘調査の結果、17世紀中頃に非常な土橋の造り方を確認しました。この頃は、幕府との関係が思わしくなく、「寛永の危機」と言われています。そのような歴史的な時代背景とこの調査結果がどのように結びつくのかこれから研究課題となります。

また、土橋の原形がいつ造られたかはまだわかりません。金沢御堂か、依久問答館あるいは前田利家の可能性もあります。盛土8の年代を特定できれば、石川の歴史を考える上に非常に重要な位置を占めることとなります。

なお、現在の白鳥堀の石垣の根石の下に根太(杉の下におく横木)を発見しました。地盤が粘土なので、石が不均等に沈み込むのを防ぐためでしょう。石垣は盛土8を敷き込んで根太付けており、盛土4の土の上に作られたと考えられます。



白鳥堀石垣下で見つかった根太(杉)

「発掘する」ということ

私たちの主な仕事は、「遺跡の発掘調査」を行うことです。発掘調査は、計画して現地での調査、作成した記録類や出土遺物を整理・分析して「調査報告書」を刊行するまでの一連の作業をいいます。そして「考古学」という学問を基礎にしています。考古学は、発掘することを目的としているわけではなく、遺跡や遺物・遺構を研究して、人間生活を研究し歴史を構築しついでに「学問」です。発掘は考古学研究の一つの方法にすぎません。私たちは大学で考古学を学んだのであって発掘を勉強したことはありません。しかし考古学の中で占める比重は大きく、発掘によって新事実が発見されたり、発掘調査量が多いと研究も大きく深化されます。つまり考古学と発掘は切っても切れない関係というわけです。「昔の穴がどうしてわかるのですか」と聞かれます。これは土の色や堅さ、あるいは砂っぽさや粘土っぽさなどの土の性質の違いからです。つまり掘られた穴に堆積する土は地面の土と絶対に違います。同じ土を埋め戻しても違います。そして当時の生活している土の面の性質を理解しなければ土の違いを深することはできません。発掘で、土層を調べたり遺構の構造を把握したり、遺物がどのように出土しているか細かく調べたり、さまざまな作業があります。多くの記録類の作成や測量・写真撮影。何よりも冷静な判断が必要があります。エジプトの王(747)フツンカメンの墓を発掘したH.カーターは、素晴らしい調査品を見てはやる心を抑えて的確な記録を作成し、素晴らしい調査をおこなっていました。つまり発掘調査は誰でも出来るものではありません。1・2年調査を経験すれば発掘を技術として行うことができるでしょうが、考古学研究に物を与える調査品を生み出すためには発掘結果が生きてきます。そして調査計画や遺構を分析してはじめて発掘結果が生きてきます。そして調査担当者には考古学的に考え判断できる能力が求められるのです。

Fig.21 発掘ニュース 第7号

第2節 調査日誌抄録

平成4年の調査

10月2日(金) 晴れ

調査区を下見して、プレハブの位置を確定する。

10月7日(木) 晴れ

プレハブ建て上げ

10月8日

器材搬入

10月17日(土) 晴れ

白鳥路公園の木を移植するための立会調査を行なう。

10月20日(火) 曇

木の移植に伴う立会調査の継続。両日の土層の状態は、古いのか新しいものなのかわからなかった。

10月21日(水) 曇時々晴れ

本日より作業員を入れた発掘とする。まず白鳥塚調査区の設定と、下草の処理を行なう。

10月22日(木) 晴れ

人力掘削による表土除去を開始する。早くも5箱分の遺物が出土。

10月23日(金) 曇時々晴れ

表土除去の継続。

10月26日(日) 雨

夜間作業に行なう石川橋南西側の桜の木の移植に伴う立会調査。江戸時代の堆積層に掘削範囲が届いていないことを確認する。

10月27日(月) 晴れ

表土下の汚れた土の除去。石垣沿いに断ち割りを入れる(断ち割り1)。

10月28日(火) 晴れ

断ち割り作業の継続。石川橋築造後の土層を確認できた。

10月29日(水) 晴れ

石垣築造時の面まで下げる。

10月30日(木) 晴れ一時小雨

石垣築造時の面まで下げる。土の状態がよくわからないので、再び断ち割りを入れる(断ち割り2)。夜間作業として、沈床園内の桜の木の移植に伴う立会調査を行なう。ほとんどが盛土中におさまる。

11月2日(日) 晴れ時々曇

流土と思われる層の除去(流土2)。石川橋実測用ポイント設定。石川橋の欄干に埋め込まれて



Fig. 22 平成4年度調査風景



Fig. 23 平成4年度検出の16世紀代包含層

いる大理石に刻まれた文字の拓本を取る。図版表紙等参照。

11月4日(木) 曇時々晴れ

調査区を上から三等分して上・中・下区とする。上・中区の流土3除去。落ち込み1掘削。

11月5日(木) 晴れ時々曇

下区の流土除去。落ち込み1の除去。断ち割り2の掘削。

11月6日(金) 曇後雨

下区の流土層の除去と並行して、落ち込み1と断ち割り2の掘削を継続する。断ち割り2から瓦溜まりを検出した。断ち割り1の掘削。

11月9日(日) 雨

断ち割り2で検出した瓦溜まりの性格をつかむために、断ち割り幅を倍にする。中区の流土除去。

11月12日(水) 曇後晴れ

断ち割り2掘削継続。中・下区で流土3除去。

11月13日(金) 曇

断ち割り2の掘削完了。落ち込み2の輪郭を確認。明治43年の金沢城の写真と、現状を比較して、百間堀の水面位置を検証した。

11月16日(日) 曇時々晴れ

断ち割り2の土層写真撮影。南北方向の土層の状態を把握するために、断ち割り3を設定する。

11月17日(月) 晴れ時々曇

同様の目的で、断ち割り4・5を設定。

11月18日(火) 晴れ

断ち割り3で瓦溜まりの続きを確認。断ち割り5の掘削。

11月19日(水) 木 晴れ

断ち割り3～5の掘削。断ち割り2あぜの明治時代の土層部分を除去する。

11月24日(火) 晴れ時々曇

断ち割り3～5精査。落ち込み2掘削。下区流土除去。

11月25日(水) 曇一時雨

落ち込み2掘削。中・下区流土除去。

11月26日(木) 曇時々雪

初雪が降る。

11月27日(金) 曇時々小雪

石垣の写真測量の打ち合せを現地で行なう。

11月30日(日) 晴れ

石垣写真測量用清掃。沈床園ヤードの石垣除去の立ち会い。

12月1日(火) 曇後雨

石垣写真測量用清掃。沈床園ヤードの石垣除去の立ち会い。

12月2日(水) 曇時々雨

石垣写真測量用清掃。

12月3日(木) 晴れ

写真測量の基準点測量。石垣の清掃。断ち割り3をさらに掘り下げ、断ち割り5を延長する。

12月4日(金) 晴れ時々曇

石垣の写真測量。



Fig. 24 瓦たまりと石川門

12月8日(火) 雨後曇

埋文センター運営委員会の一行の視察。

12月9日(水) 晴れ時々曇

断ち割り3 掘削の継続。

12月10日(木) 晴れ後一時雨

流土除去。

12月14日(月) 曇時々曇

流土除去。断ち割り2の炭層を旧地表面ではなくて盛土と考えた。

12月15日(火) 雪後曇

流土除去。断ち割り3のセクション写真、実測用割り付け。

12月16日(水) 曇時々雨

仮橋台2を重機によって掘削する。断ち割り3のあぜ実測。

12月17日(木) 雨一時曇

仮橋台2の壁面精査。仮橋台1・4掘削。断ち割り3の断面図に土色をいれる。落ち込み2の掘削。

12月18日(金) 雪後雨

仮橋台3・4の掘削。仮橋台の平板実測。

12月21日(月) 晴れ

仮橋台1・2の断面図作成。仮橋台3掘削中に水道管破裂。

12月22日(火) 雨後晴れ

本日記者発表を行なう。多数の報道機関が集まり、金沢城発掘の関心の高さを感じる。流土4・5除去。仮橋台4断面図作成。

12月24日(水) 雪

流土5除去。道具をあらう。

12月25日(木) 雪

除雪して、全景写真を撮る。瓦溜まり部分を保護して一旦調査を終了する。

平成5年の調査

1月7日(水) 雨

水道管を迂回させるのための立会調査

1月8日(木) 曇

前年発掘調査地点の全体写真を撮る。あわせて調査区の平板測量も行なう。

1月11日(日) 晴れ時々曇

仮橋台3の重機掘削を再度行なう。橋台1・2の壁面精査、写真撮影。白鳥堀調査区の石垣を除去し始める。

1月12日(火) 晴れ

橋台3の壁面精査。写真撮影。石垣除去継続。

1月13日(水) 晴れ

橋台4の壁面写真撮影、土層実測。石垣除去がほぼ終わり、白鳥堀ヤードの掘削に入る。調査区の上・中区は瓦溜まりのために掘削を見合せ、下区のみヤードとしての削平掘削になる。黒色シルトを確認する。

1月14日(木) 曇時々雨

調査区下区の重機掘削を完了する。さっそく遺構確認のための精査を行なう。

1月18日(日) 晴れ後雨

調査区下区の土層断面の精査、写真撮影。確認した黒色粘質土に断ち割りを入れた。この土層中より漆器、瓦、明染め付け碗、灯明皿が出土。一見して16世紀代と判明。文化課から文化財係長

谷内尾晋司、埋文センターより調査第1課長平田天秋、企画調整課長湯尻修平、同主査福岡正実
に現場に来てもらい、これからの作業を協議する。

- 1月19日(火) 雪
調査区下区の土層断面実測。黒色土に断ち割りを入れる。礎石のような石を2個確認する。
- 1月20日(水) 雪
断ち割りを継続する。平面図作成。
- 1月21日(木) 雪
断ち割り部分の写真、断面図作成。調査をひとまず終息し、器材を撤収する。
- 1月26日(火) 曇一時雨
3ヶ所に試掘坑を入れて、16世紀の遺物包含層である黒色土の広がりを確認する。その結果、北
端は近世白鳥堀によって削平されていることがわかった。
- 4月15日～4月20日
石垣の写真測量の補正のために現地調査を行なう。主に刻印の確認である。
- 4月26日(申) 晴れ時々曇
沈床側の石垣除去。プレハブを昨年と同じところに建てる。
- 4月27日(辰) 晴れ時々曇
石垣除去
- 4月28日(未) 曇
表土を重機で除去。
- 4月29日(未) 曇後雨
表土除去
- 4月30日(金) 雨
表土除去完了。
- 5月6日(木) 晴れ時々曇
器材を搬入する。ベルトコンベアーなどの発掘機械も搬入する。作業員も本日より作業を開始し、
調査区の環境整備から始める。
- 5月7日(金) 晴れ
ベルトコンベアーを設置し、調査区壁面を削って土層関係を把握する。
- 5月11日(火) 晴れ
遺構面の状態を確認した。つまり、石垣は盛土の上ののっており、百間堀の堆積土の除去を始め
る。
- 5月12日(水) 晴れ
近世石間堀堆積土の除去。部分的に再盛土確認。第4層の掘削を開始し、17世紀代の遺物が多数
出土してきた。金箔土師器皿が出土する。



Fig.25 調査風景



Fig.26 調査風景

- 5月13日(木) 曇後雨
第4層の掘削。遺物多数出土。
- 5月17日(月) 曇後晴れ
第4層掘削。断ち割りを入れて下層の深さを確認する。
- 5月18日(火) 曇後晴れ
第4層を除去し、第5層上面で写真を撮る。石川橋に通っている水道管を仮橋に移設するために掘削に立会調査を行なう(水道管切り直し調査、第2章第5節参照)。兼六園側で既に用水石管が出土する。
- 5月19日(水) 晴れ
第5層掘削。前日の立会調査トレンチの精査。
- 5月20日(木) 晴れ後曇
第5層完掘写真。立会調査兼六園側トレンチの壁面調査。
- 5月21日(金) 晴れ
沈床園調査区の第4・5層完掘平板実測。
- 5月24日(月) 曇後晴れ
第4・5層除去後の江戸初期の堀底の写真撮影。
- 5月25日(火) 晴れ
第6層上面精査。遺構がないことを確認する。
- 5月26日(水) 晴れ
第6層掘削。部分的に第7層に届く。調査区平面図を平板によって作成。
- 5月27日(木) 晴れ
第7層掘削。木器多数出土。出土土器から16世紀代の土層とわかる。
- 5月28日(金) 晴れ
第7層掘削。出土遺物を適宜写真を撮り、遺物出土状況を実測して取り上げる。
- 5月31日(月) 晴れ時々曇
遺物出土状況の写真撮影と実測図作成して、適宜遺物を取り上げる。
- 6月1日(火) 晴れ
遺物出土状況の写真撮影と実測図作成して、適宜遺物を取り上げる。
- 6月2日(水) 曇
遺物出土状況の写真撮影と実測図作成して、適宜遺物を取り上げる。
- 6月3日(木) 曇後雨
遺物出土状況の写真撮影と実測図作成して、適宜遺物を取り上げる。
- 6月4日(金) 雨
遺物がほとんど出土しない調査区南半分を重機によって掘削する。
- 6月5日(土) 雨
調査区南半分の重機掘削の継続。
- 6月7日(月) 晴れ
第7層掘り下げほぼ完了。土層断面の線を引く。調査区南半分の重機掘削を完了する。
- 6月8日(火) 晴れ
第7層完掘写真。土層図を作成する。石川門調査区の表土除去を重機で行なう。
- 6月10日(木) 晴れ後雨
土層図作成。本調査区完掘の平板測量を行なう。石川門調査区の表土除去を重機で行なう。発掘調査ニュース第1号を発行する。大好評?
- 6月11日(金) 晴れ
沈床園調査区を石川門調査区のベルトコンベアーの排土置き場にするために、調査区が埋まって

しまうので、保存のために土嚢を敷くことにした。その準備を行なう。

6月15日(火) 雨

沈床圃調査区の第7層下にある薄い砂の層の除去を完了する。石川門調査区にベルトコンベアーを設置する。

6月16日(水) 曇

沈床圃調査区の完掘写真を撮る。また平板測量を行なう。石川門調査区の北側斜面の表土を掘削開始。

6月17日(木) 晴れ

石川橋の平板実測を行なう。表土除去。沈床圃調査区を土嚢で埋め立てて保護し、沈床圃調査区の発掘調査を完了する。

6月18日(金) 晴れ

石川橋の平板実測。石川門調査区の新しい水道管布設溝を掘削する。

6月22日(火) 曇後晴れ

石川橋の平板実測。石川門調査区の北側の表土掘削。

6月25日(金) 晴れ

百間堀石垣撤去について、土木部と打ち合せを行なう。

6月28日(月) 曇

北側の表土除去と並行して、断ち割りを設定して落ち込み1を確認する。

6月29日(火) 雨

北側の表土除去。S D 01を確認掘削。辰巳用水石管が出土。断ち割りを設定して落ち込み1との関係調べる。

6月30日(水) 曇後雨

S D 01掘削。北側の表土及び流出土の除去。

7月1日(木) 曇後晴れ

調査区全体に精査。S D 02掘削開始。S D 01石管の写真撮影。

7月2日(金) 曇時々雨

S D 01、02の上層断面図作成。石川門調査区の全体写真を撮る。

7月6日(火) 晴れ

S D 03、04掘削。S D 01石管の構造を調べる。写真撮影。

7月7日(水) 晴れ

S D 03、04掘削。

7月8日(木) 晴れ後曇

S D 01の断ち割りを拡幅してさらに深くする。実測用の杭を設定。S D 02上端実測。

7月9日(金) 晴れ後曇

S D 01の石管幅まで掘削の幅を広げる。

7月12日(月) 曇時々晴れ

溜め槽と土管実測。石管脇の栗石除去。百間堀石垣取り外しの日程についての打ち合せを行なう。

7月13日(火) 雨

S D 03断面実測。石管の平面、立面実測。

7月14日(水) 雨時々曇

溜め槽の平面側面略図作成。S D 01実測のエレベーション。



Fig. 27 盛土にシートで保護する

7月15日(木) 雨後曇

石管を取り上げる。一時的に石垣際に保管する。また、本日より石間廻石垣の取り外しを開始する。

7月16日(金) 曇

石垣取り外し。写真実測で作成した石垣の断面図を補足する。

7月17日(土) 雨

石間廻側石垣取り外し。写真実測で作成した石垣横断面図を補足する。

7月19日(月) 曇時々雨

石垣取り外し。写真実測で作成した石垣横断面図を補足する。

7月20日(火) 曇一時雨

石垣取り外し。写真実測で作成した石垣横断面図を補足する。並行して重機によって石川橋建設時に破壊された部分を掘削する。

7月21日(水) 曇

重機によって白鳥堀側石垣の取り外し。

7月22日(木) 曇時々晴れ

重機によって白鳥堀側石垣の取り外し継続。

7月23日(金) 晴れ

沈床調査区で掘底となることがわかった南半分の基盤層までの深さを知るために、試掘調査をおこなう。あわせて、兼六園側調査区についても地下遺構までの深さを知るために試掘調査をおこなう。

7月26日(月) 晴れ

23日におこなった兼六園側調査区の試掘結果を下に土木部と当該地区の掘削について協議する。石川門調査区で、再びベルトコンベアーを設置する。

7月27日(火) 晴れ

落ち込み1掘削。近世の盛土と石川橋掘削土との境を出す。

7月28日(水) 晴れ

落ち込み1掘削。近世の盛土と石川橋掘削土との境を出す。S D 06石管写真、断面実測図作成。

7月29日(木) 晴れ

落ち込み1掘削。近世の盛土と石川橋掘削土との境を出す。S D 06石管平面実測図作成。瓦溜まり1検出。

7月30日(金) 雨後曇

兼六園調査区の辰巳用水石管を平板実測。石川門調査区の瓦たまり1の掃除、写真。

8月2日(日) 晴れ

S D 06遺構平面実測。石川門調査区の全景写真。兼六園調査区の実測ポイントの設定。

8月3日(月) 曇時々雨

石川門調査区の遺構各断面を精査。部分的に盛土1を掘削し出す。

8月4日(火) 曇

石川門調査区盛土1掘削。S D 05写真。兼六園調査区石管平面実測。

8月5日(水) 曇のち雨

石川門調査区盛土1掘削。S D 06石管縦断面図作成。兼六園調査区石管平面実測。

8月6日(金) 曇一時雨

石川門調査区盛土1掘削。S D 06石管縦横断面図作成。兼六園調査区石管底のレベルまで掘り下げる。



Fig.28 石垣解体作業

- 8月9日(日) 曇時々晴れ
石川門調査区盛土1掘削。SD05石管平面図作成。兼六園調査区石管取り上げ。
- 8月10日(火) 曇時々雨
石川門調査区盛土1掘削。SD06・05石管平面図作成。
- 8月12日(木) 曇
石川門調査区盛土1掘削。SD06蓋石取り外し。
- 8月19日(木) 曇時々雨
石川門調査区外の際にあった桜が倒れそうなので、切り倒した。この時石管上に倒れてしまい、破損してしまう。SD05石管を取り外す。兼六園調査区平板。
- 8月20日(金) 雨時々曇
兼六園テニスコート際の電柱の建て替えに伴って立会調査。大きな石垣の石がでてきた。
- 8月23日(日) 曇
調査区の北端の表土・流土を除去して近代の石垣を検出する(白鳥堀近代石垣)。そのために仮橋樑掘削範囲まで広げて掘削しなければならなくなった。
- 8月24日(月) 晴れ
SD05石管敷石および栗石実測。SD06実測。調査区北端石垣検出作業。
- 8月25日(火) 晴れ
前日に同じ。
- 8月26日(水) 晴れ後曇
沈床園調査区で、地下ケーブルの移設に伴って立会調査。石川門調査区は前日の継続作業、アゼ1断面実測。
- 8月27日(金) 曇
前日に継続、アゼ1取り外し。立会調査の継続。
- 8月30日(日) 曇
盛土3上面の写真撮影。
- 8月31日(火) 晴れ
盛土3上面の平板測量。
- 9月1日(水) 晴れ
平板測量。SD05エレベーション。
- 9月2日(木) 晴れ後曇
盛土3の掘削開始。大量の瓦出土に備え、細かい地区割りを設定する。
- 9月3日(金) 雨
台風が近づいているので、器材をプレハブまで一旦撤収する。



Fig.29 調査風景



Fig.30 調査風景



Fig.31 辰巳用水を守る会の人々の調査



Fig.32 調査風景

9月6日(明) 晴れ後曇

ベルトコンベアーの設置。盛土3掘削。戸室石の砕石範囲を平板実測。

9月7日(火) 曇時々雨

盛土3掘削。S D 05敷石下掘削。

9月8日(水) 雨

現場で土木部と石川橋のアーチ部落橋の日程を詰める。また、第2回目の百間堀側石垣取り外しの日程と、記者発表の日程を確認。

9月20日(明) 晴れ

部分的に残っていた盛土2の除去。瓦の掃除。11区の掘削。

9月21日(火) 曇のち晴れ

瓦の掃除。瓦たまりに関する記者発表をおこなう。

9月22日(水) 曇

盛土3瓦たまり出土状況写真。遺物の取り上げ開始。本日の成果、110箱。

9月24日(金) 晴れ時々曇

遺物の取り上げ。本日の成果、80箱。

9月27日(明) 晴れ

遺物の取り上げ。瓦たまり礫層下の褐色土の除去。兼六園調査区の壁面を精査する。石川橋の裏込め土の深さを試掘する。

9月28日(火) 晴れ

瓦たまり礫層下の褐色土の除去。11区にあった桜の切り株の流土除去。兼六園調査区壁面精査、写真、実測。

9月29日(水) 曇一時雨

瓦たまり礫層下の褐色土の除去。兼六園調査区壁面実測。

9月30日(木) 雨

コンテナ搬入。

10月1日(金) 晴れ時々曇

瓦たまり下の写真。1・2区の調査区壁際から石垣出土(白鳥堀近世石垣)、大いに憶てる。当該部分出土遺物について、「盛土3石垣外」とする。

10月4日(明) 雨後曇

瓦たまり下の黒色土、炭層掘削開始。盛土3石垣外掘削。

10月5日(火) 晴れ後雨

瓦たまり下の黒色土、炭層掘削、かなりの遺物量である。盛土3石垣外掘削。

10月6日(水) 曇

瓦たまり下の黒色土、炭層掘削。アゼ1の断面写真。盛土3石垣外掘削。検出石垣は、盛土3の



Fig. 33 木桶出土現場の様子



Fig. 34 木桶と工事



Fig. 35 調査風景



Fig. 36 調査風景

下の層の遺構と考えられるか？

10月7日(木) 曇

瓦たまり下の黒色土、炭層掘削完了。アゼ1の断面実測。盛土3石垣外掘削、石垣の全容がでてくる。石垣の調査方法について土木部と打ち合せ。

10月8日(金) 雨

アゼ1実測。取り外し。

10月12日(火) 晴れ時々曇

アゼ1取り外し。白鳥塚近世石垣清掃。盛土3除去後の平板測量。

10月13日(水) 曇

盛土3除去後の写真。盛土4の掘削を開始する。

10月14日(木) 晴れ時々曇

盛土4掘削。兼六園調査区で第2回目の壁面調査。

10月15日(金) 晴れ

盛土4掘削。兼六園調査区壁面調査、写真、実測。壁面の一部が崩落し、大いに慌てる。

10月16日(土) 曇

兼六園調査区壁面実測。奈良県立橿原考古学研究所研究員 北垣聰一郎先生に白鳥塚近世石垣を実見していただき、ご教示をいただく。それによると、寛永頃の石垣とのこと。

10月18日(日) 曇

盛土4掘削。重機でアゼ1まで掘削する。

10月19日(火) 晴れ

アゼ1の壁面精査。盛土4掘削。

10月20日(水) 晴れ

アゼ1の壁面精査。盛土4掘削。白鳥塚近代石垣の取り外し。

10月21日(木) 晴れ

アゼ1の壁面精査。アゼ2実測。盛土4掘削。白鳥塚近世石垣実測。白鳥塚近代石垣の取り外し。

- 10月22日(金) 雨
石川門調査区の第1回目の重機による工事掘削。白鳥塚石垣の取り外し。
- 10月25日(月) 晴れ時々雨
石川門調査区壁面調査。
- 10月26日(火) 晴れ時々雨
石川門調査区壁面調査、実測。11月3日の城内開放に関して、文化課との打ち合せを埋文センターでおこなう。
- 10月27日(水) 晴れ
石川門調査区壁面調査、実測。
- 11月1日(月) 曇時々雨
百間塚石垣の取り外しをおこなう。
- 11月2日(火) 曇一時雨
百間塚石垣の取り外しをおこなう。重機によって第2回目の工事掘削をおこなう。
- 11月3日(水) 晴れ
はじめての金沢城内の一般開放日である。重機による掘削中に、木樋出土の報が係に出ていた伊藤に入る。これ以上の掘削を見合せ、木樋の調査に入ることとなった。辰巳用水かもしれない。
- 11月4日(木) 晴れ
木樋を精査、構造を調べると同時に壁面調査もおこなう。
- 11月5日(金) 晴れ
木樋実測、壁面実測。偶然NHKの記者が通りがかり、ことの重要性を認識して急遽取材となって放送した。
- 11月6日(土) 晴れ
木樋実測、取り上げ。前日のNHKの報道によって各社の報道機関が集まり、自由取材となる。また、辰巳用水を守る会が来て簡単な測量をおこなった。作業と並行関係となって完全にブツン。
- 11月12日(金) 曇時々晴れ
第3回目の工事掘削。
- 11月15日(月) 晴れ
工事掘削。沈床園現地表面下から百間塚石垣の続きが出土。壁面調査。青木治氏が木樋関係で現場を見に来る
- 11月16日(火) 晴れ
壁面精査、写真、実測。出土石垣も同時に調査。
- 11月17日(水) 晴れ
壁面実測。出土石垣の写真及び写真実測。盛土6との関係を壁面から重点的に調べるがよくわからない。
- 11月18日(木) 晴れ時々曇
白鳥塚調査区の道路に面する石垣を取り外す。
- 11月19日(金) 晴れ時々曇
白鳥塚調査区の道路に面する石垣を取り外す。
- 11月20日(土) 晴れ
白鳥塚調査区の包含層まで重機掘削。
- 11月22日(月) 曇一時雨(時雨れる)
百間塚の出土石垣の取り外し。石の下にある刺木の写真をとって実測、取り上げ。
- 11月24日(水) 雨
調査区の壁面調査にかかる。これ以降主たる調査を白鳥塚調査区に移す。

- 11月26日(金) 晴れ時々曇
土木部と打ち合せ、白鳥堀調査区を今年度中に終了させることを確認する。
- 11月29日(月) 晴れ時々曇
白鳥堀調査区壁面(アセ1に相当する)の精査、写真撮影実測を開始する。側溝を掘り、ベルトコンベアーを設置する。
- 11月30日(火) 晴れ後曇
白鳥堀調査区の壁面実測。白鳥堀堆積土掘削。石川門調査区盛土5・6掘削。
- 12月1日(水) 雨
石川門調査区盛土5・6の重機掘削。
- 12月2日(木) 雨
包含層掘削。白鳥堀堆積土掘削。
- 12月7日(火) 晴れ時々曇
包含層掘削。白鳥堀堆積土掘削。
- 12月8日(水) 晴れ時々曇
石川門調査区の残りの盛土5重機掘削。遺構面直上まで重機で掘削。
- 12月9日(木) 雨後曇
包含層掘削。
- 12月13日(月) 曇時々雨
包含層掘削。工事用フェンスの針金が危険で作業員が転倒し、改善を申し入れる。
- 12月14日(火) 曇時々雨
包含層掘削。遺構面精査に取り掛かる。S E 01検出、掘り始める。
- 12月15日(水) 曇時々雪
遺構面精査。S E 01完掘。
- 12月16日(木) 晴れ
遺構面精査。S E 01完掘写真。S X 01から南を重点的に精査する。
- 12月17日(金) 曇時々雪
遺構面精査。S X 01から南を重点的に精査する。北端で瓦の出土が顕著。
- 12月20日(月) 曇一時雪
S X 01～03精査。S X 03は炉跡の可能性が大きい。
- 12月21日(火) 曇時々雪
S X 01～03精査。白鳥堀屑近くの掘削。
- 12月22日(水) 雪
年末に向けて器材を片付ける。ベルトコンベアーの取り外し。
- 12月24日(金) 晴れ時々曇
一旦器材を撤収して、作業員の仕事を終了する。
- 12月27日(月) 曇時々雨
排水作業。
- 12月28日(火) 曇時々雨
排水作業。最後の木回りの点検。

平成6年の調査

- 1月4日(火) 曇時々雨
器材を運ぶ。
- 1月5日(水) 曇一時雨
調査事務所内整理。白鳥堀調査区壁面実測。



Fig. 37 土橋の旧地形

- 1月6日(木) 曇時々雨
白鳥堀調査区壁面実測。
- 1月7日(金) 曇時々雨
作業員による調査再開。S X 01～03中心に精査。S X 02土層実測。
- 1月10日(日) 晴れ
S X 02上面、04実測。S X 02～03精査。S D 01石組部実測。S D 01下写真。S E 01が底に達して
いなかったのだから掘り下げ。
- 1月11日(月) 晴れ時々曇
石川門調査区壁面調査。S X 01～03断ち割り精査。S E 01完掘写真。
- 1月12日(火) 曇一時雨
石川門調査区壁面調査、実測。白鳥堀調査区平面図作成。
- 1月13日(水) 曇一時雨
石川門調査区壁面調査、実測。白鳥堀調査区平面図作成。
- 1月14日(木) 曇時々晴れ
石川門調査区壁面調査、実測。白鳥堀調査区平面図作成。白鳥堀堆積土除去。
- 1月17日(日) 曇後雨
S E 01平面図作成。白鳥堀堆積土除去。
- 1月18日(火) 曇時々雨
S X 02、04間の叩きしめ土掘削。S X 02内部の堆積土除去。S X 01、03間の包含層掘削。
- 1月21日(金) 雪
除雪をおこなう。全面にシートで覆う。
- 1月24日(月) 雪後晴れ
現場の壁面崩落。以後、雪で動きが取れず。
- 1月28日(金) 雪時々晴れ
崩落上の取り扱いはについて土木部と、除去作業の具体的方法について打ち合わせる。崩落土除去工
事に伴って、調査用の杭が失われる危険があるので、逃げ杭をうつ。
- 1月31日(日) 晴れ
コンクリートなどの産排物除去。
- 2月1日(火) 雨
崩落土上面重機掘削。
- 2月2日(水) 曇時々雪
崩落土上面重機掘削完了。
- 2月7日(月) 晴れ時々曇
崩落土を工事側の作業員で除去する。壁面のモルタル吹きつけ開始。
- 2月8日(火) 晴れ
崩落土を人力で除去する。壁面のモルタル吹きつけ。
- 2月9日(水) 雨
崩落土を人力でシートまで除去する。工事側の人力掘削完了。
- 2月10日(木) 曇時々雪
遺構にたまった土砂をきれいに取り除く。
- 2月14日(月) 曇一時雪
除雪。一日かかってしまう。
- 2月15日(火) 曇
遺構面を元の状態にまで復旧する。

- 2月16日(水) 晴れ時々曇
S X 02、03周辺を徐々に掘り下げる。断ち割りをもう一度きれいにして、七層関係をチェックする。面としてよくわからない。
- 2月17日(木) 晴れ
S X 02を掘り下げる。S X 03上面の写真を撮る。また断ち割り断面を精査継続。
- 2月18日(金) 晴れ
S X 02木組み内部の土除去後の写真。遺構がのびそうなので調査区を拡張する。調査区の北側の実測をおこなう。
- 2月23日(水) 曇時々雪
S X 02杭の外の堆積土除去。S X 03下の面まで下げる(遺物をS X 03下と取り上げ)。拡張区精査。
- 2月24日(木) 曇時々雪
S X 02精査。S X 03下の面まで下げて写真をとる。S X 04、05、06掘削。
- 2月25日(金) 曇後雨
S E 01とS X 02の実測。
- 2月28日(月) 晴れ時々曇
S E 01断ち割り開始。S X 02内掘削。S X 03下掘削。拡張区掘り下げ。
- 3月1日(火) 曇時々雨
S E 01東側地土除去。S X 02下とS X 03下の写真。拡張区をさらに拡張する。
- 3月2日(水) 曇
S E 01断ち割り実測。調査区東側整地土除去。調査区南半分を実測する。
- 3月3日(木) 晴れ
S E 01断ち割り実測。調査区東側整地土除去。調査区南半分を実測する。
- 3月4日(金) 晴れ後一時雨
S E 01断ち割り実測。調査区東側整地土除去。調査区南半分の遺物を取り上げる。
- 3月7日(月) 曇
S E 01断ち割り実測、写真。調査区東側整地土除去。S X 06掘削。
- 3月8日(火) 雨
S E 01断ち割り実測、写真完了。S X 06掘削。S X 01、02、03に断ち割りを入れる。S X 05拡張区掘削。
- 3月9日(水) 曇
S X 06掘削を完了。S X 01、02、03に断ち割りを入れて精査する。整地土のアゼに線を引く、精査。全体写真。
- 3月10日(木) 曇時々雪
富山大学広岡公夫教授に熱残留地磁気年代測定の資料サンプリングに来ていただく。S X 02、03の土層図作成。S X 01の炉の粘土をはずす。S X 05掘削。柱材の断ち割り。
- 3月11日(金) 曇一時雨
S X 02、03のアゼをはずす。S X 01の炉の粘土をはずし、下からまた炉がでてくる、困った。S X 05掘削。柱の断ち割り。
- 3月12日(土) 曇後一時雨
S X 02、03のアゼをはずす。S X 01アゼ実測。S X 05掘削。柱材の断ち割り。S X 01、05の写真をとる。本日で作業員による現地作業を終了する。
- 3月13日(日) 晴れ時々曇
S X 01、S X 05実測。S X 01の最後まで掘削する。S X 03のだめおし調査をおこなう。

- 3月14日(月) 晴れ
器材を撤収して後片付けをおこなう。
- 4月4日(月) 晴れ
兼六園調査区の石垣取り外し。辰巳用水石管を金沢菓子博覧会で展示するための運搬について、菓子博覧会事務局と運搬を担当する日本通運と打ち合せをおこなう。
- 4月8日(金) 曇
兼六園調査区第3回目の重機による工事掘削。プレハブを建てる。
- 4月9日(土) 晴れ
兼六園調査区壁面調査、写真、実測。
- 4月11日(月) 晴れ
兼六園調査区壁面実測。
- 4月25日(月) 晴れ
兼六園調査区重機掘削、白鳥堀調査区で、調査終了区域外までT工事掘削が及んでいることがわかった。土木部との間で、発掘調査の必要を確認する。工事掘削が谷の堆積土下の基盤層に及ぶことから、金沢大学藤則雄教授に現地見学を請う。
- 4月26日(火) 晴れ
重機掘削。壁面調査。
- 4月27日(水) 晴れ
壁面調査。写真。実測。金沢大学藤則雄教授が現地見学。
- 4月28日(木) 雨後曇
壁面実測。先生にたのまれていた谷の黒色シルトのサンプルを採取する。
- 5月17日(火) 晴れ
壁面の写真、実測。
- 5月24日(火) 晴れ
重機掘削。
- 5月25日(水) 晴れ後曇
壁面調査。基盤層なので土層の状況のメモ図のみの作成となる。
- 5月30日(月) はれ
器材撤収。本日をもって、平成5年度調査予定箇所を終了する。
- 7月1日(金) 雨
追加調査となった白鳥堀調査区の表土除去
- 7月5日(火) 晴れ
調査区に高さを移す。調査区壁面の精査。盛土5下掘削。
- 7月6日(水) 晴れ
側溝を設定する。盛土5下掘削。
- 7月8日(金) 曇
包含層掘削。中世のお金がでる。
- 7月11日(月) 晴れ
包含層掘削。杭打ちをおこなう。
- 7月12日(火) 曇
包含層掘削。
- 7月13日(水) 晴れ
北のS D01掘削。包含層掘削。
- 7月14日(木) 晴れ
北のS D01掘削、平面図作成。第1遺構面のS X01の掘削、写真。

- 7月15日(金) 晴れ
第1遺構面のS X 01写真、遺物を取り上げる。
- 7月19日(火) 曇
第2遺構面まで下げて精査。
- 7月20日(水) 晴れ
第2遺構面精査。何も遺構はないが、全体写真。
- 7月21日(木) 晴れ
第3遺構面まで掘り下げ。
- 7月22日(金) 晴れ
第3遺構面まで掘り下げ。
- 7月25日(月) 晴れ
第3遺構面まで掘り下げ完了、精査。写真をとって実測。第4遺構面まで掘り下げ。
- 7月27日(水) 晴れ
第4遺構面掘り下げ。炉を検出S X 401とする。その断面図作成。
- 7月28日(木) 晴れ
第4遺構面の掘削と、S X 401の炉の掘削。調査区壁面の写真撮影と断面図作成。
- 7月29日(金) 晴れ
第4遺構面精査。全体写真
- 8月1日(月) 晴れ
S X 401の精査。調査区南壁実測。
- 8月2日(火) 晴れ
第4遺構面平面図実測。調査区南壁実測。
- 8月3日(水) 晴れ
第4遺構面平面図実測。調査区南壁実測。
- 8月4日(木) 晴れ
S X 402掘り下げ、写真。断面図作成本日をもって発掘を完了する。あとは車轍門跡の発掘調査となる。

第2章 試掘調査と事前調査

第1節 試掘調査と立会調査の概要

試掘調査あるいは立会調査として原因者から依頼を受けて実施したものは、前章および本章第3節でのとおりである。しかしながら、そのような形にあらわれない調査も少なからずある。また、発掘調査でありながら、次への基礎データを得るための調査もある。このように、発掘調査や試掘調査等と言葉で単純に区別できない調査が多い。これは、工事掘削と並行する発掘調査という性格から両者の工程を搾り合わせる必要があり、そして比高差10m以上もある立体的な遺跡の発掘では地下の状態を手探り状態であったという、このような点から通常の発掘調査と一線を画する調査になった所以である。

試掘調査等で得られた調査所見やデータは、各調査区の報告中に適宜盛り込むことができたものの、どこにも取り込むことのできない調査所見もある。これらを中心に本節で概説したい。

第2節 百間堀通りの試掘調査

都市計画道路寺町今町線は、通称百間堀通りと呼ばれている。本事業の対象が兼六園下交差点から広坂交差点までとなっており、現在埋設されている電力や電話等の地下ケーブルも移設されることとなっている。新たな掘削となることから、全面にわたって地下遺構の状態を調べる試掘調査や地下ケーブル埋設に伴う立会調査が実施された。

沈床園内は、厚さ10～70cm程度の近代以降の盛土や園造成の整地土が見られ、南にいくにしたがって薄くなっている。地山としての基盤層（以下地山と称する）は、上層に礫層があり、下層に卯辰山層としての砂層からシルト層となっている。沈床園内にあけた試掘坑のうち、整地土直下に地山を検出できたのはNo.2試掘坑のみである。他の試掘坑の土層を検討したい。

No.1試掘坑では、表土と地山との間に腐植土を中心とした瓦礫の層があり、車橋門跡発掘調査によって、明治43年におこなわれた百間堀水抜きの際の痕跡と考えている。しかし、車橋門跡発掘調査区は、No.1試掘坑の25m南付近に標高29.3mの地山が検出されており、文禄年間に作られた石垣3の裏詰め土となっており、地山の高さは本来的なものであることを示す。したがって、試掘坑No.2～4の地山の高さが標高30.7～30.9mとほぼ同じであることから、この付近が最も高い地形であったことがわかる。そして、No.5試掘坑にかけて地形の落ち込みが見られ、整地土と地山との間には近世百間堀の堆積土がある。

旧地形の高まりはNo.6試掘坑周辺でも認められ、百間堀堆積土と考えられる暗灰色あるいは灰色粘質土が続かず、青灰色粘土がありこれも堀の堆積土と考えられる。これより石川橋側で暗褐色系の粘土や粘質土の埋土となる。No.6試掘坑の青灰色粘土を堀底のヘドロと考えると、水面近くに堆積した土と考えられ、この地山の高まりが分水嶺のごとき存在となっている。

No.7～9試掘坑の土層は、基本的に沈床園調査区で確認した土層と同じである。上層に、暗褐色系粘質土が厚く堆積し、近世の堀の堆積土である。沈床園調査区の第2～第5層に相当する。また、No.9試掘坑で、その層の下に戸室石砕石を含む層を確認し、さらにその下層に暗灰粘土がある。ここではその層に植物遺体や下の方で礫を含むという違いがある。沈床園調査区の土層と比較すると、多少異なる顔をもつ土層だが、第6～第7層と同じと理解したい。

つまり、石川橋からNo.2試掘坑まで多少の凹凸はあるものの、地山のレベルが上がっており、そこを頂点として南にまたレベルを下げている。百間堀相当部分にその堆積土が全面にわたって認められる。そしてNo.8試掘坑から北側の百間堀の広い部分に、16世紀代の遺物を包含する池あるいは沼状の堆積土を確認し、いわゆる「金沢御堂の蓮池」に比定できよう。その範囲はNo.7試掘坑近くまで池であったと推測される。本丸に続く尾根の広さは、No.2～3試掘坑付近が最も高い

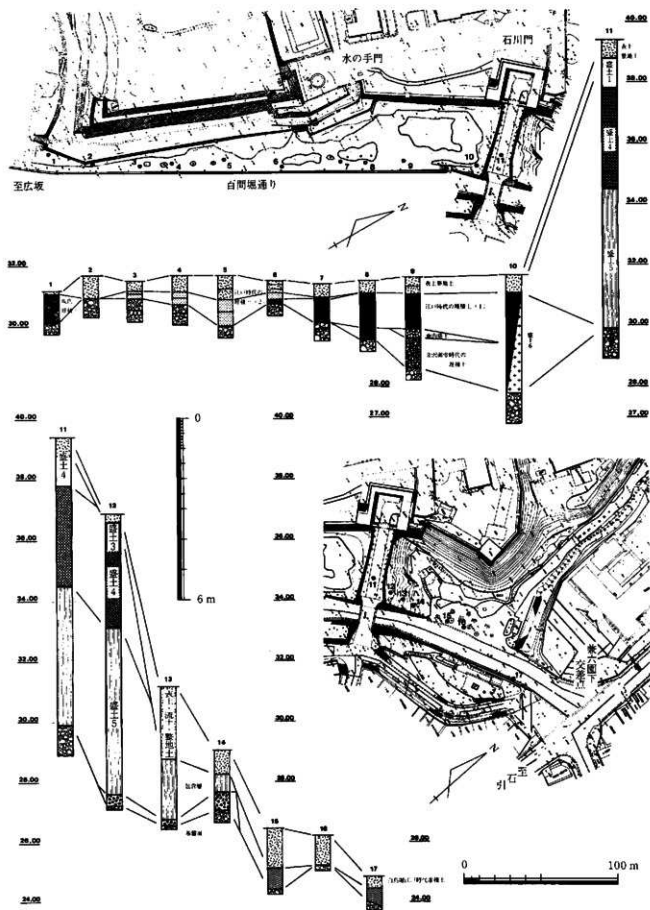


Fig.38 百間堀通り試掘位置 (1/2500) と土層柱状図 (1/125)

が、小さな鞍部あるいは谷を隔ててNo. 6 試掘坑付近にもう一つの尾根筋があるものと考えられる。

そのように見てみると、本丸部の幅程度で、台地の続きが伸びているということになる。そして水の手門周辺が地形の変換点になろう

石川橋の若干南から谷地形の堆積土と考えたさらさらとした粘質土的な黒褐色シルトの堆積が始まり、北にいくにしたがって厚くなっている。これは、石川橋から白鳥堀側にかけて緩やかに地山が下がっていることを示す。なお、谷地形の堆積土もまた地山として扱っていることをことわっておく。

16世紀代に創建されたといわれる金沢御堂の時代に盛土6の土橋を構築して池を作ったことを確認できたわけだが、それまで低湿な地を利用しており、地山の高い部分が尾根状になっていたとすると、そこからも湧水があつたに違いない。今でこそあまり認められなくなったが、小立野台地の崖から水が滴り落ちていたものである。この池もそのような水とともに、谷地形に集まる雨水等を利用して池としたと考えられる。なお、その排水がどこにあつたと考えられるが、発掘調査によって明らかにできなかった。

白鳥堀に関しては、土橋上を含め6地点の土層を確認した。No. 12-14試掘坑は、土橋盛土部分で、盛土5下には16世紀代の遺構群が展開している白鳥堀調査区北端で江戸時代白鳥堀を確認しており、No. 15試掘坑でも整地土の下に白鳥堀堆積土を確認している。しかし、やや離れるNo. 16試掘坑では盛土下すぐ基盤層となっており、白鳥堀底が意外と起伏に富んでいることがわかる。裁判所裏に白鳥堀土手の残骸があるが、その道路をはさんだ対面にあるNo. 17試掘坑では、青灰色粘土が交差点方向（北側）に落ち込んでいることを確認した。これが白鳥堀の堆積土と考えられるのかどうか判断できないが、少なくとも、地山が北に向かって下っており、地形的に低い位置にあることがわかる。

以上のようなことから、明治に作られた道路は、最も地形の低い部分を選んで作られていることがわかり、当時の道路設計の考え方をすることもできよう。

第3節 仮橋の調査

仮橋構台の掘削にともなって断面観察を主とする調査をおこなった。

仮橋1は、紺屋坂際にあり、石川橋方向で土層観察をおこなった。表土下には昭和期頃の陶磁器を包含する褐色礫層があり、北（石川門側）に向かって落ちている。下層には灰褐色粘質土があり、紺屋坂の盛土となっている。この土層もまた落ちている。時期は特定できない。褐色礫層は仮橋1

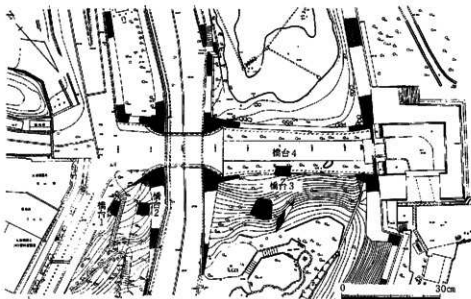


Fig. 39 仮橋々台調査区位置図 (1/1,000)

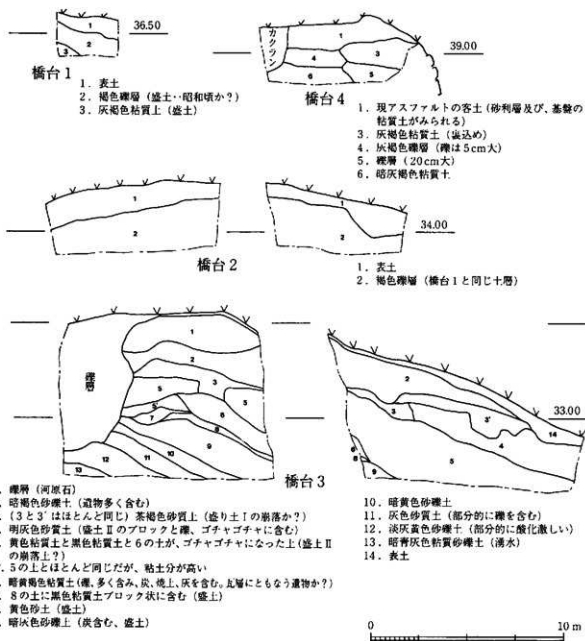


Fig.40 仮橋々台トレンチ土層図 (1/80)

より7mほど石川門よりにある仮橋2でも確認できた。工事掘削は地表面より140cm下がりであるが、下の層まで及んでいないので、かなり落ち込んでいることがわかる。

仮橋4は、石川門前上にあたり、石川門調査区の2mほど北(石川門側)にある。地表面から130cmまで掘削し、上橋主軸に直交して土層観察をおこなった。石垣築石面から2mまでその裏込めがあるが、上層は灰褐色粘質土、下層が15cm大の礫層となっており、違う技術で構築されているので、石垣が補修されたことがわかる。裏込めよりも内側には、灰褐色礫層が上層にありその下に暗灰色粘質土がある。灰褐色礫層は近代以降の盛土であるが、高さ的に暗灰色粘質土が盛土Iに相当する可能性がある。

仮橋4は白鳥堀土手中にある。地形の高いところから3.4mも掘削して、低い部分と同じ高さにした。表土下には、川原石の礫層が40~60cmの厚さで見られ、明治になって破壊された白鳥堀近世石垣の裏込め石である。その下には瓦を多く含む暗褐色砂礫土と茶褐色あるいは明灰色砂質土がある。石川門調査区で検出した白鳥堀近世石垣を埋めている層に対応しよう。

さらに、下には黒色土と黄色粘質土が混在した土、部分的に下層に礫や炭・灰・焼土を含む暗黄

褐色粘質土がある。これが、盛土3の瓦溜まりの白鳥塚近代石垣外を真っ先に埋めた層に対応するものと考えられる。それ以下の層は盛土4の土である。盛土4より上層の上は、土橋から白鳥塚方向に斜めに堆積し、崩落上あるいは土橋斜面に、人為的あるいは自然に堆積した層であることがわかる。そして、暗褐色砂礫土がかなりの厚みのある層であり、人為的に埋められた層であろう。

兼六園側で縦方向に落ち込む攪乱層としての礫の詰った土層を確認した。これは、土管排水溝であるSD01の延長にあたる。白鳥塚近代石垣上に出水口を設けて水を落とし込むようにしており、その続きを溝にしていたようであり、調査で確認したのはその痕跡である。深さは、現状で3m近くもあり、溝のような施設である。

第4節 平成4年度の発掘調査

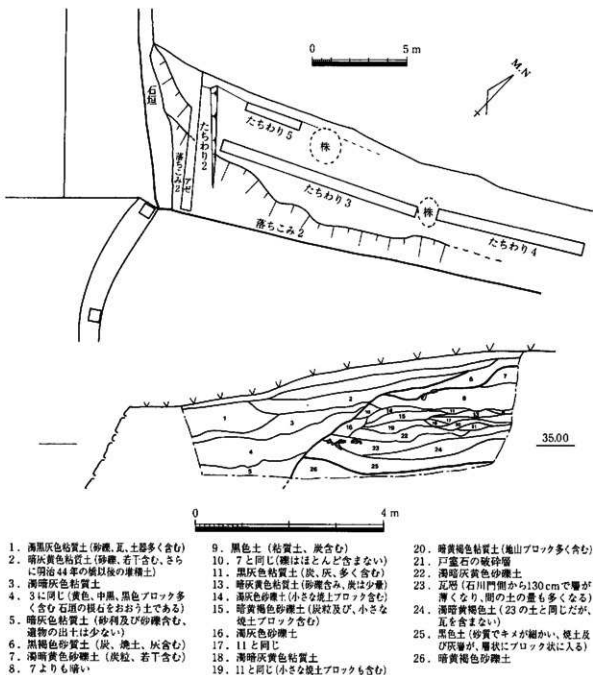


Fig.41 平成4年度調査区 (上図平面図 1/200、下図断ち割り土層図 1/80)

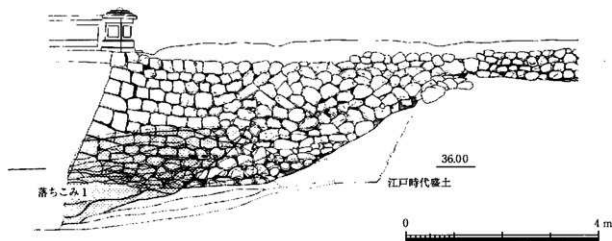


Fig.42 明治の石川橋工事と石垣、盛土との関係 (1/80)

平成4年度におこなった発掘調査は、10月に現地調査に着手し、白鳥堀調査区を対象にしておこなったが、結果的に来年度以降の発掘調査の基礎データを得るための調査になった。当初、白鳥堀調査区の調査を完了して工事側に引き渡す予定であったが、土橋のほとんどが盛土で作られている可能性があったことや、盛土途中に大量の瓦の溜まった層を確認してその性格に注目されたこと、などから当該箇所の発掘調査を完了する目的から事前調査のような目的をもって調査にあたった。部分的な発掘であったので、そこで確認した細かい土層の整合性は翌年度の発掘調査の成果とすりあわないが、石川門前十橋の調査が簡単に終わることのできない調査であることを広く十分に認識することが出来た。

明治の石川橋建設時に破壊され埋め戻された範囲を落ち込み1として確定した。ところが白鳥堀側の石垣はかなり埋められており、落ち込み1と同時期の埋め戻しかそれとも後からの埋め立てかわからないものこれも落ち込み1とした。百間堀通り開墾後の石垣構築に伴って掘削された範囲を落ち込み2とした。二つの遺構としてあるが、明治の石川橋建設の一連の工事であり、同じ遺構として扱うことができる。第4章で明治の石川橋建設の落ち込み遺構として扱っており、参照されたい。

試掘データがなかったために、盛土の構成や厚み、土質などが全くわからない上に、細長く調査区があるので、どこまで盛土として認定してよいのか非常に判別し難いものがあった。したがって堅い硬泥じりの土を盛土とし、それ以外の柔らかい褐色系の砂質土を流土と考え、上から流土1から5まで番号を付けた。

調査区は上から3等分して上区、中区、下区とした。上区は表土も薄くすぐに盛土様の土にあたったが、土橋の傾斜変換点や下のなだらかな中、下区は、確実に流土のような砂質土が堆積していた。流土をそのまま土橋の一部にとり込みつつ時代をおって土橋が変化しているので、流土除去作業とその記録作成がどの程度必要か判断に苦しんだ。しかも木株の存在によって調査作業にかなり制約が加わった。そこで、平面的に観察することよりも断面的に調査する方法を重視した。

断ち割り2～5を設定した。土層断面図は、断ち割り2のみ記録したが、それ以外は来年度にすることとして、メモのみで終わらせた。

断ち割り2は上区で確認した盛土と落ち込み遺構との関係を知るために土橋に並行に設定した。断ち割り2で確認した盛土は、大きく二種あった。一つは、濁暗黄色砂礫土系の土とその表土系の土にあたる暗灰色粘質土である。これは、翌年度の調査によって瓦溜まり1を包含する層と盛土2に相当することが明らかになった。もう一つは、黒灰色粘質土や地山の黄色砂質土などに似た土、および炭・灰・焼土層が薄く横方向に積まれ、下層にほとんど瓦からなる層と、その下にある旧表

土系ではないかと考えた黒色土からなっている。これは翌年度の調査の盛土3に相当する。

断ち割り3、5は、この盛土の広がりや流土の範囲を押さえるために設定した。上層の盛土は既に認められないことが予想されたが、下層の盛土もまたすぐに認められなくなり、狭い範囲に水平に堆積された盛土である。それより下は、盛土であることは陶磁器の出土からわかったが、それがどこまで盛土でどこから流土であるか判然としない。わずかな面積での土層の観察では、土橋という大きな遺構を把握するにはあまりにも小さかった。

第5節 水道管の切り直し調査

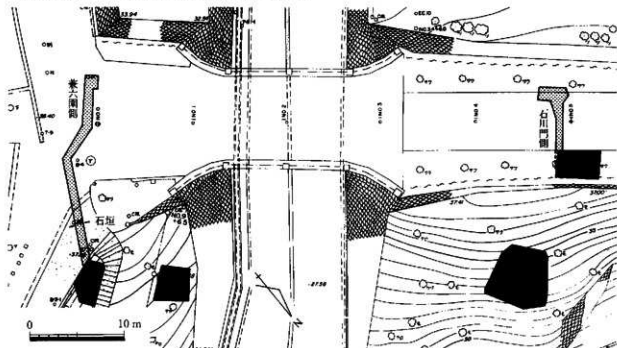


Fig.43 水道管切り直し調査位置図 (1/400)

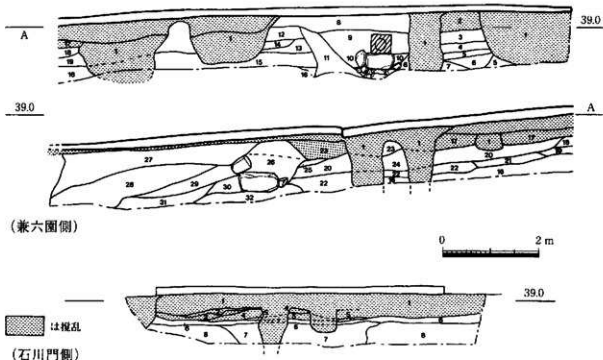
土橋中には、金沢大学に供給されている水道管が敷設されており、石川橋の解体に伴って迂回させる必要があった。そこで仮橋にその水道管を通すために、それを切り回すための掘削に伴って、立会調査をおこなった。石川門側と兼六園側の二つの掘削で、それぞれ水道管敷設のための幅約1mの狭いトレンチの土層断面観察による調査である。

兼六園側は、近世土橋の状態を知るのに、貴重なデータを提供してくれる。アスファルトと路盤下には、近世土橋の盛土が遺存している。この盛土は土橋盛土4に対応するものである。そして盛土状態は、兼六園調査区と同じである。

既に用水石管も出土しており、継ぎ手の部分に敷石をおくことから近世の埋設と考えられ、近代の擾乱を受けていない。石管理設の掘り方の深さが1mもあることから、現在の地表面は、多少削平を受けているものの、幕末当時の地表面とあまり変わらないとかがえられる。調査地点から20mほど東側で、当時融雪装置の工事をおこなっており、その掘削を見ると道路路盤下がすぐに基盤層となった。このようなことから、土橋の始まる少し東から急激に地形が降り、それをもりあげて土橋とし、現在の地表面が幕末の頃の地表と考えられよう。

また本調査区では、白鳥堀石垣も確認している。石垣は根石を含めて2段を確認したが、あと2~3段の積み石があったと予想される。根石は大きな石材を用いているが、褐色砂質土の上に直接おいており、根石の特別な施工をおこなっていない。これは、予想される石垣の高さが、わずか1.5mくらいという低いものであるためであろうか。根石を置く土は、それように特別に盛られたものである。なお、幅1mのトレンチ調査なので断定できないが、石垣の方向が、土橋の軸からかなり斜めになっており、組屋坂につづき広がっていく部分にあたるのであろう。また、確認した石垣裏込

め石が非常に狭く、根石部分で最大50cmほどしかない。しかも裏込め石が直に入り込まずに傾斜をもっていることから、盛土積み上げと同時に石垣構築をおこなったものと考えられる。



(兼六園側)

1. カク乱
2. カク乱上? 炭灰褐色粘質土 砂礫多く含む
3. 炭灰黄色シルト
4. 炭黄砂礫土
5. 赤褐礫土
6. 炭礫砂礫土
7. 6の上に黒褐粘質土 層状に包む
8. 黒褐色粘質土 (瓦、砂礫多く含む)
9. 黒褐色粘質土
10. 暗灰色砂礫土 (根石包含層)
11. 9よりもしまっている
12. 暗灰色粘質砂礫土
13. 暗灰色シルト
14. 13より砂礫多い
15. 濁黄灰色砂礫土
16. 灰色砂土
17. カク乱上? 灰黄色粘質土 (砂礫土黄砂ブロック多く含む)
18. 灰色粘土
19. 黒灰色砂礫土
20. 炭灰黄色シルト
21. 茶褐色砂礫土
22. 濁黄色砂礫土

23. 覆乱土か? 濁黄色粘質砂礫土
24. 上の層に茶褐色粘質土を含む
25. 炭茶灰褐色砂質土
26. 裏込め土 人頭大の石多く含む
27. 茶褐色砂礫土 粘性高くしまっている
28. 炭茶褐色砂質土
29. 炭灰褐色砂質土 (キメが細かいが砂礫少量含む)
30. 茶褐色砂質土
31. 29だが礫をほとんど含まない
32. 褐色砂質土

(石川門側)

1. 暗灰褐色粘質土 (礫あるいは瓦など多く含む、覆乱土か?)
 2. 1の層に近いがより砂っぽい
 3. 暗黄色砂土 (礫など多く含む)
 4. 黄色粘質土 (黄色ブロック少量含む)
 5. 黄色粘質土 (砂礫、礫少量含む)
 6. 黒灰色粘質土 (シルト的) ~ 旧表土のような土
 7. 暗灰色粘質砂礫土
 8. 黄褐色粘質砂礫土
 9. 覆乱
-) 一連の盛土の単位か?

Fig. 44 水道管切り直し調査土層断面図 (1/80)

出土は少なく、ほとんどが白鳥堀調査区包含層あるいは谷の堆積土上面、盛土中の出土である。したがって、谷堆積土の正確な年代を知ることはできないが、弥生時代には遺物の入り込む状態になっていたと考えられる。今回の調査で特徴的なのは、礫を主体とした土を相手に発掘調査を実施しながら、多数の石器を確認できたことである。より細かい調査をおこなうことによって、さらに多くの石器を得ることができたものとする。これらの石器は縦長剥片の旧石器であり、金沢で最も古い人間活動の一つを確認できた意義は大きい。

また菅玉の出土は、付近に古墳が存在していたことを教えてくれる。金沢市街地に古墳の存在は知られず、わずかに小立野2丁目地内に「塚」の伝承があるにすぎない。平成8年度に検出した大手町地内の方形周溝墓とともに、古代氏族の動向を知る上に重要な資料である。車橋門跡の調査で布目瓦が出土していること、金沢大学附属小中学校跡地から大量の白鳳期の瓦が出土していることから、奈良時代にあっても重要な地点であったことが推測できる。このような城郭前史においても、金沢御堂や金沢城に劣らない歴史的痕跡を考古学的手法によって確認できるので、十分に留意すべき事柄である。

さて、特徴的の遺物を見てみる。Fig. 45-1~3は旧石器である。2は車橋門跡発掘調査で出土したもので、本報告書で再録した⁴⁰。ともに頁岩から作られた縦長剥片で面調整を施し、定形的な刃器ではないが、側縁に使用痕跡が認められることからスクレイパーのような石器として使われたものであろう。3は周囲打撃が加えられた剥片で、各種の剥片を取った残りと考えられる。4はメノウ製の縦長の剥片で、側縁に使用痕がある。使用石材がメノウであることから旧石器よりも縄文時代の剥片の可能性もある。5は菅玉である。濃緑色を呈し、片側穿孔品である。後期古墳によく見られる菅玉のタイプである。

Fig. 46-1~4は土器である。1は弥生土器底部で厚い作りである。底部からあまり広がらない体部となることから、弥生中期頃の甕の底部であろうか。2は奈良時代須恵器坏身で、3は古代の須恵器甕体部である。4は珠洲焼である。珠洲焼の最終末である冒期が15世紀末頃といわれており⁴¹、金沢御堂の時期と重複することはないが、16世紀代にまでの使用が十分考えられ、その点で金沢御堂と同時代資料の可能性が高い⁴²。一方古代の土器や弥生土器は図示したもの以外にも数点出土しており、また珠洲焼もこの他に数点出土している。珠洲焼の出土頻度が他の種類の土器よりも高いことはないので、金沢御堂と同時代資料の可能性はそれほど高くはないものと考えられる。

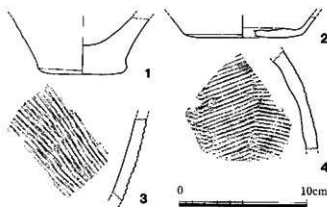


Fig. 46 調査で出土した城郭以前の土器 (1/3)

第4章 近代以降の遺構と遺物

第1節 石川橋建設の落ちこみ遺構

明治44年に建設した石川橋橋梁工事に伴う掘削痕跡である。平成4年の発掘調査においては、橋梁本体部分の落ち込みを1、百間堀通りに面する石垣建設に伴う落ち込みを2という遺構名で遺物を取り上げたが、一連の工事の中での遺構であることから、本報告では同じものとして記述し、単に落ち込み遺構とする。ただし、調査時においてあまり意識した調査をしなかったため、記録類の作成はおこなわなかった。

落ち込みは、段掘りとなっている。石川門側の掘削の起点は、百間堀に水を落としこむ排水溝である。標高36m付近までかなり急激な角度で落ち込み、しばらく平坦部を作って再び落ち込む。この段の正確な幅は出せないが、記憶では5m程度と思われる。しかし、百間堀通りに面する石垣の掘削幅は石垣面から3m程であり、高さが低い部分ほど狭い掘削幅となっている。そして、落ち込みの平面形は、「コ」字形である。

兼六園側の落ち込みの起点は、平成4年の石川橋付替工事掘削起点とほぼ同じであった。すなわち、工所用No.0ポイントより少し兼六園側でおこなった水道管切り回しに伴う立会調査で確認された辰巳用水石管は、江戸時代に敷設されたものであったが、それより2m石川門側から始まった工事掘削の断面調査で、明治の石川橋建設落ち込みを確認した。落ち込みの深さが、標高36m付近で石川門側の段の高さとほぼ同じになる。したがって、全体的に標高36m前後の高さにまず切り下げ、そして橋梁部分をさらに掘り下げたものと考えられる。

落ち込みの埋土は、標高37m付近まで川原石を用いており、石垣の裏込めのようなものである。それより上は、瓦や土器を多く含んだ暗黄灰色粘質礫土で覆っている。ちょうど橋のアーチより上にくることになり、石川橋の表層をなすものである。石川門側で確認された近代の遺構は、すべて石川橋落ち込み埋め戻し後に作られたものである。

なお、辰巳用水石管や木樋が僅かの傾きで石川門側に向かって下がっていることから、明治の工事の時に兼六園側が多少削平を受けていることが予想される。現在の兼六園観光案内所横の道路の融雪装置の工事中に見に行ったところ、舗装面と路盤下はすぐに基盤層となっていたので、これを傍証するものである。

第2節 導水・排水遺構

a) 溝と溜め槽

S D 02・04

S D 02は兼六園から石川門に続く辰巳用水石管を繋ぐ導水遺構である。橋のアーチ部分では石管の代わりに銅管を用いている。石管は、掘り方内に直置きされ、不安定な部分に木枕を下に噛まし、両側は栗石で埋め込んでいる。石管同士の間は、石川門側ではモルタル、兼六園側ではアスファルトを用いており、当時の工事請負業者の違いであろうか。S D 02石管を外したところ、石管内部に多量のヤマトシジミ貝やタニシ貝の殻が遺存しており、兼六園から入ってきたものである¹⁰⁾。S D 02・04で使われた銅管はグラインダーで切断することが出来、日本製か外国製か興味のあるところである。また、旧石川橋橋梁内の鉄筋はグラインダーで切断することが



Fig.47 辰巳用水石管内部(白く見えるのがシジミ貝)

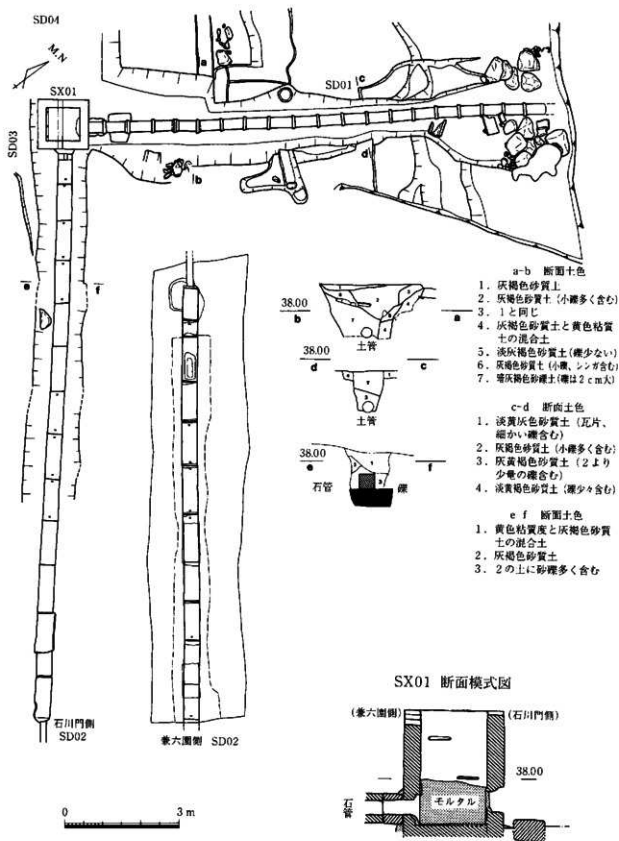


Fig. 48 石川門調査区近代の遺構 (1/100) と SX01 模式断面図 (1/50)

できず、溶接切断によって切ることができた。化学的分析をおこなわなかったが、その所見を示しておく。

SD02は、SX01のレンガでできた溜め柵に接続している。溜め柵のレンガに穴をあけてモルタルを用いて接合している。SD02の延長にSD04がある。しかし、レンガの溜め柵に接合できるように穴をあけているにもかかわらず、モルタルによって塞いでいる。これは、SD01が溜め柵をとって城内に引き込まれ、江戸時代の辰巳用水が明治以降になってもある程度機能していたことを推測させる。つまり石川橋建設直後のSD02は金沢城内に引き入れられていたが、暫くしてそれを壊して水を白鳥堀側に落とすという、その遺構がSD01である。



Fig.49 近代再敷設の石管

またSD04はSD01の埋土と同じで、現石川橋表土が覆っているSD04から辰巳用水石管が出土しているが、こちらの方は江戸時代に据え付けられたままの状態であったものの、石管上面を砕いて破片を内部に落とし込んでいる。この作業は、検出した2本のみに施され、断面に続いている石管を破損した痕跡はない。調査中において、この石管口から水が流れてくるのがなかったため、当時も水の逆流がなかったことがわかる。これらの作爲は、先に述べた辰巳用水を排水するためのものである。時期を確定できる遺物の出土がないので、施工時期はよくわからない。しかし、SX01とSD04接合部分の側に入頭大の石で穴を塞ぎ、内側をモルタルで塗り込み、SD01埋土中に戸室石や凝灰岩でつくられた暗渠施設破片が出土している。このような点から、SD01、02の建設とSD04の破棄およびSX01建設が短時間のうちにおこなわれたと考える。

SD01

SD01は、SX01から白鳥堀方向に排水する溝で土管を連ねている。直径30cm（内径23cm）の一方が受口状になり、もう一方が噛み合わせを良くするために溝を刻んだ形状の土管である。そしてSD01は白鳥堀の近代石垣の所で排水する構造と考えられる。近代石垣の外側には、SD02からの

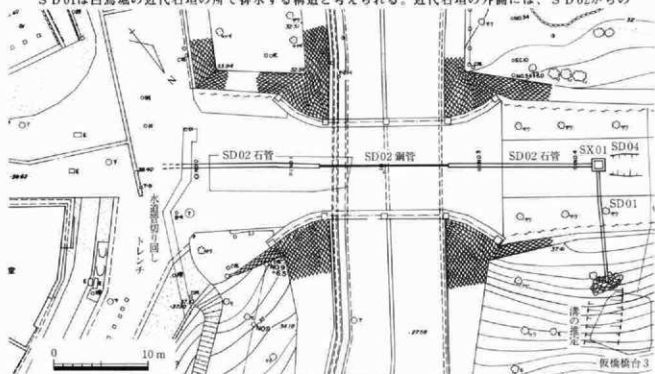


Fig.50 近代排水管と排水溝および白鳥堀近代石垣 (1/400)

排水を受ける特別の施設は見られないようで、溝状になっていることを予想できるのみである。なお、当初の発掘調査区域がちょうど白鳥堀近代石垣とS D01との接点となったことから、両者を意識して発掘することができなかったのは残念である。

S D01の埋土は表土及び石川橋盛土の混合土となっており、掘り方内に多量の凝灰岩あるいは戸室石でできた樋とその蓋石の破壊されたものが出土している。これは、S D03 (06) と同じ施設を構成する部材と考えられ、S D03 (06) が白鳥堀方にも続いていたことを示し、その遺構を壊して同じ位置にS D01を作ったと考えられる。

S D01とS X01との接合もまたモルタルを用いており、S D04等の設置施工が一連の作業であると考えられる。その高さは、溜め槽底に土管が接する状態で、S D02と同じ高さに相当する。

S X01

S X01は1辺1.4mをはかり、レンガを積み上げて作られている。レンガは、横位と縦位に交互に置いており、現状で深さ1.8mある。S X01南面に鉄製梯子が作られている。地表面の高さが現在と変わらないものとする、あと50cm上方に伸びてあと1段の梯子があったことがわかる。内部は一気に埋められたような砂礫土で、埋土中よりビニール袋が出土した。内側は底から50cmまでモルタルが一面に塗られてS D04との接合穴が塗り込まれているほか、S D01、02との接合の強化をはかっている。なおS X01下にS D06の栓の石となる凸型の部材があった。

S D06 (S D03)

S D06とした排水溝は、長さ5.5mを測り、戸室石を樋石に、凝灰岩を蓋石に用いている。同様の部材は近代排水路 (S D01) 埋土中にも見られ、白鳥堀側にも通じていたことがわかる。排水溝は、百間堀石垣に通じており、そこから出水している写真や絵画がある。石川橋建設時の掘削がS D06まで及びしかも裏込め石上にのる部分は、石垣解体に伴って裏込め石が崩れてS D06が壊されている可能性がある。そのような視点でS D06を見てみたい。なお、同じ溝だが、埋土から確実に近代に埋められたものである部分をS D03とした。

蓋石は乱雑におかれ、大きさを揃えるとか方向を揃えるなどの注意を払っていない。そのため



Fig.51 近代の遺構



Fig.52 S X01のS D04側で穴を塞いでいる



Fig.53 S D01内に散乱する石材



Fig.54 S D06と石栓

に、溝の両端まで蓋石が覆っていないなかったり、蓋石間で隙間が生じ、それを無理に埋めるために二重に蓋石としているなど、丁寧な造作とは思われない。樋の平面形は緩やかなS字のカーブを描き、樋間でも隙間が見られる。よく見ると、上樋中心から二石目までは直線だが、三石目から歪んでおかれている。出水口になる樋の先端が欠けているなど当初の状態でないことがわかる。

つまり、石川橋建設の掘削作業が及んだ時に、一旦撤去し再度置き直したものと考えられる。直線におかれた二石のみは当初の状態を保っている可能性があるが、少なくとも蓋石はない状態であろう。土橋盛土部分の掘削範囲はSD06まで及んでいるが、掘削法面の関係でそれ以下の高さでは際でしか掘削は及んでいない。これは、SD06が置き直されたにしても、盛土上におかれたSD06高さまで攪乱していないことを示す。

このように、近代の遺構と考えられるが、おそらく近世の遺構と同じように組まれたと考えられ、目的をもって組み直されたものであろう。

b) SD01と白鳥堰近代石垣

白鳥堰近代石垣はSD01出水口に位置しており、幅3.5m、高さ2.5mをはかる。北端には近世白鳥堰石垣があり、部分的に石を噛ませているので、近代石垣を構築する時には近世石垣が見えていたことがわかる。石垣はほとんど角のない丸い川原石を用いて構築されている。基本的に水平に積み上げていく間積みの技法によっているものの、小口面を築石面にする意識はあまりないようである。裏込め石も10cm前後の比較的小振りの川原石を用いている。假橋橋台3が石垣前面にあるが、その南北の上層図に礫が充満した溝状の落ち込みを確認

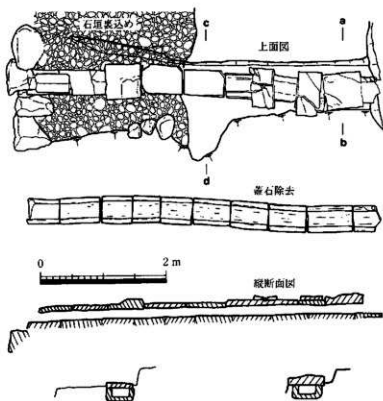


Fig.55 石川門調査区SD06実測図 (1/60)

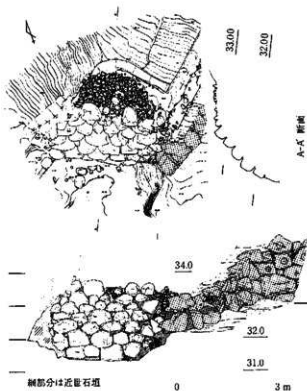


Fig.56 石川門調査区白鳥堰近代石垣図 (1/100)

している。SD01からの水を流す溝のような落ち込みと考えられよう。

この石垣は、近世石垣と石川橋との間に石垣部分だけ掘り窪めて積んでおり、両側に石垣自身が突っ張ることによって強度を高めているものと考えられる。SD01から出水する水量は、辰巳用水に流れる水量とすると決して少なくないはずであり、それなりの量になると予想され、石垣についてもそれなりの強度が求められたと考えられる。明治の石川橋建設工事で修復された部分の石垣は尸室石を使っているが、この石垣は川原石を使うという根本的な違いがある。これは、一連の石川橋建設工事に伴って作られたものではなく、やや遅れた別工事として施工された可能性がある。

第3節 近代遺構等の出土遺物

実際は多くの遺物が出土したが、遺物取り上げに際して選別をおこなった。土器・陶磁器に関しては、時期の分かりそうなものや、異なる産地あるいは器種が分かるようなものを中心に、瓦に関しては、軒瓦を中心に採集した。

a) 表土及び流土 (Fig.57, 59)

陶磁器、土器

表土出土遺物は、ほとんどが白鳥堀側で人力掘削した時に採集したものである。明染付け (57-1, 2等) がある。7は外面一重網目文の碗で、軸は生掛けされているので、初期伊万里の製品であることがわかる。また、6の外面青磁染付け碗など、17世紀代という近世前半に位置付けられる遺物が若干認められる。しかし、出土陶磁器の多くは幕末から近代に属するものである。おそらくこれら古相の一群は、盛土中に含まれていた遺物が近代の工事の攪乱によって地表にでてきたものであろう。

57-8の丸碗は肥前である。しかし、その他の染付けは瀬戸美濃系が多くを占めており、これは時代的な背景であろう。14は銅版刷りの鮮やかな鉄須の徳利である。エッチングの技法によって濃みを表現している。17は硬質陶器で、体部外面に「よ志乃」、内面に紅葉が描かれている。兼六園の茶店で使われたものであろう。このような明治の遺物は、兼六園茶店にかかわるものが多いと思われ、その園遊の残滓であろうか。15, 16は軍隊で使用された食器で、硬質陶器である。底に「硬陶」と銘がある。城内に駐屯していた第七連隊で使用されたものである。

流土中から出土の遺物もまた表土と同じ傾向のようである。ただし、第2章第4節でも述べたが、平成4年度の調査で流土としたもののおおぐが、上層関係がよくわからないまよりあえず上げた資料である。流土としたものでも、当時はよくわからず今考えれば盛土4相当の土層から出している遺物も流土として取り上げている可能性がある。したがって、あまり参考になる資料でないことを断っておく。

59-1~4は明染付けである。1は見込み饅頭心で枝折花文を描き、底に「福」銘。同種碗は白鳥堀調査区遺構面からも出土している。2は芙蓉手碗で、口縁端部はやや内湾する。文様の区画の単位は大きい。3は角皿で外面に龍を描く。同種角皿は、盛土4・5からも出土している。5は白磁八角杯で製作である。八角になっているのは体部上半のみで下半は円形である。小破片だが、把手がつくものである。口縁端部外面に雷文、体部に雲気文の間に小珠文を散りばめている。盛土4から同類の白磁八角杯が出土している。6は肥前染付けである。7は織部角皿で、鉄軸によって文様を描いているが文様構成はよくわからない。8は絵唐津皿で、小さな胎土目が見られる。

b) 石川橋建設落ち込み遺構 (Fig.58)

陶磁器、土器

落ち込み遺構から大量の遺物を出上しているが、特に選別して取り上げた。

58-7のような壺蓋で18世紀代の遺物や、8の紅皿、瀬戸美濃染付け (5, 15) のように幕末頃に降る遺物もある。また、13の土師器皿は盛土3資料群と同一のものである。12や14の肥前陶器もまた、盛土3資料群に対応する可能性がある。なお11の播鉢は全面に鉄錆軸をかけており、産地は不明。

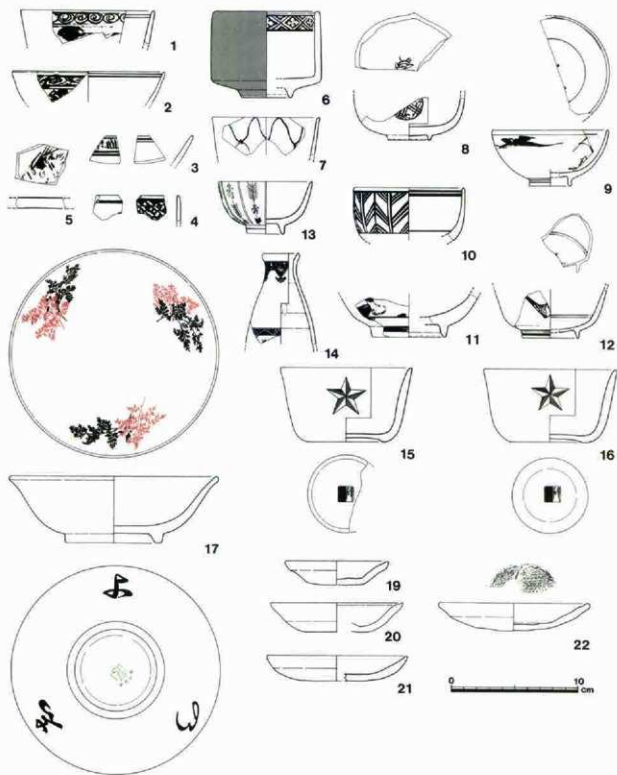


Fig.57 石川門調査区表土出土土器 (1/3)

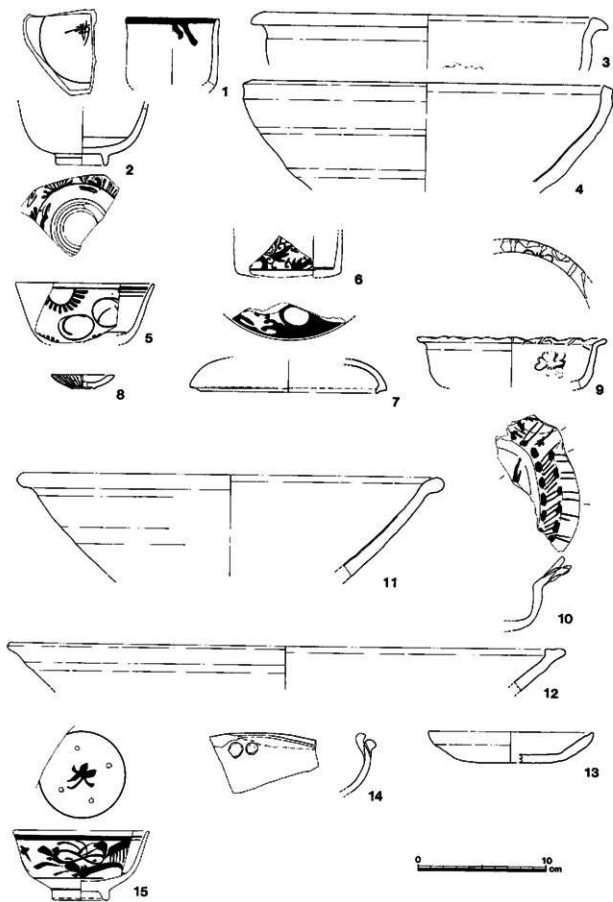


Fig. 58 石川門調査区流土・落ち込み遺構出土土器 (1/3)

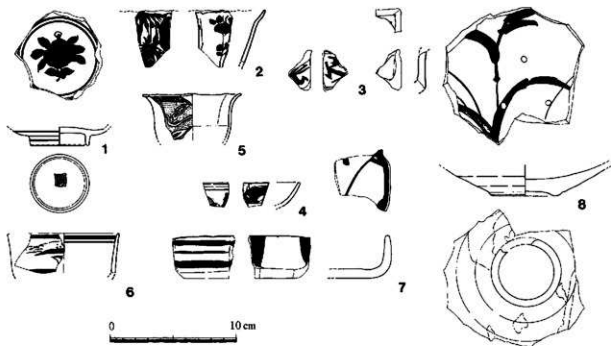


Fig.59 石川門調査区白鳥塚出土土器 (1/3)

c) S D01・04 (Fig.60)

1、2、11は瀬戸美濃染付けである。2の呉須はグラデーション様に施され年代的にも新しい印象を受ける。4、5はともに鉄軸をかけた陶器で、5の壺は器形から肥前系と思われる。これら以外は、盛土3資料群に対応するものである。すなわち、S D01が盛土3瓦溜まり層を一部切り込んで作られているので、盛土3資料群が入り込んでいるものと考えられる。3は越中瀬戸の皿で、おそらく見込み中央に菊印花が押されているものであろう。同様の遺物が盛土3から出土している(122-8、9、10)。

6~10は土師器皿である。いずれも灯明油煙を付着させている。9の器形がかなり体部がねた器形で口径もやや大きいようであるが、他に比べて小さな破片なので口径が小さくなるかもしれない。6~8は同じ器形で、しっかりした底部から立ち上がる体部、口縁端部に面を作り出しており、10はそれほど顕著ではない。このような特徴は、盛土3資料群に共通し、そこから混入と考えられる。

S D03 (06) (Fig.60)

11、13は明染付け皿である。13は非常にきれいな裏地を用いており外面に菊花が赤線で描かれている。これらはS D03建設時に混入したものである。

d) 表上、近代遺構出土瓦類

梅鉢文軒丸瓦 (Fig.61-1~3、67-1、79-1~5)

61-1~3は梅鉢の花弁と中心軸のみ「円」で表現している。面径18cmとおおきい。これらは巴文と同じようにいぶし瓦で、昭和59年に木立雅剛氏によって白鳥塚土手で同形の瓦が採集されている⁶⁰。また、67-1は花弁と軸、剣を表現して褐色の軸がかけられているほか、79-1~5の軸の種類は違うが同じ軸瓦の梅鉢文がでている。面径も小さく15cm程度である。梅鉢文の下顎には2個1対の穴が開けられており、他の軒丸瓦と違う取付け方法であったことがわかる。層位的に確認できないが、軸や剣のない梅鉢文が古くて軸のかかった梅鉢文が新しい。幕末頃の瓦と思われる。

巴文軒丸瓦 (Fig.61-3~12、62-1~3、68-1~2、70-1~4、73-1~6、77-1~3)

全て三巴文である。右巻と左巻きがある。また、巴の頭部が集まる中心に珠文のあるものがある(62-2、3、70-4、73-1、6)。また、巴の尾部が隣の巴の背中に接して一見内区と外区を分ける圏線のようにになっているものもある(61-4、5、10、62-2、3、70-4、73-2、3、

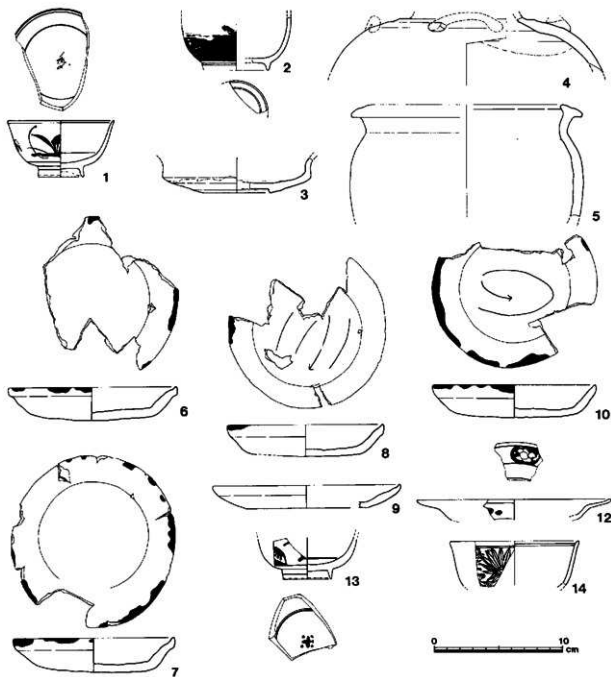


Fig.60 石川門調査区近代遺構出土土器 (1/3)

77-2, 3)。巴文の間に×のマークがあるものもある。これらの特徴は、盛土3の瓦たまり資料に共通するものであり、古い資料の混入と考えられるが、依然として使われ続けたものもあろうか。唐草文軒平瓦 (Fig.62-4~11, 67-2~6, 68-3~5, 70-5~10, 73-7~9, 77-4~7, 79-6, 8)

中心飾りの形や枝葉、ツルの形から複数の形式に分類できるが、文様の要素のみ概観する。中心飾りが上方に3枚の花弁が開くものがおおくを占めている。そして花弁の下に2本の枝葉が続くもの (62-4, 5, 70-5, 6, 7, 77-4, 5) が圧倒的多数を占めるが、枝葉の伸び方によってさらに細分できる。また、3枚の花弁が下方に開き1枚が上に、そして左右に2本ずつのツルがあるものがある (77-7)。5枚の花弁が下方に開き上に2本のつるがあるものもある (62-11)。こ

これらの花卉は、細長い柳葉状のものであるが、中心飾りが花卉の花びら状のものがある。この時の枝葉部分は、幅広の葉の表現である(62-9、10、70-9、10、73-7、8、4)。このような形式の多くは盛土3資料に共通し、軒丸瓦と同じである。

無文軒瓦 (Fig.68-6)

無文の軒瓦が流土から1点のみ出土している。軒に面する部分が斜めになっているので、隅切りの軒部分である。

丸瓦 (Fig.63、67-7~8、69-3、71、74、75-1~2、78-1~2、79-7)

すべてコビキBで作られている。丸瓦の幅は、軒丸瓦にある程度反映されようが、直径のわかる資料では、15.2cm、15.5cm、14.8cm、14.4cmのやや小さな一群と、19.1cm、17.4cmのやや大きな一群とがある。軒丸瓦の面径が18cm、15cmなどを確認しており(盛土3資料参照)、それぞれに対応するものであろう。内面には布袋痕やその縦じている紐あるいは刺し子などがみられる。40-2や47-2は内面に角棒でつづいた痕跡があるが、丸瓦の製作の土台から離す時に離れにくかったためにつづいたものであろう。

平瓦・隅切瓦 (Fig.63-3、64-1~4、65-1~2、69-1、2、4、72、75-3、76、78-3)

全形のわかるものはないものの、平瓦の属性のうち大きなウェートを占めるのは、幅である。幅が、23.4cm、22.8cm、24.0cmとよくにている。平瓦の製作台はほとんどが凹台であることが、平瓦裏面に成型材である砂粒が残されている。凹面表面はハケによって、縦方向そして端部近くはそれに並行してなでている。基本的に成型した表面は調整をおこなわない。隅切り瓦は(65-1、2、76-3)3点出土しており、平瓦製作後、一隅を切ったものであり、製作技法は同じである。

棧瓦 (Fig.64-5、79-9、80)

ほぼ完形品は、SD04から出土している(Fig.80)。幅31.8cmである。この他に、受けのあるもの(64-5)がある。これも棧瓦といってよいかわからない。受けの部分に上の同じ種類の瓦が置かれるとすると、かなり特殊な瓦である。

石瓦 (Fig.66)

棟瓦である。凝灰岩から作られ、幅37.0cmをはかるが、長さについては破損によって不明である。内面に粗く工具痕を残すが、外面および端部は、調整である鋸で切ったような擦痕がある。棟瓦の頂部に工具痕が認められ、細部調整をおこなっているものの粗い調整である。

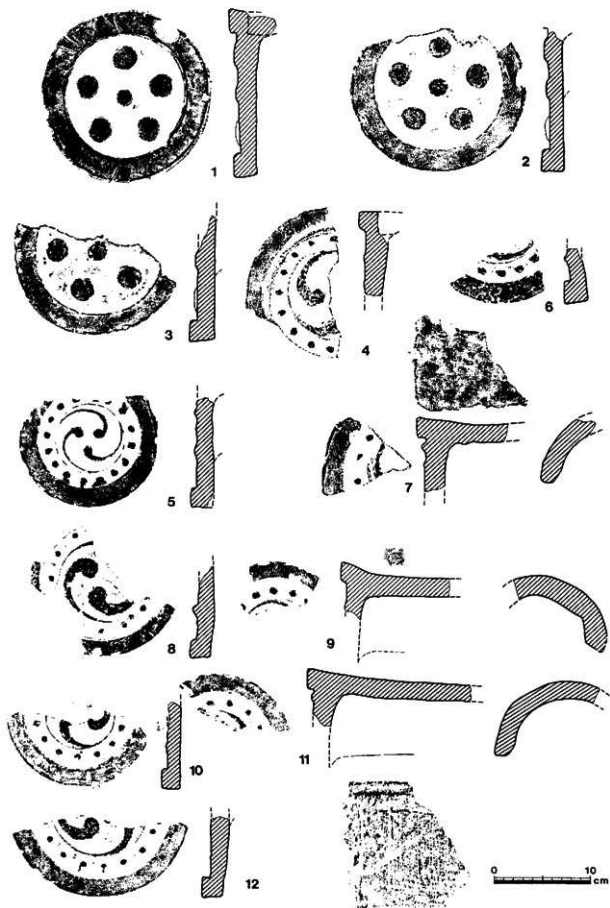


Fig. 61 石川門洞金区表土出土軒丸瓦 (1/4)

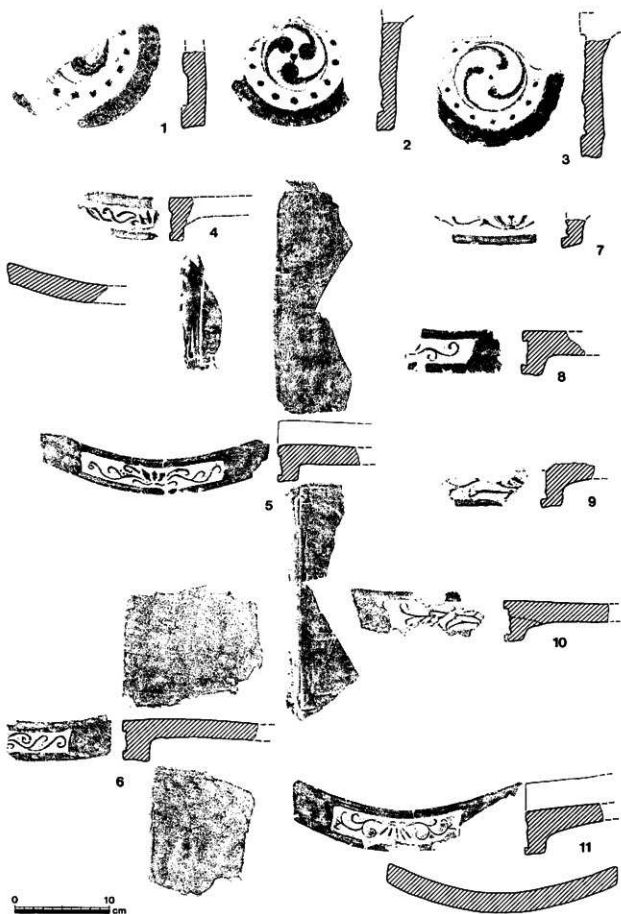


Fig. 62 石川門調査区表土出土軒丸・軒平瓦 (1/4)

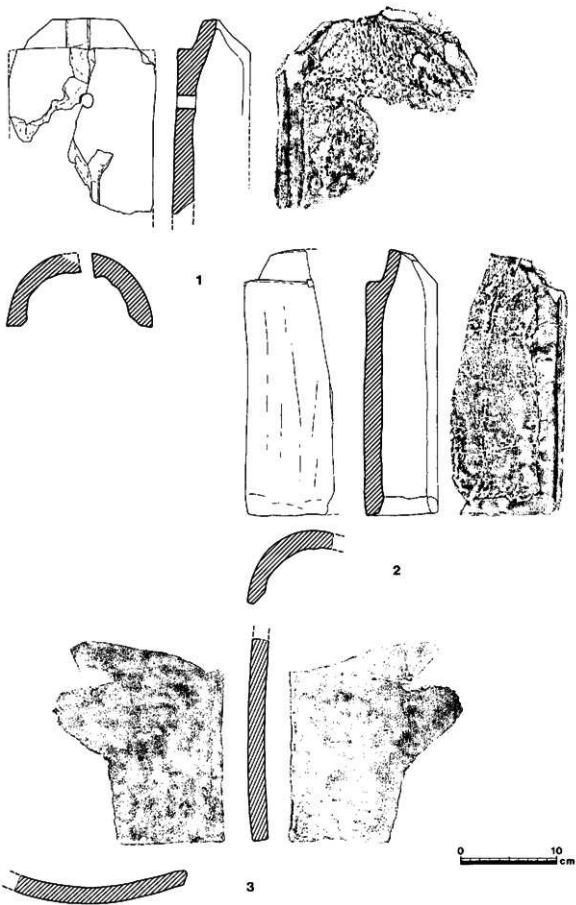


Fig. 63 石川門調査区表土出土丸瓦 (1/4)

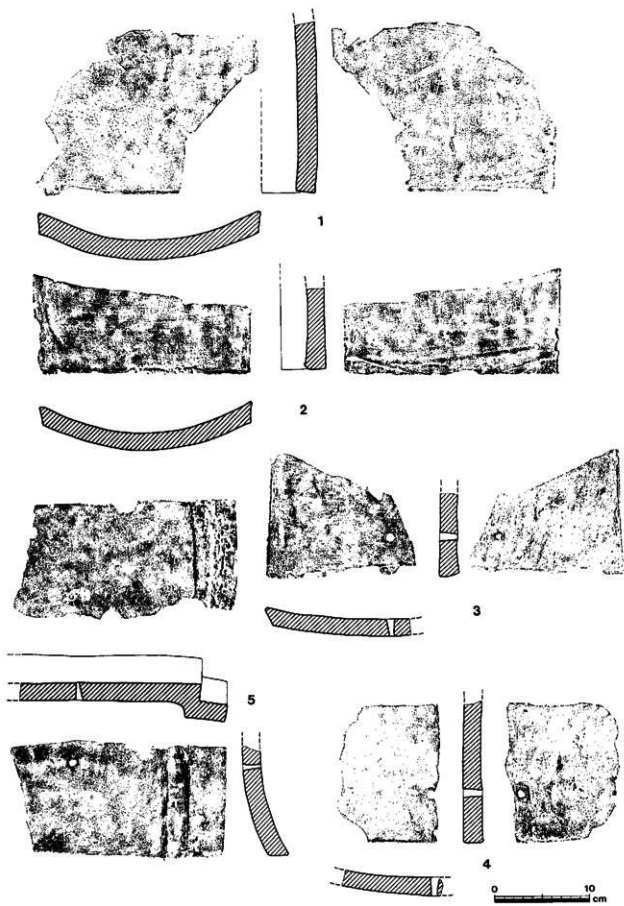
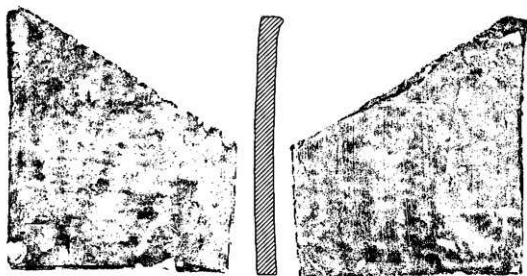
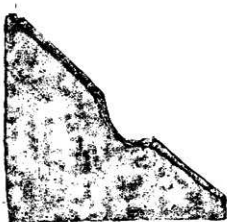


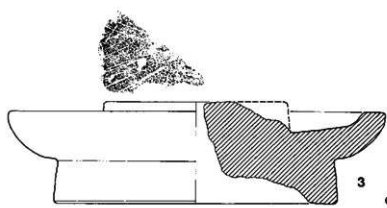
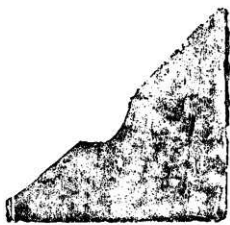
Fig. 64 石川門調査区表土出土土平瓦 (1/4)



1

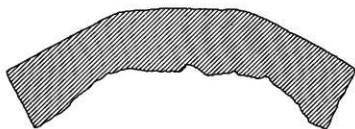
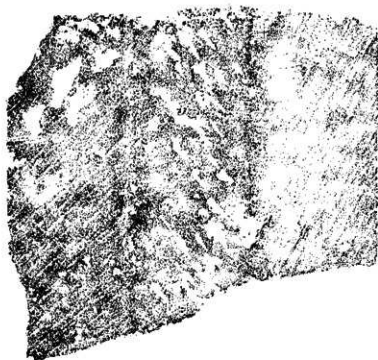


2



3

Fig.65 石川門調査区表土出土隅切瓦 (1/4)、石臼 (1/8)



1



Fig. 66 石川門調査区表土出土石瓦 (1/4)

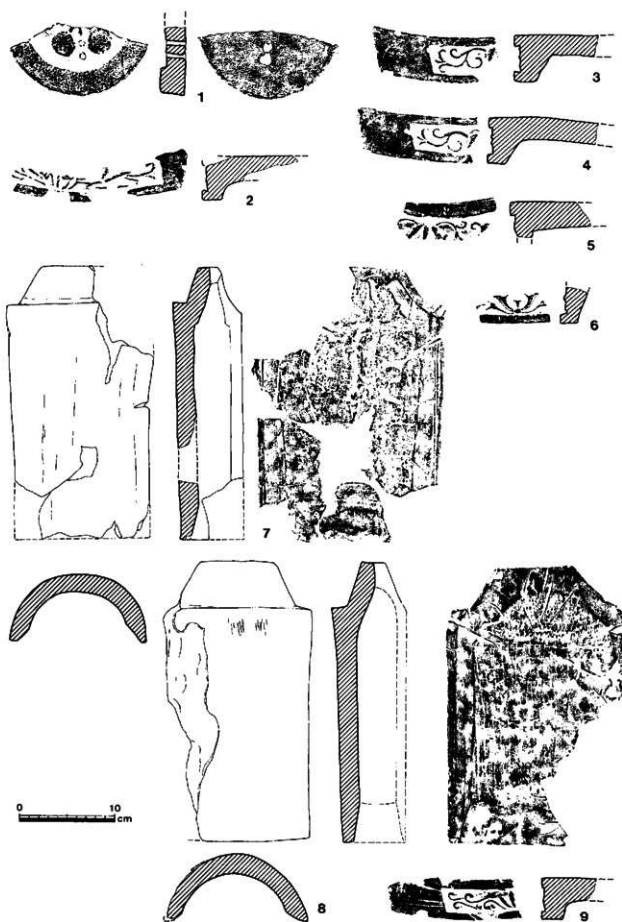


Fig.67 石川門調査区白鳥堀流土1出土瓦 (1/4)

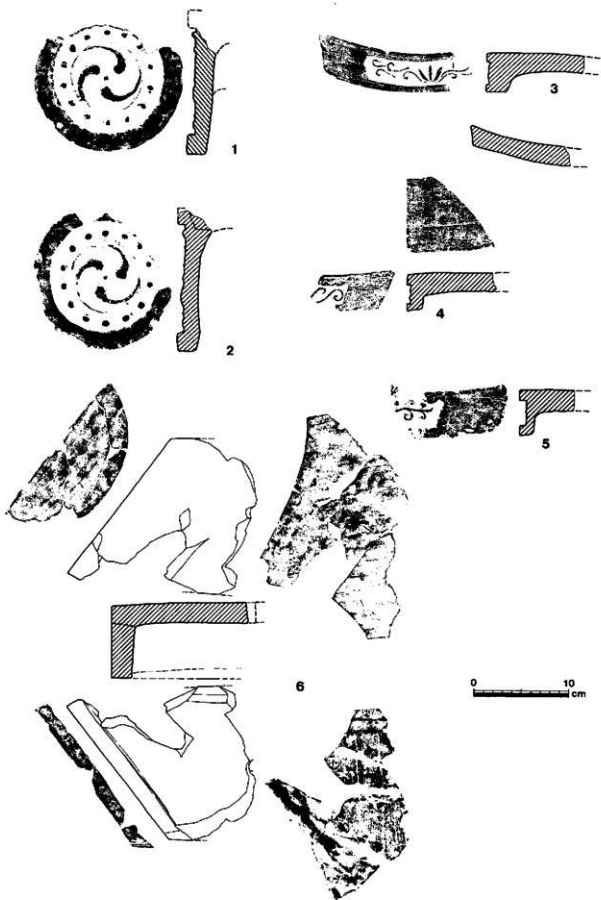


Fig.68 石川門調査区白鳥塚遺土2-3出土瓦 (1/4)

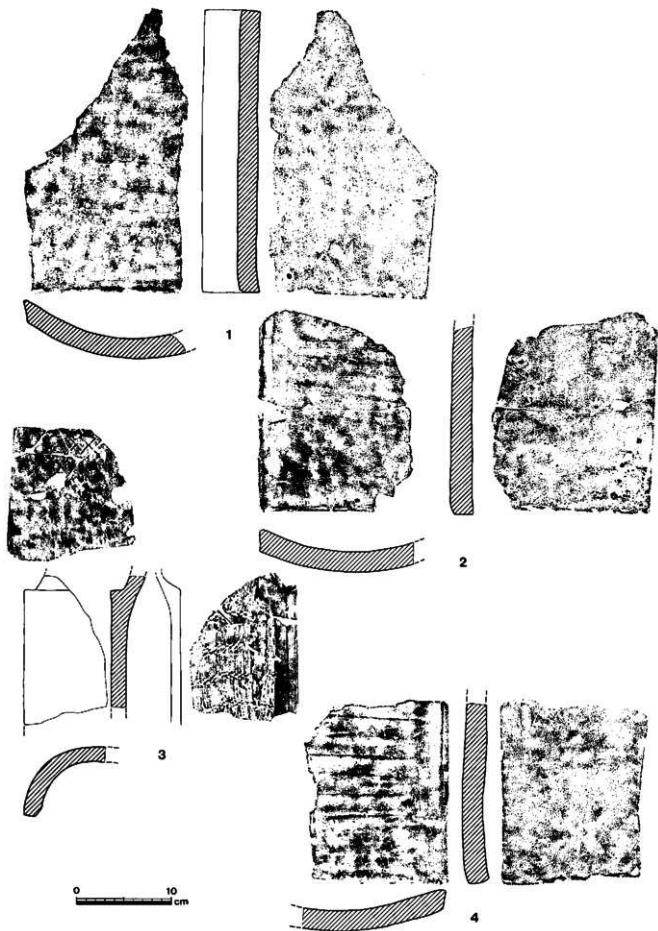


Fig. 69 石川門調査区白鳥堀流土3～5出土瓦 (1/4)

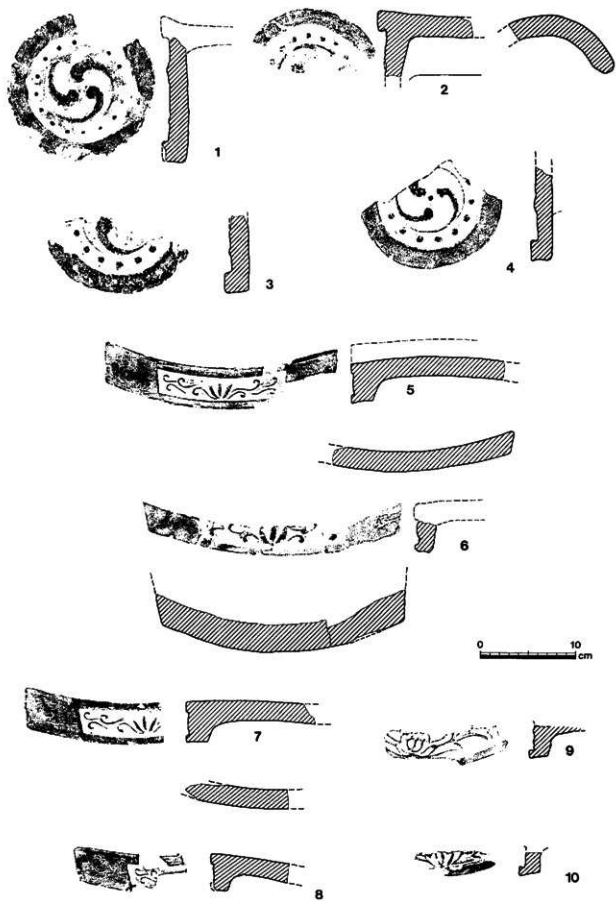


Fig. 70 石川門調査区北側表土出土軒丸、軒平瓦 (1/4)

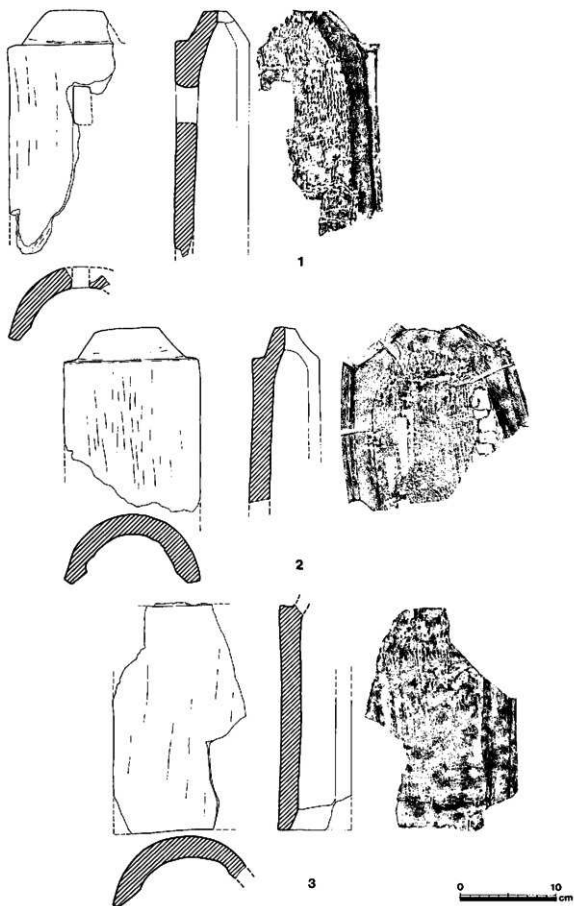


Fig. 71 石川門調査区北側表上出土瓦 (1/4)

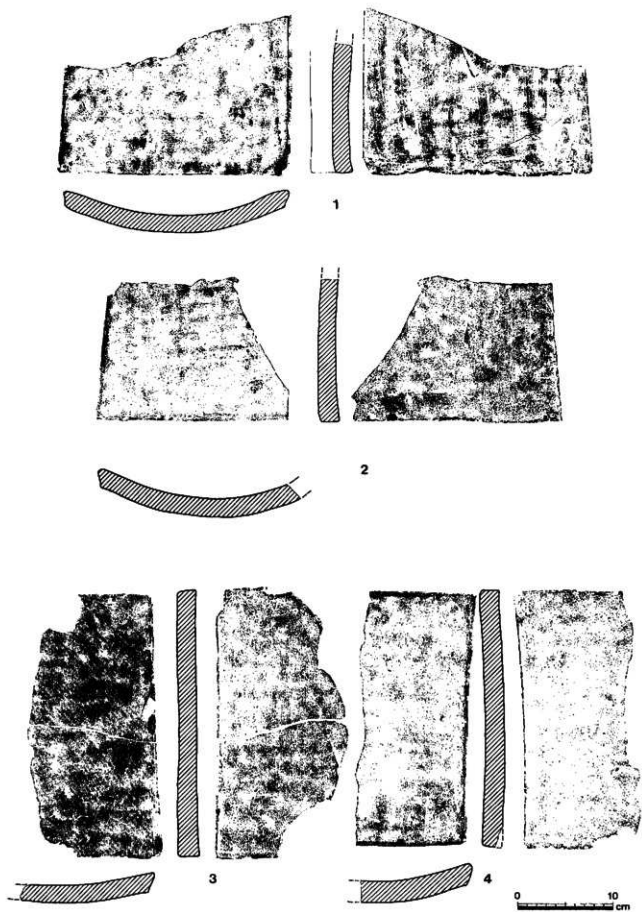


Fig. 72 石川門調査区北側表土出土平瓦 (1/4)

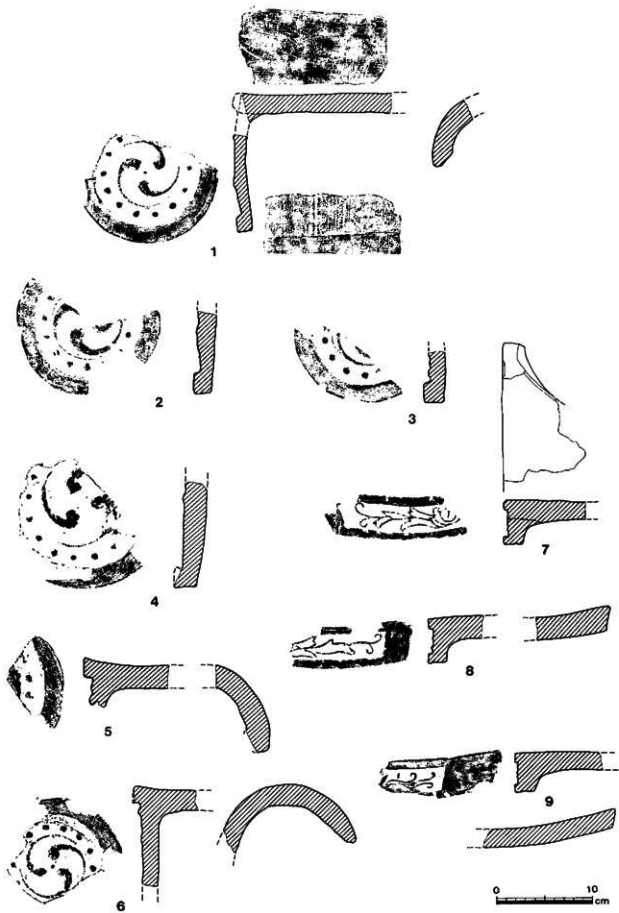


Fig.73 石川門調査区石川桶建設落ち込み遺構出土軒丸、軒平瓦 (1/4)

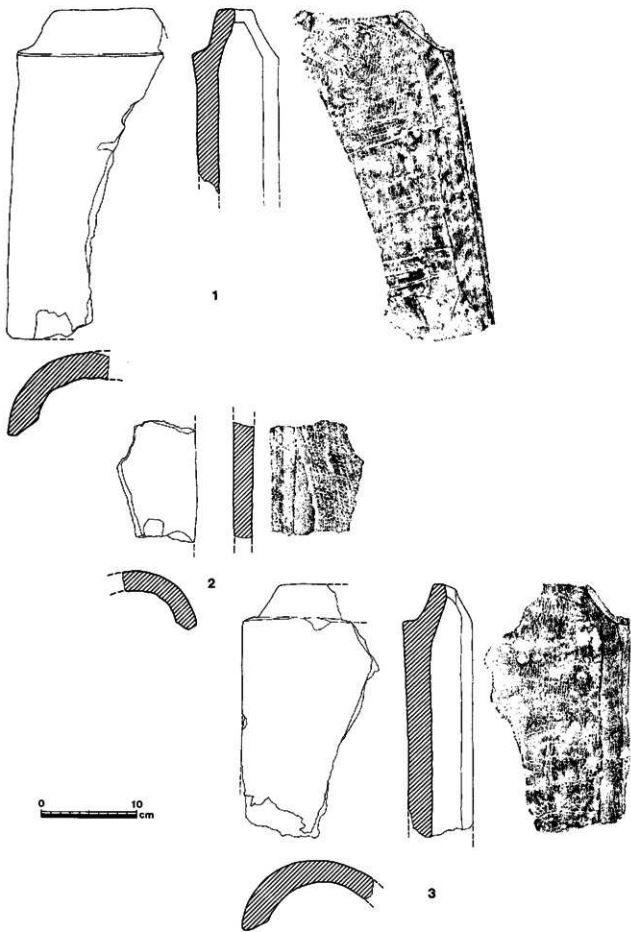


Fig. 74 石川門調査区石川橋建設落ち込み遺構出土丸瓦(1) (1/4)

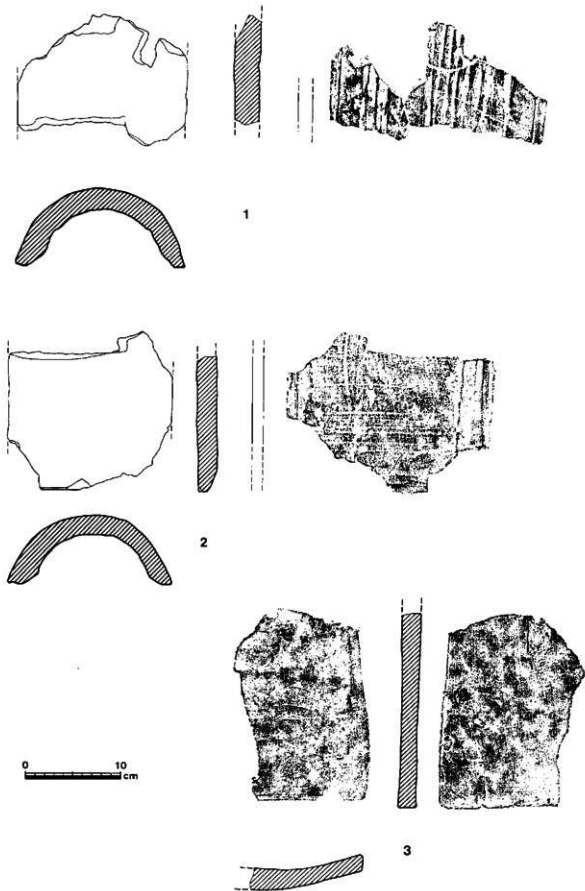


Fig. 75 石川門調査区石川橋建設落ち込み遺構出土丸瓦(2) (1/4)

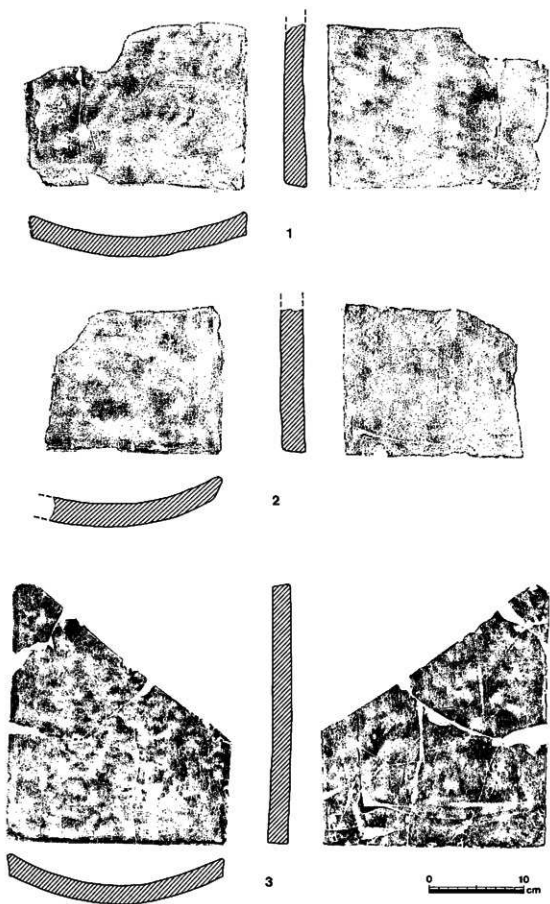


Fig. 76 石川門調査区石川橋建設落ち込み遺構出土土平瓦、隅切瓦 (1/4)

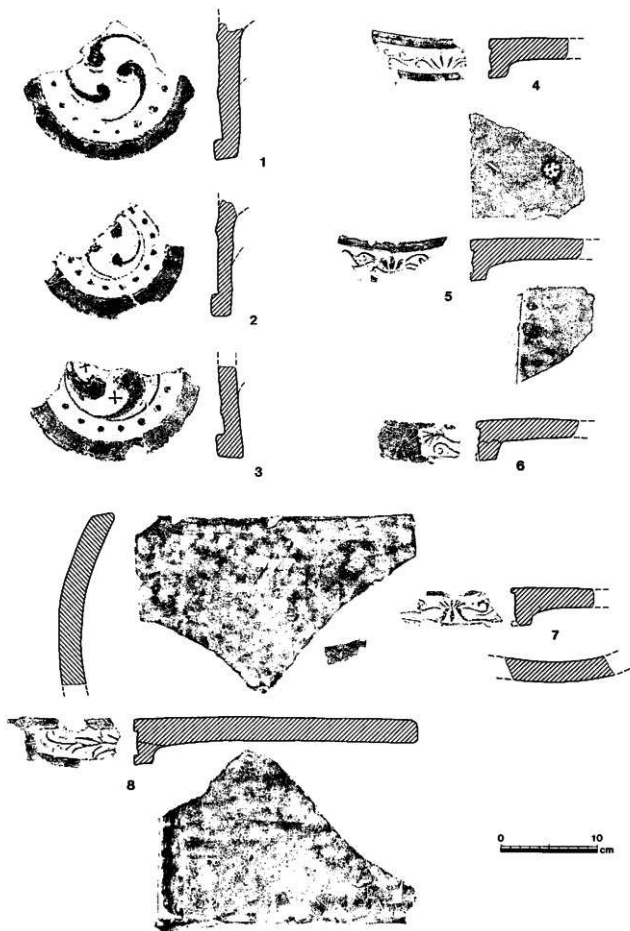


Fig. 77 石川門調査区S D01出土軒丸、軒平瓦 (1/4)

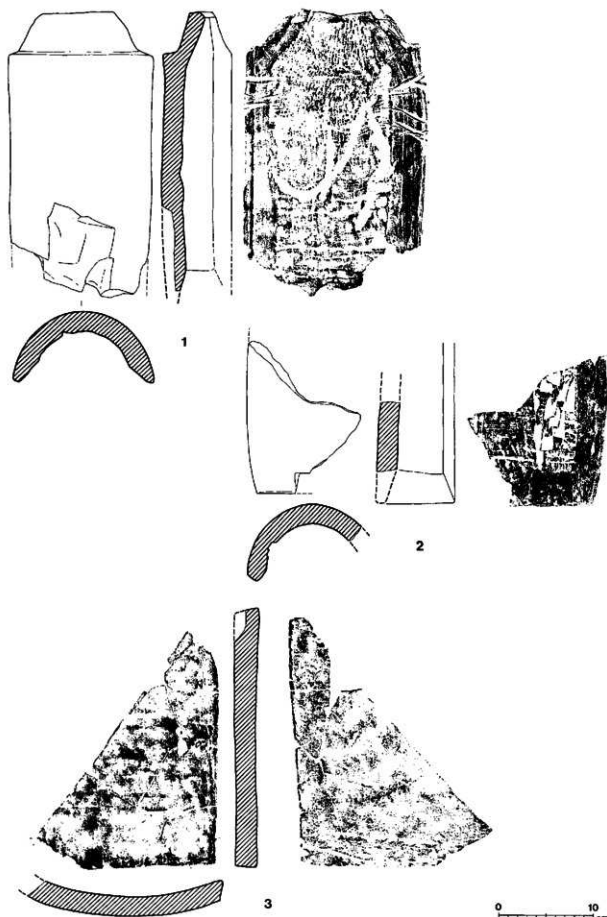


Fig.78 石川門調査区SD01出土丸、平瓦 (1/4)

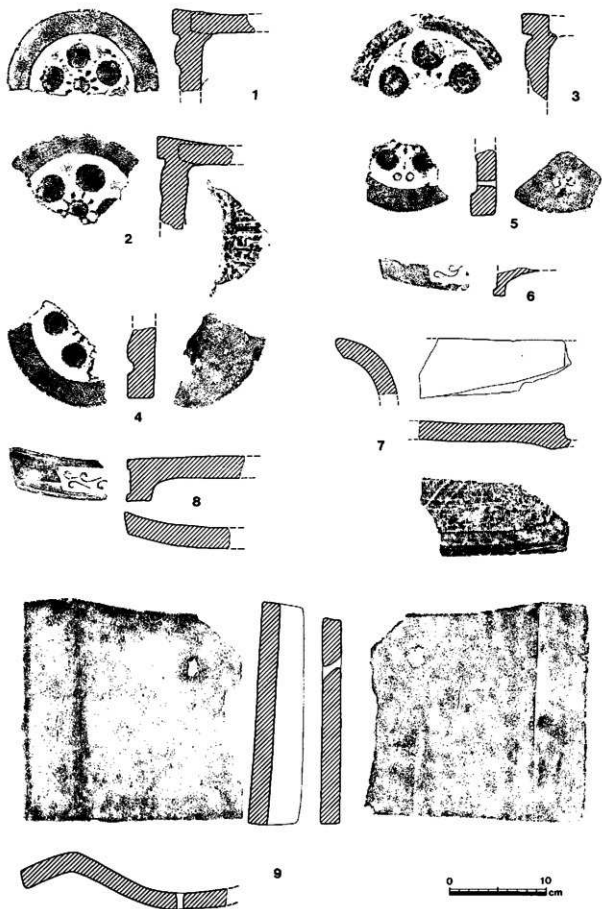


Fig. 79 石川門調査区S D04出土軒丸、軒平、棧瓦 (1/4)

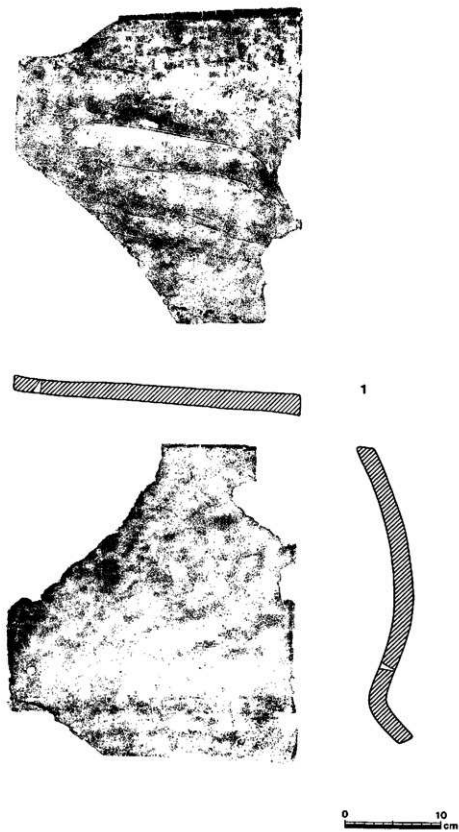


Fig.80 石川門調査区S D04出土棧瓦 (1/4)

第5章 沈床園調査区

第1節 基本土層と調査の概要

現在の石垣がのっている盛土とその外側に広がる堀の堆積土を確認した。盛土は、16世紀代に作られたと考えた盛土6の土橋本体であり、それを利用して江戸時代の石垣が構築されている。根石とその上1・2段の石の外側に盛土を施しているほか、石垣用材を石垣外においており、これらによって根固め石としている。この盛土を、盛土6と区別するために「石垣外盛土」とする。

堀堆積土は、おおきく五つに区分できる。すなわち、上層より明治43年の堀の埋め立てによる近代以降の整地土、江戸時代の堆積土、16世紀代の堆積土、それ以下の谷地形の堆積土である。さらに江戸時代の堆積土のうち、百間堀を水堀にした時としない時の土層もまた区分できる。これは遺物の出土状況が全く異なるほか、百間堀石垣を作る前と後（車橋門を作る前と後）ということでもある。それぞれ、江戸前期の堆積土、江戸後期の堆積土と区分する。また、16世紀代の堆積土は、第2章で確認したように、金沢御堂の頃の池の堆積と考えられる。

発掘調査で区分した層は、10層になる。上より第1層として近代以降の整地土、第2層として百間堀が水堀であった時の堆積土、第3層として石垣普請にかかわる堆積土がある。これらは、概ね17世紀後半以降の堆積土と考えられ、同じ層位関係にあるものとして石垣外盛土がある。第4・5層は金沢城初期の堀の堆積土であり、特に第5層を人為的埋立土と考えた。第6～7下層は、金沢御堂期の堆積土で、地形が東南東（兼六園側）に向かって下がっているために、断面図を作成した2地点で南東側の方がさらに多くの堆積（6層下、7層下）が確認できる。第8層は谷の堆積土で、盛土6の土橋建設によって沈み込んでいる様子がよくわかる。

第2節 堀の堆積と出土遺物

a) 江戸後期の百間堀

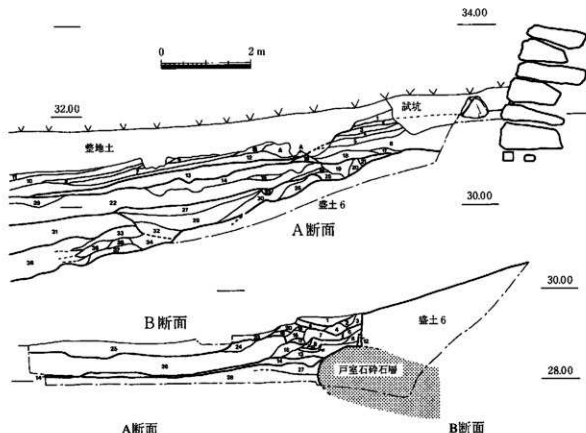
ここでは、石垣普請を行って百間堀を作った時点で沈床園調査区における江戸後期としたい。ただし今のところ、その正確な年代比定は困難である。

百間堀石垣と堀の堆積

百間堀石垣は、盛土6を掘り込んで作られているわけだが、その外側に土を土観頭のように盛上げていく。その盛土は、根石から3石ほどまで及んでいるようであり、根固め石もその盛土中であり、盛土構成要素の一つと考えられる。部分的に、江戸前期の堆積土まで及んで盛土がなされている。これは、兼六園調査区で石垣外盛土を確認できないことから、当該箇所が兼六園側よりも石垣と盛土6の端との間が狭いので、石垣根固めばかりでなく石垣普請作業を容易にするための作業エリアのような性格を合わせつつものと考えられる。

石垣外盛土は、粗い砂土や砂礫土を中心としている。下層には、拳大の淡灰色砂礫土や赤褐色砂礫土中に淡灰色シルト土が混入し、盛土作業中における土の攪乱状況を示すものである。江戸前期の堆積土と盛土の接面には凹凸が見られ、その下層にも分層し難い縦方向の土層の状態が見られる。これらもまた盛土作業の上の攪乱状況を示すものである。盛土の上部にいくにしたがって、砂土あるいは粘質土という細かい粒子の土を用いて、盛土上面を整えている。

盛土外には、第3層として炭粒を含む淡灰色砂礫粘質土が盛土端から6mほどの範囲でみられ、最大約25cmの厚みのある上層である。この土は、石垣普請後最も早い時期の堆積である。炭粒を含むことや砂礫を多く含むこと等から、盛土構築・石垣普請の時に一定期間水位が下がってヨシなどの草が繁茂する状態となり、諸作業の廃物を捨てる範囲であったと考える。つまり、遺物の出土はきわめて少なく構築物等の廃材ではなく、土砂の搬入の残余などの土木廃材と考えている。したがって、人為的な堆積土ということになり、石垣の年代を直接的に示すものであるものの、陶磁器



- A断面**
1. 淡灰色砂土 (部分的に淡灰色シルトを、ブロック状に含む)
 2. 淡灰色シルト
 3. 赤褐色砂礫土
 4. 2に同じ
 5. 3の上に、淡灰色シルトをブロック状に含む
 6. 淡灰色砂礫シルト土 (礫は、2、3 cm ~ 拳大まで)
 7. 明灰黄色シルト
 8. 淡灰色シルト
 9. 淡灰色砂質土 (粘性あり)
 10. 明灰色粘質土
 11. 淡灰色粘質土
 12. 7よりも砂っぽい
 13. 淡灰色砂礫粘質土 (炭粒含む) 人為的埋立土
 14. 灰色シルト中に黄色砂土をブロック状に含む。~炭粒含む。~人為的な埋立土と思われ、13の土施工の前処理の土か?) 4層
 15. 灰色シルト
 16. 13の上と14の土のブロック状
 17. 灰黄色砂礫土
 18. 暗灰色砂礫土
 19. 灰色粘質土 (粘性強い)
 20. 暗灰色粘質土
 21. 灰色砂土 (粘質土含む)
 22. 灰色粘質土~シルト (4層)
 23. 灰色粘質土 (シルトっぽい)
 24. 灰色粘質土中に砂礫を含む
 25. 19よりも暗い
 26. 暗赤黄色粘質砂土
 27. 赤黄色砂土 (人頭前後の石含む)
 28. 赤褐色砂土 (土中の鉄分の酸化による)
 29. 暗赤黄色砂土
 30. 暗灰色粘質土
 31. 黒灰色シルト 36よりも粘性あり
 32. 黒灰色砂土とシルト、ブロック状に含む
 33. 37よりも砂っぽい

A. 黄灰色砂土に明灰色シルト、部分的に含む) No.1~5層
 B. 灰色シルトに黄灰色砂土を部分的に含む) の崩壊土か

- B断面**
1. 灰色シルト (部分的に砂礫あり) 4層の残り
 2. 赤褐色砂土 (鉄分の酸化)
 3. 暗灰色砂礫土
 4. 3よりも明るい
 5. 暗灰色粘質土
 6. 7と同じだが、粘質土少ない
 7. 灰褐色砂土 (粘質土、層状に含む)
 8. 黒灰褐色粘質砂土
 9. 黒灰色粘質土 (盛土中、小礫多く含む)
 10. 暗灰色粘質土
 11. 10よりも粘性高い
 12. 灰褐色粘質粘土 (盛土ブロック少量含む、板敷の恐の土止めの板か?)
 13. 暗灰色粘質土 (盛土ブロック粒、多く含む)
 14. 暗灰色砂土 (部分的にシルト、黄色砂土を多く含む、~7層下砂土)
 15. 黒灰黄色粘質土
 16. 18よりも砂っぽい
 17. 黒灰黄色シルト (盛土粒含む)
 18. 黒灰色シルト (砂分多)
 19. 20よりも砂多い
 20. 赤灰色シルト (部分的に砂分なし)) 6層扱い
 21. 暗灰色粘質土 ~6層
 22. 暗灰色粘質土 ~7層
 23. 黒灰色粘質土 ~7層
 24. 黒灰色粘質土 (ボロボロとしまりのない土) ~6層下は部分的にしか見られない
 25. 赤灰色粘質土 (ボロボロとしまりのない土) ~6層下は部分的にしか見られない
 26. 黒灰色粘質土と灰色シルトの細かい互層 (各層は2~3cm程度で、層底は水平に、その形にそって堆積~自然堆積土) ~7層
 27. 黒灰褐色粘質土 (途中より、分層不能)
 28. 黒灰色シルト~粘質土 (遺物の出土はない)) 谷の黒色土

Fig.81 沈床調査区土層断面図 (1/80)

などの遺物の出土はない。

第2層がその上にある。灰色粘質土やシルトを中心とし、石垣際が高く堀中に向かって低くなるという地形に沿った堆積である。石垣外盛土近くには、その崩落土あるいは攪乱土と思われるような黄灰色砂土と灰色シルトの混合土層がある。おそらく石垣修築時の攪乱と考えられる。なお、出土遺物はほとんどない。出土遺物 (Fig. 83-1~2)

2層出土遺物の多くが瓦で、幕末明治期以降の陶磁器類が若干見られる他は、次に見る遺物群のみである。83-1は瀬戸美濃系天目碗で、2は肥前系碗である。2には釉薬が落ちて白濁した被熱の痕跡がある。これら図示した以外に肥前系陶器碗や明染付け碗がある。肥前系陶器は、砂目積み製品であり、確認できる遺物のおおくが17世紀前半代までのものであり、それ以降の近世の遺物は皆無である。これら占手の一群は、下層にある4層の遺物と共通するものであるが、掘り返しが見られないので、4層の遺物が混入する可能性はなく、石垣の構築年代の年代的上限を示す資料と考えられる。

したがって、これらの堆積土は17世紀前半~中頃以降の年代が考えられ、それ以降に物が堀に捨てることのできなかった管理状況であったことが窺える。

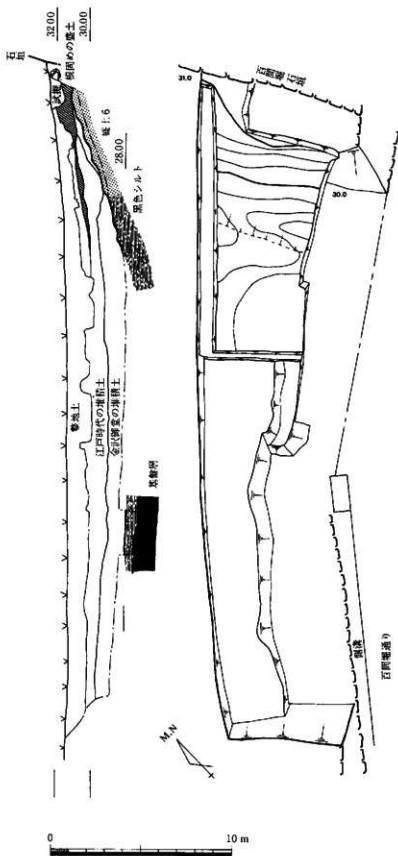


Fig. 82 沈床調査区江戸初期(第4・5層除去後)の堀底実測図 (1/200)

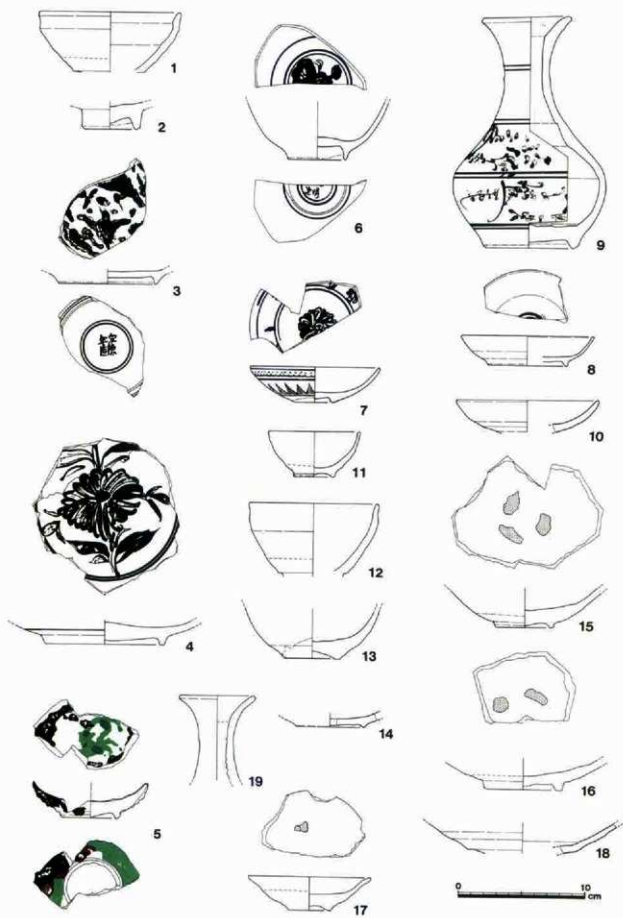


Fig. 83 沈床園調查區2~4層出土土器 (1/3)

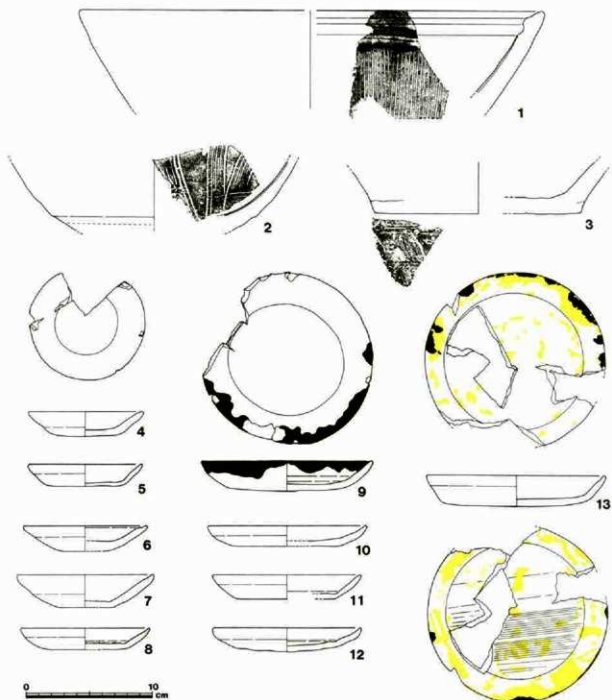


Fig. 84 沈床園調査区第4層出土土器 (1/3)

b) 江戸前期の百間堀

堀の堆積

第4・5層が当該時期の土層である。第4層は灰色シルト土を主体とし、土積際にかけて炭粒や黄色砂土をブロック状に含む層がある。また、石垣外盛土下には、前項で記した盛土構築にかかる縦方向の土がある。これらは、いずれも石垣外盛土普請時に影響を受けた土である。堀内堆積はきわめて安定し、岸近くで分層可能でもあっても岸から離れるにしたがって次第に江戸後期の堆積土との区分が難しくなる。

第5層は、盛土6の際にある溝状の堆積である。赤黄色砂土や赤褐色砂土などの粗い砂が多く入

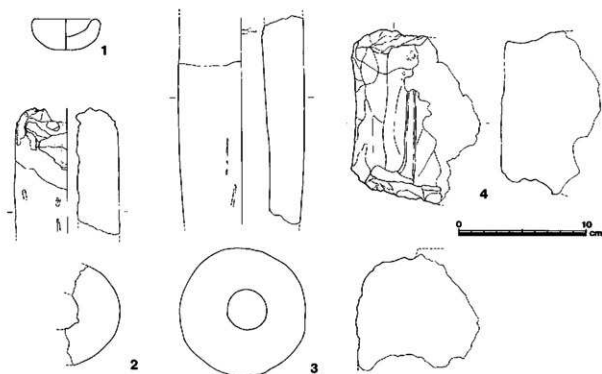


Fig.85 沈床園調査区第4層出土生産遺物 (1/3)

り込み鉄分の酸化の著しい堆積土である。また、人頭大の石が混入する層もある。このように、水中における自然堆積とするには、粗い砂や礫が多く入り込んでいるので不自然である。しかし、水が流れたような砂の堆積でもないことや、ほぼ水平堆積で見られることなどを考えると、盛土6の際をもう一度掘削し短期間の内に埋め込まれた状況と考えられる。その時の埋め立ては、水を抜いたきれいな埋立ではなく、砂礫を投込むような埋め立て行為ではないかと推測する。

第5層の遺物相は第4層と全く異なる。第4層が肥前系陶磁器を主体とする遺物群で17世紀前半の年代を与えることができるのに対し、第5層が明染付け磁器を主体とし第4層よりも第6層以下の遺物群に近い印象を与える。第5層の性格は、塚の層の掘削遺構と考えているので、下層の遺物が上がってきたものとする。

したがって、第5層の年代は塚の掘削をおこなった時期であるが、それを金沢御堂期とすることもできるもの、織田方が落とした後の可能性を重視して江戸前期の項に含めた。

出土遺物

4層出土土器等 (Fig.83-3~19, 84-86)

4層からは、比較的多くの遺物が出土し、金箔を貼った土師器皿など特徴ある遺物が出土している。全体的に兼六園旧江戸町跡推定地の上出遺物に最も近い印象がある。

83-3~9まで明染付けである。3の底銘「宣徳年造」。4は漆継がある。津州窯系である。5は熱を受けて完全に釉が溶けている。6は饅頭心で「大明年造」。7は碁笥底で、外面芭蕉葉文、内面十字花文である。津州窯系である。8は玉獅子文か。9は津州窯系である。

83-10-19まで陶器である。10-13、15-17は肥前系である。17が胎土目積み、15、16が砂目積みである。11の小杯は内外面灰釉。14は瀬戸美濃系で、全面施釉の鉄輪皿である。19は鉄輪瓶であ



Fig.86 沈床園調査区第4層出土軒丸瓦 (1/4)

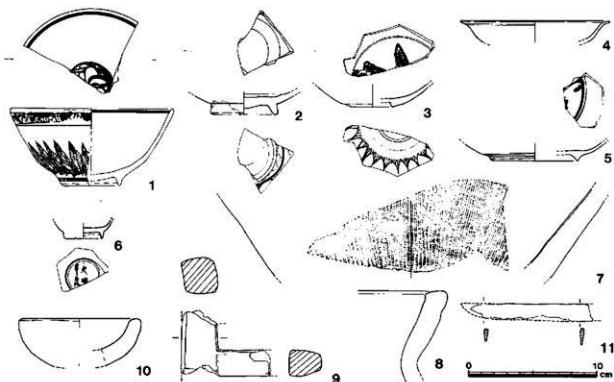


Fig. 87 沈床岡調査区第5層出土土器 (1/3)

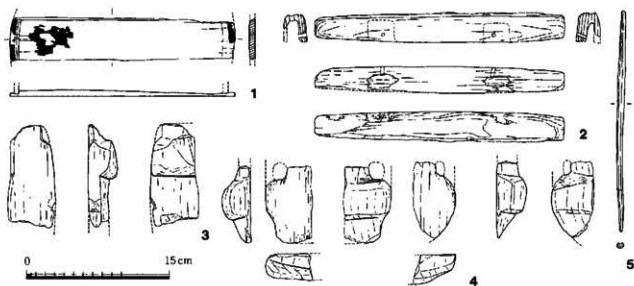


Fig. 88 沈床岡調査区第5層出土木器 (1/4)

るが、肥前系と思われる。84-1は越前播鉢で、2は肥前系播鉢、3は越前鉢底部である。

84-4-13は土師器器皿である。4-7は小形の一群で、口径9~10.5cmである。底面に比べて長い体部をもつ中世的な器形に近いものである。4、5の口径端部がやや引出されたようになっており、6は完全な面を作り、7が上方につまみ上げられている。8の体部は底面に比べて小さくなり、内面体部との境に浅い溝がめぐり口径端部を引出している。程度で口径端部の形状はやや異なるが、10-12も同じタイプになる。

9-13はより大きな口径で厚い作りである。灯明油痕があるのも、他にはない特徴である。しかし器形はよく似ており、内面体部との境に不明瞭ながら浅い溝がある。成形技法上の問題であろう。

13には全面にわたって金箔が貼られている。ほとんど剥落しているが、ニカワのような接着剤で貼り付けているようである。底部に腐⁶¹あるいは木目状圧痕がある。金箔を貼った後に灯明皿として2次的に使用していることがわかる。9、13は、盛土3資料群の土師器皿に最も近い特徴をもつ。

なお、4層から、鍛造・鍛冶関係の遺物が出土している。85-1がトリペで使用されている。2、3はフイゴ羽口。4は粗い粘土で作られたもので、熱を受けている。よくわからないが、鋳型の内型の可能性がある。Fig.86は瓦である。瓦は僅かしか出土していないが、軒丸瓦がある。直径16cmの左巻き巴文である。頭部はしっかりしているが、尾は次の巴の背中に接することなく7mmも離れ、外区の珠文に接している。珠文の数は9個あるが総数16個に復原できる。表面に離れ砂が残っている。

5層出土土器等 (Fig.87)

87-1~6は明染付けである。1の外表面は口縁波濤文、体部芭蕉葉文内面十字花文で漳州窯系と考えられる。2の見込は蛇の目軸ハギで高台内はとん状。3は碁筒底の芭蕉葉文。4は口縁端反の白磁碗である。6は青花小杯だが、外面に文様はなく、白磁のようである。底銘のみもつ。4~6は景德鎮窯系。7は越前掻鉢で、8は越前焼口縁である。9はバンドコの窓部で緻密な粘土で作られている。10は増埴でよく使われており、錆が一部分吹き出ている。11は短刀である。脇差であろう。錆化が激しく薄くなっている。

5層出土木器

木器は5層のみ出土している。5層出土土器は6層から上がったものと考えているので、木器もまた同じように考えられる。1は漆塗り櫃の底板で、直径23.6cmをはかる。ヒノキ材から作られ、底板の中央部分であるが、それより左右は既に割れて遺存していない。底板を組み合わせるものではない。側板が底板の上に置かれる形式で、その部分が僅かに彫り回められている。内面および側板がおかれた外側に黒漆膜が遺存している。2は手桶の持ち手部分と考えられる。長さ26cm、高さ3cm、幅2.6cmを測る。深さ2.1cmのほぞ穴が2ヶ所あけられ、棒が差し込められ、そこに目釘が差すことができるように小さな穴が開けられている。スギ材で作られている。

3、4は下駄である。いずれもミズキ材から一木で作られたもので、破損が著しい。またすり減っ

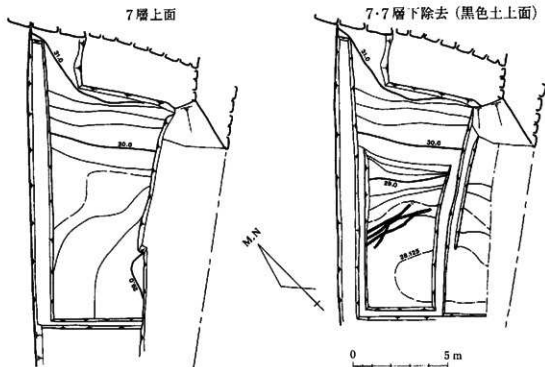


Fig.89 沈床園調査区16世紀代の埴積土・地形実測図 (1/200)

た儀であるので、よく使い込まれていることがわかる。5は箸である。長さ23.4cm、幅8mmをはかる。一方端だけ削られて箸として使われている。

番号	法	量 (cm)	実測番号	樹種
1	長さ(直径) 23.4、幅4.2、厚さ0.7		306	ヒノキ
2	長さ25.8、幅3.1、厚さ2.7、ホゾ穴長2.7、幅1.2、深さ2.2、目釘穴径0.3		182	スギ
3	長さ10.8、幅5.1、厚さ2.0、歯厚さ3.0		181	ミズキ
4	歯厚さ3.0		180	々
5	長さ23.3、幅0.8		179	アスナロ

Tab. 1 沈床調査区第5層出土木器計測表

c) 金沢御堂の池

池の堆積

本調査区で確認した水中堆積土の要因を、堀とせずに池としたのは、金沢御堂に堀があったかどうか不確定なことや、百間堀に蓮池の伝承があることから「池の堆積」という項目にした。つまり、盛土6の土構構築によってできた池の堆積土である。

土構構築直後の地形は、現在の車道付近が最も低いようで、その付近で四つの層を確認した。上から第6層、第6層下、第7層、第7層下である。第7層下は、低いところでしか確認できず、もっとも早い時期の堆積土である。暗灰色砂土で、部分的にシルト的になったり粗い砂になったりしており、厚みも数mm~10mm強とかなりのばらつきがある。そして土構近くで厚くなるようである。このような点から、池になったときに一番初めに堆積した土であり、土構構築直後の雨などによる水流によって堆積した砂層であると考えられる。

それより上層は、池状の水の溜になった時の堆積土である。第6層は暗灰色粘質土、第6層下は赤灰褐色粘土で酸化した状態の上、7層は植物質を多く含んだ黒灰色粘質土と灰色シルト土の互層となっている。いずれも土構からやや離れところでは非常に安定した土層の状態であり、第6層下の酸化状態は、一時期水が干上がったことを示す。また、第7層で見られた黒灰色粘質土と灰色シルト土の互層は、夏場にヨシなどの植物が沼地に生い茂り、冬場にそれが枯れ、春になって溶解け水による土が堆積したことの繰り返しを示すものである。この互層の一つの厚みは、4~5cmで



Fig.90 沈床調査区第7層・第7層下遺物出土状況 (1/40)

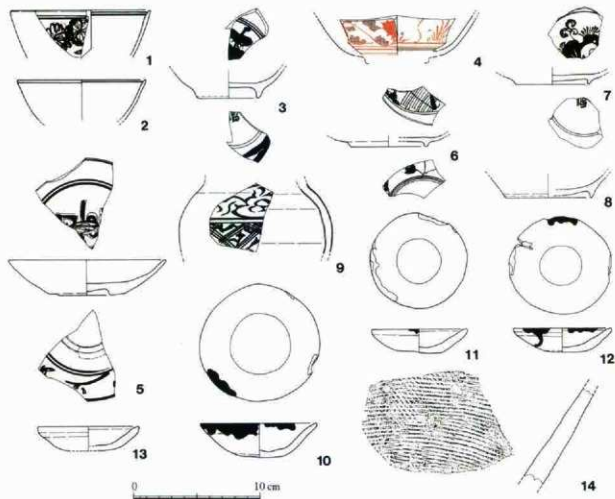


Fig.91 沈床園調査区第6・7層出土土器 (1/3)

ある。第7層の厚みが20cm強あるので、数年間ほどの堆積ということになる。

このような安定した土層状況を示すものの、土橋岸近くはかなり複雑な状態である。基本的に第7層下と同じ土であるがや砂分の入り方あるいは色調の微妙な変化、盛土6がブロック状に入っている、などの違いによって細かく分層される。安定した第7層の堆積は、これらの細かい岸際の堆積土のあとに見られることや、斜め方向の堆積であることから、盛土構築中に溜まった土と考えられる。これには、池水の堆積よりも版築盛り上げに伴う流出した土の堆積が顕著であったと思われる。実際、盛土6の版築された時の土留め板痕跡を確認したが、途中から痕跡がわからなくなる。そして、堆積土層の途中に見られるのは、土橋を盛り上げるのと同時進行で池の堆積があったことを示す。

遺物出土状況

第6層から第7層にかけて陶磁器とともに有機物の遺物が出土している。特に、第7層から木器、漆器が出土している。草鞋の痕跡が三ヶ所あり、足に結びつける紐も確認している。竹箕も二個体出している。これらの遺物群の高低差は比較的大きく、意識的におかれた遺物はなく、土橋から離れるにしたがって遺物の出土頻度が少なくなる。つまり、土橋から捨てられた状況であることがわかる。出土遺物は、日常生活で使われるものばかりであり、破損した器物である。土橋北側に鋳造遺構群が展開するが、それに関連する遺物は少なく、鉄滓やとりべが僅かに出しているのみである。つまり鋳造遺構群以外に各種の生活遺構群が土橋周囲近隣に存在していたことがわかる。また、盛土6の土橋際に細長い木が数本土橋に平行して出している。土橋構築にともなう作業用の用材であろう。

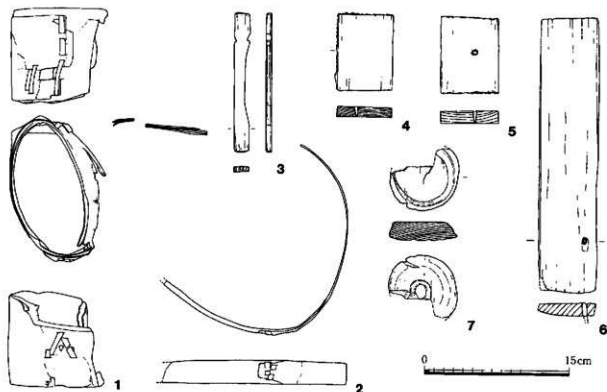


Fig.92 沈床調査区第6層出土木器 (1/4)

出土遺物

6層出土土器 (Fig.91)

1～3は明染付けである。1の外表面は菊文。3の底銘はよくわからない。9は青磁壺で、肩部に雲、体部に菱文を陰刻している。10は土師器皿で口径7.4cm、器高2cmで、1ヶ所のみ灯明油痕がある。口縁端部に明確な面を作り出し、中世的な器形である。

7層出土土器 (Fig.91)

4～7は明染付けである。5は菴筒底で見込みに数字文がある。4は上絵付けされた皿である。8は白磁皿で見込みがやや下がり気味である。高台は一面のみ輪掻きされ三角形になっている。14は珠洲焼甕体部である。時期不明。11～13は土師器皿で、Fig.87～17に似ている。11の口縁端部は丸く収めより長い体部である。13の油痕は不明だが、破片が小さいので油痕のない部分と思われる。

6層出土木器 (Fig.92)

6層出土の木器は、7層に比べて少ない。1は曲物で作られた柄杓の杓部で底板はない。形が垂んでいるが、直径10.5cm、高さ9cmに復原され、柄穴が1辺1cm×1.4cmで、柄のつく角度は水平に対して8度の傾斜がある。薄板を2重に巻いて桜の樹皮で固定している。固定部分は柄のつくところで、板が3重になっており、強度的な問題と考えられる。桜の樹皮は互い違いに通されており、さらに柄の装着部分だけもう片側に桜の樹皮を巻いて強度を強めている。柄は、最後に開けられた方形の穴に通され、ちょうど反対面に柄の先が貫通するようになっている。柄の先端は尖っているようで、小さな穴が開けられているのみである。しかし、それを山形に開くように桜の皮がまかれており、柄をしっかりと固定するものである。

2は、ヒノキ材から作られた曲げ物の皿のような浅いものである。切れているが、もともとは1周するものである。復原直径約12cm、器高2.4cmを測る。薄板を縦じ合わせる部分の上にくる箇所は、先端を削って細くし、2列のスパンの狭い縦じである。底板を咬ませると実質的な内法の高さが2cm弱しかなくなるので、曲げ物の蓋と考えられる。3は用途不明品で、アスナロ材から作られ

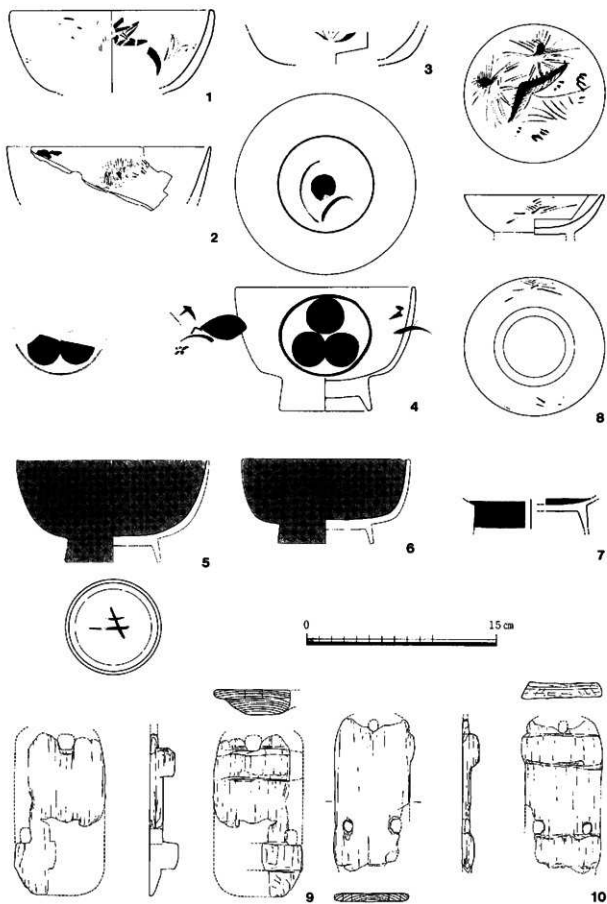


Fig.93 沈床岡調査区7層出土漆器 (1/3)・木器 (1/4)

た何かと組み合わせる部材である。一方の端面に両側から切り込みを入れ、一側縁に緩やかなカーブの削りがある。このカーブ部分に手で持つような機能があると考えられる。

4、5は付れである。四周は鋸で粗く切り放たれたままである。ともに釘で固定した痕跡があるが、貫通していないので、釘の貫通破損を防ぐために二次的に使われたものである。3・4の表面には墨書文字が見えるが判読し難い。4がスギ材、5がヒノキ材から作られ、板の切れ端の再利用であろうか。6にも鉄釘がうちこまれ、札類であろう。7は円盤状木製品とでもいえよう。何かの栓のようである。

番号	法	量 (cm)	実測番号	樹種
1	直径7.5~14.0 (復元直径11.0)、高さ9.9		135	ヒノキ
2	幅2.4		139	ヒノキ
3	長さ14.4、幅1.6、厚さ0.6		172	アスナロ
4	長さ7.9、幅5.8、厚さ1.0		169	スギ
5	長さ8.0、幅6.0、厚さ1.3		168	ヒノキ
6	長さ29.1、幅6.1、厚さ1.4		171	クロマツ
7	直径(上) 5.7、直径(下) 8.0、高さ1.9		170	ケヤキ

Tab. 2 沈床圃調査区第6層出土木器計測表

7層出土漆塗り製品 (Fig.93-1~8)

1~4は碗で、黒地に朱色で文様を描いている。器面の遺存状況が非常に悪く、薄い塗りであることがわかる。透ウルシが既に剥落している。描いている文様はよくわからない。4は円に3つの丸と草を描く。家紋を描いたものであろうか。高台内面の厚みがあり、中世的な作りである。5、6は黒漆塗りの碗で、ともに高台内面の厚みが薄い作りである。しかし5の方が口縁端部からなだらかに体部に続くのに対して、6は腰の張る体部となっている。7も同じタイプの高台であり、漆絵を施すものと無文のものと器形が違う点に注目できよう。8は蓋か皿かわからないが、内面に鶴の文様が派手に描かれていることから、内面を強調するものとして皿と考えた。外面も鶴を描く。

番号	口径	器高	高台径	高台高	取り上げ	番号	口径	器高	高台径	高台高	取り上げ
1	15.9	/	/	/	S-2	5	15.0	7.9	7.4	1.8	S-14
2	15.8	/	/	/	S-4	6	13.2	6.5	7.5	1.6	S-1
3	/	/	/	/	S-3	7	/	/	8.8	/	S-9
4	14.2	/	/	/	S-8	8	10.8	3.1	6.2	/	S-6

Tab. 3 沈床圃調査区第7層出土漆器計測表 (cm)

7層出土木製品 (Fig.93-9、10、94-1~16)

93-9、10、94-1、2は下駄である。9、10は一本作りの下駄で、1.5cm前後の緒穴がある。9の方が幅が広い。よく使い込まれて、筒の厚みは2.6cmで、緒穴がやや右側に寄った位置にある。9がコシアブラ材から、10がヌルデ材から作られ、下駄の形式と樹種が必ずしも一致しないようである。94-1、2は連筒式の下駄で、筒の高さ8cm以上残っており、先の本木作りの下駄と大きく異なる。2の台部内面中央に4×3、深さ1.8cmの穴が粗く扶られている。用途はわからない。

3はスギ材で作られた桶側板である。内面底から上18mmに幅22mmの間隔の刻線が見られ、底板を合わせる目印である。曲面の状態から直径60cm程度の桶の部材になる。4は小さな曲げ物の底板である。5は一端がやや細くなった円筒形の中央に7~10mmの穴があげられている。非常に丁寧に作られており、何かの栓あるいは紐の最後につける留具のようなものであろう。6はケヤキ材から作られたコップ状の容器だが、7×15mmの方形の穴が粗くあけられており、これは二次的な加工であろう。7は曲げ物柄杓で、底板が残っている。基本的な構造は第5層出土のものと同じだが、使われている板の樹皮がより細い。したがって、縦じ合わせ方も、細かい造作となっている。特に柄付け根には何重にも皮がまかれて強固にしている半面、先端に固定の仕方は貧弱である。柄の角度は、

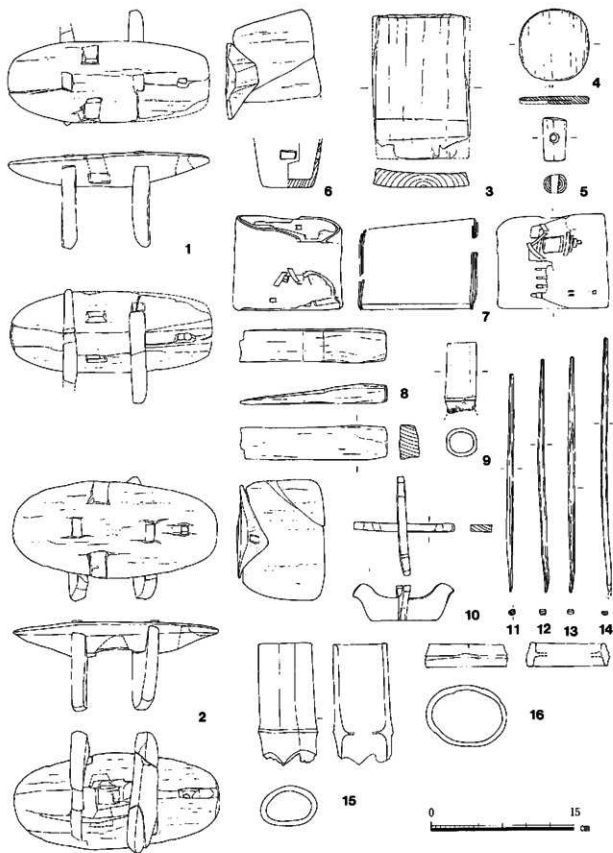


Fig.94 沈床園調査区第7層出土木器 (1/4)

水平に対して16度である。

8はくさびで、大型の部屋に入る。途中に、くさびとして止められていた痕跡である凹みがついている。9は茶筌である。先端部は欠損しているが、根元に細く刻まれた徳の刻み痕が観察できる。10は灯明皿受けである。凹みに灯明皿をのせるもので、十字に組み合わせられた交点には、径4mmで深さ15mmの穴があけられ、灯明受台と軸をつなぐ組み合わせるものである。ちょうど、第7層出土灯明皿がのる大きさである。ヒノキ材で作られている。11~14は箸である。14のみ一端を異常なまでに削って扁平にしており、一方端のみ箸として使われたことがわかる。15、16は竹筒である。15の先端が鉞のようなものでもう一方端が鋸で切られている。節はあいているが、人為的なものが不明である。16は節部分を中心に薄く鋸でさらされている。用途不明。

番号	法 量 (cm)	取り上げ	実測番号	樹 種
9	長さ17.2、幅9.5、高さ2.6、歯幅3.0、歯高1.2		164	コシアブラ
10	長さ16.3、幅8.4、高さ1.8、歯幅3.5		163	ス ル デ
1	長さ21.1、幅8.5、台高3.6、歯幅10.0、歯高8.8	W-2	133	ブ ナ 属
2	長さ21.5、幅10.5、台高3.8、歯幅13.0、歯高8.2	W-6	134	縁の付竹種 葉：7幅
3	長さ15.2、幅10.2、厚さ1.8		173	ス ギ
4	直径7.2~7.4、厚さ0.8		166	アスナロ
5	長さ4.5、直径2.2~2.5、穴0.6~0.9		165	マンサク
6	底径5.4、高さ4.5、厚さ(底)0.9、穴0.8×1.7		280	ケ ヤ キ
7	直径12.0、器高9.5~、穴1.6×2.0		142	板：ヒノキ 底：サクラ
8	長さ15.7、最大幅3.6、最大高2.0		174	ク リ
9	直径3.1、長さ7.5		137	タ ケ
10	高さ3.9、受部径8.0、外径10.6、軸穴0.4	W-1	141	ヒ ノ キ
11	長さ23.0、幅0.6		175	ネ ズ コ
12	長さ24.6、幅0.7		176	アスナロ
13	長さ24.9、幅0.7		178	アスナロ
14	長さ26.8、幅0.6		177	アスナロ
15	直径4.3~6.1、長さ12.9		136	タ ケ
16	直径6.0~8.4、長さ2.4		138	タ ケ

Tab. 4 沈床園調査区第7層出土木器計測表



Fig.95 遺物整理風景

第6章 石川門調査区

第1節 基本土層と調査の概要

本章では、江戸時代の遺構を報告する。ただし、木樋と辰巳用水石管との関係は、導水施設の関連として次章に一括してまとめた。また、盛土最下部の盛土6については、築造年代を16世紀中頃と考えており、金沢城としての遺構ではない。しかし、近世の土橋盛土構築の前提に盛土6があり、金沢城土橋の変遷に重要な位置を占めるので、本章で報告することにした。

土橋の盛土を大きく6つに区分し、上から盛土1、2・・とした。盛土1は石川橋の現通路下の最上層の盛土で、盛土2は白鳥堀側に最上層の盛土である。盛土3は、盛土2の下にある瓦溜まりを包含する盛土で、平成4年度調査で確認した盛土である。盛土4は、白鳥堀近世石垣内側の盛土で、木樋の上にある盛土でもある。白鳥堀調査区の方にも伸びている。盛土5も広い範囲にある。木樋が埋設されている盛土である。最下層が盛土6で、版築で作られた非常に堅固な盛土である。

盛土の大まかな配置はこのようであるが、それぞれの築成年代を盛土6は16世紀中頃、盛土5は金沢御堂陥落後暫くして、盛土2・3・4を17世紀第2四半期、盛土1を18世紀末と考えている。百間堀石垣や辰巳用水石管と土橋の関係については、盛土1と盛土2の項で述べることにする。

第2節 盛土1

a) 盛土の状況

旧表土

近代の整地土を除去するとSD05（辰巳用水石管）を境にして、白鳥堀側の石川門への通路部分でのみ、よく締った小砂利を多く含む茶褐色砂質土が約8cmの厚みでみられる。これは、小砂利と



Fig.96 盛土1上面旧表土

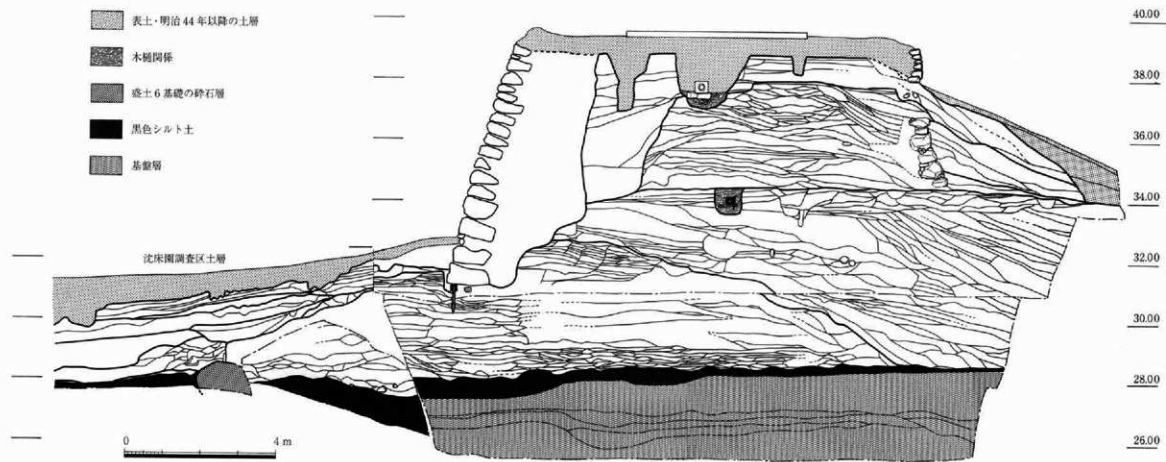


Fig.97 石川門調査区と沈床調査区土層全体図 (1/100)

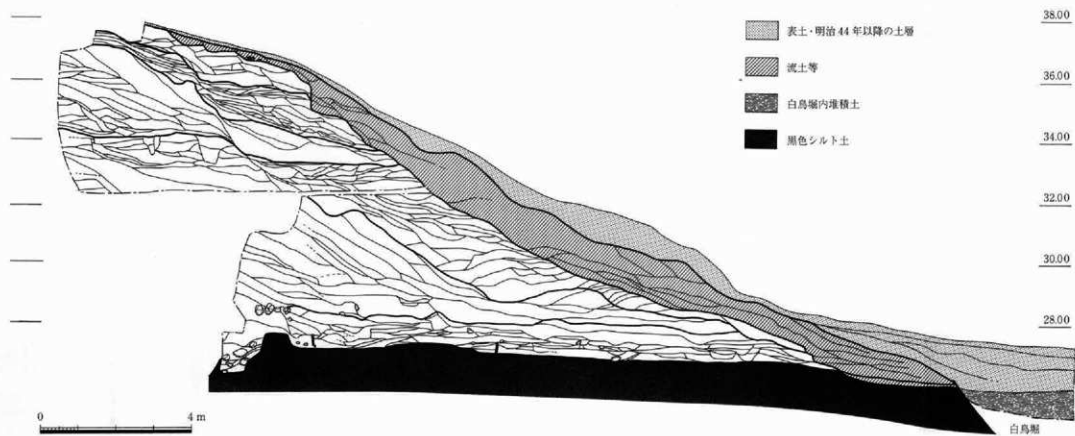


Fig. 98 石川門調査区と白鳥堀調査区土層全体図 (1/100)

ともにキメの極めて細かい砂質土であり、園地に見られるような小砂利を敷いた園路が想定される。その下には、小礫を主体とする層やキメの細かい細砂土がある。この層は、以下の土の厚みの単位よりも小さく、薄く水平に堆積している特徴がある。これらを、金沢城を明治政府に引き渡す前後、すなわち幕末頃の石川門前土橋の表土と考えている。

この層が辰巳用水理土上にはないのは明治44年以降の擾乱によるものであるが、それとともに辰巳用水をはさんだ白鳥堀側で旧表土と考えた土が辰巳用水よりも南側で見られない。この解釈として、もともと南側の地表面が高かったのだが、明治以降削られてしまった、という考え方ができる。また、近代の整地土の厚みが百間堀側から白鳥堀側に向かって次第に厚くなっているのが、百間堀側の表土が常に白鳥堀の方に流れて表土層を形成しなかった、とも考えられる。百間堀側の旧表土の見られない部分は、百間堀側石垣を補修した時の掘削範囲を埋め戻した土にあたる。石垣補修掘削の埋め戻し土は盛土1と共通しているのが、旧表土と考えた層の蓋然性が高いならば、もともと百間堀側が高い地面であったと考える。それゆえ表土層の形成が顕著でなかったと推測したい。

盛土1と百間堀石垣補修掘削痕

百間堀石垣裏込めの内側に、築石面によって縦に走る落ち込み、すなわち石垣補修による埋め戻し痕跡を確認した。辰巳用水石管掘り方は、その落ち込みを切り込んでいるので補修痕の掘削上端を明確に観察することができない。そして、上から3層(4~6)が、辰巳用水石管遺構を間にするもの連続しており、盛土1と同時構築されたことがわかる。盛土1と盛土4との間に水平の薄い層が見られる。締りのよい土で、表層に極めて近い土と考えられ、幕末以前に盛土4上面が地表面である時期があった可能性が高いと判断できる。したがって、石垣補修掘削痕は、盛土1が盛られる以前の表土から掘り込まれたと考えたい。

盛土1には石垣補修による落ち込みを埋める目的と、土橋のかさ上げする目的の二つがある。そして、前者が第1段階。後者が第2段階とする作業工程であり、埋め立て作業は石垣普請と同時に並行でおこなわれなければならない。

第1段階は、まず落ち込みの底から2m近くまで水平に、灰褐色礫層を主体とする赤褐色礫土を含む土(22)を盛っている。この土のみ横方向に動かされた土である。これより上層の土は土橋側から土を落し込むように入れている。まず灰褐色砂礫土(9~12)を入れている。この層の単位はかなり大きく、基本的に最下層(22)と同じ土で礫の粒子が下ほど粗い。これによって、盛土4の時の土橋地表面より1m下まで埋められたことになり、落ち込み土がほぼ水平になって第1段階の工程が終了する。

第2段階も石垣構築と同時に並行であるが、土橋全体に土を盛り上げている。下部には灰色砂礫土(6)、上に赤褐色砂礫土(4、5)があり、ほぼ水平に盛り上げている。しかしその盛り上げが先にも述べたように、百間堀石垣側が高いようで、白鳥堀側が約20cmほど低い。これは、埋め立て土の沈下を予想してあらかじめ高く盛ったものであろうか。

この石垣裏込めおよび補修痕上面に土製の管が多数出土している。これは、三和土のような中に



Fig.99 土管出土状況



Fig.100 土管の筧目



Fig. 101 土管の半截



Fig. 102 白鳥塚近代石垣の根石

小砂利を多く含む製品で、外径60cm、内径約30cmをはかり長さは不明である。型によって作られており、外面に窺目が残っているものもある。管の部分はくり抜きではなくて、型抜きであるので、中に芯棒を入れた型成形であることがわかる。管の内部はほとんど風化による磨滅がみられず、製作当初の形状を保っている。水を通す道具と考えられるが、どれほど実用に耐えうるかわからない。いつ埋め込まれたものかわからないが、土橋に埋設されていたこの土管を廃棄したものと考えられる。天保年間に設置された辰巳用水石管の前の施設の可能性も考えられよう。そうすると、辰巳用水は、木樋—土管—石管という変遷をたどったことになるが、この種の土管の存在は幕間で前期例の増加に期待したい。

なお、現在の白鳥塚石垣の下50cmで川原石を横に並べた遺構を確認した。当該部分の調査区断面は重機掘削時に荒らされてしまったが、盛土1を掘り込んでいるようであり、明治の石川橋構築直後の白鳥塚石垣根石であろう。したがって、現状の白鳥塚近代石垣は、大正年間以降の積み直しということになる。

b) 瓦たまり1

盛土2上面で若干窪んだ地形に瓦溜まりを検出した。遺物箱で箱出土したが、明治の石川橋建設工事掘削によって一部分しか残されていないので、その全容そして性格はよくわからない。現状の範囲は、2m×1.5mの範囲である。この瓦溜まりは、平成4年度調査において確認した上層の表土層出土に対応する。瓦溜まりからは、軒丸瓦、軒平瓦、丸・平瓦が出土している。この中に土器や陶磁器類を混在しないので、明確な時期を決めたい。

c) 盛土1出土遺物 (Fig.105)

105-1～5は明染付けである。1は牡丹文、2の底銘が「大明成化年製」。4は肥前系の可能性もある。5は袋物で瓶のようなものである。6は越前三足鉢である。器壁に鉄錆軸を塗っている。7は越前搦鉢で、高台を削りだしている。

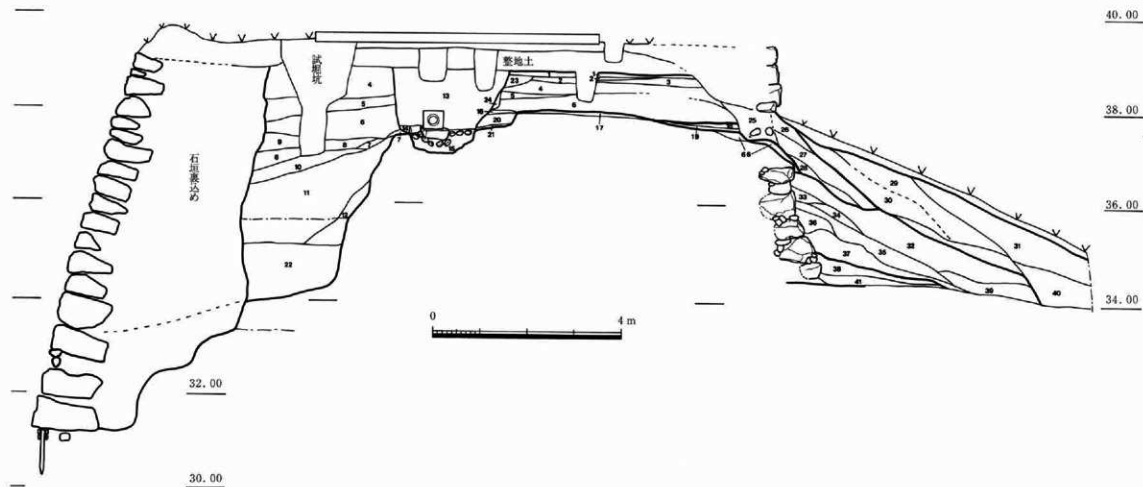
8～12は土師器類で、いずれも灯明油痕はない。8の口径や大きく、見込み体部との境に浅い溝がめぐりやや引き伸ばす口縁端部など、盛土3資料に類似する。これは明染付けなどと同じように混入したものと考えたい。10と11は8の小形に近い器形である。10の口縁端部は軽く外方に引出すが、11は立てて面を作っている。12は明確な底部と直線的な体部からなる。口縁端部は丸く取める。9は平らな底部から概反する体部へと続き溝縁状の口縁端部である。12の系統に近い皿であろう。

d) 瓦溜まり1出土遺物

表土出土の瓦とよく似ているが、軸のついた瓦や棧瓦など極めて新しい要素は見られない。したがって、19世紀中頃まで降るものではないと考えられる。

軒丸瓦・扇巻瓦 (Fig.106)

軒丸瓦は左巻きの巴文と右巻きの巴文がある。106-4、5は右巻である。4の面径15cmで尾部は隣の巴の背中から離れ、中心に珠文がある。5はもう少し面径が大きくなるようである。一方左巻きは1～3である。1、2の面径が15cm前後であるのに対し、3は17～18cmと大きく、巴も大型で



1. 茶褐色砂質土（よくしまる。小砂利を多く含む）
2. 礫層土（よくしまる）
3. 細砂土（よくしまる）
4. 赤褐色礫土
5. 4が酸化して、赤みを帯びる
6. 灰色礫土
7. 黄白色粘質土
8. 黄灰色礫土
9. 灰褐色砂礫土
10. 9と同じ
11. 灰褐色砂礫土
12. 灰褐色砂礫土（11よりも細かい礫）
13. 灰色粘質土（礫多く含む）
14. 礫土（灰色粘質土含む）
15. 灰色粘質土（礫多く含む、14と同じか）
16. 明褐色礫土-6のブロック土か？
17. 暗褐色粘質土（下層、白色砂土を層状に含む）
18. 暗褐色粘質土（下層に白色砂土を層状に含む）
19. 戸室石砕石層
20. 暗灰黄色砂質土
21. 灰黄色砂質土
22. 灰褐色礫層（赤褐色砂礫土が層状に入る）
23. 暗灰褐色礫層）既已用水の溜り方か？
24. 暗灰色砂礫土
25. 4、6の土とよく似ているがより粒子が細かく汚れている
26. 黄褐色砂質土
27. 海苔褐色砂質土
28. 戸室石砕石中に黄褐色砂質土を含む
29. 31と同じだが暗灰褐色砂質土を多く含む
30. 29と同じだが石が少ない
31. 人頭大の礫層（石垣裏詰め石の流出層）
32. 瓦たまり
33. 灰褐色砂質土（汚れている）
34. 灰色粘質土
35. 灰色砂質土
36. 35よりも粒子粗い
37. 黒色土と灰、黄土、炭を層状に含む（盛土3の黒色土）
38. 灰褐色砂礫土（盛土4と同じ）
39. 褐色粘質土中に黄色ブロック多く含む
40. 暗褐色砂質土
41. 暗黄色砂礫土（礫、黄色ブロック含む）

Fig. 103 石川門調査区盛土1関係土層図 (1/80)

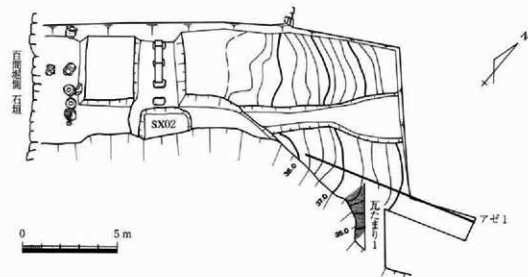


Fig. 104 石川門調査区盛土1・2上面図 (1/200)

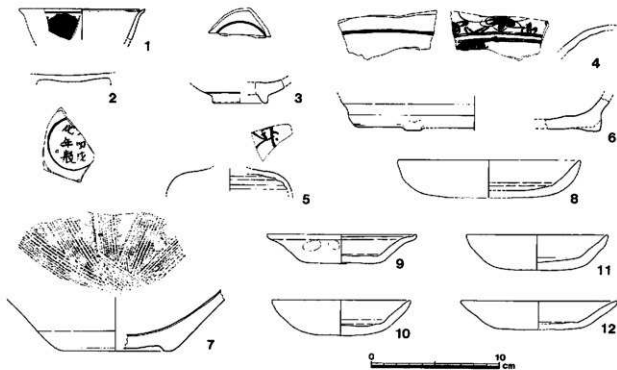


Fig.105 石川門調査区盛土1出土遺物 (1/3)

ある。そして珠文の数が14、16、14個(推定)と全て違う。このような違いがありながら、巴の尾部が隣の巴の背に接して圏線となるという共通した意匠である。

烏倉瓦は、1点出土している。左巻きの巴文で、面径15cmで中心に珠文、外区に14個の珠文がある。下顎はカット成形されているが、その後の調整は加えられていない。

軒平瓦 (Fig.108)

唐草文軒平瓦(108-1~8)と梅鉢文瓦(108-9)がある。唐草文のうち、中心飾りの形から大きく二つに分けられる。一つは下から上に3枚の花弁が伸びるもので、多くがこの部類に入る(108-1~5)。花卉の方向、枝葉の展開の仕方と細分される。1・2は中心飾りの右横に棒状の範のマークが共通しており、同範の可能性が高い。もう一つは上から下にさがる花弁のものである(8)。6の枝葉の伸び方が8に類似するので、これも同類かもしれない。9は梅鉢文である。中心に軸や圓のお花弁のみの表現の梅鉢を配し、左右に唐草を延ばしている。

丸瓦・平瓦 (Fig.109-112)

基本的に表土などで見た瓦と同じである。

丸瓦は、全てコビキB手法によって作られている。109-3の内面に台から離すために角棒を差込んだ痕跡がある。また、110-1の外面にタタキ成形の痕跡がある。丸瓦幅は15cm~17.5cm幅がある。それぞれ、瓦当面径の15cmと18cmに対応するものである。なお、109-2と110-1には穴があけられており、固定するために釘などを打ち込む穴であるので、棟瓦である。平瓦は、凹面台で成形されたもので、凹面に調整が加えられ、凸面には離れ砂が残って未調整である。まれに、112-4のように、凸面でもナデ調整が加えられているが、離型時の器面の荒れを直すために施されたものである。

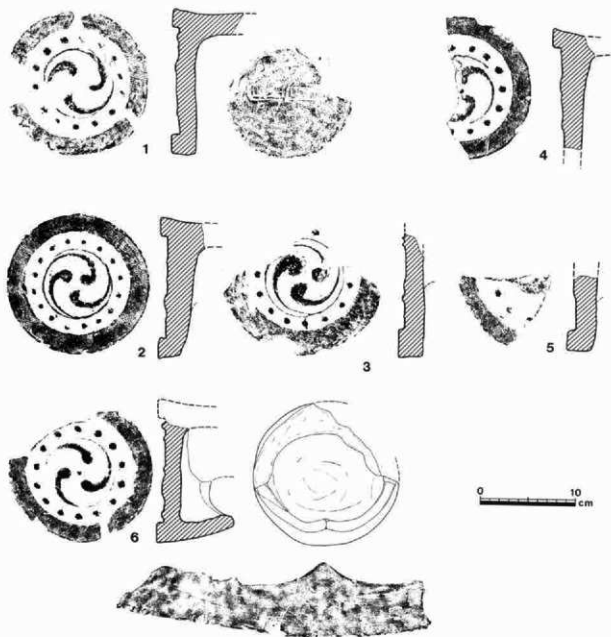


Fig.106 石川門調査区瓦溜まり1出土軒丸瓦 (1/4)



Fig.107 遺物整理風景

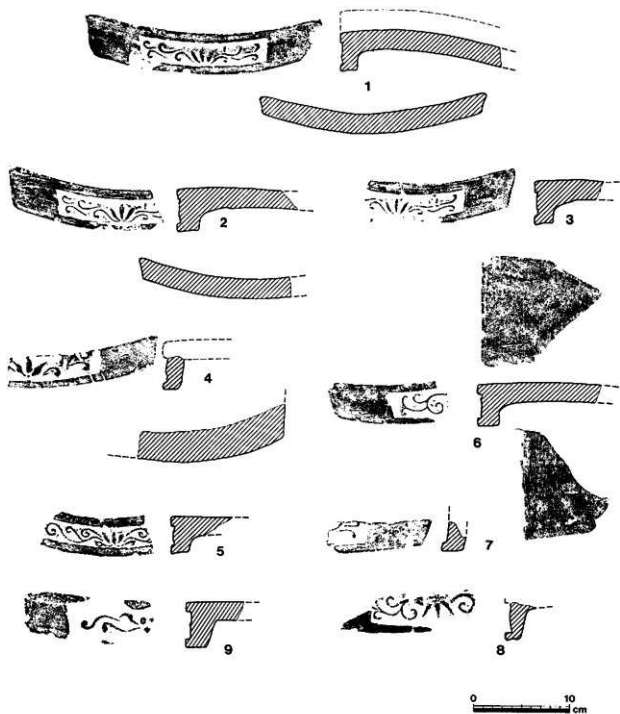
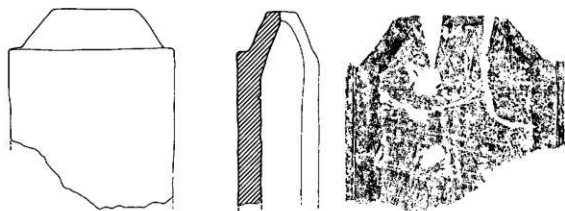
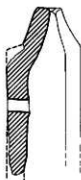
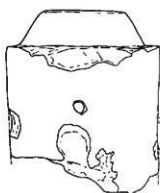


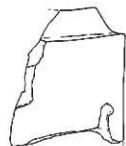
Fig. 108 石川門調査区瓦溜まり1出土軒平瓦 (1/4)



1



2



3

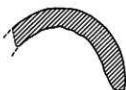


Fig. 109 石川門調査区瓦溜まり1出土丸瓦(1) (1/4)

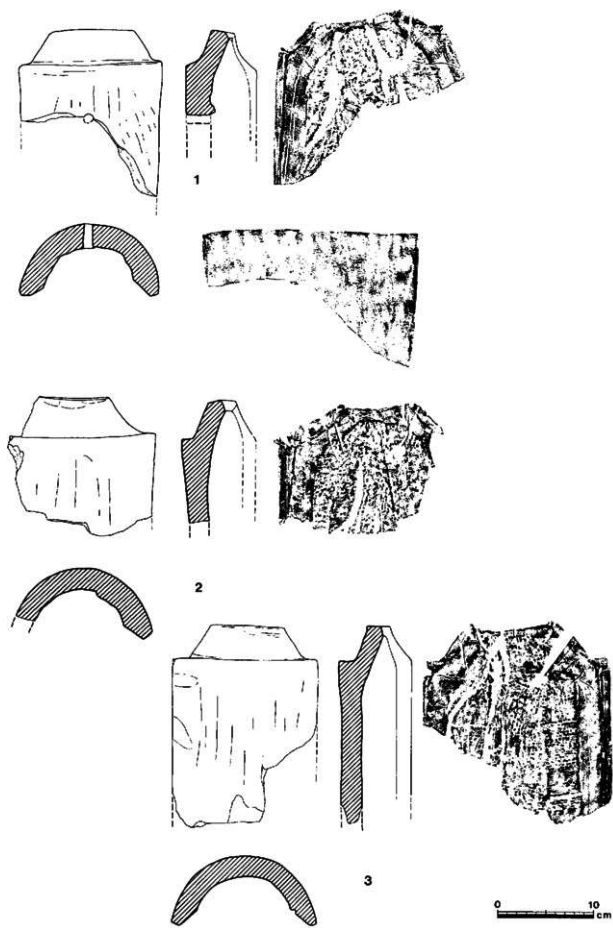


Fig. 110 石川門調査区瓦溜まり1出土丸瓦(2) (1/4)

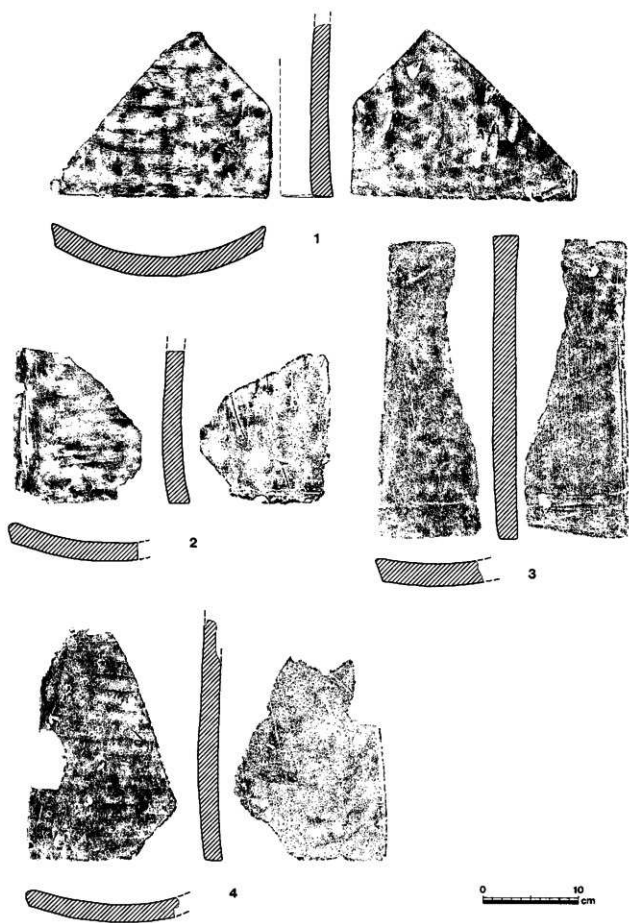


Fig. 111 石川門調査区瓦溜まり1出土平瓦(1) (1/4)

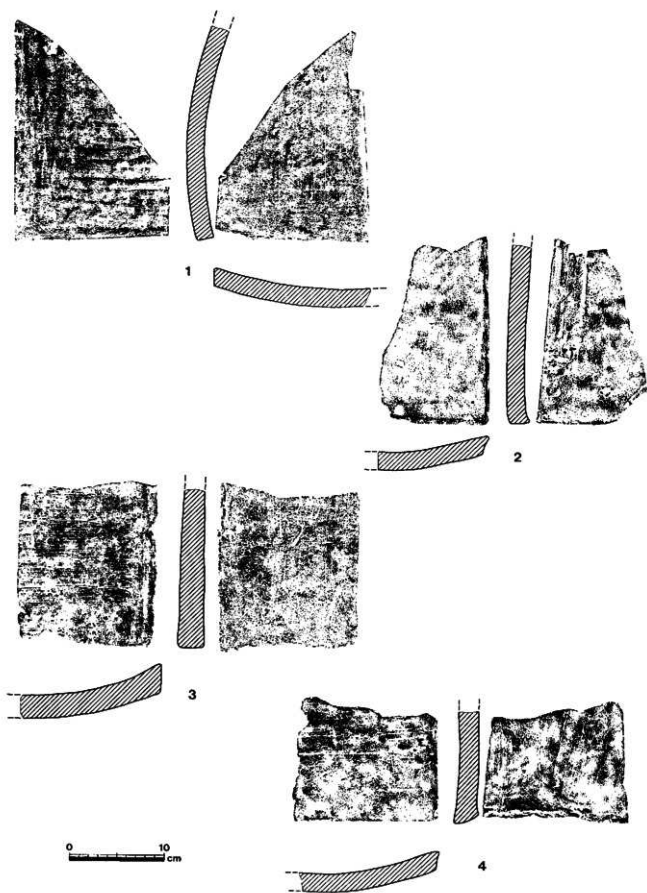
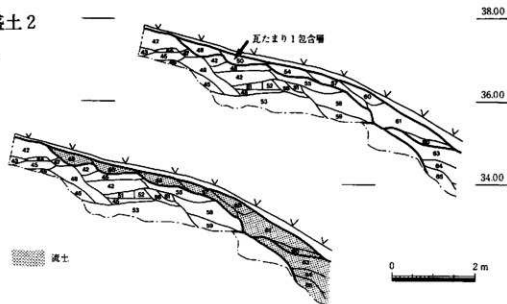


Fig.112 石川門調査区瓦溜まり1出土平瓦(2) (1/4)

第3節 盛土2

a) 盛土の状況



- | | |
|---------------------------------|-----------------------------|
| 42. 黄褐色砂礫土 (よく締まる) | 54. 黒褐色砂質土 (焼土塊含む、瓦たまり1包含土) |
| 43. 44よりも汚れている | 55. 黄褐色砂礫土 (礫ほとんど含まず) |
| 44. 淡黄褐色砂礫土 | 56. 暗灰黄色砂礫土 |
| 45. 淡黒灰褐色砂礫土 (炭粒含む) | 57. 54と同じ (礫若干含む) |
| 46. 淡灰褐色砂礫土 (焼土、炭、灰含みしり悪い、礫土3か) | 58. 51と同じだが汚れている |
| 47. 暗黄褐色粘質土 | 59. 暗灰黄褐色砂礫土 (炭含む) |
| 48. 暗黄褐色砂礫土 | 60. 暗灰黄色砂質土 |
| 49. 43と同じ | 61. 淡黒灰褐色土 (木根によるカク乱) |
| 50. 暗黄褐色砂礫土 (48より礫が小さい) | 63. 暗灰黄色砂質土 |
| 51. 赤褐色砂礫土 | 64. 黄褐色砂質土 (炭、灰含み、流土) |
| 52. 灰褐色砂礫土 | 65. 淡赤褐色砂質土 (流土) |
| 53. 灰褐色砂礫土 (炭、焼土、炭、若干含む) | |

Fig.113 石川門調査区盛土2と白鳥堰表土系上層図 (1/80)

土橋本体の調査をはじめたころは、表層の土の状態が盛土1とよく似ていること、そして白鳥堰土手部分の土がよくわからなかったことから、盛土1と同じものと認識していた。盛土1下面の標高が38mなのに対して、盛土2はそれよりも低く、盛土下面が急激に落ち込んでいる。そして土橋が一段広がる部分に相当する。しかし、白鳥堰現代石垣を境にして地点が違うので盛土2とすることにした。つまり、盛土を区別した方が後の資料整理作業そして資料批判をおこないやすいと考えたわけである。

盛土2は、白鳥堰近世石垣内側の盛土として構成している。その盛り上げには盛土3の形状が大きく左右している。盛土3の上面は、途中でテラスを持つ段状の地形であり、まずその段を埋めてテラスのレベルを上げていっている。すなわち、最下層として炭、灰、焼土を少し含む灰褐色砂質土(53)が比較的厚く水平に盛り上げているが、テラス端まで及んでいない。盛土3に見られた焼土系の混入物があるが、盛土3に換するよう近く(45、46)の土にいずれも含まれているので、盛土3の土が部分的に盛土2と混和されていることになる。

次の段階では(53)の土に上から斜め方向に土を盛り、さらに(53)からテラスを盛り上げつつ全て埋めるように斜め方向に土を盛っている。ともに同じような土を用い、黄褐色～灰褐色砂礫土系であまり締りのよいものでない。部分的に礫をほとんど含まない層もある。全体的に堅い土はあまり見られず、強固な叩き締めはされなかつたようである。ただし、比較的高さの揃う部分があるので、ここでの叩き締め作業がなされた可能性が高い。具体的には、(53)上面、(51、52、56)上面などである。(45)上面ラインでも可能性があるが、直下にある(46)が柔らかいので、作業された可能性は少ない。

盛土2上面は、後世の削平を受けているようで、旧表土系の暗灰黄色砂質土がある。明治以降の攪乱土であろうか。瓦溜まり1の包含する土には焼土や炭を含むが、基本的に表土系の土であり、

盛土3瓦群よりも新しいものである。梅林唐草文軒平瓦は表土からも出土している。盛土1との関係に注目でき、瓦つまり1の資料群をその下面に位置づけることができようか。

前節で盛土4上面に旧地表を想定し、盛土1施工を百間堀石垣の大規模な補修後とした。そこで、盛土1と2とは、よく似た土を用いながら同じ時期の施工であろうか。盛土2と盛土3との境には、旧表土は見られず、段をなす地形から旧表土のみの除去ということは想定し難い。つまり、盛土2を盛土1と近い関連を考えるよりも、むしろ盛土3との関係に留意すべきである。現状の盛土2の最も高い部分は標高37.8mであり、ちょうど盛土4の高さにあうので、盛土4と同時に施工された盛土の蓋然性は高い。しかも、白鳥堀石垣が明治の石川橋建設時に壊されて、それまであった盛土が流土として流れている可能性があり、そのために、流土中に盛土4(3)出土遺物に類似する遺物が散見されるのであろう。

b) 出土遺物 (Fig.114)

114-1~9は明染付けである。1~3は芙蓉手碗で、1の口縁はやや受口になっているが、3は外反する。いずれの体部も型作りによる種をもつ。4は外面に龍文のある碗、5は外面に宝相文のある皿である。6は色絵皿で、呉須とともに赤と黄色で上絵付けしているが、多くが剥落している。9は合子蓋で、口縁内面の軸を掻き取っている。内面のみピンホールがみられる。7は角皿で裏に「玉堂(?)佳器(?)」銘がある。内面に牡丹、外面に龍を描き、盛土4からも同種のものが出土している。10は瀬戸美濃皿である。高台が非常に小さいので蓋の可能性もあるが、ここでは皿として記述する。見込みに小さな段がある。高台を中心に外面に鉄軸で密に圈線を描き、内面は鉄軸で草を描き、厚く透明感のない白い釉を掛けている。長石軸であろう。このことから、志野の可能性もある。11は越前甕。12は信楽茶壺である。肩部に一重の低い突帯をめぐらす。

第4節 盛土3

a) 盛土の状況

盛土の遺物

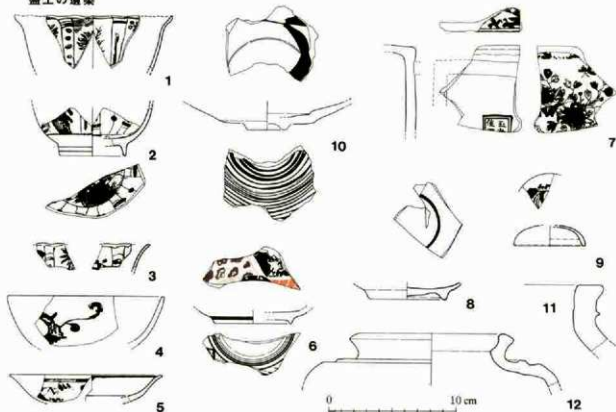


Fig.114 石川門調査区盛土2出土遺物 (1/3)

大量の瓦を出した盛土で、その範囲は非常に狭い。しかも、盛土3下面(盛土4上面)の凹凸が激しいことや盛土3上面(盛土2下面)に大きな地形の段があるという特徴がある。これらから、盛土3のみで土橋を構成する一時期があったと考えられず、先に見たように、盛土2・4とともに土橋構築に使われた盛土であると考えられる。認識した盛土の違いは、工程の差であり、盛土3のテラス状の段は、盛土2でもみられたような斜面地を盛り上げる一つの方法である。

盛土4上面は、アゼ1上部に大きな段を作って、その段を拡張するように盛り上げている。そして、盛土3上面はその段を1m高くしている盛土である。盛土3上面は、白鳥壱の方にさらに30cmの小さな段とさらにもう一段大きく下がったようになっているが、これらの外側には流土のような盛土が動いた土があるので、後世に削られていると考えられる。なお、盛土3と盛土4との関係や盛土1との関係については、明治の石川橋の掘削によって観察できる箇所が失われていたので、正確な対比や関係を知ることはできない。見直しについては、前節で述べたとおりである。

盛土3は盛土4に比べて非常に小さな盛土単位だが、おおきな特徴は、大量の瓦と炭・焼土・灰が入った表土系の土、そして部分的に戸室石の砕石を使っていることである。盛土は比較的柔らかく、叩き締めのような工程と考えにくい。しかし、一つの層の単位は小さい。

盛土3の大きな特色は、黒色土とした炭層あるいは炭や灰や焼土を多く含む層が顕著であることである。この土は、混和されたような状況ではなく比較的純粋な層なので、火災等の跡の残土と考えられる。火災を示す火を受けた陶磁器片は比較的少なく、121-2等でみられる。しかも大量の上出瓦のうち火災にあった痕跡のあるものは皆無である。したがって、単純に火災と結びつけるこ

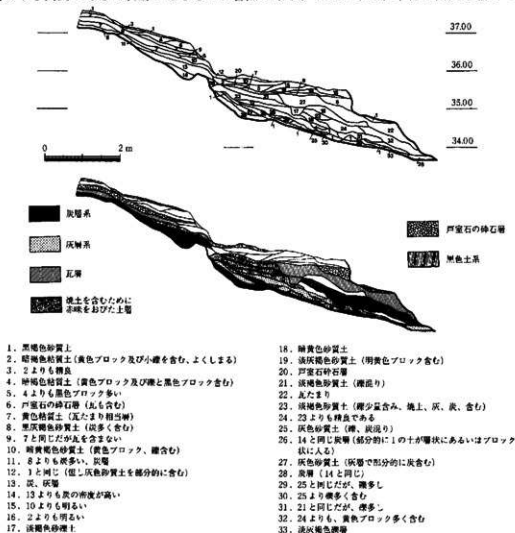
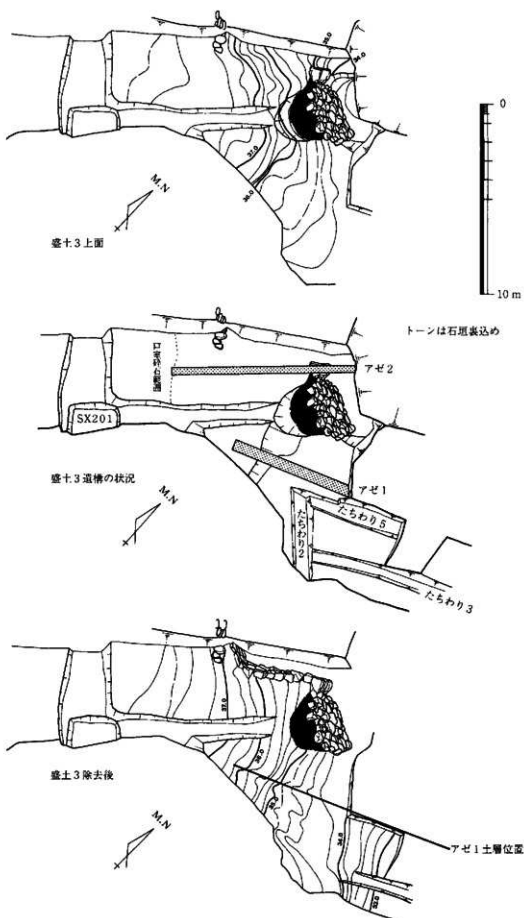


Fig. 115 石川門調査区盛土3上層図(1/80)



とはできないが、大量の焼土、炭、灰を火災によって得ることができるという面もある。一連の盛土である盛土4に炭粒が入る層が多く見られるのも無関係ではなく、盛土3を中心に炭粒をめぐって関連性があり、人為的に盛土に入れるために炭や焼土・灰を作ったと考えるのは無理がある。土師器皿や瓦には火を受けた痕跡がないのは、後で見るように廃棄にあたって祭祀的側面を見ることができ、黒色土中に含まれる陶磁器類と同列に扱うことのできない性格をもって、盛土3の供給に火災の要因の可能性が高いと考える。

さて、構築についてみてみたい。まず下の段をある程度埋めることから始まっている。最下層には、炭のつまった黒色土をおき、その上に表土と思われる土や灰を主体とする層がある。これらは、火災の跡片付けを受けた表土層であり、黒色土という層名で遺物を取り上げている。さらに上には、暗黄色砂質土や淡灰褐色砂質土という共に小礫を含む層があるが部分的であり、大部分は焼土を含むために赤味の強い土が主体となっている。淡褐色砂質土系で焼土・灰・炭を含んでおり、焼土という層名で遺物を取り上げた。そして、大量の瓦が層を成しているのがその上層にあり、瓦溜まりという層名で遺物を取り上げた。その上の凹みに戸室石の砕石を入れている。

これらの土を盛り上げることに伴って、先の段が緩やかな斜面となっている。次の段階は、上の斜面の傾斜を緩やかにするためにすることである。まず上段に、同じように炭層をおく。下段には暗黄色から暗褐色の黄色系統の小礫層を20cm厚みにおいて下段の上面として整えている。

一方、上段の炭層の上には、黒色土や瓦溜まり、その上に戸室石砕石層があり、小さな段を作っている。戸室石砕石層は、瓦溜まり上に置かれているので、瓦溜まり層の表面を整えて固め締める役割があると考えられる。また、上には下段の最上層に見られた暗黄色から暗褐色の黄色系統の小礫層を置いている。また、白鳥堀近世石垣外側で確認した盛土3は、内側の堆積と基本的に同じである。すなわち、下層に黒色土、そして焼土や灰を主体とする層、そして瓦溜りである。

このように、上段も下段、さらに石垣の外でも基本的に同じ盛土施工をおこなっている。用いる土が、炭・灰・焼土や瓦や土器などに見られるような、廃材を主としているという共通要素がある。これらの廃材の供給源は、日常生活で求めるに、あまりにも量が多すぎる。材料をストックするわけでもないだろう。また、一般的にこのような材料を盛土に用いることはしないので、かなり特殊な盛土であり特別な事情を想定しなければならない。

盛土3の白鳥堀の方には、現在失われているが、白鳥堀石垣の延長があったはずであり、盛土2や3が石垣裏を構成する盛土として存在していることになる。兼六園調査区や水道管切り直し調査で確認できた白鳥堀石垣の裏込め構造は、盛土によって播鉢状になった所に裏込め石を置くという構造なので、本調査区でもそのような構造であった可能性が高い。そうすると、段を作っていく盛土方法は、石垣裏を作る特別な方法であったということになる。

石垣背後には、石材をはった時にできる層をそのまま土に埋め込んでいく方法がある。しかし盛土3の戸室石砕石はこれと違って、はった石屑をあつめて所要所の部位に敷いており、土を固めるような役割があろうか。また、盛土を固める目的とともに、工事の足場を良くする目的もある。このように考えると、石垣の構築にあたって、石材搬入などの工事を容易にするための目的が強いと考える。

盛土3は兼六園調査区では確認されないで、その途中で終わっていることになる。どれほどの範囲にあるのかわからないが、土が足りないので廃棄物のような土、用材を使ったとは考えにくい。むしろ意図的にこのような材料を用いている可能性が高い。これは、盛土中からでてくる染付け陶磁器や国産陶器の量に比べて土師器皿が異常に多いことや、小型の土師器皿の1群が特定場所からしか出土しないということ、大量の瓦群からも、その蓋然性は高いものである。すなわち、地鎮的な色合いの強い盛土ではないかと考える。

b) 遺物の出土状況

瓦溜まりから大量の瓦が出土した他、盛土中から陶磁器類をはじめとして、土師器皿も多く出土した。瓦が約560箱、陶磁器類が4箱、土師器皿等が33箱である。遺物の取り上げは、平成3年度

の調査で大量の瓦が出土するのが明らかになったので、11の地区に細かく区分した他、あぜについては、上段と下段に区分して「上」「下」とした。また、盛土3掘削途中に検出した白鳥堀近世石垣の外側の遺物については、「石垣外」として取り上げた。この区分は、グリッドのような機械的ではなく、地形に即したものである。小範囲における遺物取り上げの変則パターンであるといえるが、より実際の遺物の配置を見るのに都合がよい。

瓦の出土量は、瓦溜まりの大きさや厚さに比例する。当然上段の厚みが少ないことから出土量も少ないことになる。瓦の出土は、ほとんどが地形的に低い部分のものであり、具体的には石垣外(2区)と6区、8区、9区、10区である。10区より北側は斜面となってしまうので、瓦の出土は極めて少ない。また、1区と3区の盛土3は僅かな厚みしかなく、瓦は極めて少ない。

瓦は低い部分のかさ上げの目的に使われたと思われるが、同時に土師器皿との分布ともオーバーラップすることから、同じような性格をあわせ持つのであろう。白鳥堀石垣背後に盛土4が土手のように盛られているので、盛土3はその斜面を埋めるものであり、低い部分を中心に瓦が集まるのである。種類毎の瓦の出土の仕方にも規則性などは見られず、丁寧に置いているような風でもない。まさに乱雑にそして投げ捨てられたように、かたまっている。このような瓦溜まりは、瓦しか出土しない単純層である。土器、陶磁器類の混在は少なく、瓦の廃棄にあたって土器類が混じらないような状態である。しかも瓦の種類が軒瓦、丸・平瓦、輪違い瓦と限られており、廃棄物としての瓦が保管され投棄されたと考える。

瓦層は、碎石層と違って固くならない。実際発掘中において瓦の間に水の流れた跡を示す泥が多く認められた。これは、盛土層の中に隙間が在ることを示し、盛土の強度を強めることはなく、むしろ弱める要因である。それゆえ、瓦のような廃材を盛土に用いる例は寡聞である。石垣裏という重要な部位にこのような盛土をもってくる意義は、土木的な見解以外に求めねばならない。したがって、土師器と同じように祭祀的側面を強調したい。

土師器皿もまた、陶磁器類に比べて異常な量を出土している。染付けなどの磁器類が1箱、唐津や瀬戸美濃系の陶器が2.5箱に対し、土師器皿は33箱も出土している。染付け磁器類は器壁が薄く小破片となっており、1箱に入る実質の個体数は、陶器や土器に比べて多いものの、土師器皿の大量さが目を引く。藤田邦雄氏によると、兼六園江戸町跡推定地では土師器皿の占める割合が3割程度であり、17世紀初頭の土器組成比として考えられている¹¹⁾。

地区別で出土量を比較してみる。個体数を出していないので、遺物箱数の比較にする。8区が最も多く、次にアゼ1、5、6区の順で、大量の瓦のあった10区や石垣外には僅かに1箱ずつである。

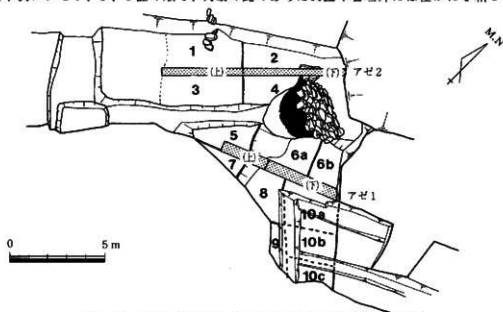


Fig. 117 石川門調査区盛土3遺物取り上げ地区割り (1/200)

必ずしも低いところに集中しているわけではなく、むしろ、5、6、8区の一角にかたまっているといえる。この部分は、盛土4によって出来た土手の一番端つまり端鉢状に落ちかけようとする際にあたる。調査中には全く気づかなかったが、5区やアゼ1上で、口径が10cm以下の小型の土師器皿が出土している。まどまって出土していたかどうか全くわからないが、アゼ1上はほぼ5区相当である。他の地区からほとんど出土していないのは、小型の土師器皿が、5区という傾斜が変わって落ちる際に、意識的に捨てられたものであろう。これが、小型の一群だけ目的意識をもって捨てられたのか、それともほかの土師器皿に敷衍されるのであろうか。

また、土師器皿の接合で十分時間が取れなかったが、完形になるものあるいは完形になるであろうものの数が非常に多い。陶磁器類は、小破片となっており、火を受けているものも若干認められ、出土地点に偏るわけではなく盛土3の一円に分布しているという大きな違いがあるので、盛土中に陶磁器類がもともと入っていたと考えたい。つまり、土師器皿はもともと盛土中に入っていない状態であり、意識的に廃棄されたと考える。

盛土に伴う祭祀行為の可能性について

少なくとも小型の一群の土師器皿は何等かの目的意識をもって廃棄されていることを推定した。この土師器皿は口径が8cm前後で、口径のわりに小さな底部となっており、一見して中世的様相が強い。しかし底部内面にしっかりと面を持つことや、成形技法が口径の大きなものと基本的に同じであることから、両者同時期性を持つものであり、数の上から小型の一群は特殊なものである。

大型の土師器皿は、口径13cm前後でほぼまとまる。器形はよく似ており、しかも胎土や焼成もよく似ているという特徴がある。このような状況は、兼六園江戸町跡出土土師器皿のような個体差が大きい場合と対照的であり、兼六園江戸町跡資料の方がより実際の生活状態を反映すると考える。つまり、大型の一群も同種同形の皿を大量に廃棄していることになる。

この中で、灯明油痕がついているものうち、よく使い込まれて口縁にべっとり油痕が付着しているものがかなりの数に上る。反対に全く付いていないものもおおい。少ない種類の大量同時廃棄は、同時に大量同時使用を意味し、その前提に大量同時生産がある。これが具体的にどのような状態であるのかよくわからないが、一般的な使用形態から廃棄される状況を想定することはできない。したがって、この特殊な状態を祭祀とよべるかわからないが、少なくとも尋常な状態でないことだけは確かである。遺構の状態は全く異なるが、江戸加賀藩邸の「池地点」の状態を連想する²²。

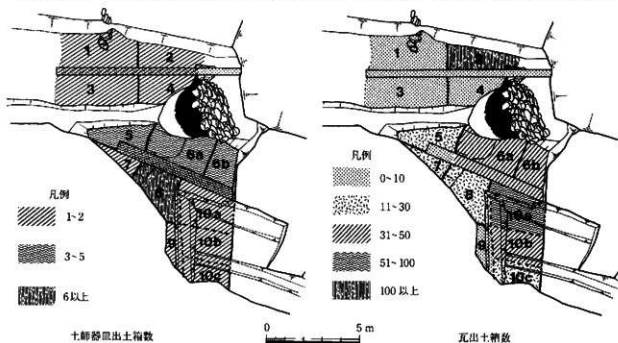


Fig. 118 石川門調査区盛土3遺物出土状況 (1/200)

c) 出土遺物

染付け磁器 (Fig.119)

明染付けがほとんどを占め、肥前染付けはわずかに21、22の2点のみである。金沢における初期伊万里の流入を知る上に重要である。

1～8は碗である。1は渦巻き文?で腰の張る体部である。2～6は直線的にのびる体部である。5の底に「大明成化年製」。8は碗の腰部あたりと思われ、アルファベット文字が書かれている。輸出品であろう。9～16は小杯である。10～14は同じタイプで、口縁端部が外反し、外面に雲芝を描き、同じセットのものであろう。13の高台は幅広いものである。15は器頭心気味で見込みに枝折草花を描く。19は角型合子で、20は円形合子である。ともに作りは丁寧で、祥瑞あるいは古染付であろう。

21、22は肥前磁器の筒碗である。青みがかった釉で、生掛けされている。21は、外面に雲を描いている。

陶器・焼き締め陶器 (Fig.120-123-1-7)

120-1～5は碗である。内外面灰釉を掛けしている。しっかりした高台である。2の底部に鉄釘が付着している。5は瀬戸美濃碗で、全面に藍色の釉が掛けられている。120-6～11は皿である。120-6、7が口径13cm程度の中皿であるが、7は見込に段を持ち、釉調から李氏朝鮮製である。8は瀬戸美濃系の首碗で、高台際に「露」の印が押されている。120-9～11は肥前溝縁皿である。

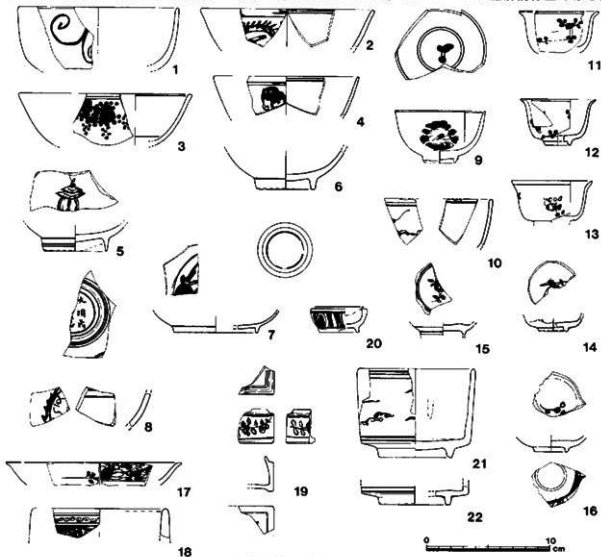


Fig.119 石川門調査区盛土3出土土器(染付け) (1/3)

120-12は小鉢で口縁に鉄軸で幾何文様を描く。13も7と同じ中皿で、砂目積み痕が見込みと高台に付着する。121-1も中皿だが内面に鉄軸で文様を描く、鉄軸で輪郭を描いた中を別の軸で塗るいわゆる二彩唐津である。120-14は口径27cmの大皿で、高台に切り込みが入っている。砂目積みである。121-3は絵唐津だが火を受けて表面の釉が縮れて絵も緑色に変色している部分がある。121-1ともあわせ、二彩唐津である可能性が高い。121-3は内面に鉄軸でかいたような濃い紫色の変色部があるが、文様かどうかかわからない。121-5は深い鉢で播鉢と同じ器形だが下ろし目がない。灰釉が掛けられている。砂目積みである。122-1~3は播鉢である。1、2の口縁端部は受け口状だが、3はツバ状に張り出す。いずれも下ろし目の間隔が粗く、鉄軸が掛けられている。

122-4~7は瀬戸美濃系である。4のは天目碗。5は黄瀬戸溝縁皿である。122-8~10は越中瀬戸内はげ皿である。ごけ底のような底部と屈曲して短く立ち上がる体部をもち、見込みに印花がある。体部のみに鉄軸を掛けられている。

122-4、123-1、3は越前播鉢である。底部には回転糸切り痕が見られ、おろし目は極めて摩耗している。底も薄くなり、よく使われ播鉢である。123-2は産地不明で、口縁に面をもち横線をめぐらし、重ね焼の痕跡がある。4は唐津と思われ、高台をもつ。123-5~7は瓶であるが、肥前唐津産かもしれない。内面に同心円当具痕が横方向に認められるが、粘土紐接合痕を残しているものもある。6、7は無軸である。5外面には鉄軸が塗られている。実測していないが、体部が鉄軸で口縁部灰釉が上というように塗り重ねられている物もある。高取焼であろうか。

その他の土器 (Fig.123-8~13)

123-8はとりべである。123-10~13は土師器壺である。上半が10などで下半が12などだが、直接接合されるものでない。円筒状の容器に一段小さくなった口縁がついている。口縁は強いなでによって成形されているが、10のようにすばまるものと11のように長く直立するものがある。内面には粘土の積み上げ痕跡が明瞭に見とめられ、底部から3cmまで1つの単位となっており、それ以上は通常の粘土紐の積み上げである。これは、底部が型のような器物で作られているためであろうか。熱を受けた痕跡はないが、焼壺壺が器形的に最も近い。123-9は蓋である。何の蓋かわからないが、10~13の土師器壺の蓋の可能性はある。

土師器皿 (Fig.124~134)

正確な出土個体数を数えていないが、出土箱数にして33箱が出土している。個体差の少ない資料である。

口径から、14cm前後のもの、12cm前後のもの、10cm前後のものに分けられる。実測資料のうち13cmを測るものがある。これは、平面形が口縁のナデによってどうしても若干楕円形になってしまうので、反転実測した場合や計測点によってこのような数値がでる可能性があろう。したがって、法量分布は以上の3つになるようである。

特殊なものとして、口径7~8cmの小型の一群があり、これらは器形が全く異なる。底径が2~4cmと口径のわりに小さな底部となっており、大きく開く体部になっている。底部は小さくてもしっかりとした底面をもっており、中世の土師器皿とは異なる作りである。しかも、底部内面と体部との境は屈曲して明確に分けられている。これは、底部内面に横方向のナデが施された時に体部はやねる状態となる。そして次に体部に回転しながらナデが加えると体部がおきる状態となり、その時の屈曲によるものであろう。

口縁端部は直線的に伸びて丸く収めるものがおおい。131-7、8の口縁端部はやや上につまみあげられたようになっている。これは最後に口縁端部外面に、さらにナデを加えるためであろう。胎土はいずれもよくにており、土師器皿の3類に近い。そしてこれらの器形の差は、製作時の個体差であると考えられる。

3つの法量を確認した皿は、胎土、色調、焼成状況から、大きく3つのグループに分けられる。1類一淡赤灰黄色を呈し、重ね焼の状態によって火の回りの悪いところは赤色が強くなり、良いところは黄色が強くなるものである。砂分の強い粘上のせいか粉っぽい感触である。そして土器全体

が非常に柔らかい。接着剤で接合しても樹脂の部分で割れてしまう。

2類-黄色味がかった灰褐色を呈し、1類に比べ器面のしっかりした土器である。胎土中に長石や石英を入れているが、あまり特徴的な顔をしていない。器面調整もよく観察できる。

3類-2類よりも白っぽい色調を呈し、より粉っぽい土器であるが、1類ほど器面は荒れていない。胎土中に金雲母の極小粒を含むが、目立つほどではない。

3類に分けた時の感覚は、1類が粉っぽくて橙色、2類が肌色でカチッとしたもの、3類が白くて砂っぽいもの、である。これら3つに大きく区分けできるが、それ以外の胎土もみられ、134-3は薄く作られ体部がかなりねて口縁端部がつまみあげられており、胎土も金雲母の極小粒とともに石英も顕著であるというように、違う胎土である。しかし、この3つの胎土の分類で、ほとんどの個体に当てはめることができる。

このような3つのグループに区分したが、いずれも同じ器形を呈しているのは、同じ作り方をしているためである。これは小型の一群でも同じである。見込みに横方向のナデを加える。よく見られるものは、見込みを2-3回往復するナデである。稀に大きく1回のみもある。このナデは、おそらく薄い粘土板に粘土を巻きつけて体部を作り、指で成形した跡である。したがって、体部外面には指圧痕を残すような粗いナデないしは無調整である。

次の段階で体部に回転しながらナデを施す。ナデは一気におこなって引き抜いている。そのため体部には、抜いた時のナデが体部に対して斜めに見えるほか、手を手前に引くことになってその部分の口縁がねることになって、平面が楕円形を呈する。おそらく、手持ちでナデを加えるのであろうか。内面調整が主目的であるので、体部外面の口縁下1cm強しかナデが及んでいない。

見込みにナデを施す時に、体部も少なからず押すことになってしまうので、体部が結果としてねることになる。次に体部にナデを加えると逆におこすことになるので、底部内面と体部との境には不明瞭な浅い溝がめぐる。また、底面には、蕨のような圧痕が見られる。この圧痕はかなりの個体数に見られ、製作時についたものである。調整手法から、回転台の使用を考えなかったが、それに代わる回転を容易にするものとして餅を使っていたと考える。圧痕が焼成まで残されているということは、乾燥途中に付くものでなく、製作時についたものである。製作当初から焼成直前まで甕の座の上に置かれていたものであろう。

口縁端部は、やや引き伸ばされたような形状であるが、それが内側に小さく内湾気味にあるものや外面に面を作るものがある。内面の指に力がより強くかかれば内湾し、下方に強くかかれば面を作るというように、工人などのクセであろうか。

このような特徴は、京都系といわれる手づくねの土師器皿の系譜に繋がるものであろう。また、同じ胎土で同じ器形という特徴は、同時に大量生産されたことを意味しており、出土状況から一括廃棄を考えたが、土師器皿の特徴も考え合わせると、同時に大量に作って、同時に使用して廃棄する、ということが考えられよう。

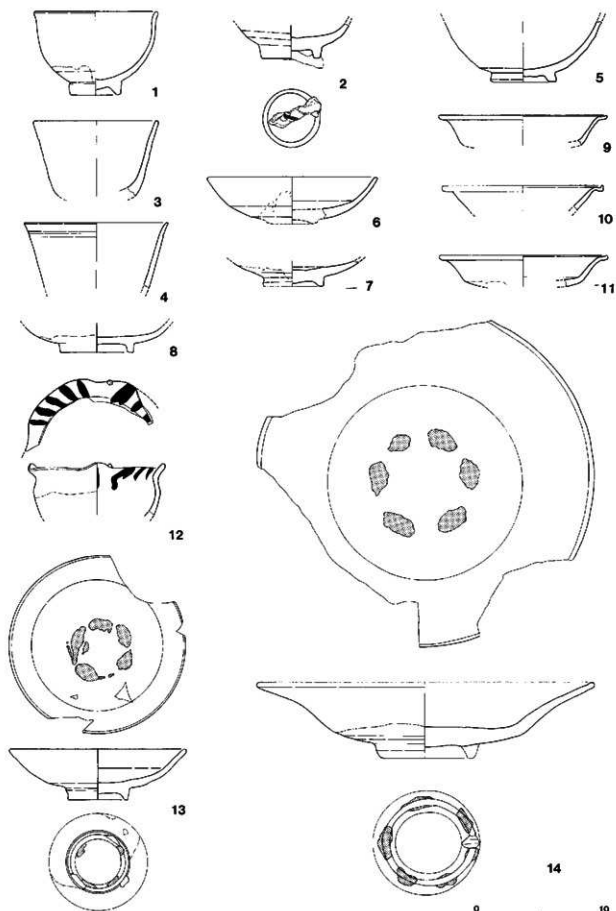


Fig. 120 石川門調査区盛土3出土土器(唐津1) (1/3)

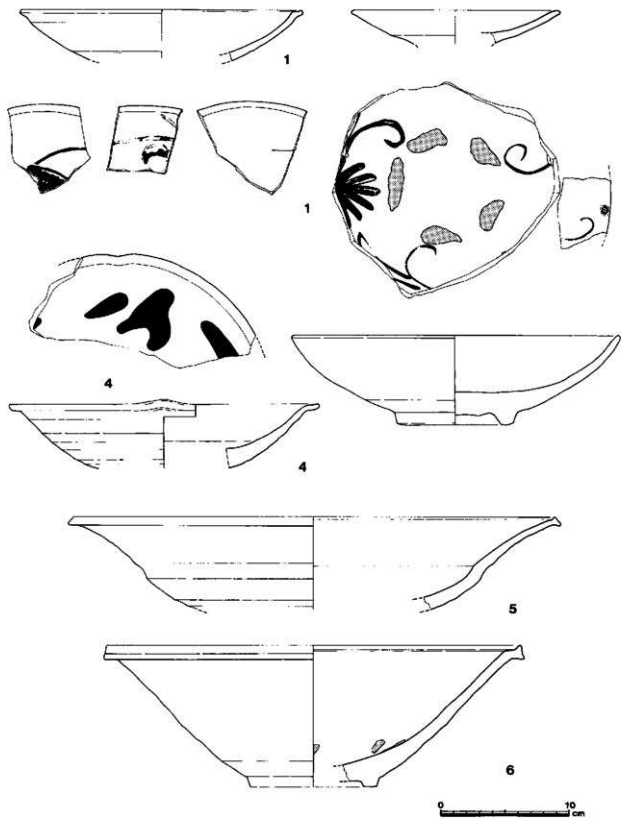


Fig.121 石川門調査区盛土3出土土器（唐津2）(1/3)

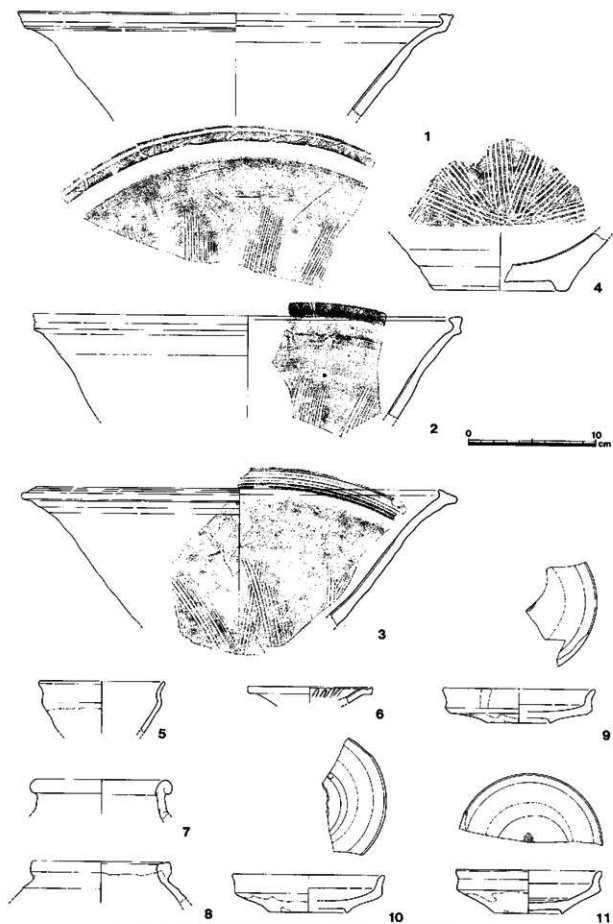


Fig. 122 石川門調査区盛土3出土土器 (唐津3、瀬戸美濃池1) (1/3)

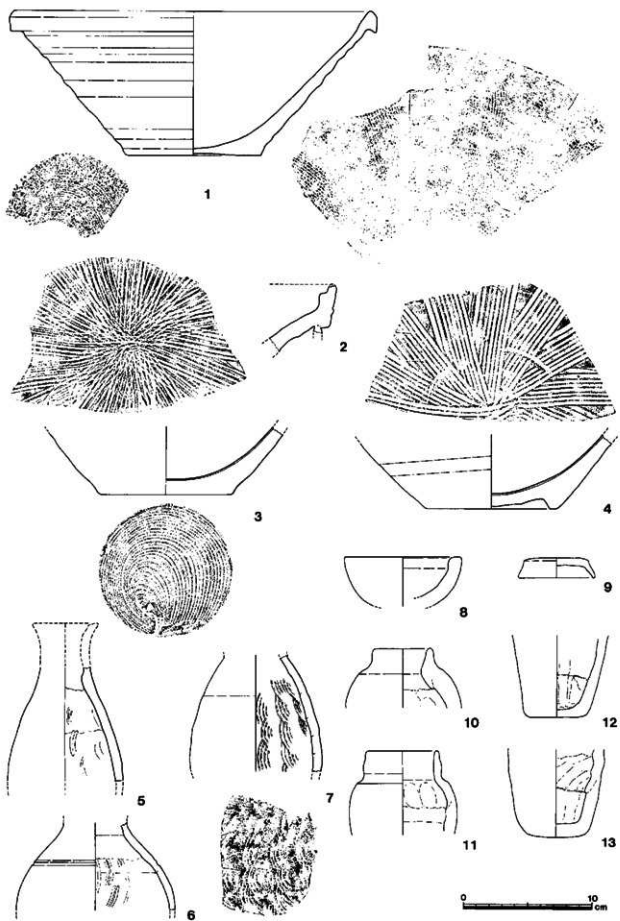


Fig.123 石川門調査区盛土3出土土器（瀬戸美濃他2、焼塩壺）(1/3)

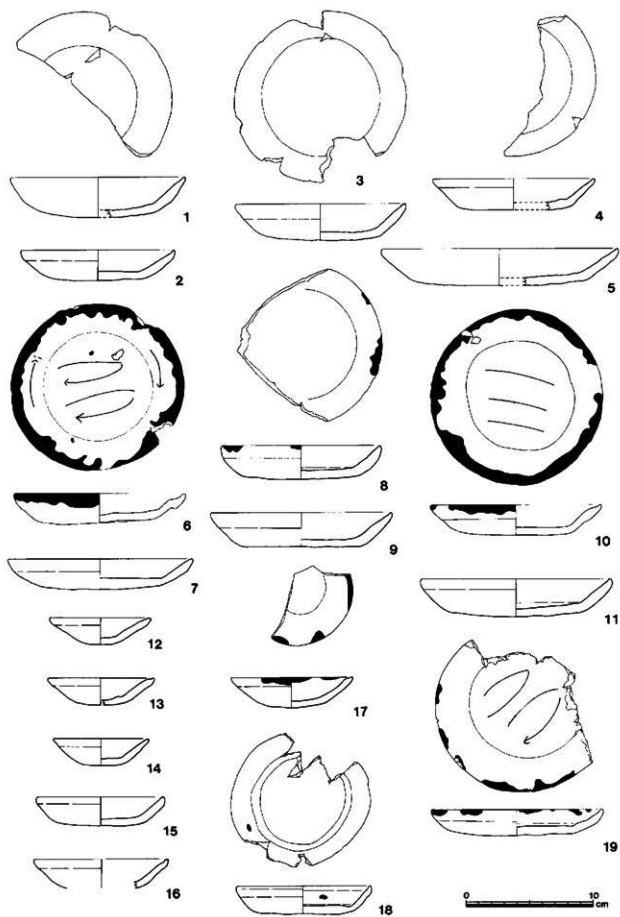


Fig.124 石川門調査区盛土3出土土器（土師器皿1、1～5区）(1/3)

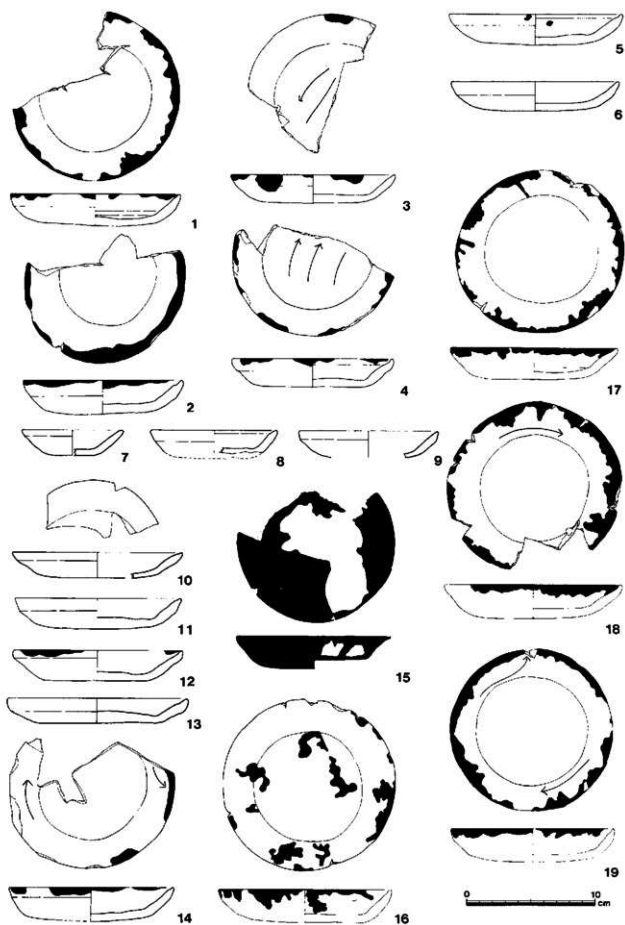


Fig.125 石川門調査区盛土3出土土器（土師器皿2、5-6区）(1/3)

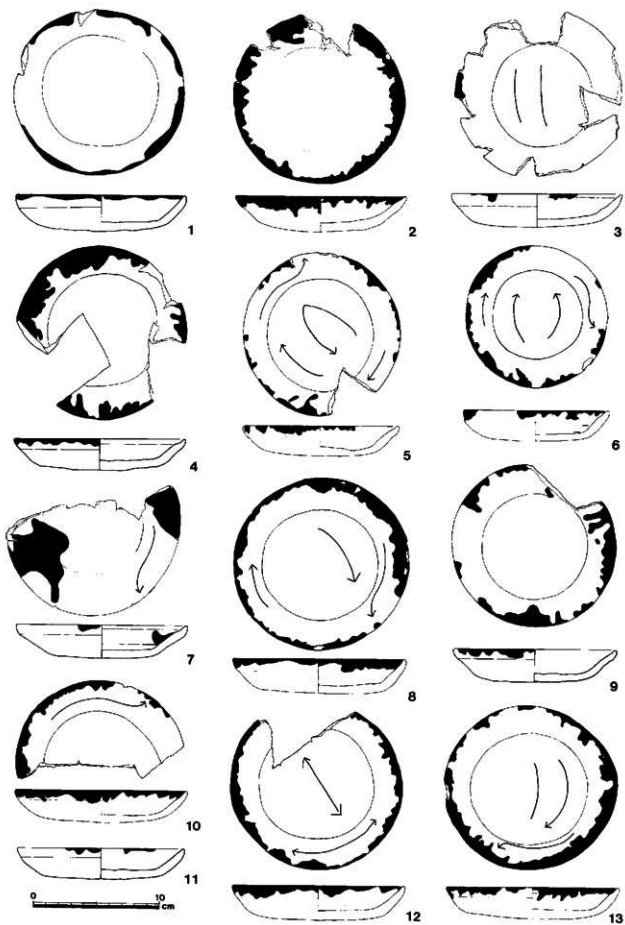


Fig. 126 石川門調査区盛土3出土土器(十師器皿3、6~7区)(1/3)

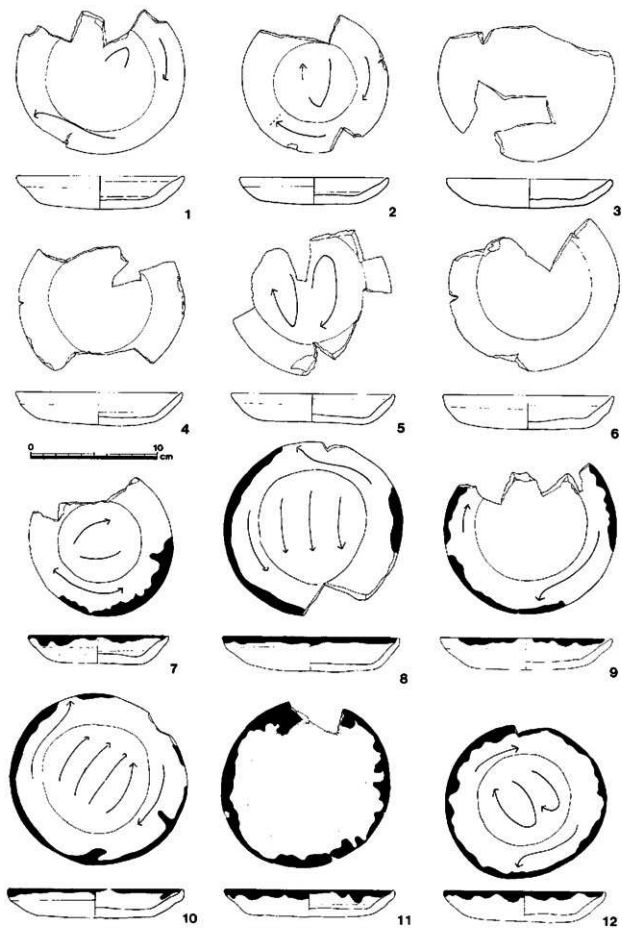


Fig.127 石川門洞査区盛土3出土土器(土師器Ⅲ4、7-8区)(1/3)

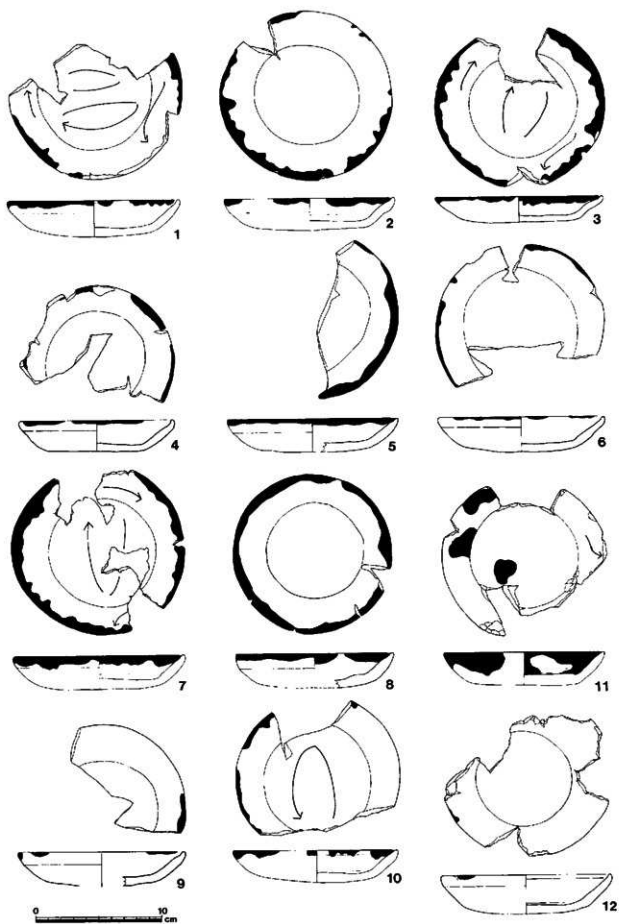


Fig.128 石川門調査区盛土3出土土器（土師器皿5、8区）(1/3)

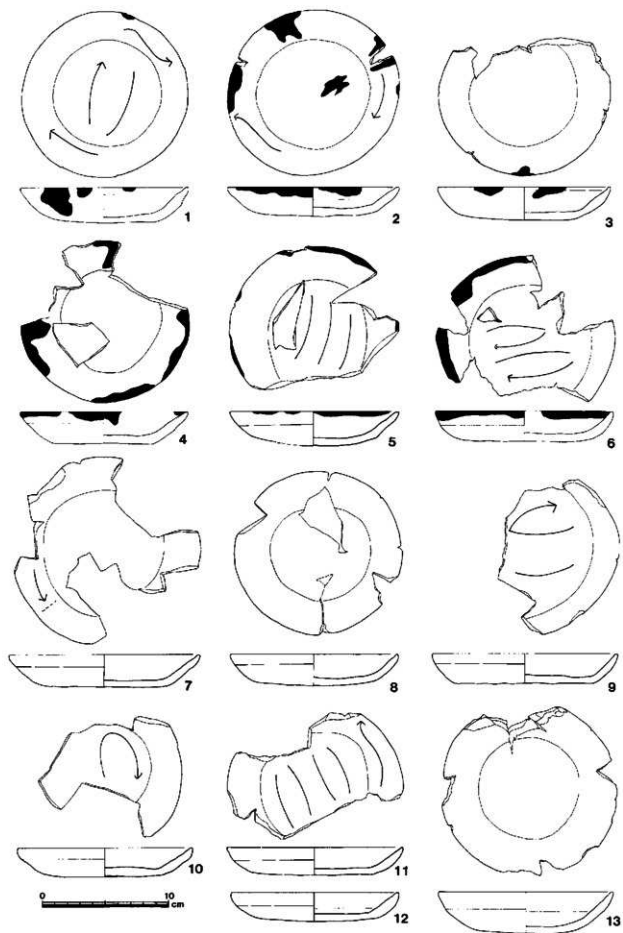


Fig.129 石川門調査区盛上3出土土器(土師器Ⅲ6、8区)(1/3)

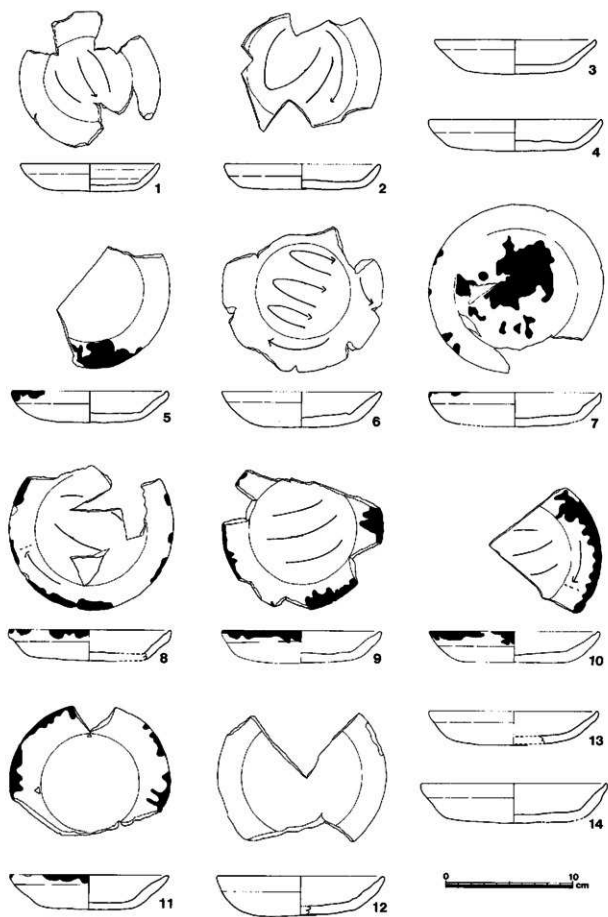


Fig. 130 石川門調査区盛土3出土土器（土師器皿7、8-10区）(1/3)

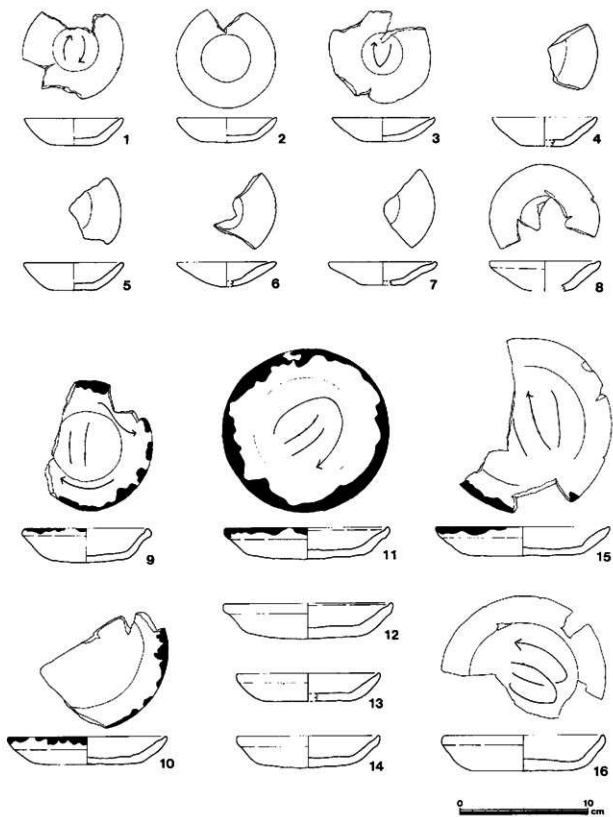


Fig.131 石川門調査区盛土3出土土器（土師器皿8、アゼ1）(1/3)

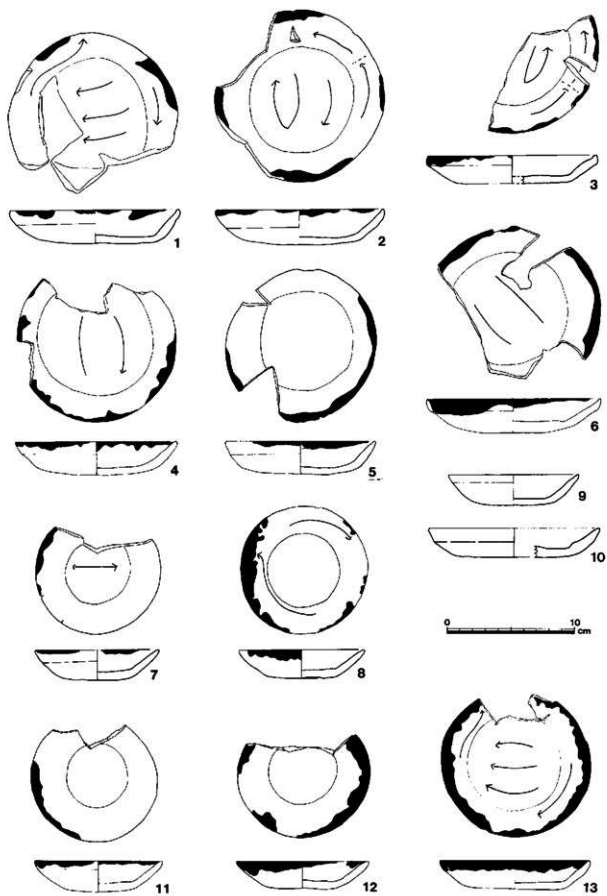


Fig.132 石川門調査区盛土3出土土器 (土師器皿9、アゼ1) (1/3)

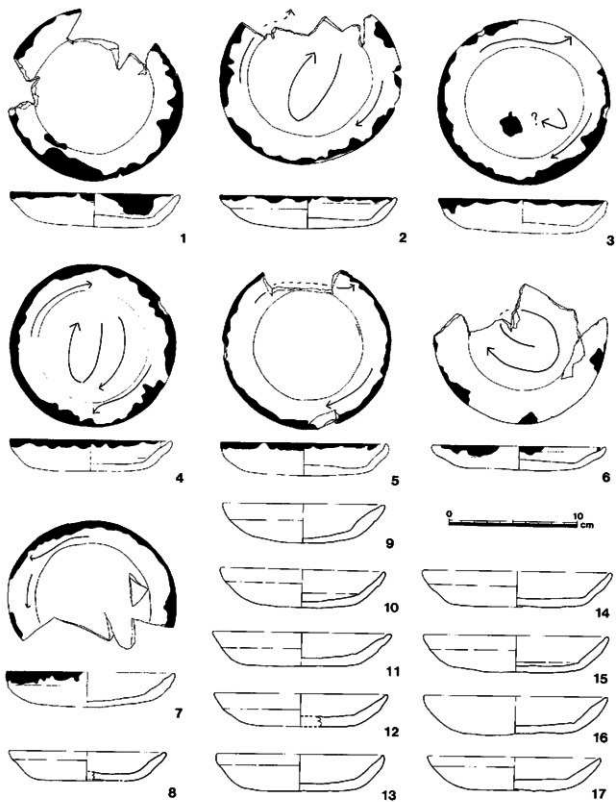


Fig. 133 石川門調査区盛土3出土土器（土師器皿10、アゼ1・2）(1/3)

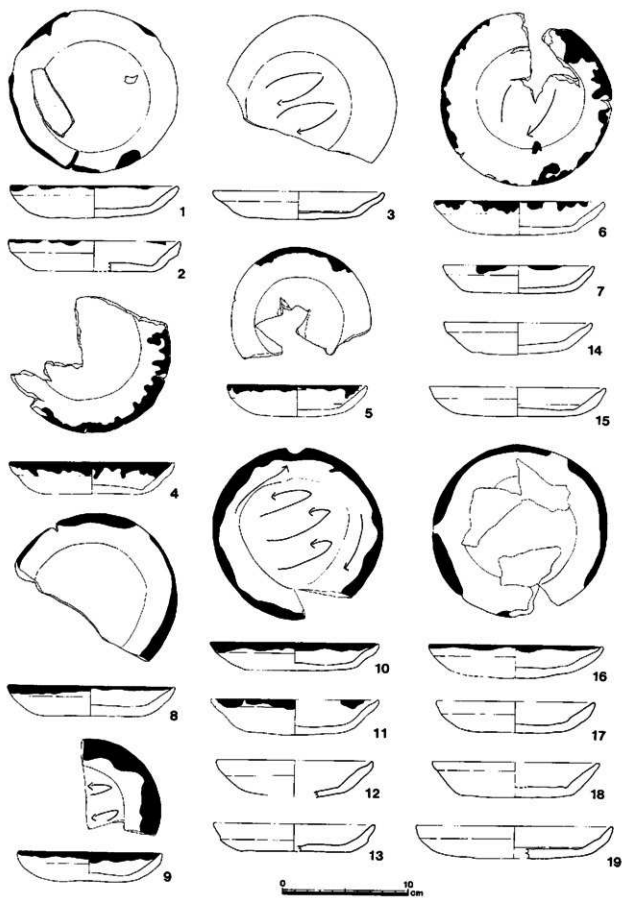


Fig. 134 石川門調査区盛土3出土土器（土師器皿11、石垣外等）（1/3）

軒丸瓦 (Fig.135~140)

全て巴文ばかりである。瓦当面には離型材としての砂が見られるが、雲母が認められる個体も少数みられる。巴文の分類は、まず右巻かそれとも左巻きかの違いに注目される。ここでは、明確な分類はおこなわないが、そのための基礎作業として、軒丸瓦の各種の属性についてみてみたい。製作技法は同じなので、文様などの比較が主な観察事項になる。瓦当の面径は、それに続く丸瓦の幅の大きさに決まってくるので、城郭の使用部位によって大きさが異なるようなので、まず面径を中心にみる。

面径18cm (Fig.135-1~137-6)

全て巴文が右巻で外区の珠文の数が16個である。巴の巻き方で隣の巴の背中に接してみかけ図線のようにになっているものがある(135-3、6等)。あるいは、背中に極めて近接してあたかも接しているようなものもある(136-8、9等)。また、尾と背中との間が5mm程度の少し離れるものがある(135-5、136-9等)。さらにその距離がさらに離れて1cm前後離れるものもあるが、この場合前三者に比べて尾が短いという特徴がある。

珠文については、おおきいものと小さいものがあるが、これは文様構成というよりも、瓦の范の作りの問題である。頭部の形状については、首が鋭く切れこむものと、丸くなるものがあるが、実際見る印象と拓本とではどうしても一致しないので、あまり分類の視点として有効かどうか見極める必要がある。瓦当面にマークを刻んでいるものがある。135-1~7である。1~3は同じ「十字」のマークだが同范かどうかかわからない。5と6も同じ「十字」の一方が鋸状になったマークである。

面径16cm (Fig.137-7、8)

巴文は右巻で珠文の数は18個と推定される。8の巴の尾部は隣の巴の背中に接しているが、7はそのようなことはない。面径15cmのものと同じ使われ方と思われるが、珠文の数が18個とより多くあるので、別類型と認識できる。

面径15cm (Fig.137-9~139-14)

個体数の最も多い面径であり、金沢城で最もよく使われた瓦である。珠文の数が、16個のもの(137-9~138-9)と14個のもの(138-10~139-14)がある。さらに、珠文数14個の内にも巴が右巻き(9-10~12)と左巻き(139-1~14)があり、左巻きのものの方が数が多い。

珠文数16個の瓦当では、巴同士が接するのは138-1のみで、あとは離れている。これをよく見ると、尾が細いために消えかかっているものが多く(138-5、7等)、近接する位置まで尾が伸びていると考えられる。138-8、9の中心に「十字」のマークがある。

珠文数14個で右巻の巴文の瓦当は3個体のみだがよくにている(138-10~12)。頭部は丸く体部との境(頸部)を明確にしていけない。尾はとなりの背中に接して図線となっており、珠文は大きい。細かく検討していないが、同范の可能性が大きい。

珠文数14個で左巻きの巴文の瓦当のうち、中心に珠文をもつものはよくにている(139-1~8)これらは、巴文は他の巴よりも頭部が小さくて明確な頸部を作らず、全体的にスマートである。そして隣の巴に尾が接する。外区の珠文が大きいものと、小さなものがある。また、10や12は中心に珠文をもたない。中心の珠文もつものよりも全体的に厚い文様となっている。

面径13cm (Fig.140)

珠文の数は16個もあるので、珠文は小さな突起となっているが、しっかり突出している。140-5は中心に珠文をもつようである。全体的にスマートだが、頭部はしっかり作っているものと(1、2、3等)、小さく作っているもの(5、6)とがある。

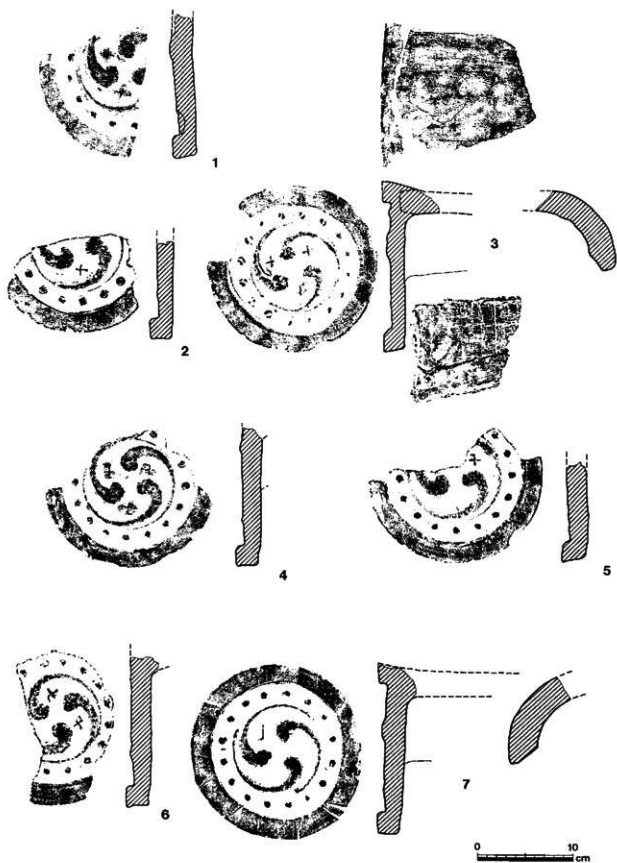


Fig. 135 石川門調査区盛上3出上軒丸瓦(1) (1/4)

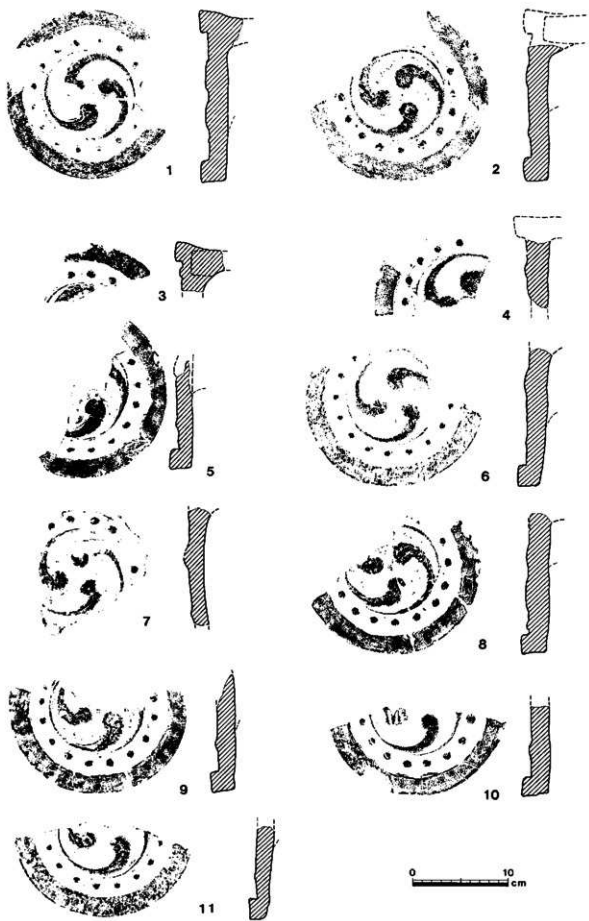


Fig. 136 石川門調査区盛土 3 出土軒丸瓦(2) (1/4)

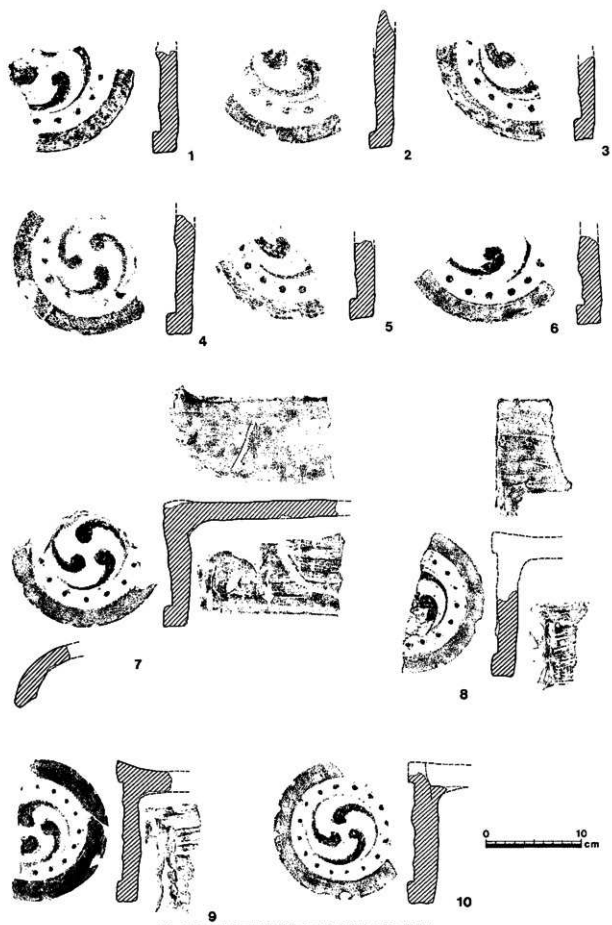


Fig. 137 石川門調査区盛上3出土軒丸瓦(3) (1/4)

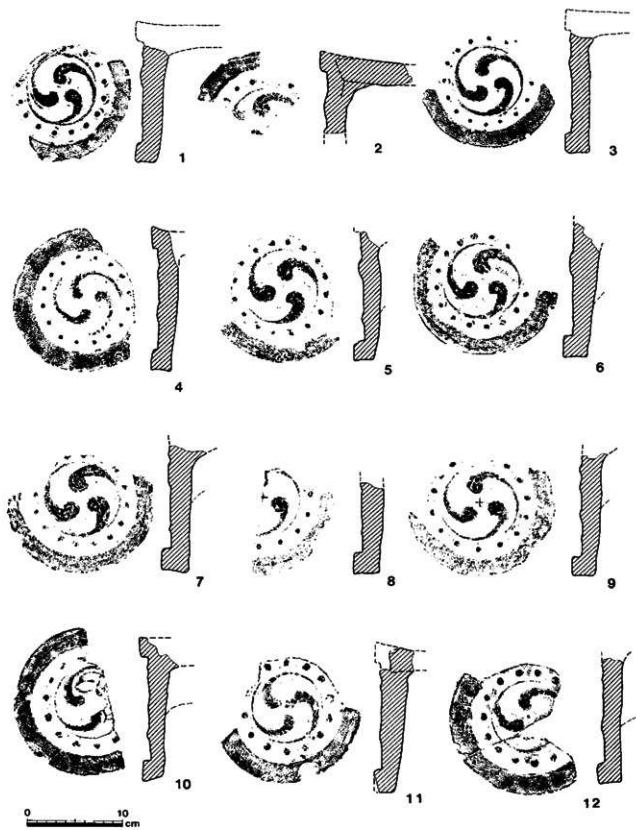


Fig.138 石川門調査区盛土3出土軒丸瓦(4) (1/4)

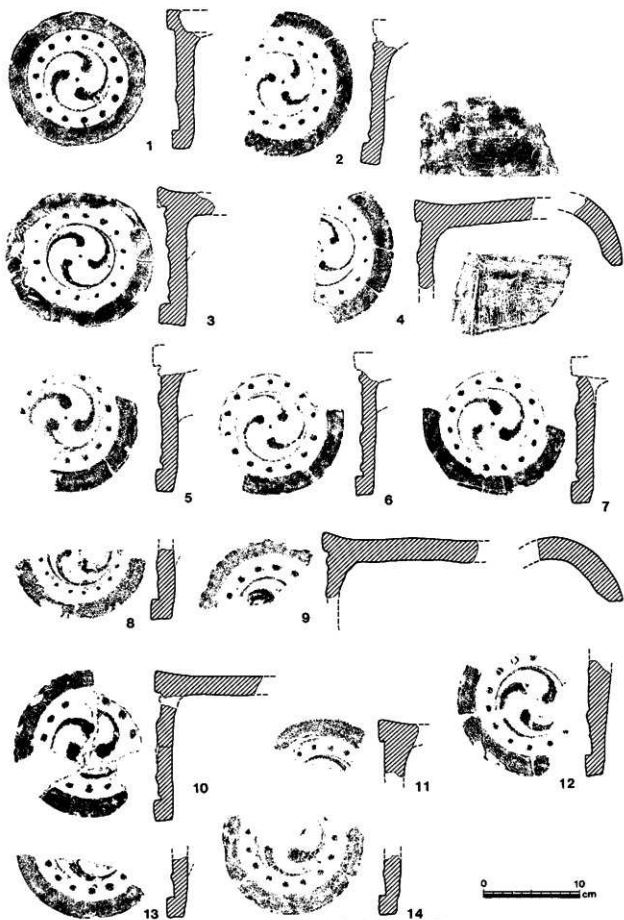


Fig. 139 石川門調査区盛土3出土軒丸瓦(5) (1/4)

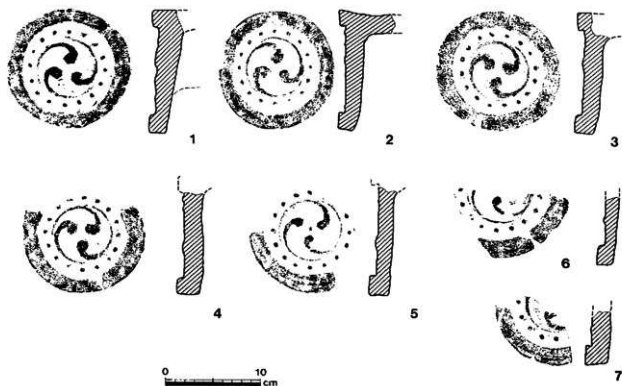


Fig.140 石川門調査区盛土3出土軒丸瓦(6) (1/4)

軒平瓦 (Fig.141~145)

軒平瓦は、全て唐草文に属するものであり、軒丸瓦同様に梅鉢文瓦がない。分類のための属性の観察にする。中心飾りの形態からみる。一つは中心飾りの細長い花卉が3枚下から上に立っているものがある (141-1~143-5)。これを花卉直立型と仮称する。二つは、細長い花卉が3枚さがっているものがある (144-1~9)。これを花卉垂下型と仮称する。三つは、幅広の花卉のものがある (145-1~13)。これを幅広花卉型と仮称する。前2つは唐草のツルが左右に伸びて、第1枝葉、第2枝葉、第3枝葉あるいは飛び枝葉などと言われている。ところが幅広花卉型は、左右にツルが伸びるものの、それにつく葉を大きく表現しているために、かなり趣の異なる唐草となっている。

花卉直立型

最も出土個体数が多い。瓦当表面には彫型材の雲母がみられる。花の下に小さなつるが左右に伸びているものが多い。例えば、141-2や142-2、143-5等である。このつるがないものもある (142-3)。つるの表現が、Fig.141にあるような細長いものや、142-1、2の太くて短いもの、Fig.143のように細くて巻きこむものなどがある。このようなつるの状態はつる本体の表現と密接にからんでおり、中心飾りがなくとも、つると識別するだけでどのような軒丸瓦かある程度推測することができる。

唐草の状態から幾つかの型式に細分できそうで、一つのつるで末端まで続くもの (141-1、2等)と、つるを伸ばしつつ枝葉を連ねるもの (143-3等)、枝葉を一つ一つ並べるもの (142-2)、の3つに区分できよう。142-3もまた、一つのタイプと考えられるが、出土地点がはっきりしないので盛土3資料と同時期性があるか疑問である。

花卉垂下型

花卉直立型に比べて個体数が少なく、小破片が多い。花卉は細長いが、直立型よりも幅広である。垂下する花卉の根元に2つの小さなつる？あるいは葉のつくもの (90-1、3、4等)とそれのないもの大きく二つに分かれる。しかし、そのつるは花卉直立型と違って小さなもので目立つものではない。しかも、左右に伸びるつるが、花卉直立型では文様構成に大きな影響を与えているのに

対し、花卉垂下型はほとんどそのようなことはないという違いがある。花卉垂下型のつるはどれも同じような表現で、1本のつるが最後まで続いて、途中で葉が分岐する。8、13のように、二股のものがある。また先端が異常につるが分かれるものが、どの中心飾りにつくか不明である。花卉垂下型の唐草モチーフが、花卉直立型と異なっているものと考えられる。

幅広花卉型

ほとんど例をみない金沢城特有の文様であり、これまでの大学構内の発掘調査でも黒門横北崖の調査によって、僅かに出土しており¹¹、全体からすればほとんど出土していないものである。中心の花弁は輪郭のみの表現で、その表現が密なもの（91-13、4）と粗いもの（5、6）に分けられる。花卉の表現が細かいものは、つるや葉の表現も繊細で、表現の粗いものはつるの表現も大雑把である。花卉の表現の違いは、葉の表現の違いにも対応する。花卉の密な表現のタイプの葉の表現は、斜めに影りこむ半肉影りのようになっているが、粗い表現のものは、全て線による平板な表現であるという違いがある。

145-10-13はつるの部分であるが、中心飾りの描写がわかるものの、つるの表現と異なるので、あと最低4タイプの中心飾りがあることになる。黒門横北崖出土のものは、145-12に類似する。石川門前土橋盛土で一定量出土しているので、この付近で使われた瓦と考えられるが、これより新しい層位の瓦にはみられないので、空間的な使用の限定の可能性とともに、时期的に限定できる可能性もある。

丸瓦 (Fig. 146~155, 173)

丸瓦の製作技法は全て同じである。つまり、コピキB手法によって切り取られた粘土板に、玉縁を一端の下に接合し、凸型となった丸瓦製作台の上のせて成形する。凸型製形台の上に、一般的には、型から離れやすくするために布を被せており、布の圧痕が残っている。単純な布だけでなく、糸の刺し子が施されるものもある。147-3は格子に刺し子され、148-1などは2cm間隔の横縞状である。あるいは部分的に一面みられるものも若干ある（153-2）。この刺し子は、布の強度を強くするためのものである。刺し子をするものとしないものの比率は、統計をとっていないのははっきりしないが、折半する程度であろう。太い紐の痕跡があるが、これも布と同じ離型しやすくするためのものであろう。

なお、成形にタタキを使っているようである。盛土3資料ではないが、流土から出土した丸瓦の外面にタタキ板の痕跡を確認した。格子目印きで、木目が確認される。瓦の中に水が浸透するのを防ぐために、外面調整が徹底的に施されているのでタタキの痕跡を確認できた意義は大きい。凸型製形台上で外面調整と、側面調整が施されている。外面調整はへらのようなもので長軸方向になでつけられており、真中がやや凹むような状態になっている。これは工人の手の自然な動きによるものである。長側縁は1回のみのカットである。

製形台から離れた後、小口と内面をカットすることによって仕上げている。カットは、最低必要回数のみおこなっており、通常は小口、内面、玉縁側面など、全て1回のカット調整である。稀に内面から長側縁にかけて複数回の調整もみられるが、失敗したためであり、調整の丁寧さということではない。

軒丸瓦の面径は、接続される丸瓦の大きさに規定されるので、丸瓦の幅についてみてみたい。丸瓦の幅は、17cmのもの（146-1~148-2）、15.5cm（148-3~151-2）、14cm（153-1~4）、あとは12~13cmである。量的には、15.5cmのものが多数を占め、面径15~16cmの軒丸瓦に対応し、17cmのものは面径18cmの瓦当に対応する。幅17cmの丸瓦で重みのあるものは少ないのに対し、小さくなるにしたがって重が生じていく割合が大きい。151-2などはこで屋根が掛けるのかと思うくらいに全体にひずんでいる。盛土3資料は、平瓦でもそうだが、器壁が薄いほど歪んでいるという共通した特徴があり、実際に歪かっていたものが問題となろう。

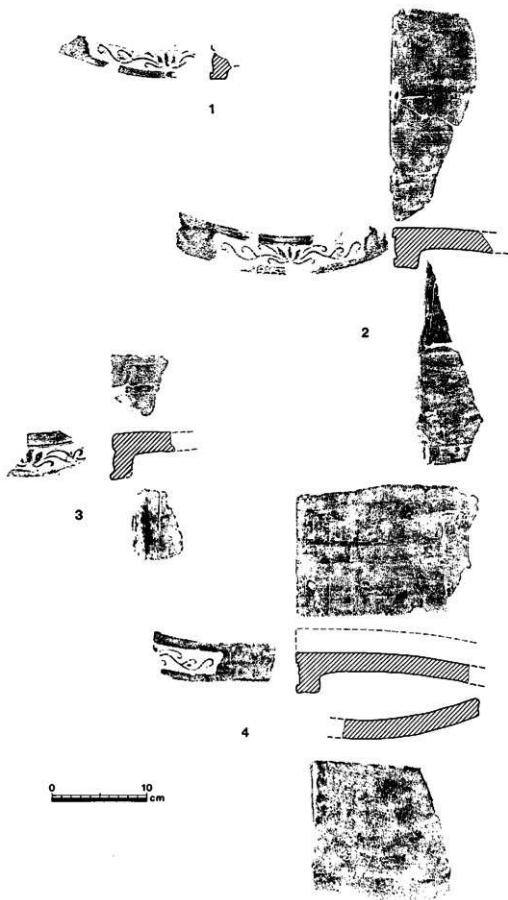


Fig. 141 石川門調査区盛土3出土軒平瓦(1) (1/4)



Fig.142 石川門調査区盛土3出土軒平瓦(2) (1/4)

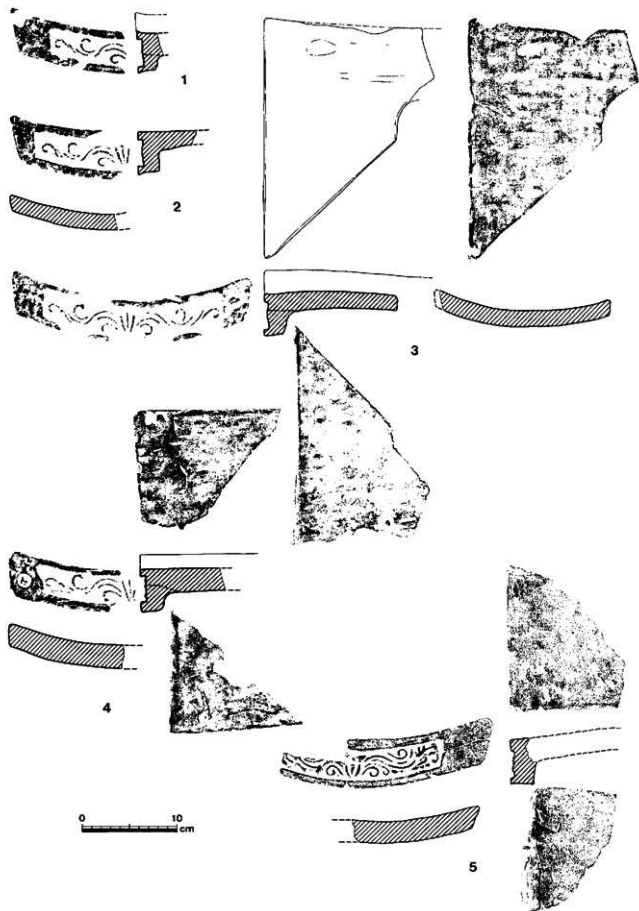


Fig.143 石川門調査区盛土3出土軒平瓦(3) (1/4)

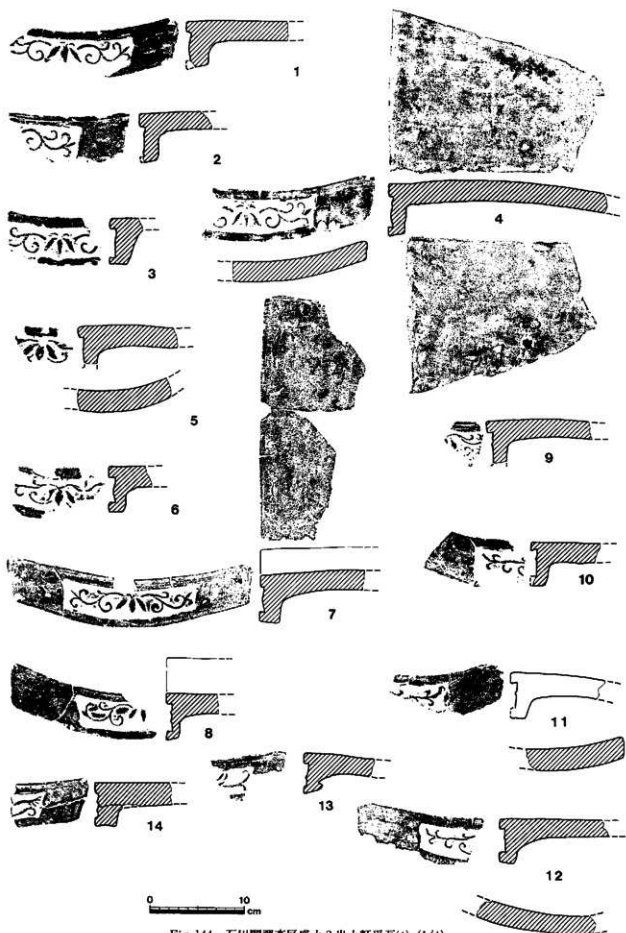


Fig.144 石川門調査区盛土3出土軒平瓦(4) (1/4)

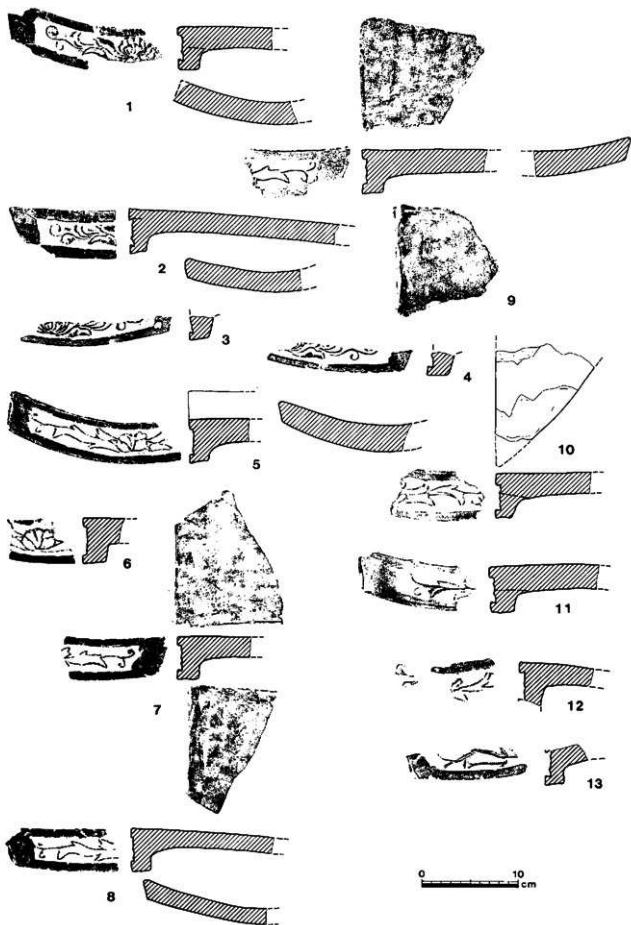


Fig.145 石川門調査区盛土3出土軒平瓦(5) (1/4)

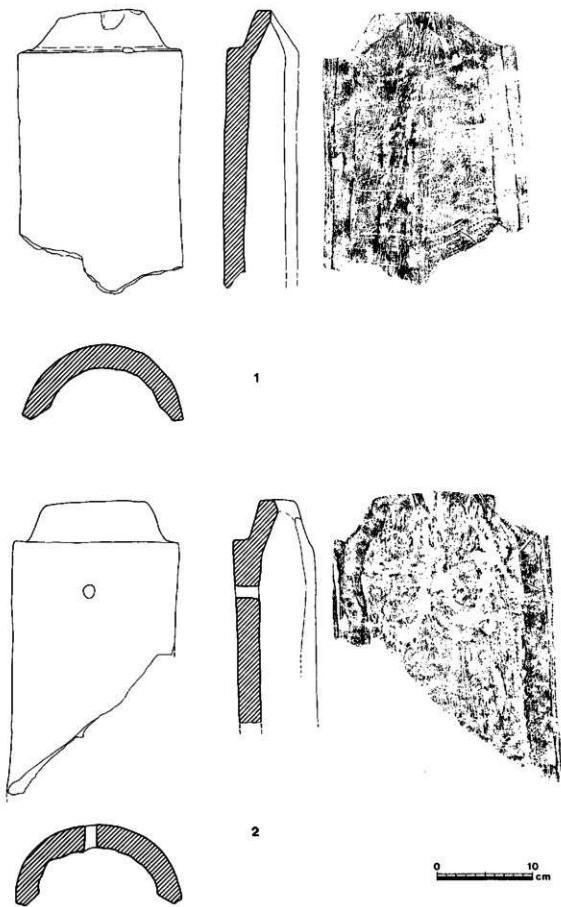


Fig. 146 石川門調査区盛土3出土丸瓦(1) (1/4)

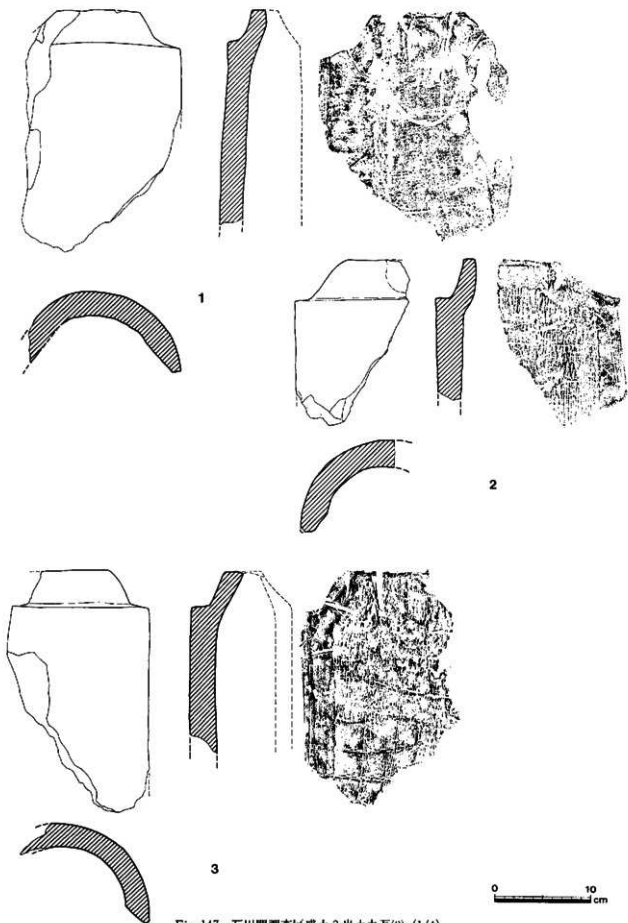


Fig. 147 石川門調査区盛土3出土丸瓦(2) (1/4)

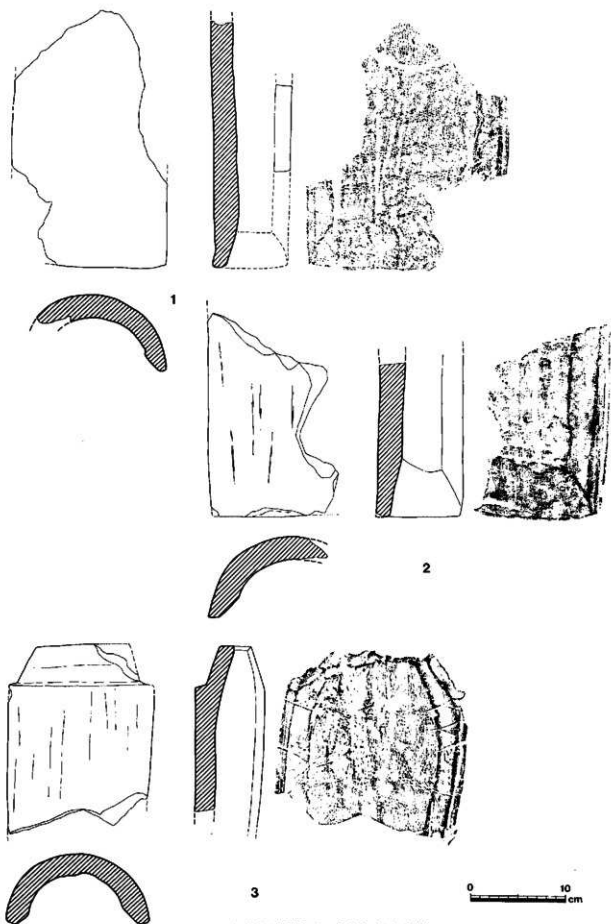


Fig. 148 石川門調査区盛土3出土丸瓦(3) (1/4)

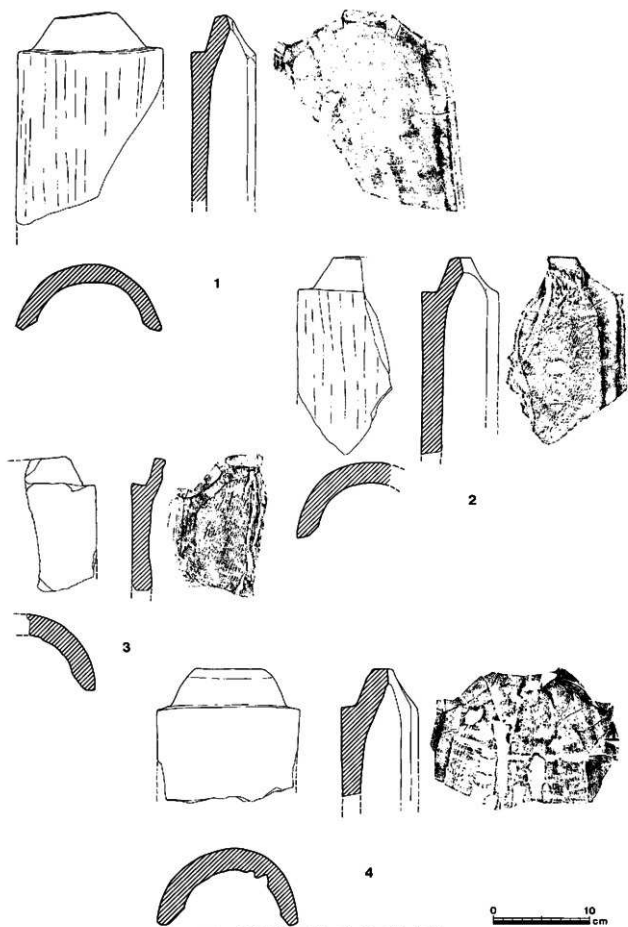


Fig. 149 石川門調査区盛土3出土丸瓦(4) (1/4)

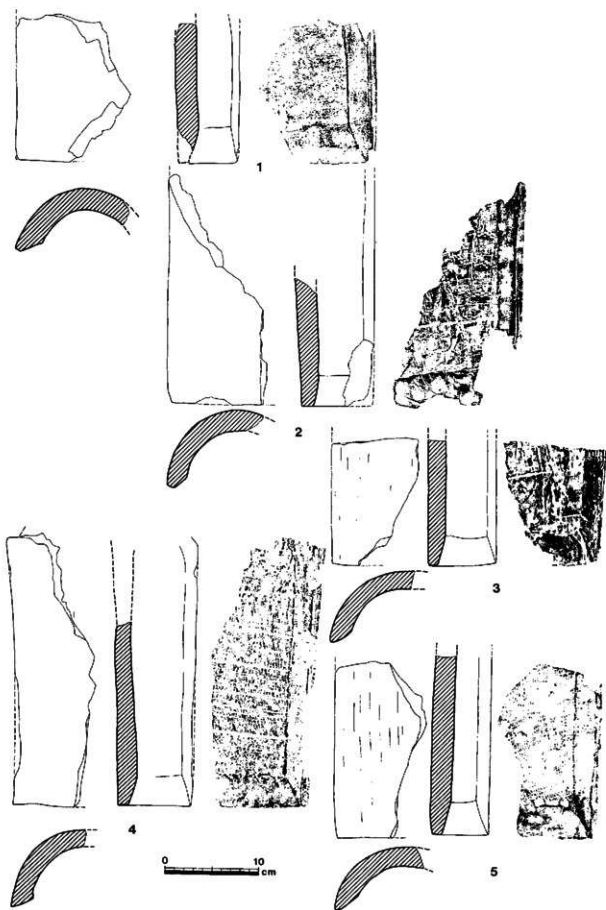


Fig. 150 石川門調査区盛土3出土丸瓦(5) (1/4)

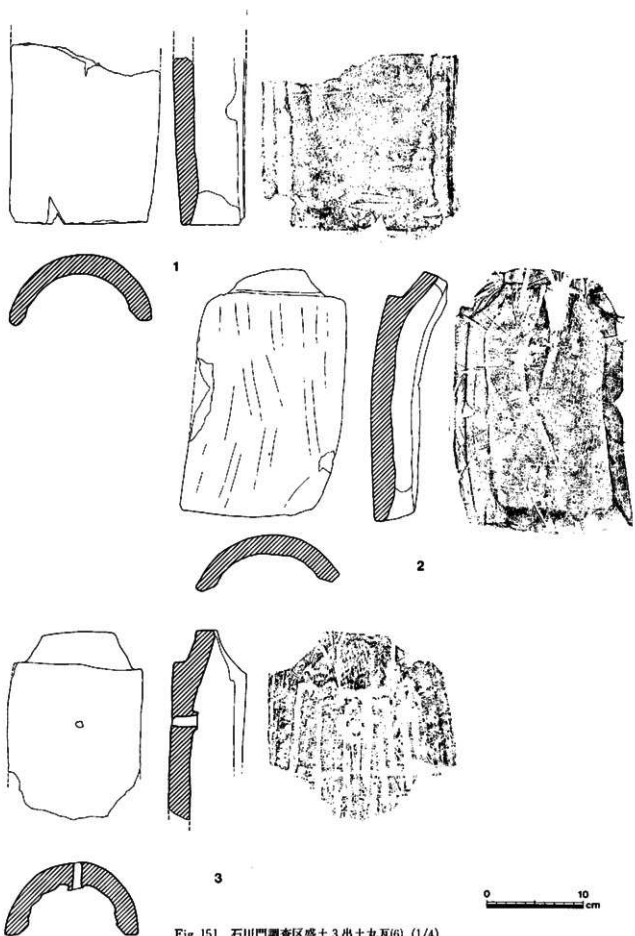


Fig. 151 石川門調査区盛土3出土丸瓦(6) (1/4)

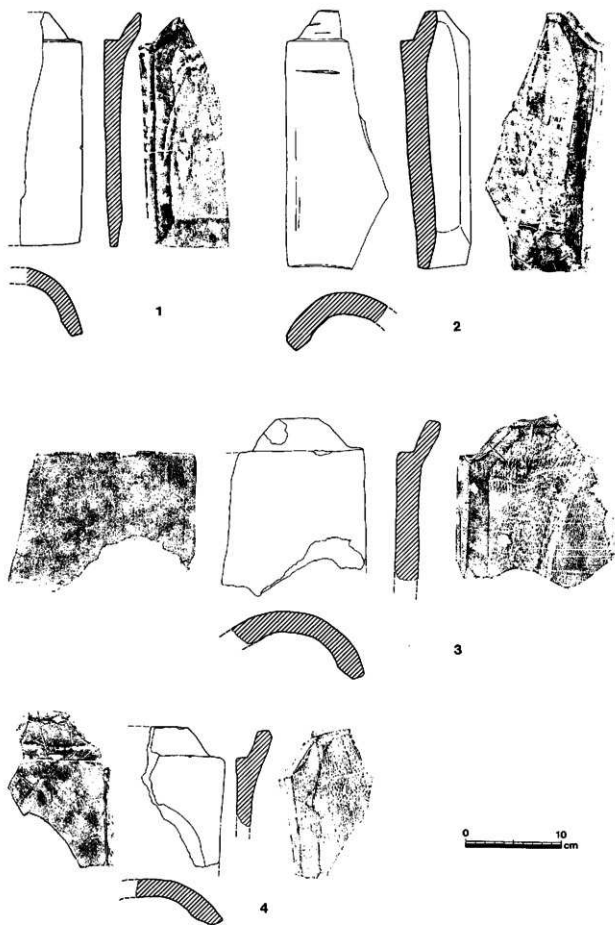


Fig. 152 石川門調査区盛土3出土丸瓦(7) (1/4)

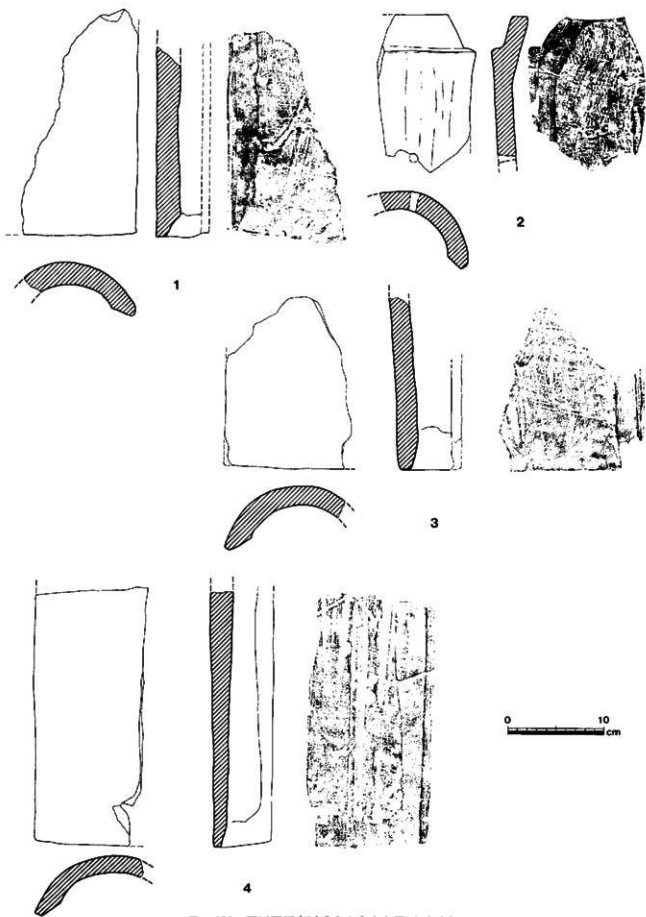
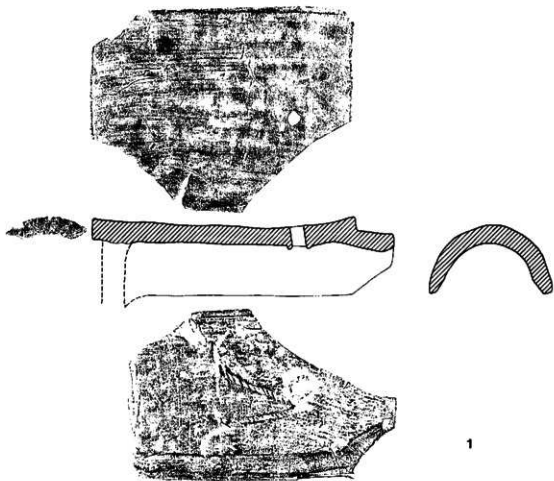
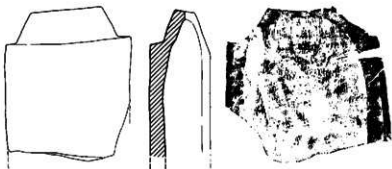


Fig. 153 石川門調査区盛上3出上丸瓦(8) (1/4)



1



2



3



Fig. 154 石川門調査区盛土3出土丸瓦(9) (1/4)

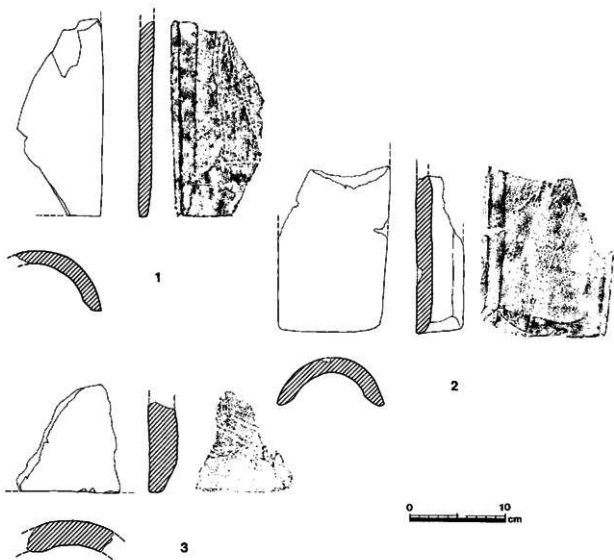


Fig.155 石川門調査区盛土3出土丸瓦00 (1/4)

平瓦 (Fig.156-163, 174)

平瓦も全て同じ作り方である。コビキによって板状になった粘土を平瓦製形台にのせている。製形台には凸型と凹型の二種があるが、本資料は全て凹型で作られている。凹型上から瓦を離れやすくするために砂を敷いて離型材としている。凹型におくことによって、上面が瓦の表面になる。表面の調整は、板状工具のようなもので基本的に軸に横方向に施し、周縁のみ周囲に沿ってT.具を動かしている。その後ナデを施すが、ハケと同じ方向の動きをしている。この段階で、周縁をきれいに裁断して表面と周縁との隅を面取りしている。その後瓦を葺く上下方向の端面を手でもって台から離している。この時、かなり歪みを生じており、ひどい場合には持ち上げる時の指がめり込んでいるものがある(161-1等)。どの個体も持ち上げの指の痕跡が、程度の差はあるが確認できる。裏面は未調整で、離れ砂を残したままである。

平瓦の大きさはほとんど同じである。左右28cm幅が最も多く、長さについてもほぼ同じであろう。つまり、丸瓦の幅の違いがセットである平瓦の幅のバリエーションに反映されていない。平瓦の厚みに注目すると、最も厚いのが2.5cmで、最も薄いのが1.5cmである。最も多いのが、1.8cm前後の厚みの平瓦である。最も薄い1.5cmと2cm前後の厚みの瓦と比較すると全く違うものであるが、これらの厚みの違いがどのような機能差となっているかわからない。平瓦の厚みを統計にすると、幾つかのピークがあると予測され、それが本来の厚みとなろうが、一つの個体でも中央が薄く周縁

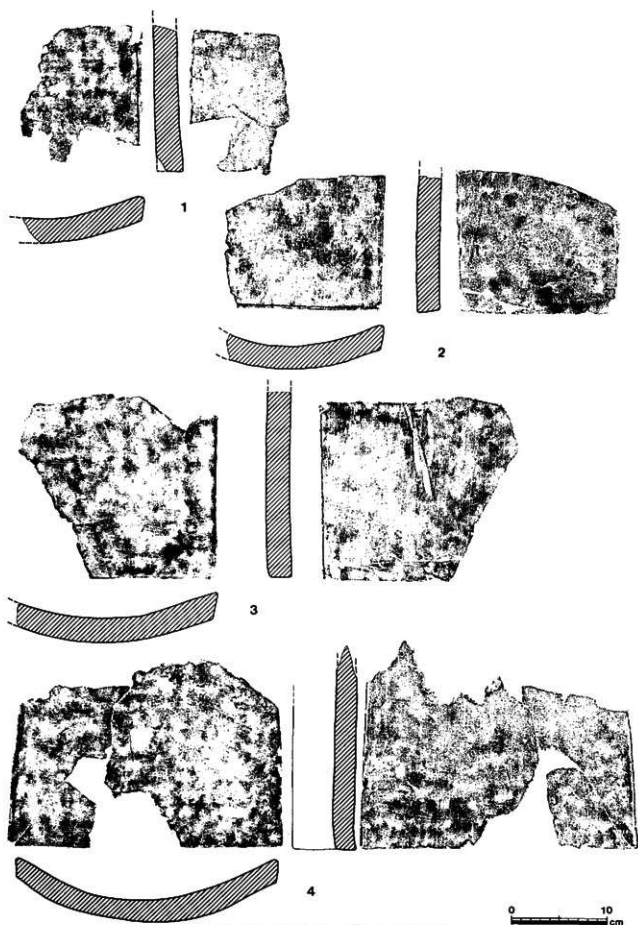


Fig. 156 石川門調査区盛土3出土平瓦(1) (1/4)

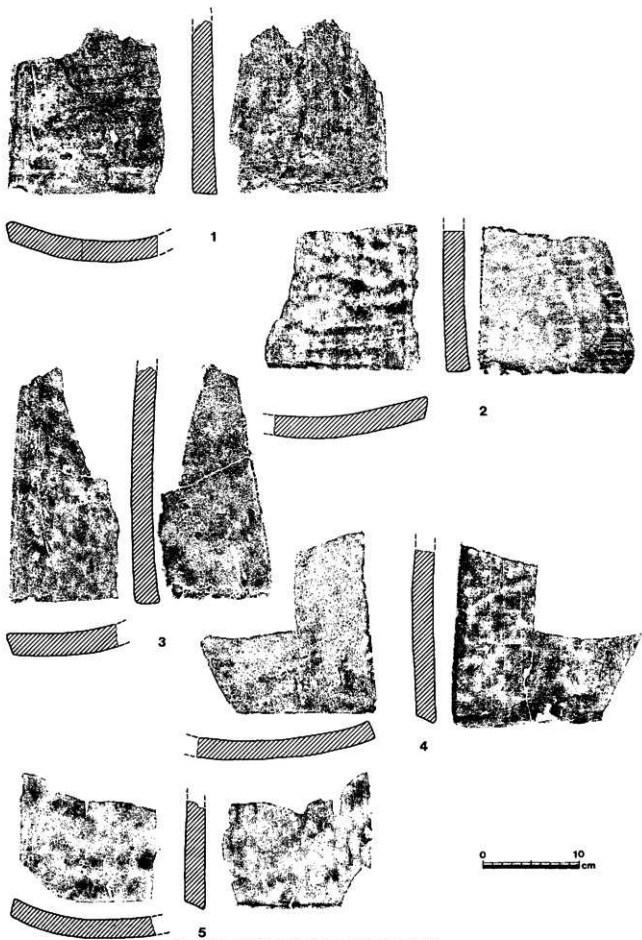


Fig. 157 石川門調査区盛上3出上平瓦(2) (1/4)

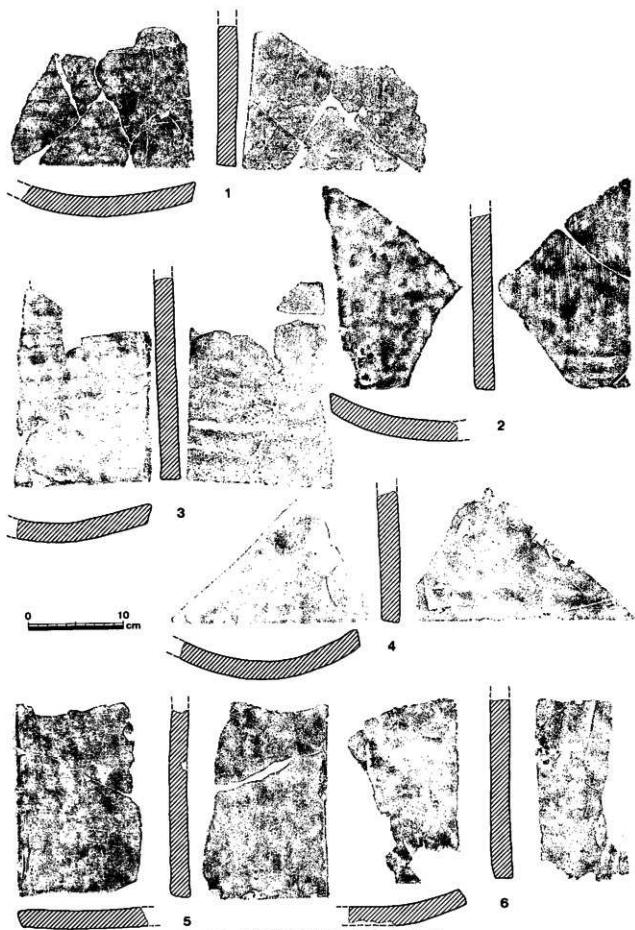


Fig. 158 石川門調査区盛土3出土平瓦(3) (1/4)

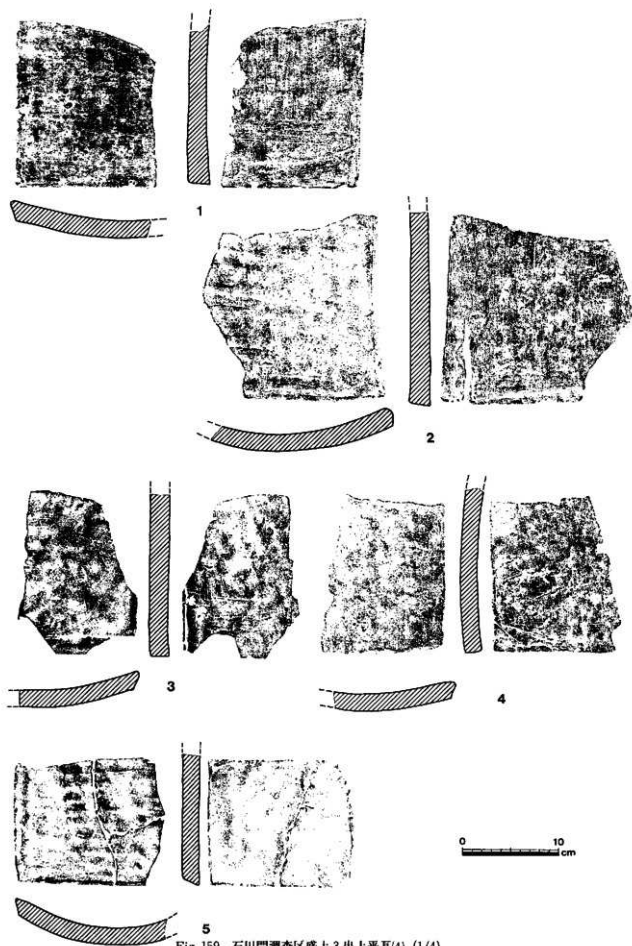


Fig. 159 石川門調査区盛上3出上平瓦(4) (1/4)

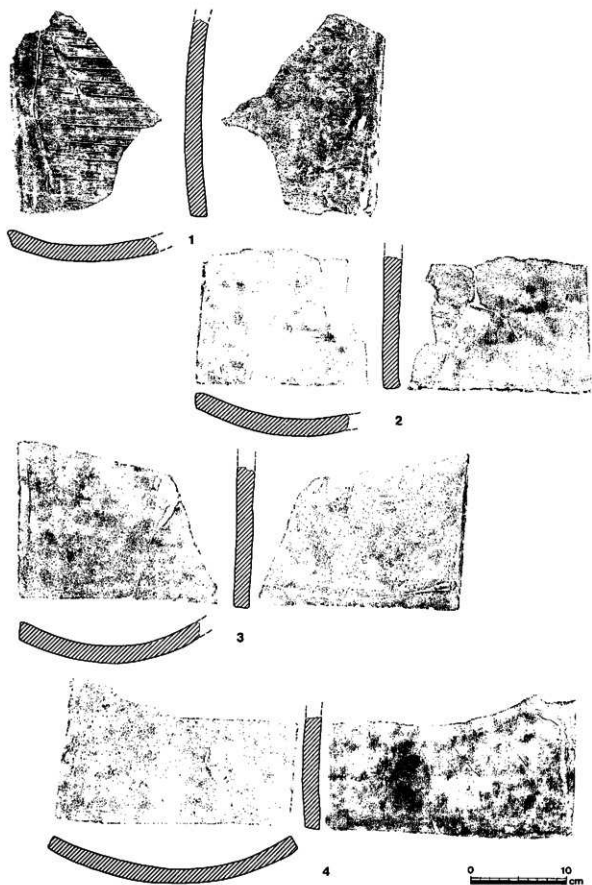


Fig. 160 石川門調査区盛土3出土平瓦(5) (1/4)

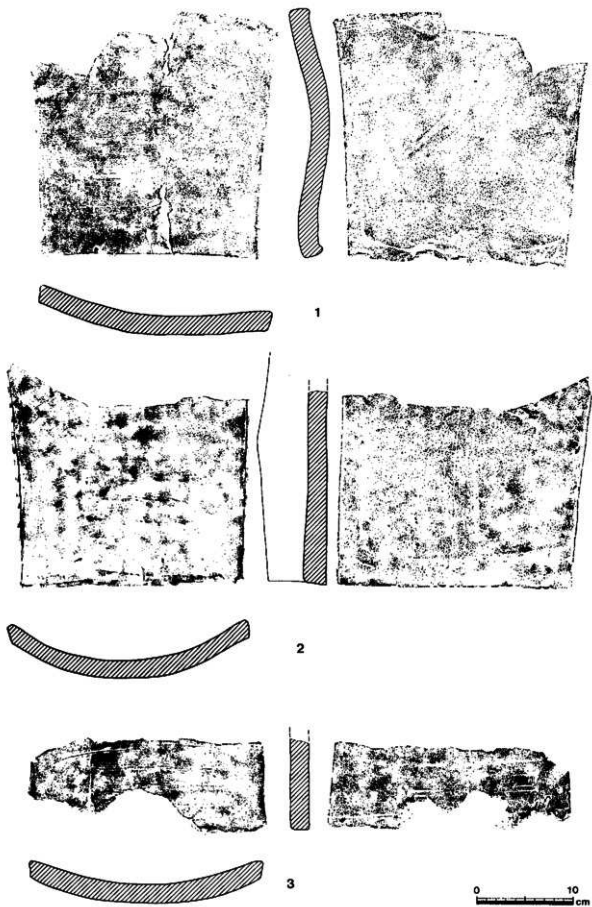


Fig. 161 石川門調査区盛土3出土平瓦(6) (1/4)

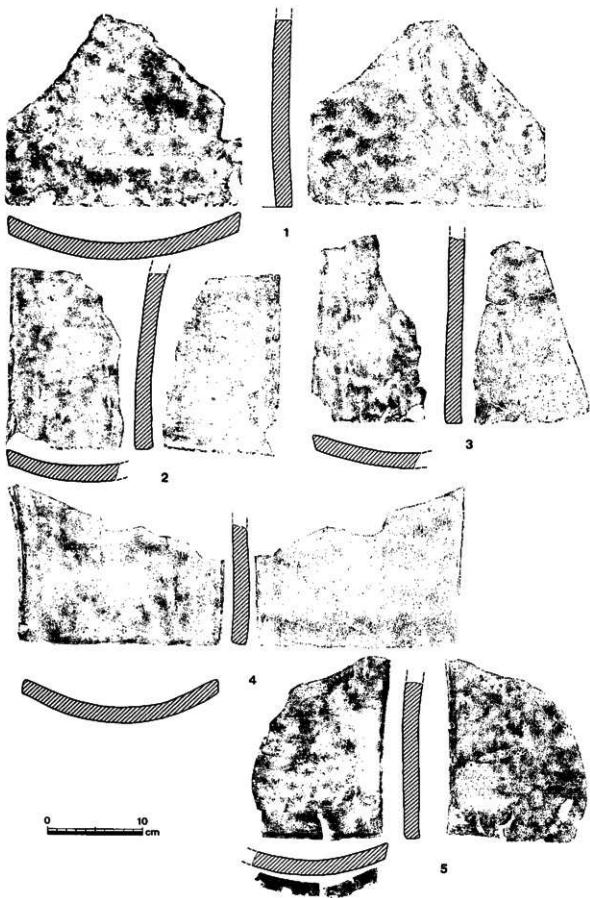


Fig. 162 石川門調査区盛土3出土平瓦(7) (1/4)

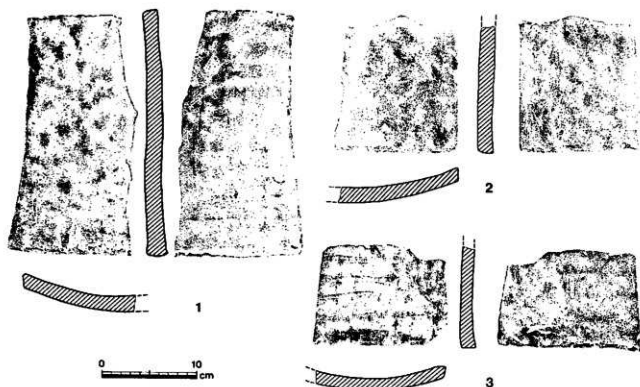


Fig. 163 石川門調査区盛土3出土平瓦(8) (1/4)

が厚くなる傾向にあり、計測の仕方にも問題がある。したがって、本報告では問題点を指摘するに留めたい。

特殊瓦 (Fig. 164~167)

164-1、2は玉縁のない丸瓦形態で、玉縁相当部分が斜めに側縁を切って作っている。製作技法は、丸瓦と同じである。164-3~165-1は、輪違瓦のように短くて丸瓦のような製作技法で作られているが、輪違瓦と異なって側縁が斜めになって平面台形になっている。

165-2~4は、隅切りの軒瓦である。軒平瓦のように面を作っているが、無文である。軒の面は瓦の軸に斜交するが、2のように大きく斜交するもの、4のようにあまり斜めにならないものがある。3は長さの短い資料である。これらを軒の瓦と考えたが、その面幅は小さく3cm程しかない。特殊な部位の軒先におかれた瓦であろう。166-1~3は焼成前に平瓦を斜めに切って三角形にした瓦である。その長辺はほぼ中央が窪みになっており隅切り瓦であろう。166-4~167-7は輪違瓦である。幅はほぼ一定しているが、長さが長いもので10cmを超え、短いもので6cmとばらつきがある。製作技法は丸瓦と同じである。

鬼瓦 (Fig. 168)

盛土3以外で出土した資料も一括している。盛土3資料は1と6のみである。1は桐文の三枚の葉のうちの中心の葉の部分である。家紋を表現したものである。型で作ったものである。6は鬼瓦の榫であろうか。2~5は表土系の土層からの出土である。3、4では剥落の痕跡がある。2~6は、粘土板を型に押しあててはめこみながら作っている。

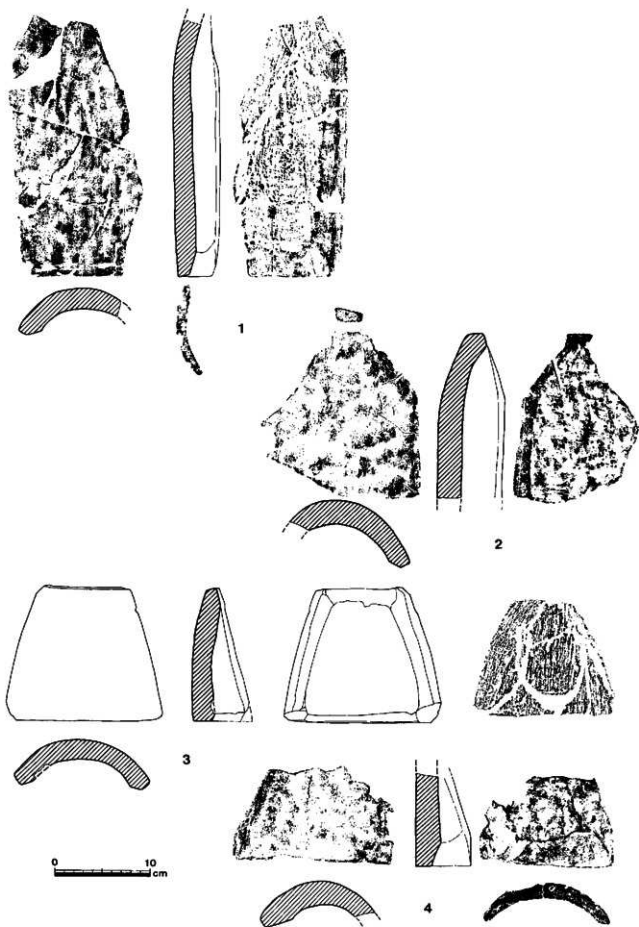


Fig. 164 石川門調査区盛土3出土特殊瓦(1) (1/4)

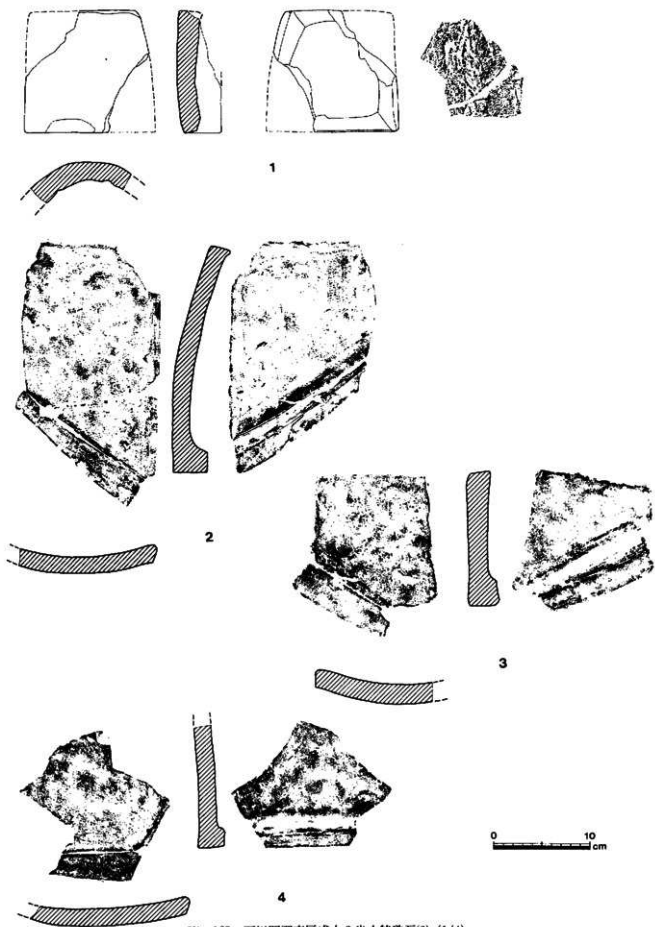


Fig.165 石川門調査区盛土3出土特殊瓦(2) (1/4)

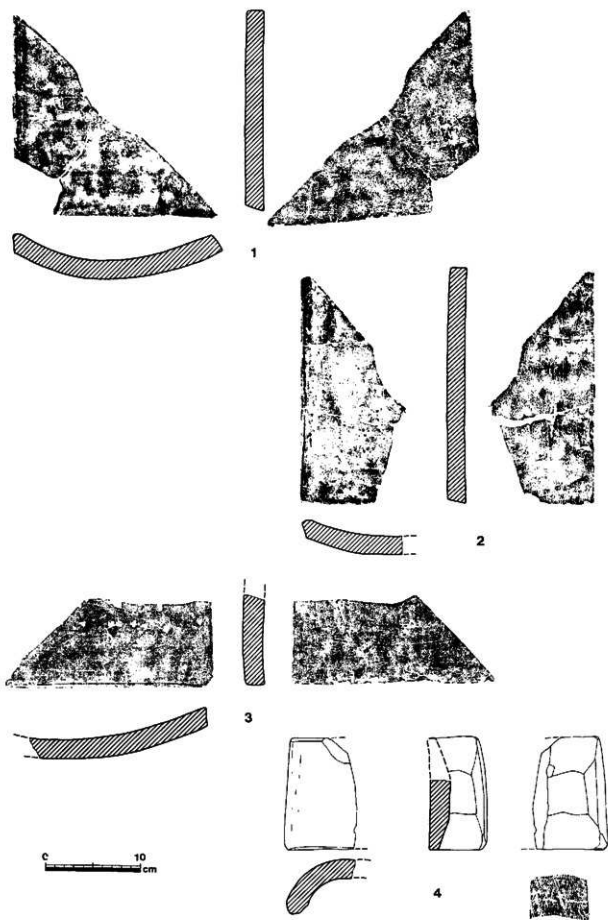


Fig. 166 石川門調査区盛土3出土特殊瓦(3) (1/4)

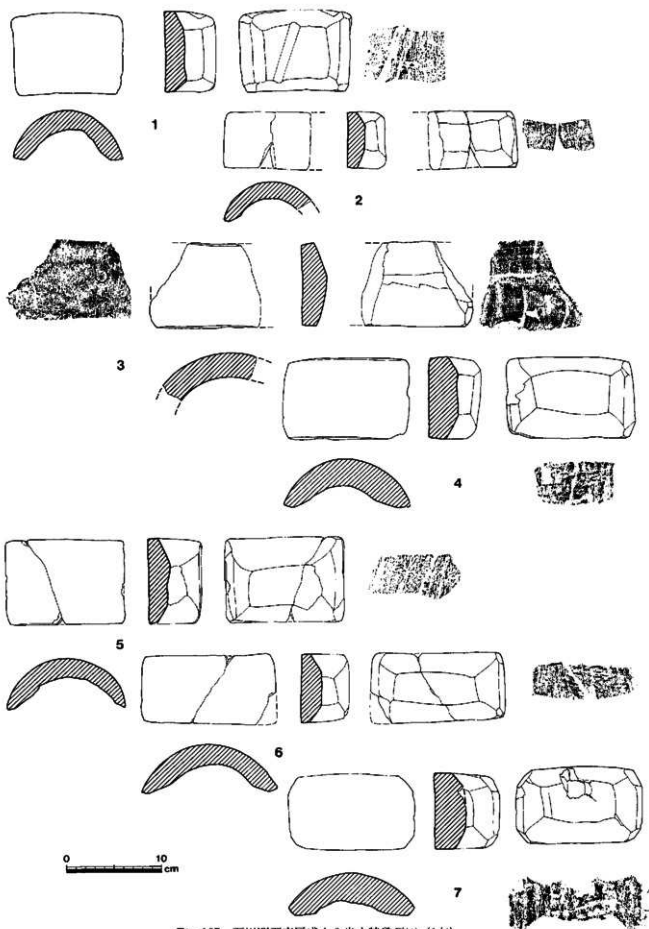


Fig. 167 石川門調査区盛土3出土特殊瓦(4) (1/4)

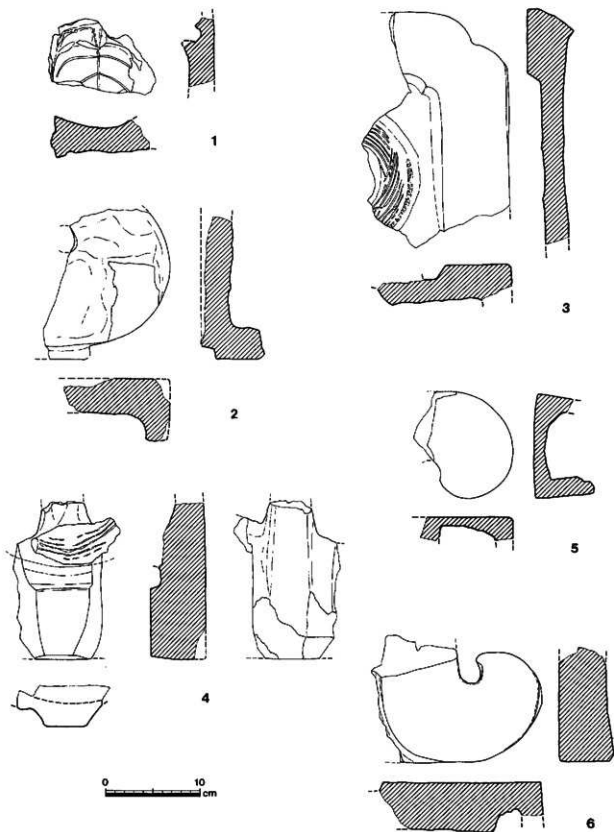


Fig. 168 石川門調査区出土鬼瓦 (1/4)

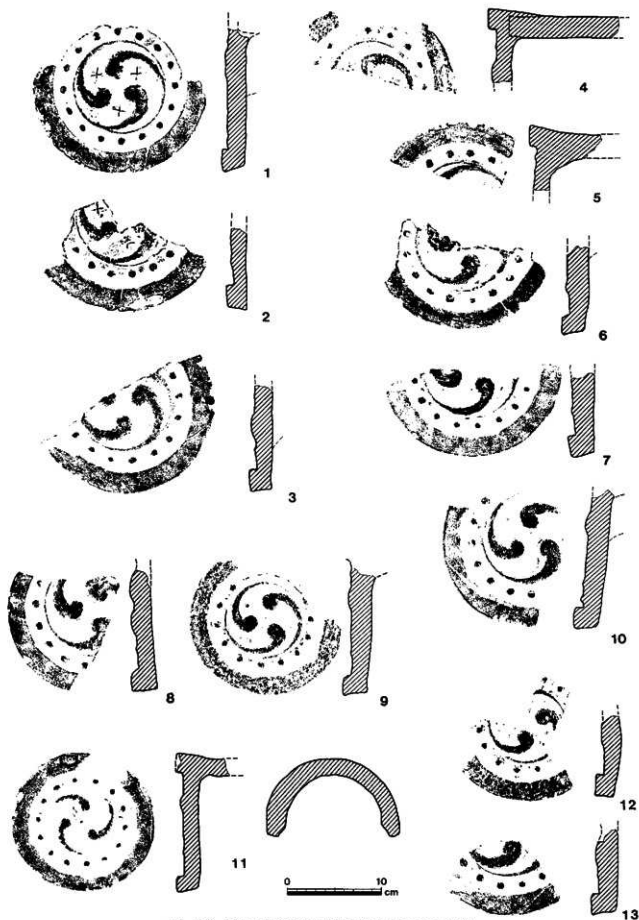


Fig. 169 石川門調査区盛土3石垣外出土軒丸瓦 (1/4)

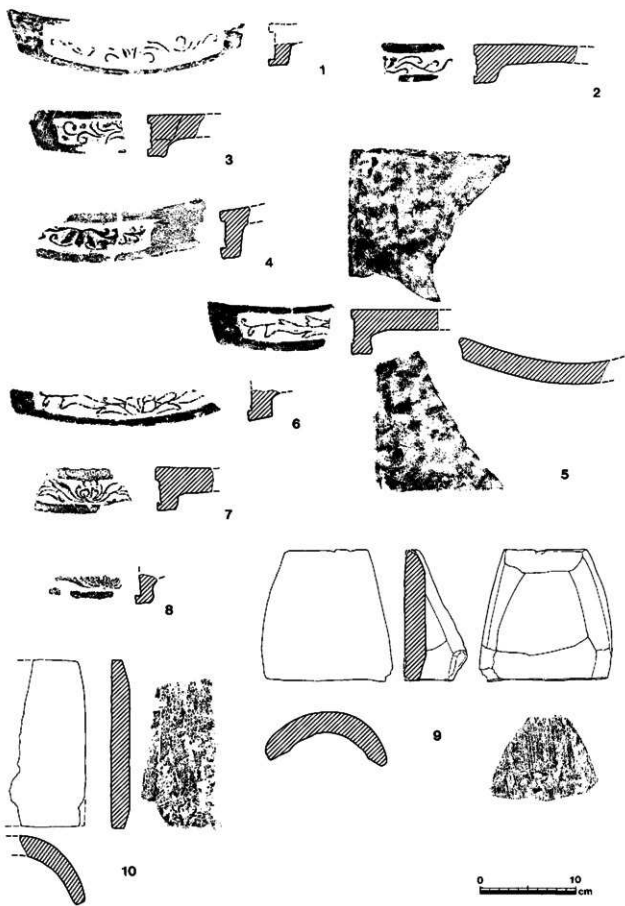


Fig. 170 石川門調査区盛土3石垣外出土軒平瓦・特殊瓦(1) (1/4)

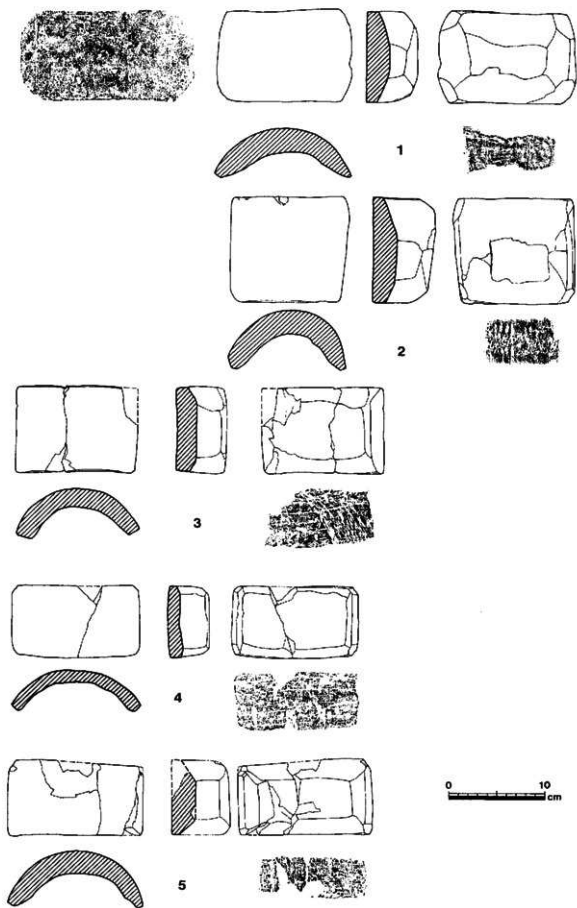


Fig. 171 石川門調査区盛土3石垣外出土特殊瓦(2) (1/4)

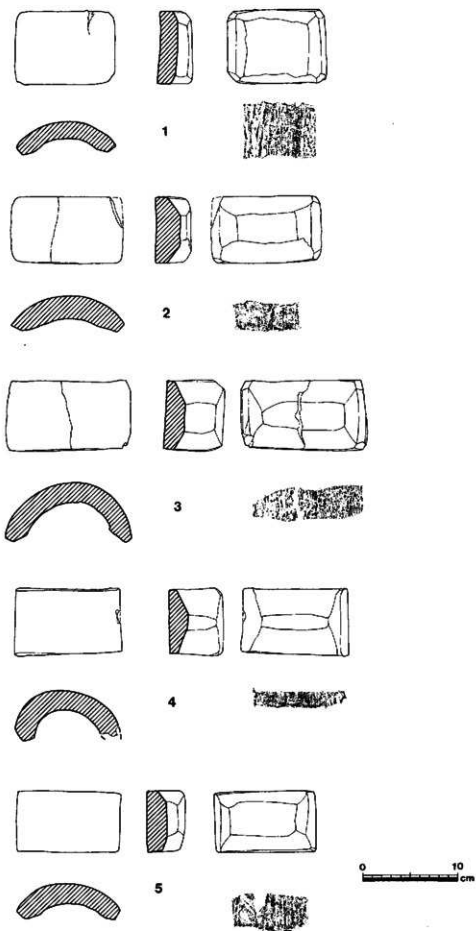


Fig. 172 石川門調査区盛土3石垣外出土特殊瓦(3) (1/4)

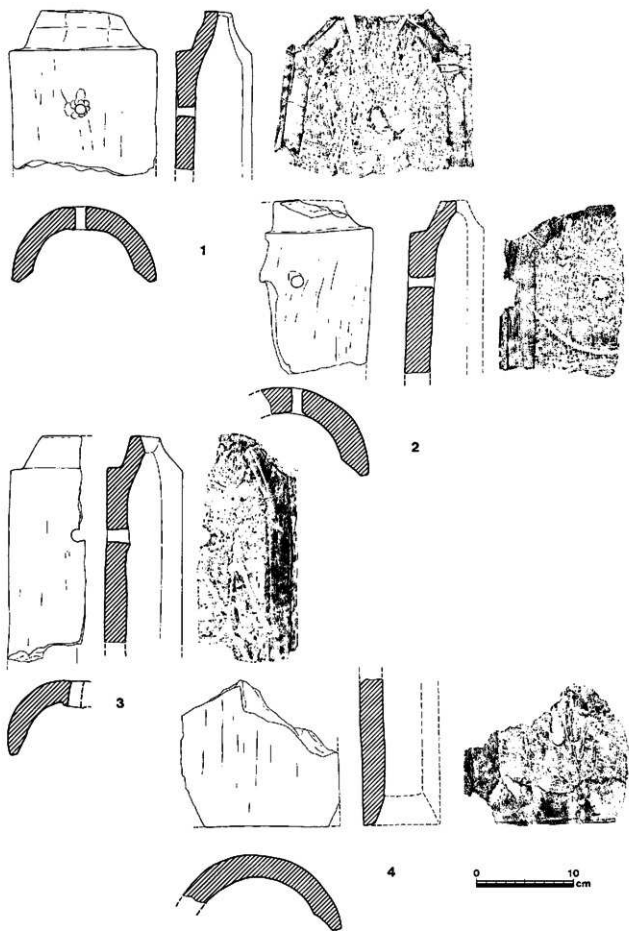


Fig. 173 石川門調査区盛土3石垣外出土丸瓦 (1/4)

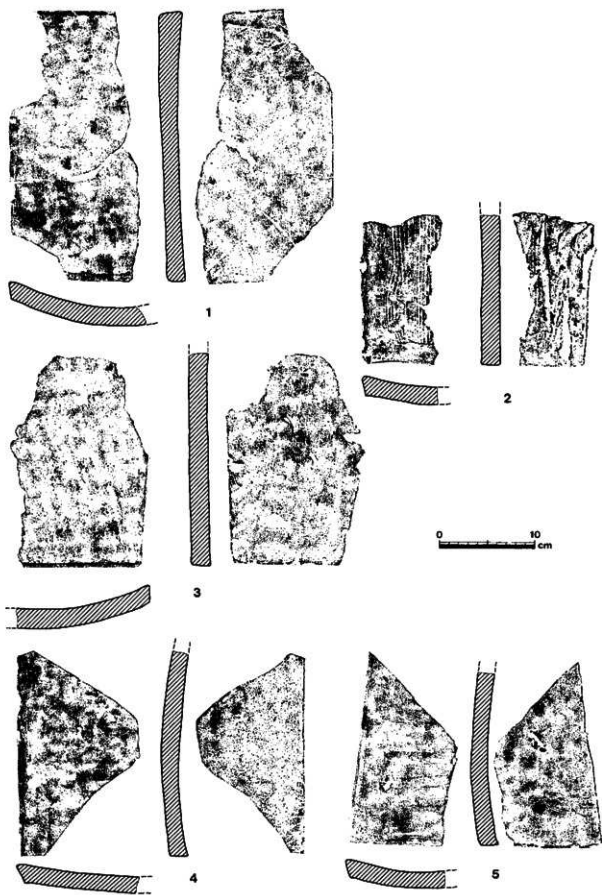


Fig. 174 石川門調査区盛土3石垣外出土平瓦 (1/4)

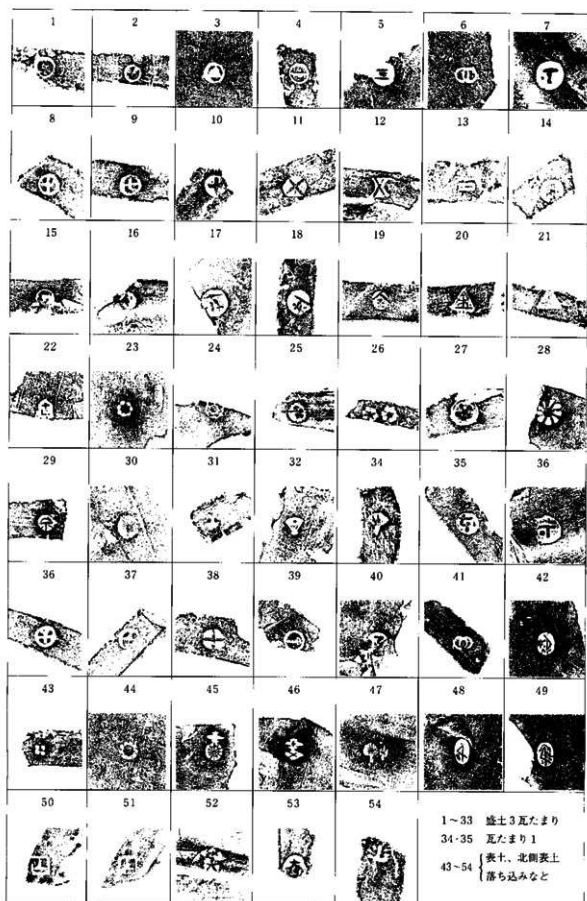


Fig. 175 石川門調査区出土瓦刻印集成

第5節 盛土4

a) 盛土の状況

盛土4は、盛土1と盛土3の下層にある。盛土2～4は一連の土橋構築の盛土と考えられ、それぞれの盛土の違いを構築の工程差と捉えているのは、何回も述べているところである。土橋通路下部分で盛土高3.6mをはかる。なお、盛土4の中にもいくつかの工程が存在するものの、土質がよくていことから同じ盛土4と認識した。また、盛土3最下部の土は、概ね盛土4のA断面の標高36m付近の土に類似することから、同じ盛土と判断した。本節では、石川門調査区壁面で観察した土層をA断面、アゼ1で観察した土層をB断面とする。

A断面の盛土状況

盛土の盛り上げと石垣の構築が同時並行でおこなわれている。石垣は盛土築成と同時に組み上げている。石垣際を擋鉢状にし、そこに裏込め石をいれている。このような盛土構築方法である。

まず第1段階として、灰色系や灰褐色系の土に礫や砂が混ざると高さが110cmまで盛り上げられる。これらの土は、下ほど厚く上ほど薄い層となっており水平に盛り上げられている。しかし、石垣際は擋鉢状にするために灰褐色砂礫土を斜めに積んでいる。これは、必要な土饅頭の高さを斜めに積んでおり、根石掘えつければ、根固めに同じ土を用いている。この時の裏込め範囲は非常に狭くて幅20cm程度であり、根石設置の目的である。

次に第2段階として、最大約1.3mが盛り上げられている。これは、第1段階と違って石垣側に頂がくるような山形の盛土である。石垣構築を優先するために、そちらを主に盛り上げ、石垣作業終了後、もう片側の斜面を頂部と水平になるほどに盛り上げて、第2段階が完了する。この段階の石垣は、根石から3段まで積まれる。第1段階と同じように盛土の単位は厚く、しかも水平に積み上げることをあまり意識していないような乱雑な積み方である。灰黄色砂礫土や灰色系の砂質土、粘質土と、比較的精良な土を用いている。そのためか、石垣裏込めの範囲は広く120cmの広さがある。次の山形盛土の斜面を埋める土は、礫を主体とする土を水平に積み上げている。最後には、土橋中央が最も低くなるように斜面をもって積まれている。

第2段階までの盛土の単位は粗く、石垣構築のための盛り上げが主たる目的になっている。そのため、よく締るような砂礫土やキメの粗い砂質土を中心に使っている。土が均一でなくて黄色や白色のブロックを含んだり礫がはいるのは、意識的に混和しているものである。それによって盛土としてよく締る土に改良している。

最後の第3段階として、土橋頂部まで盛り上げて石垣構築も完了する。この段階の盛土の単位は非常に小さく、炭や灰、焼土を含むことに特徴がある。土橋中央部を少しずつ盛上げて石垣裏込めの擋鉢形状を高くして、その高さ分だけ少しずつそこも埋め込んでいるのである。その単位が石垣一段の半分から3分の1という細かさである。このような施工の関係で、裏込め礫の範囲は、20～40cmとまた狭くなっている。使われている盛土は第1、2段階の盛土とよくにているが、砂礫の混入や炭、灰、焼土の混和などの意図的な土質改良をおこなっている。

なお、石垣上には黄色砂礫土があるが、白鳥堀石垣上部の崩落に伴って流出した土であり、動いている裏込め土である。

B断面の盛土状況

B断面でみられる盛土4は、A断面から続く土層とその上にある土層の二種類がある。A断面から続く土層は、A断面と同じ作業段階の盛土構築をおこなっており、その上にある土層は、A断面作業終了後にあたる第4段階の盛土作業にあたる。1～3段階に構築された盛土の高さは、いずれもA断面と同じ高さであり、一連の盛土工程ということで測ける。

第1段階は、最下部に薄く水平な明灰色砂質土や灰色シルトがみられ、灰褐色砂質土などの土が大きな単位で盛られている。第2段階で暗灰色砂礫土や暗褐色砂質土などがあり、礫や焼土、炭、灰が目立つ層となっている。これは、A断面での第3段階の特徴であったが、盛土の工程から第2

段階であることに間違はない。第3段階である褐色砂質土層は、さらに多くの炭や灰、焼土を含み、しかも一つの層の厚みが薄いというA断面の特徴に共通している。

その上層の第4段階の盛土は、非常に大きな単位の盛土で、灰黄褐色砂質土や灰黄色砂礫土という非常に均一な土層である。わずかに炭、灰、焼土の入り方や砂礫の混入の仕方から分層されるにすぎず、それまでの盛土段階の土層の状態と対象的である、しかも水平に積み上げるといふ意図は見られず、土橋側から一気に土を流し入れて、土橋を拡張するように緩やかな斜面をもつテラス

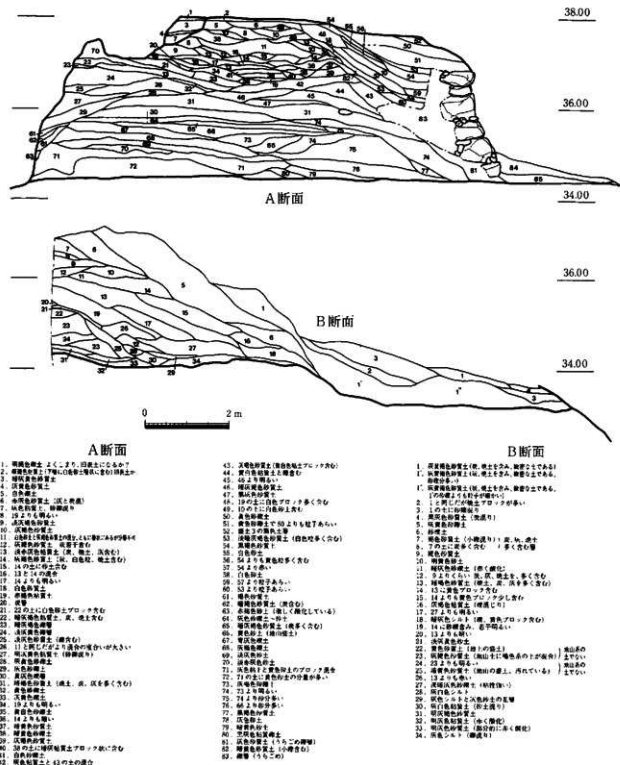


Fig.176 石川門調査区盛土4土層図 (1/80)

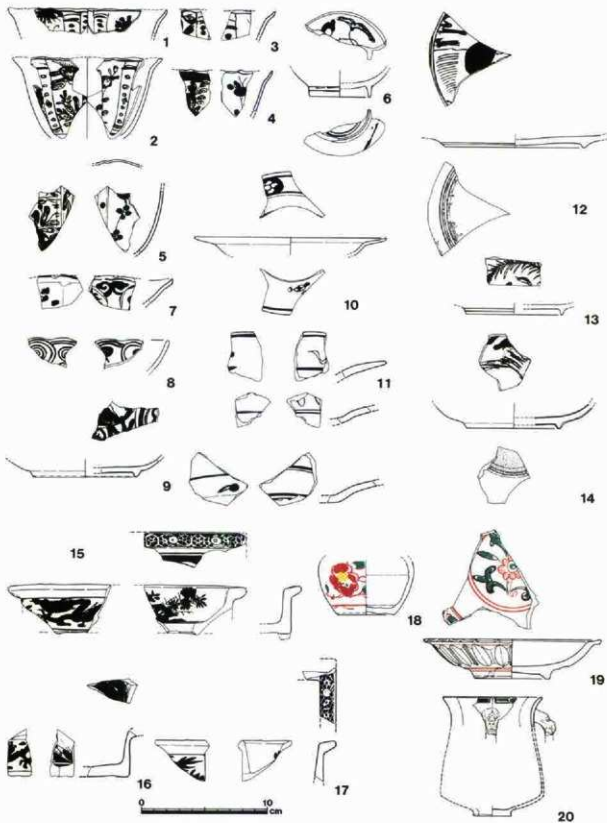


Fig. 177 石川門調査区盛土4出土土器 (1/3)

を作っている。つまり、盛土3や盛土2にあった段の原型をここで作っているのである。そして1～3段階の盛土が石垣構築作業を伴うために丁寧に盛られているのと対照的な盛土であり、土木作業を必要としない盛土、つまり単にかき上げることが目的の盛土が第4段階である、という施工の性格の違いがある。

b) 出土遺物

陶磁器類 (Fig.177, 178)

染付けは明のものであり、その他の輸入陶磁器として三彩や白磁、緑釉など多彩な遺物群がある。しかし、盛土3などと同じように小破片となったものばかりである。

177-1～5は芙蓉手碗で、口縁形態がやや内湾して受け口状を呈するものが多い。7、8は口縁が波状である。7には体部に明確な稜をもった皿だが、8は不明確である。8は渦巻き文が特徴的である。9～14は皿である。11は接合しない3片を図示した。内外面に熱を受けており、釉が白く変色して器面が荒れたようになっている。15～17は角皿で、盛土2からも同種のもので出土している。外面に龍、内面に風景、口縁上面に亀甲文の中に珠文を付けている。祥瑞であろう。

178-6は茶入れである。外面の文様は線描、ペンシルドローイングによって描かれている。

177-18、19は色絵である。18は小壺である。底面に若干灰が落ちていることと、体部内面上半に釉がかけられていないので壺と考えた。焼成のせいか外面の釉に縮みがみられ、貫入が顕著である。赤を主体に用いて緑と黄色を使って花文を描いている。赤絵の系統であろうか。19は白磁皿で枝折花文を描き、夔須を用いていない。178-8は緑釉合子蓋である。外面は格子の線刻がみられ、

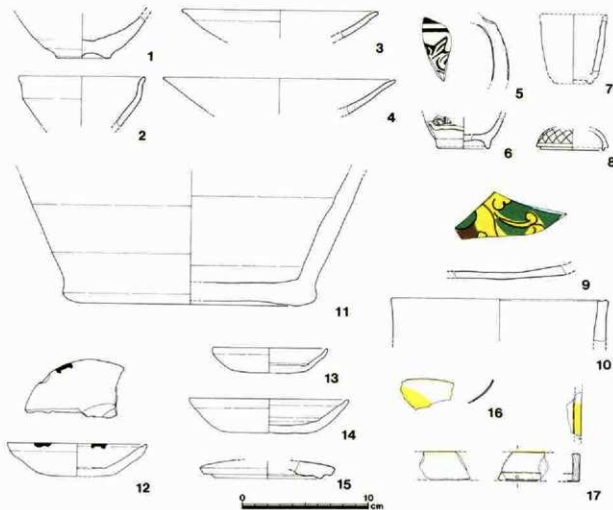


Fig.178 石川門調査区盛土4出土土器 (1/3)

外面に緑釉、内面に青味がかった灰釉がともに薄くかけられている。胎土は灰色であるが磁器質のきめの細かい素地であり、上絵付け技法によって作られたものと考えられる。

177-20は白磁八角形小杯、コップであり、同種のもが盛土2から出土している。把っ手の上部は、龍の顔をあしらっている。口縁の外面には雷文がある。底部は平らで八角形を呈する。178-9は三彩で大きく浅い皿である。内面に線刻された文様を埋めるように緑釉、黄釉、褐釉が塗られているが、外面(底面)は無釉である。漆靴の痕跡がある。なお、178-5は青磁壺体部である。178-3、4は李氏朝鮮白磁皿である。3の胎土は悪く破断面がギザギザになるが、4の胎土は極めて精良である。実測しなかったが、李朝白磁皿は他に数個体分がある。

177-14は肥前染付けである。底部の釉が他に比べて厚く、素地も黒色粒を含む灰色かかっており、高台内に離れ砂のような細かい灰のようなのが一面に付着している。牛掛けの釉もある。これらから初期伊万里と考えられる。178-1は肥前陶器碗、7は肥前陶器小杯である。7は外面から内面口縁直下まで鉄軸をかけている。178-2は瀬戸美濃天目で、このほかに、黒織部呑碗がある。

11は越前壺底部で、10は越前の火桶である。口縁端部のみ灰が被っている。15も越前の蓋だが、火桶の蓋であろうか。段になった内面に激しい灰かぶりとなる。口径が異なることから、10とはセットにならない。178-12~14は土師器皿で、14は盛土3資料に類似する。また、12が11cmの口径、13が9cmの口径と一回り小さい。盛土3資料群であまり見ないものである。

漆塗り製品 (Fig.178-16、17)

盛土中から乾燥状態の漆塗り製品が2点出土している。ともに黒地に金彩である。16は皿と思われ、口縁端部と内面文様に金が使われている。木質は腐朽し、漆膜のみ遺存している。非常に厚く漆が塗られており、しっかりした作りである。17は箱物の側板である。折敷などの側板とおもわれる。口縁端部上面に金が塗られている。なお、側板は外面から直径2mmの目釘で固定されている。

金属器 (Fig.179)

盛土3、4出土の金属器を一括し、1-7までが盛土3出土で、8・9が盛土4出土品である。

1-4はキセルである。銅で作られているが錆化が激しく鍍金されているか不明である。4はラウの部分で火皿はしっかりしている。軸に接続する管は直線的である。1-3は軸の部分である。1は太い軸の中に、狭い軸を差込んでいる。ラウと木の軸に繋がる部分であろう。2は軸の部分で、3はラウからの続きの部分である。軸部分のみ木を覆っており、木質が遺存している。以上より、軸全体が銅板で覆われているキセルと考えられる。なお、銅板は、丸く包んで接合している。

5は鉾前の鍔である。長さ76cm、厚さ6cmで先端が22cm直角に曲っている。根元は環状になって円環が接続する。全て銅製である。6は刀のはばきで、鞘口金具ともいう。鍍金されていたと考えられるが錆によって不明である。大きさから大刀である。8、9は刀の兜金で、柄尻金具ともいう。

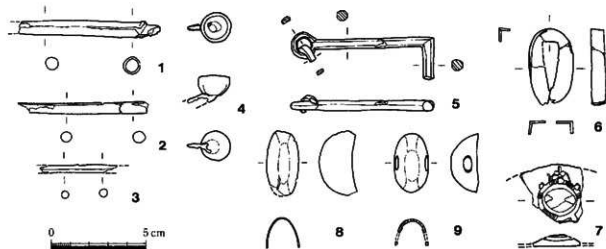


Fig.179 石川門調査区盛土3、4出土金属品 (1/2)

9には、両側に丸い穴があげられている。これは、装飾のためのものである。7は銅鏡である。亀の形をした鈕である。破損後一端面が磨かれて再利用されている。垂飾具であろうか。

第6節 盛土4にともなう土橋の構築

石川門調査区で確認した盛土4～2によって、土橋を約3mもかさ上げしたことになる。さらに土橋の形も途中から一段広がる形に変えて、石垣作りの土橋に作り替えたことになる。このような大規模な工事も、兼六園調査区の上層を見る限り比較的単純な土層で、石垣設置面前後の大きな2段階に分けられる。本調査地点での多くの作業段階の確認は、土橋が1段広がる部分に相当する石垣の屈曲の造作にかなり苦労している姿を示すものである。

百間堀と白鳥堀の石垣普請に伴う盛土を、盛土4の第1～3段階の盛土とし、屈曲部までの石垣を構築したと考える。そして、B断面と石垣屈曲部を投影して合成した図で盛土との関係のみをみると、石垣が盛土4上面にちょうどのように作られていることがわかる（Fig.180）。単純な投影の関係で見ると、第1～3段階で石垣構築が済んでいるとすると、盛土4第4段階や盛土3などの盛土施工と、屈曲からさらに兼六園にのびる土橋の石垣の施工工程と一見矛盾しているように思われる。

そのトリックは、B断面の位置にある。B断面は、白鳥堀石垣面から5.5mも離れており、石垣構築のための特別の施土の影響外にあるものとする。すなわち、第3段階までの盛土が石垣屈曲部をL字状に取り巻くように盛られているために石垣裏込め部分が最も高くなって、ちょうどアゼ2付近が最も高くなるように盛土されている。アゼ2付近の盛土3の厚みがわずかに10～20cmしかなく、それより下層は盛土4および石垣裏込めとなっている。屈曲部の石垣裏込め範囲も非常に狭く、根石付近ではほとんど裏込め線がない状態である。このような石垣屈曲部を優先して作る施工方法の結果、石垣裏込め部分を作る盛土の外側が凹んだような形、断面で見れば段のあるテラスとなって観察できる。そして石垣屈曲部を如何に作るか、しかもそこは根石の高さの違う状況があったために、それぞれの根石にあう高さを構築しなければならない。したがって、各段階の盛土は、B断面で確認した位置よりも、より北に長く石垣隙にまで延びているのである。それがこのような構築方法を取った所以であろう。

石垣ははじめの段階でどの位置まで構築されたのであろうか、それを確認できるような実測図の記録類はとっていないが、近代石垣のある位置で急激に落ち込む盛土3となっており、盛土4第4段階の盛土も同じような位置から土を流し込んでいるので、石垣隅角部近くまで築いているものと思われる。

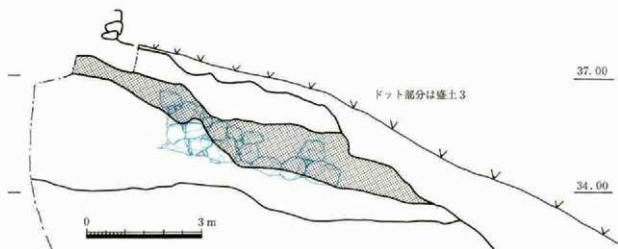


Fig.180 石川門調査区盛土2～4と白鳥堀石垣 (1/100)

盛土4の土量は非常に大きいものである。このような盛土量を最小限に押さえるために、石垣を構築したと考えるのが妥当であろう。次項でみる盛土5と当初考えたもののうち、盛土4と同じ施工になる可能性のある盛土があるが、それでもかなりの土量を必要としたと考える。

石垣構築に際し、まず第4段階のように石垣裏込め範囲を確定する段のあるテラス状態の盛り上げをおこなっている。ただ単に水平堆積できないのは、石川門から続く石垣を最優先で構築してきたために盛土の不連続ができたためである。しかも当該部分はそれまでの土橋で最も低い部分であったために、盛り上げる量も大きいことによる。おそらく、当時の土橋から見る堰のそこまでの深さも白鳥堀側では大きなものであったに違いない。それゆえ土橋の幅を広げてその強度を出そうとしたと考える。

このように、土橋の構築は、旧地形にかなり影響を受けていることがわかる。

第7節 盛土5

a) 盛土の状況

盛土5も盛土4と同じように、石川門調査区とアゼ1で確認している。アゼ1の断面は白鳥堀調査区断面となっている。第5節と同じように、それぞれA断面、B断面とする。

基本的に盛土6方向から土を入れており、外側に広がる谷の堆積土や白鳥堀調査区で確認した跡遺構群を埋め込んでいる。盛土5の端から白鳥堀の落ち込みが見られ、白鳥堀をそれほど掘り込んでいないものと考え、旧地形においても地形の変換点際で盛土5が終わっているものと考えられる。

A断面の盛土状況

盛土は大きく4段階に分けられる。第1段階は、盛土6から下方に土を流し込んでいる。第2段階は、土橋上をさらに盛り上げる。第3段階は、第2段階に作った高まりから土を下方に流し込んでいる。第4段階は、土橋地表を整えている。いずれの段階も盛土の単位は大きい。

第1段階の盛土は、緑色の強い灰色砂礫土を主としている。炭化物を多く含む層(121)や炭を含む暗灰色粘質土などの有機物を含む層が若干認められるが、ほとんどが、砂礫土を主体とする層である。このような埋め立て土の土質状況は、斜面を埋め立てる第3段階の土に共通している。そして第2段階では、灰黄色、暗灰色～緑灰色の幾つかの色調が認められるものの、砂礫を多く混入させたりあるいは粘土のブロックを混和させたりした土である。このように、いわば粗い土でもいえよう。そして、多くは砂礫を入れて混和して土質改良した土をもちいている。

第3段階の土は第2段階の土と対照的である。極めて均一な土で、木橋調査時に土層断面で確認できた黄色砂土から砂質土を、調査担当者ばかりでなく、見学に訪れた考古学研究者も地山かと思ってしまったほどであった。第3段階の下部の盛土は、暗灰色粘質土や赤黄色粘質土などを水平に敷いてその上に大きく先の均一な盛土を置いている。途中にある礫層(91)も地山系盛土と同じように均一な用材の採用ということで説明がつく。このように分層の難しい土の使われ方は、それ用にストックされた土を用いていると考えられ、これはまた、ストックされるにしても何回も動かさないで、運び込んだまま置いておいたものであり、それゆえすぐに使われる土でもある。

第4段階は、薄い土層を水平に積み上げることによって積み上げている。白鳥堀石垣下付近に土饅頭を作り、そこに保たせかけるように斜めに薄く土を盛っている。いずれの土も焼土や炭を含むなど、意識的かどうかかわからないが表土系の土が入っている。これらの土で表土近くを形成していたと思われるが、版築などはみられない。しかし、水平に薄く土を盛っていることや1つの層の単位が小さいことから、タタキ締められていることは確実である。

B断面の盛土状況

B断面の盛土も大きく4段階に分けられるが、A断面よりも外側に位置しているので、両者を合成することによって石川門調査区における土橋構築の構築順序がわかる。

第1段階の盛土は、A断面の第1段階に相当する。断面で見えているのは僅かしかなく黒灰色粘

質砂礫土や緑灰色粘質土がある。これらは水平に堆積しているのでは違うかもしれないが、位置関係から第1段階と考えた。第2段階は、A断面の第3段階に相当し、暗灰色、暗緑灰色の粘性のある砂質土や砂礫土を主体としている。ここで注意を要するのは、白鳥堀遺構面との関係である。遺構面に盛土がかかりはじめると、そこには水平に土を盛っている。この時に使われる盛土は埋め込んでいる盛土と同じ種類のものを使っている。しかし、遺構面直上は、砂礫土であつたり粗い砂土であつたりしており、部分的に違う土をまず盛っている部分がある。この違う土の範囲が、白鳥堀調査区の全面に及んでいないことから、部分的な盛土がランダムに盛られていることがわかる。この段階で、白鳥堀にあつた遺構群は全て表面を埋め立てられている。

第3段階は、白鳥堀調査区の4段階にほぼ相当する。土橋本体よりも一段さがってテラスを作っており、そこに柱穴や掘り込み痕跡を確認している。前の段階でテラスができるように段をもっており、その部分をきれいに地表面にする盛土段階である。A断面の地表面に使われている上と同じように、各種の盛土を薄く水平に盛り上げている。なお、木屑を多く混入した層(20、21)があり、盛土施工時の廃材であろうか。

第4段階としたものは、第3段階ででき上がった土橋斜面をさらに拡張する盛土段階である。この盛土は、上から盛られたのではなく、まず下から約2mまで水平に盛り上げられている。それから上は、盛土5上面より土が入られ、あと2mほどの高さになると今度はまた水平に盛土をおこなっている。これらの土の単位は小さく、盛土5の中では異質である。そしてむしろ盛土4の範囲で含めるべきものとする。しかし、この断面が早く崩落して、遺構面との関係や盛土の検討など細かな調査ができなかつたので、本報告では盛土5の中で説明を加えたことの手承をいただきたい。この盛土を盛土4の工程の中で考え、その時の土橋の拡張が土橋の裾から始めたことになり、ますます盛土4施工の大規模さが窺える。

断面に表れる遺構の状況

盛土5上面には、木樋以外にも柱とそれを抜いた痕跡や小さな穴の痕跡を確認した。しかし、それを調査する時間は与えられなかつた。盛土5上面は、盛土1、2、4の上面に比べて多くの遺物があつた。これは、木樋調査中に木樋にかかれない作業員に盛土掘削をお願いしたためであるが、それ以上に当時の土橋表面に遺構があつて遺物を多く混入させていることによる。

木樋工事の仮設施設などがあつたかもしれない。柱とその抜き取りは、それを暗示するものである。また、多くの遺物が出土する背景には、17世紀第1四半期の遺物を多く出土する沈床園調査区第4層の遺物の出土とも関連するものだろう。したがって、一時崩土橋の上に生活廃棄物が投棄される状況があつたことがわかり、それと木樋建設とが無関係なことでない可能性は極めて高いものであると言わねばならない。

b) 出土遺物

盛土5から出土したものうち、白鳥堀調査区遺構面、包含層上にある盛土5の掘削した時に出土したものが多し。しかし前項でも記述したように、盛土5でも北側に拡張しており、それが盛土4施工に伴う可能性がある。この層からの出土も少なからず認められる。つまり、図示していないが、胎土目唐津灰釉皿や胎土目絵唐津灰釉四方皿、絵唐津大皿などが少なからず認められることである。したがって、盛土5出土資料のうち、どれほどその年代を明示する指標として遺物を位置付けできるか難しい。土師器皿や唐津碗は、江戸町跡出土資料群に共通する¹⁹⁾。以上より、盛土5築成年代の下限として位置付けた方がよい。

182-1~4は明染付けである。1は芙蓉手碗で、口縁がやや受け口状になって体部には製作の種がある。薄手の優品である。2は厚手の碗で4も厚手の鉢である。ともに津洲窯系である。3の皿の口径はもう少し小さくなるかもしれない。5は瀬戸美濃小杯で、暗緑色の灰釉が外面底部までかけられている。削りは時計回り回転。6は唐津碗で、しっかりした高台がある。内面に鉄釉、外面に灰釉が掛け分けられている。8-11はとりべである。各種の法量があり、使い込まれている。12-15までは土師器皿であるが、12-14は盛土3からの混入品である。15は口径9.8cmを測り、平

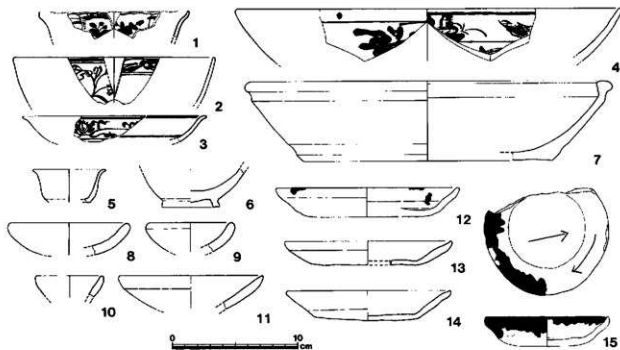


Fig.182 石川門調査区盛土5出土土器 (1/3)

らな底部から内湾気味に体部が立ち上がり、口縁は外面に面をもつ。灯明油痕も口縁径の約半分相当に見られ、よく使われている。

第8節 盛土6

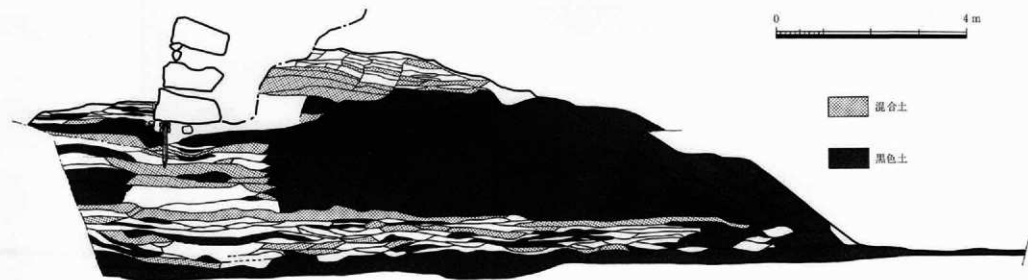
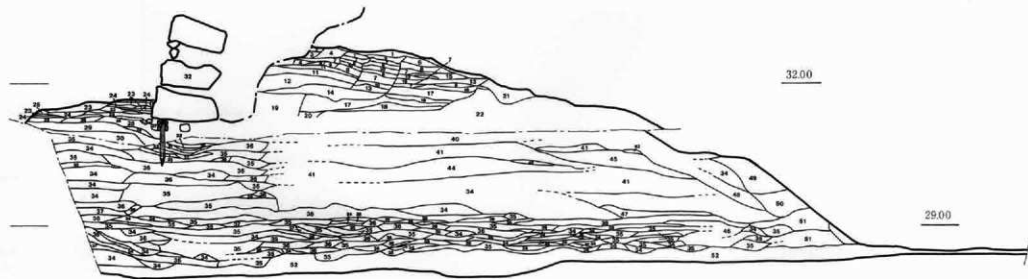
a) 盛土の構成

土橋最下部の盛土で、谷の堆積土である黒色シルト（以下谷の埋土と略）の上に構築されている。谷の埋土が薄いところはその上直接に盛土施工をおこなっている。しかし、沈床園調査区と車道との境が谷の最も深い部分であるあり、当該箇所の盛土をおこなうに際し、地盤改良をおこなっている。土橋は横断面土饅頭のようなものである。調査区壁面での計測によると、土橋の幅は20m近く、谷の埋土からの高さ5.5mを測る。池に面する部分を「池側」、白鳥堀に面する方を「背後」とする。また、土橋は百間堀石垣根石によって壊されているが、上部構造ほぼ全容を知ることができる。

沈床園調査区で確認した盛土6下にある戸室石などの碎石によって、盛土施工前の地盤改良をおこなっている。碎石層は、厚さまで確認したが、それ以上掘削できなかったため、正確な厚みはわからない。沈床園調査区では、盛土6関係を調査する条件が悪かったので、石川門調査区で行なうとしたが、本調査区では戸室石の碎石層がなかったため、十分な記録をとれなかった。

碎石層は、谷の埋土にめり込むように入っており、均一な層である。しかも非常に堅く締まっている層である。碎石層の端は、黒色シルトにめり込むように丸くおさまっているため、地盤改良するところだけ碎石をどンドン詰めこんだようである。この範囲が土橋幅全体なのか、それとも池の際だけなのかかわからない。しかし、池側の盛土に顕著に版築がおこなわれており、その基礎として位置付けるならば、地盤改良は土橋全体におこなわれたと考えるよりも池際のみにおこなわれたと考えられる。土橋の北側（白鳥堀側）の盛土が、黒色土を多用していることから頷ける。

盛土に使われた土は、大きく3種類である。一つは、谷の埋土としての黒色土である。シルト的で粉っぽく、あまり堅くない土である。これが部分的に粘質土であったり、シルト的であったりする。もう一つは、丘陵の地山土としての黄色土である。淡黄色や灰白色あるいは赤みを帯びているなどの土の変化が黒色土に比べて大きい。粘質土が多い。最後の一つは、この二つの土の混合土である。混合の具合によって千差万別の土となる。盛土は、この3種類の土を使い分けている。



- | | | |
|---|---|---|
| <p>1. 緑灰色粘質土 (Y)
 2. 灰褐色粘質土 (Y)
 3. 赤黄色粘質土よりも赤い (Y)
 4. 1よりも砂っぽい (Y)
 5. 1よりも明るい (Y)
 6. 黒灰色シルト+灰白色砂土 (B+Y)
 7. 淡赤黄色粘質土 (Y)
 8. 灰白色砂土 (Y)
 9. 灰色粘土 (Y)
 10. 黒灰色粘質土+淡赤黄色粘質土 (B+Y)
 11. 10よりも砂分多く含む (B+Y)
 12. 10と同じだが黄い土が混合した状態 (B+Y)
 13. 黒灰色粘質土+灰白色粘質土 (B+Y)
 14. 13よりも明るい
 15. 7と8の混合
 16. 13よりも暗い (B+Y)
 17. 黒灰色シルト (粒りのない土) (B)</p> | <p>18. 17中に白色粒多く含む (B)
 19. 灰色粘土
 20. 青灰色シルト+黒灰色粘質土 (B+Y)
 21. 淡青灰色砂
 22. 黒色粘質土 (シルト的) (B)
 23. 淡黄色粘質土 (砂分多い) (Y)
 24. 黒色シルト
 25. 23の土に礫 (Y)
 26. 23の土と24の土の混合土 (B+Y)
 27. 灰色粘土 (シルト的)
 28. 黒灰色シルトに23の土が継続上に入る (B)
 29. 28よりも細粒の入り方が少ない (B)
 30. 黒色シルトで黄色粘質土が層状に入る (B+Y)
 31. 淡黄色粘質土 (Y)
 32. 黒色粘質土 (黒ボタ的) (B)
 33. 31+32 (Y+B)
 34. 黒色 (B)</p> | <p>35. 黄色 (Y)
 36. 黒色+黄色 (B+Y)
 37. 灰色砂質土 (Y)
 38. 暗灰色褐色粘質土 (B+Yだが、粒状のブロックの混合)
 40. 黒色粘質土 (B)
 41. 40よりも明るい (B)
 42. 41よりも暗い (B)
 43. 41よりも暗い (B)
 44. 黒灰色シルトの単層 (B)
 45. 40よりも明るい (B)
 46. 黒褐色粘質土 (BとYの小ブロック混合土で、38に黒の量が多い) (B)
 47. 黒色 (灰色っぽい) (B)
 48. 黒色 (酸味強い) (B)
 49. 緑灰色砂壤土
 50. 黒色 (硬多) (B)
 51. 黒色 (灰味) (B)
 52. 黒色 (下の層ほど硬含む。また、茶味の強いところあり (百間側方向に顕著)) (B)</p> |
|---|---|---|

Fig-183 石川門調査区盛土6土層図 (1/80)

土橋池際の土層断面実測記録類は、先に述べた理由から作成しなかったので正確さはないが、盛土の状況を説明する。戸室石砕石層に版築用の土留めの板の痕跡を確認した。版築板の痕跡は平面で確認できなかったが、池の堆積過程の中で崩落していったものと考えられ、確認した版築の痕跡も途中で不分明になってしまう。盛土は、黄色粘質土と黒褐色粘質土（黄色ブロック混じり）を主体とし、先の黄色土と混合土である。1層の単位が5～10cmの厚みでほぼ水平に盛りあげているが、下部にいくほど黄色粘質土を多用し、礫も多く含むようになる。これは、砕石層の上をまず固めて固めて早急に水を遮断する目的があろう。それは、第5章でみたように、池の堆積のスピードが早いのである。礫でも人頭人の大きいものは、盛土際に多くあり、足場などの固めとして意識的に入れられたものであろう。

盛土の上部にいくほど黒色土との交互の堆積となり、安定した盛土作業を推測することができる。池側の内側の断面（石垣下部分）は、谷の埋土があまり厚くない部分での盛土状況であるので、池側の盛土と直接対比はできない。盛土をおこなう高さとはどちらも同じ高さである。ここでは黄色土よりも黒色土が目立って、一層の単位も大きい。これは、沈床園調査区での盛土状況と大きく異なり、当該箇所が谷の最も深いところにあつて地盤が軟弱であるという条件によるものであろうか。沈床園盛土部分の掘削に及んだ時の壁面調査の時に、黄色土や版築が見られず黒色土中心の盛土であった。つまり、池側の黄色土は水を止める目的をもって構築され、内側は後で土を盛っているのであろう。そのように考えると、黒色土と黄色土の版築のはじまるあたりに、石川門調査区壁面で見える第1段階の盛土の高さに相当する。

次に盛土は、まず標高29m付近まで約1mを盛り上げている。土の単位は小さくて、黒色土、黄色土、混合土を用いている。興味を引くのは次のような盛り方である。土橋のほぼ中央付近の土の単位が小さく、黄色土や混合土が目立って多い。それから南北にむかって層の単位は同じくくらいの大きさだがしだいに黒色土が目立ち始め、背後になると黒色土ばかりの大きな層になる。池側は次第に層の単位が大きくなり、黒色土も多くなる。黒色土は、シルト質であまり堅く締らない土であり、それを多く積むということは、土をおいてもあまり堅くない部分である、ということであり、作業などで何回も入ることもできない。したがって、中央付近が最も堅くなっており、作業のための通路であったと考える。

次の段階は、より鮮明にその傾向がでてくる。石垣根石下付近を境に左右に黒色土が厚く見られ、同じ解釈をすると、この部分が盛土作業路であるということになる。まず黄色土や混合土をおいて、左右にその高さになるまで黒色土を盛っている。土橋背後で顕著だが、作業路際の黒色土の分層は難しく、2m近く離れてようやく層の違いを認めることができる。これはすなわち作業路の際は作業する人々の往来によって攪乱されたと理解できる。この段階の盛土は、標高約29mで約2.5mの盛り上げがなされたと考えられる。つまり、背後にある黒色土上面までである。百間堀石垣は偶然この盛土作業路上におかれている。盛土の層が石垣の上からの圧力によって構出しているのが観察できた。

この段階の池側では、黒色土を多く用いていながら、版築状の盛土をおこなっている。おそらく、池の岸近くには、沈床園調査区で見たような、より細かな版築となっていると考えられる。これは、池からの漏水を防ぐためのものである。そしてこの段階でようやく、石川門調査区の壁面あたりから沈床園調査区付近すなわち、谷の最も深くで水の溜まりやすい所までの土橋の盛土施工を、一連の作業でおこなうことができる。つまり、地盤の軟弱な部分の作業は、そこに連続するしっかりした地面が必要であり、石川門側から順次土を盛って作業路を確保し、地盤改良をおこなって土橋を構築していると考えられる。

最後の段階は、地表面の整備としての盛土である。ここでは、ほとんど黒色土は見られず、混合土を下部に用いて、地表面は黄色土を用いている。基本的に水平堆積で、池側は非常に密な盛土となっている。また、上面についても非常に細かい盛土単位となっている。

注目できるのは、石垣下が灰色粘土（19）となっており、上部の細かい版築盛土の基礎となつて

いることである。そして、それより上層の池側では先の非常に細かい盛土層となっており、表面に細かい盛土、内側に粗い盛土という規則があるとすると、石垣の外側の細かな盛土層は現状で旧地表面であると考えられる。したがって、上構表面は百間堀石垣のあるあたりで、1mほどさがる段があったと推定され、石垣の構築をこの段を利用していたと考えることもできよう。

上面の盛土は、基本的に版築で築いている。背後の方から少しづつ土を盛っているが、途中で版築の板の痕跡のような縦に入る土層の不連続がある。縦の不連続は、斜めになっており、1層1層土を盛っていくときに突き固める単位で、それが低い方からおこなっているためにこのような土層になったと考えられる。したがって、百間堀石垣部分に段を想定した方が、版築作業を容易にすることができるので、この点からも先の想定に有利である。つまり、土橋最上に幅6m近くの平坦部が想定できよう。

上面の盛土として使われている黄色土は、基本的にその他の部分に使われている黄色土と同じであるが、赤黄色粘質土のようなさらに地山に近い土も使われている。特に、粘質土と砂質土が交互になるように盛られている。例えば、中程(5)の層の順を見てみると、上から緑灰色粘質土一淡赤黄色粘質土一灰白色砂土一混合土一砂土一淡赤黄色粘質土一混合土、というようになっている。これによって非常に堅牢な土橋の地表面として構築したのである。

このような盛土工法の違いは、目的とするものの違いである。第1段階の盛土は、谷の軟弱な土層上で作業を容易にするための盛土であり、堅く締った盛土表面が要求される。そして谷の最深部で水対策と地盤対策のために、地盤改良と黄色土の盛上げ、という他の地点でおこなわれていない特別の作業をおこなっている。第2段階は、土橋のかさ上げが目的である。池の堆積層が標高mまで見られるので、池側には水の浸透を防ぐ必要がある。そのために細かい盛土となった。また、盛土作業をおこなう作業路も同じようにしっかりした盛土の必要がある。しかし、土橋背後にはそのような堅牢性は必要でない。第3段階の地表面の盛土は極めてしっかりした盛土で、入念に作っている。この作業は、堅固な地表面を作るのが目的である。

何故堅い地表面が必要なのであろうか。たんに土橋を構築して谷をせき止めるだけではこのような施工を必要としないはずである。また、人の通行のみではそれほどしっかりとした地表面を必要としまい。想像すると、かなりの重量物にでも耐え得るような施工であり、通路としても極めて重要性があったために人念な作りがおこなわれたのだろう。一方において、固い地表面を作りながらも水平さは見られず、「道」という機能がはたして多大に発揮されたか疑問視できるかもしれない。しかし、版築までして構築する技術の導入に、その効果に期待する意識が働いているのは確実である。

第7章 石川門調査区出土木樋と辰巳用水石管

第1節 木樋

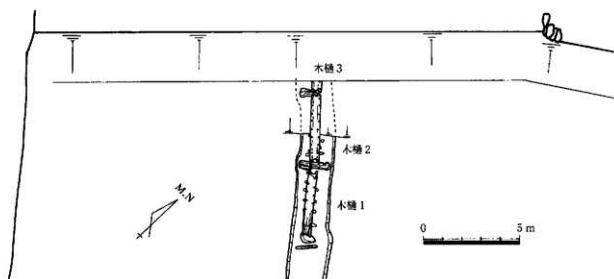


Fig. 184 石川門木樋出土位置図 (1/200)

a) 木樋の構造

木樋は、標高34m付近で、石川門前土橋と並行して検出した。調査区壁面から4.1mの長さで3本の木樋が出土した。木樋3より城側にさらに続いている。木樋は、本体と継ぎ手、そして本体の支持受け、枕木、継ぎ手の敷石の五つの部材から構成されている。樹種は、本体がアスナロ、継ぎ手や他の部材がマツで作られている。

なお、木樋1よりも兼六園側で木樋が出土しないのは、盛土4施工前に抜かれた結果と考えている。これは、兼六園調査区壁面で確認された掘り方の土層が抜き取り状の痕跡であることや、木樋1近くに鉄釘が落ちていること、さらに木樋1の兼六園側小口の遺存状況が特に悪いことからの推定である。

木樋の設置

掘り方について

木樋は、幅90~100cmの掘り方の中に設置されているが、掘り方底面に据えつけるのではなく、その中程に置くようにしている。それは、木樋の設置方法に大きく関わっているからである。掘り方の掘削面は、盛土5上面である。掘り方の深さは、現状で87cmである。しかし、盛土5と盛土4との間に旧表土が認められないので、盛土4施工時に旧表土を除去した可能性があり、掘り方の深さがさらに若干深くなる。兼六園調査区壁面で確認した木樋掘り方の深さが50cmしかないので、旧表土ばかりでなく、盛土4施工のための削削が土樋全体におこなわれたことがわかる。

掘り方の平面形態をよく見ると、継ぎ手の部分で、どちらか一方がやや広がるようになっている。継ぎ手の幅が82.3cmあることから、本体設置の掘り方幅(90cm)では狭すぎるので、継ぎ手部分のみ広げたものと思われる。掘り方はきれいなU字形の断面形で底も平坦になっている。二本目以後は抜かれており、掘り方の平面形でも全体的に広がっている。兼六園調査区壁面で確認した木樋掘り方の幅は180cmもある。

木桶の設置方法

木桶は枕木および「H」形の支持受けの上に本体をのせている。そして基本的な本体の支持受けの配置は次のとおりである。支持受けは30cm（一尺）間隔で三ヶ所に置かれている。木桶の前後のみは、「H」形の支持受けを使わずに、木桶を単に受けるためだけの枕木を使っているため、本体にかかる受けは合計5ヶ所となる。木桶1では北側の継ぎ手付近の受けに枕木を使わず、二つの支持受けとしているので、6ヶ所の木桶本体の受けとなる。枕木は芯のある丸い材木で、木桶をのせる部分のみ切り取っている。

支持受けは、芯のある丸い材木を縦木に用いてそれに方形のホゾ穴をあけ、横木を差し渡ししている。木桶本体が横木差し渡し位置よりも腐朽によって落ち込んでいるので、横木の正確な大きさを求めるのは無理であるが、幅5cm位の角棒となって縦木のホゾに通している。支持受けの立木の下面は杭のように尖らせていない。これは、立木を打ち込むのではなくて、据え置いていることを示す。これが、掘り方中位の高さに木桶を置く理由である。

木桶は継ぎ手に詰め込むことによって連結しており、漏水を防ぐためにも非常に重要な部位である。継ぎ手下には平らな川原石を敷いてその沈下を防いでいる。継ぎ手は横長の部材を用いて、木桶詰め込み部位をくり抜いている。木桶はそこに詰め込むわけだが、より強固に密着させるために、漆喰を連結部に塗っていた残余が付着している。

掘り方掘削と木桶設置、そして埋め戻しが短時間におこなわれたようで、掘り方内はほとんど分層できない状況である。埋土は、小礫をふくむ酸化の激しい灰色粘質土を主体としている。先ず埋められたと考えられる木桶設置までの面（木桶底面に相当する）では、礫が目立ちシルト的である。木桶上面の高さまでの土は、あまり酸化のない灰色粘質土で、木桶設置後第1段に埋められるものである。このような状態は、掘り方掘削土をそのまま使っていると考えられ、埋土はあまり堅くないことから踏み締める程度の埋込みであることがわかる。

また、最上部の上の酸化が激しいことに注目したい。酸化の激しさは、より長く掘削土が埋め戻されずに空気に触れていたことを示す。つまりこの部分は、埋め戻しの最終段階であり、それが木桶設置1本毎におこなわれたのではなくて、大きな単位としての木桶設置工程の最後に一気におこなわれたことを示す。

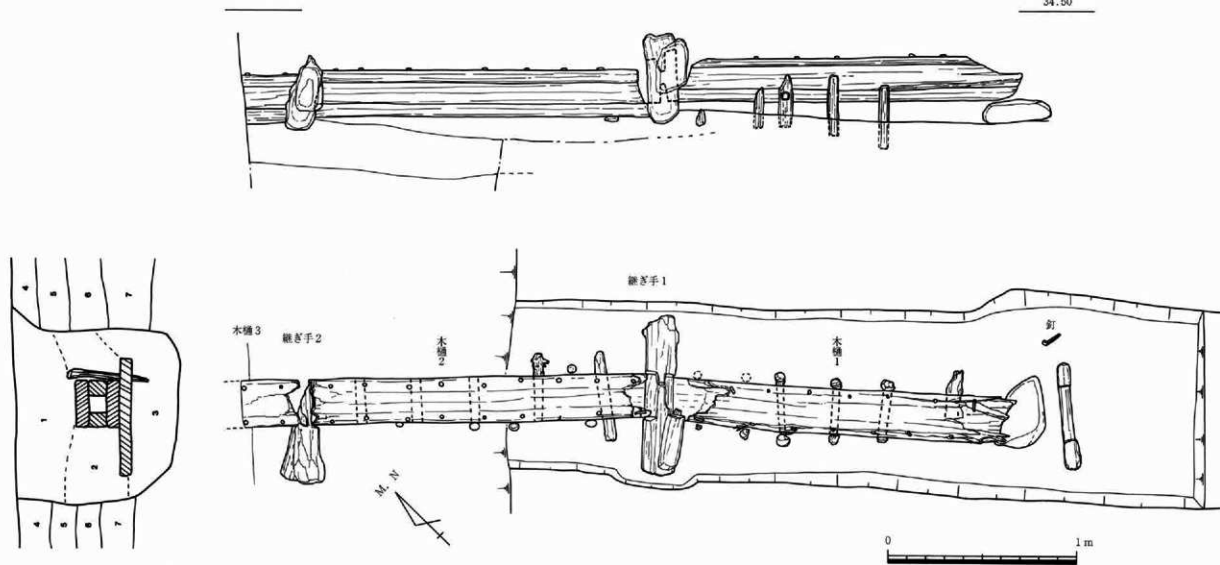
木桶の連結

このような方法で木桶を設置しているが、その連結についてみてみたい。なお、検出木桶と継ぎ手を南から（兼六園側）木桶1、木桶2、木桶3、継ぎ手1、継ぎ手2とする。

木桶本体の継ぎ手との連結は、5cmの重なりしかない。つまり継ぎ手連結部は5cmの深さにくりこまれそこに木桶を詰め込み、漆喰状の付着物に見られるように接着剤を用いている。しかし、漆喰とすると接着剤がどれほど効果があったものか疑問であり、継ぎ手部分が最も弱かったと思われる。そのため木桶本体両端の腐朽が最も激しく、継ぎ手から抜け落ちたようになって出土している。さらに、支持受けや踏み締められていない埋土の状況から木桶本体もまた不均衡に落ち込む要因を孕んでおり、継ぎ手をはやく破損させることとなったようである。

木桶2と木桶3はほぼ直線的につながり、しかも今の石川門前土橋に並行し、その主軸から僅かに1度ほど沈床園側に向いているにすぎない。しかし木桶1は6度強も沈床園側に向いており、木桶1と木桶2との間で方向変換されていることがわかる。方向転換した延長に、兼六園調査区壁面で確認した木桶抜き取り痕跡にあたることから、少なくともさらなる方向転換はないものと考えられる。

興味深いのは、方向転換しても継ぎ手の構造や設置方法に大きな変化が見られないことである。本体と継ぎ手とは微妙に斜めになってしまうために、木桶と同じ大きさのくりぬきでは本体が入らないのである。つまり、木桶連結部を僅かに大きくしているのみである。しかし、金沢城に入る用水は逆サイホンの原理を用いて引き入れており、過重な水圧がかかるとうよくいわれている。当該部分は標高の最も低い位置にあたり、水圧が最も大きくなる部分である。方向転換によって水圧が不



1. 灰色粘質土 (酸化強い)
2. 灰色粘質土
3. 1. より水多く含み、シルト的 (20cm大の石を含む)
4. 灰色礫土
5. 赤黄色砂質土 (焼土灰層)
7. 浅赤灰色礫層

Fig.185 石川門調査区木桶出土状況 (1/20)

均衡に継ぎ手にかかると考えられるが、それによる破損はみられないようである。すなわち水が通されたかどうか疑問である。

木樋は、約2度の傾きで石川門方に下がっている。この傾斜は、兼六園側で確認した木樋痕跡の延長に一致し、同じ勾配で来ていることがわかる。石川門周辺が当時どのような地形になっていたかわからないが、木樋検出レベルよりも高いことは確実であり、もうそろそろ木樋勾配を転換する地点と考えられる。

なお、木樋の設置が狭い掘り方、特に継ぎ手が身一杯であることや、その一方の掘り方を広げていること、さらに掘り方中程まで埋めていることから、掘り方検出面（盛土5上面）とさほど違わない位置から掘り込まれていると考えたい。つまり、反対に掘削面が近いので、簡単に木樋が抜かれるのである。

b) 出土木樋の観察

木樋1・2や継ぎ手などほぼ同形同大で同じ構造である。つまり、規格化された製品として量産されたものである。したがってそれぞれ一括して記述する。

木樋本体

木樋1は、現状の長さ149.6cm、幅26cm、高さ21cmで、木樋2は、現状の長さ178.8cm、幅25.6cm、高さ25.2cmを測る。木樋3の長さはわからないが、幅25.6cm、高さ25.3cmを測る。出土状態での継ぎ手との間隔は184cmを測り、両端の腐食分を考慮して、182cm位（一間／六尺）に作られていたと考えられる。継ぎ手の木樋本体との連結部の大きさは、25.0cmで、木樋の計測幅の値よりも小さい。木樋の幅は、比較的遺存状況の良い部分でおこなったために、木樋の中程の計測となった。したがって両端がやや幅を減じるような形を呈するものであり、継ぎ手に密着させるように大きめの木樋を作って現地で狭くして埋め込んだものであろう。

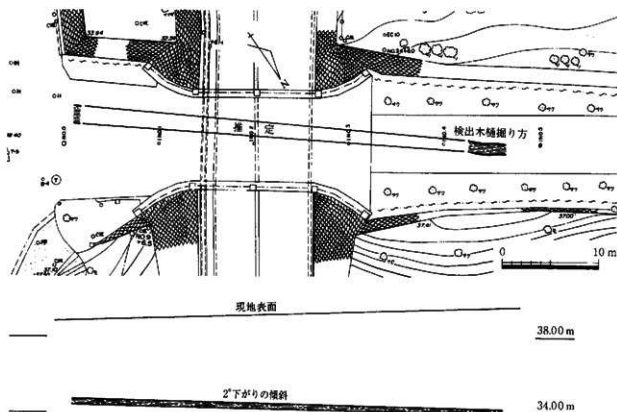


Fig. 186 木樋設置推定位置図（平面図1/400、断面図高感1/200）

木桶は、底板、蓋板および2枚の側板から構成されている。側板が底板の上にくる形式で、蓋と底の両側から釘を打ち付けて固定している。最も遺存状況のよい木桶3では、底板の厚みが9cm、蓋板が7.4cm、側板が7.6cmを測り、木桶2では底板が7.8cm、蓋板が8.0cm、側板が6.8、6.6cmを測る。側板が蓋板や底板に比べて腐食が進んでおり、その数値が当初のものである可能性は少ない。むしろ、蓋板等の8~9cmの厚みのある板材を組み合わせていると考える。鉄釘の長さが16cm前後を測るので、打ち付けた時に側板をほとんど貫通する状態となる。

木桶2では、片側9ヶ所に釘を打ち付け、片面に計18本の釘がある。その間隔は、約20cmである。興味深いことは、蓋からの打ち付け位置と底からの打ち付け位置がほぼ同じことである。これは、打ち付け途中で釘同士が接触する可能性があり、釘根元まで入らないものもある。底面左側下から3番目の釘がそうである。しかし、蓋板の釘の打ち付けが一直線状に並ばずに僅かづつ左右にずらしている。底板の釘もそうであり、しかも蓋板からの釘と接触しないように打ち付け位置を左右にずらしている。このような微妙な釘の配置によって両側からの釘の接触を回避している。

一方木桶1、3では、同じような間隔と本数の釘を使いながら、蓋と底板との打ち付け位置が互い違いになるようにしている。木桶3では僅かにずらしているのみである。どちらがより本来的であるのかわからない。木桶1と2の製作技術を見ると、木桶1の釘の打ち付け方が稚拙で、底面の釘の多くが根元まで打ちつけられずに途中で曲ってしまったために作業を断念しているの、木桶2の方がより熟練した技術をもって作られていることがわかる。釘のずれ方からみると、それが少ない方がより熟練した技術者が作ったと知ることができ、木桶2の作り方を指向していたものと考えられる。

継ぎ手と支持受け、枕木

継ぎ手1は長さ81.6cm、現存の高さ23cm、幅15.8cm（連結部で幅14.2cm）で、継ぎ手2は長さ82.8cm、高さ32.3cm、幅15.0cm（連結部で幅14.4cm）を測る横長の部材である。芯持ち材のマツで作られ、小さな節が多くあるのが特徴的である。木桶本体との連結部分は、両側から24cm四方に深さ5~6cmで削り込まれ、さらに10cm四方の榫木部をくりぬいている。つまり、継ぎ手に木桶を連

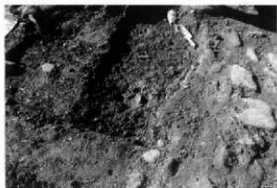


Fig. 187 木桶掘り方遺物出土状況



Fig. 188 継ぎ手2下



Fig. 189 木桶3切断状況



Fig. 190 木桶細部 (白く見えるのは漆喰)

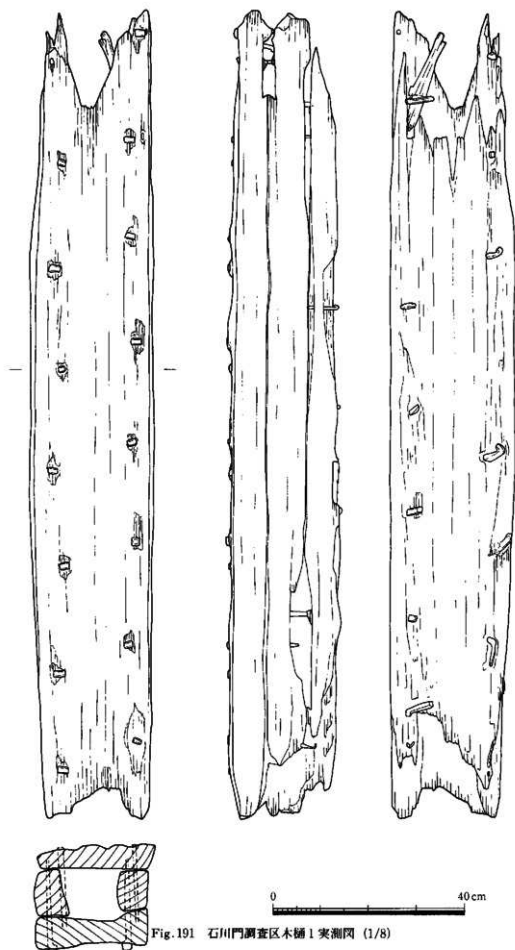


Fig. 191 石川門調査区木桶1 実測図 (1/8)

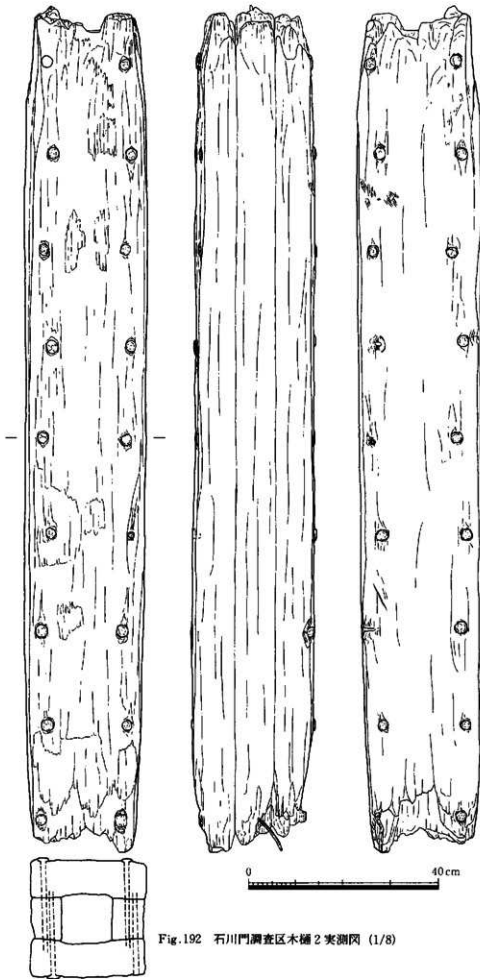
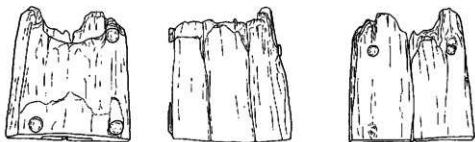
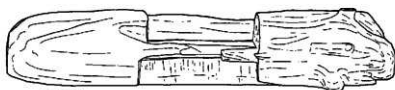
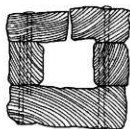


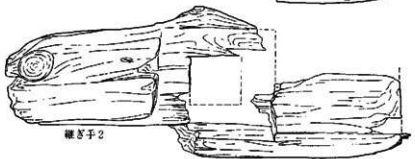
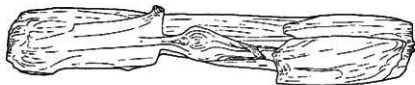
Fig. 192 石川門調査区木桶2実測図 (1/8)



木樋 3



継ぎ手 1



継ぎ手 2



Fig. 193 石川門調査区木樋 3 と 継ぎ手 1、2 実測図 (1/8)

結した時に、4 cm 近くの継ぎ手壁を介して木桶が繋がることになる。

連結部は、継ぎ手の上下、左右のほぼ中央に作られている。横長の部材であるために左右の控えが非常に長く28cm前後もあるが、上下については5 cm ほどしかないので、連結部上下が非常に弱い構造となっている。

全体的に遺存状況が悪いので、切削加工痕を確認することはできなかった。両小口面はきれいにカットされ、底面や両側面についても直線的であることから、鋸によって切断加工されたと思われる。反対に、継ぎ手2の上面は節のある部分が山形になっている。木桶を積み込んだ時の底面との厚みが約5 cm ほどあり、継ぎ手2の上面はそれ以下の厚みであるので、節の部分が堅くその部分のみ良好に残ったと考えられる。したがって、上面の形状・加工についてはわからない。

支持受けについては、縦木や横木の遺存状況はきわめて劣悪で、樹種サンプルを取ることも出来ない状況であった。発掘現場での所見によれば、長さ30cm 以上の縦木に5 cm 幅の角棒を横木を差し渡している。縦木には樹皮が遺存している。下面は鋸で切られたままであるので、枕のように打ち付けられたものでなく、据え置かれたものである。

枕木もまた良好な遺存ではない。1は長さ61.6cm、幅9.3cm、高さ8.2cm、2の長さ54.2cmを測るが、それ以外の計測は不能である。節のある芯持ち材を用いて、両端を鋸で切り落とし、中央を木桶幅よりも一回り大きい27~28cmの長さにわたって5 cm 強の深さで「コ」字にカットしている。おそらく両側を鋸で切り込みを入れてクサビなどで割ったと考えられる。1は約8 cmの高さに6 cm 近

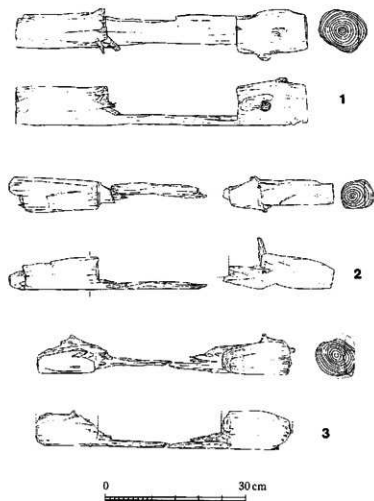


Fig.194 石川門調査区木桶の枕木実測図 (1/8)

くの削り込みを入れるので、木桶設置面の厚みが2cmほどしかなく、最も構造的に弱い部位であり、他の個体でも当該部分の破損が最も大きい。枕木の長さはばらつきがあるが、あまりそれを揃えた作り方になっていないことがわかる。

c) 出土遺物 (Fig. 195)

1は明草南製青磁碗で、軸は高台積み付けにまで及んでいるが見込みが無軸である。胎土は緻密で淡赤灰色を呈し陶器質である。見込みに上に重ね焼きの痕跡がみられる他、高台内に墨書がみられるが何を書いたものかよくわからない。

2・3は肥前系陶器皿である。2は絵唐津で見込みに5mmの小さな胎土目積み痕がある。3は砂目積み痕がある。かなり火を受けて軸が溶けてしまっており、胎土も部分的に白く変質している。3は、木桶2を取り上げたその下から出土し、木桶の年代を示すものとして注目できよう。

4～8は土師器皿である。あまり灯明油痕が付着した資料ではない。見込み周囲に浅い溝がめぐり口縁端部がやや引き伸ばされている。底部から体部にかけてしっかりした作りで明確に作り分けられている。しかし8は底部の厚みに対して厚い体部となっており、端部もまた丸い鈍く作られている。このように二形態が認められるものの、前者が概ね盛土3遺物群の土師器皿に近く、後者が兼六園江戸町跡出土土師器皿に近い印象を受ける。

なお、9は木桶に使われていた鉄釘である。長さ16cm、厚さ6～8mmをはかる。2cmにわたって折り曲げて頭部としている。

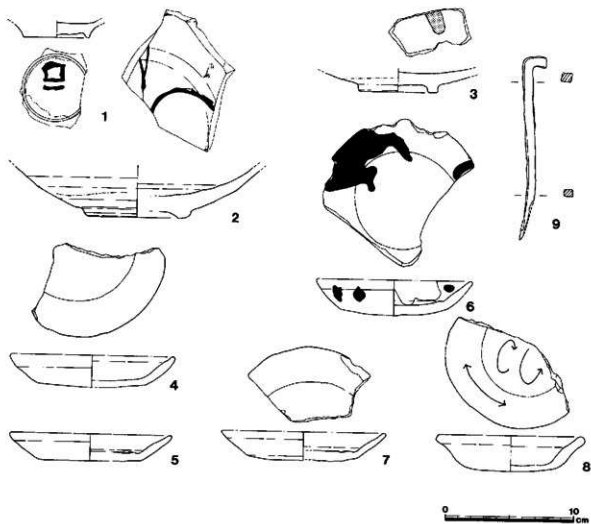


Fig. 195 石川門調査区木桶遺構出土遺物 (1/3)

第2節 辰巳用水石管

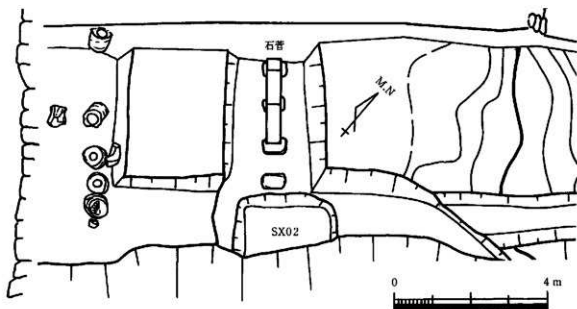


Fig. 196 石川門調査区辰巳用水石管出土位置図 (1/100)

a) 石管の構造と排水溝

江戸時代に敷設された辰巳用水石管をSD 05とした。石管部分は近代以降に攪乱されており、その時の掘削溝をSD 04としている。第4章を参照されたい。

石管の設置と構造

石管はSD 05内で3本確認し、石川門よりの個体はほとんどが調査区外にある。石管上面は破壊されてその砕石が導水部に落ち込んでいた。石管は、一辺40cm、長さは100~110cmを超えるものまであり多様である。石管の長さで違いが認められるほかは、ほとんど同じ形状・大きさである。石管の標高は、敷石面で37.5mである。

石管は掘り方内のほぼ中央に置かれ、連結部を敷石の上のせて、しかもその周囲に川原石を敷いた構造である。水道管切り直し兼六国側調査区で確認した辰巳用水石管は、攪乱を受けていないのでよく構造がわかる。それによると、幅2m強の掘り方はやや播鉢気味になり、その底面に石管がくる。連結部に置かれた敷石下には、拳大から人頭大近くの大きさの石を置いて沈下を防いでいる。石川門調査区で確認した状況と違う点は、敷石下に石を置かないことである。敷石下の構造の違いは、次項で述べる石管下部で確認した木樋関連遺構(SX 04)の掘り起こしによるものと考えられる。なお、石川門側調査区の辰巳用水石管掘り方の正確な形状は、近代の攪乱によって知ることはできない。

石管連結部に敷石を置き、その周囲の掘り方内に拳大の石を敷きつめている。敷石下にも多少礫を置いているものの顕著ではない。敷石の厚みは10cmほどで、石管部分はやや下がった状態になっている。敷石の間隔は一定ではないようで、石川門側から52cm、75cm、55cmで、石管の長さにある程度比例して配置されており、敷石中央に連結部がくるように調節している。

敷石は、長さ60cm前後、幅40cm前後、厚さ30cm近くあり、石管設置面をノミで平滑にしている。堅くて緻密な石である。敷石幅ほぼ中央に直線が刻まれている。これは、石管設置時の石管中心にあたる割り付け線であると思われる。石管にはそれを合わせるためのマークは見当たらないが、おそらく墨書などおこなうことによって敷石の割り付け線に合致するマークを作っていると考えられる。敷石上面をよく見ると、石管がおかれている部分がきわめて平滑になって、若干窪んでいるように

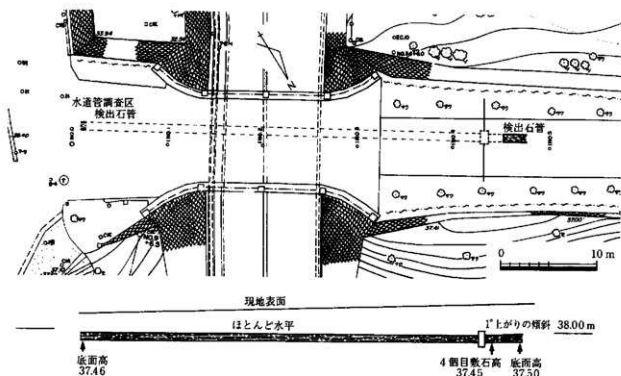


Fig. 197 辰巳用水石管設置推定位置図 (平面図1/400、断面図高低1/200)

なっている。これは設置面が水平になるように磨き込んでいるためであり、刻線はこの後に施されたものである。なお、石管連結部分には、明るい緑がかかった青色になった部分があり、石管からの漏水による変色である。

石管は、敷石に刻まれた直線を基準において連結していく。ほとんど直線で、わずかに南側の1本が方向を違えるのは、近代の擾乱によるものである。石管の傾斜を敷石の高さでもとめると、約1度近くの傾きとなって兼六園側に下がっている。石管検出位置よりも少し兼六園側で用水の最も低い箇所になる。ちょうど近代溜めます(SX01)周辺になると考える。なお、凸と凹の連結部に松脂のような褐色をした樹脂がみられ、石管連結の接着剤として用いられている¹⁴⁾。

辰巳用水石管におき変えられた時期は遺物が出土していないので確定できないが、18世紀末の百間堀石垣の補修痕跡と考えられる埋土を切り込んで石管を埋置しており、通説のように天保年間(1830~1843年)の可能性が妥当であると考えられる。

石管の観察

石管上面には、小口から9cm前後の所の中央に約4×3cm、深さ約3.5cmの方形の穴がある。連結を強固にする締め合わせ用といわれている。小口面同士の接合で石管の連結をおこなう。石管の一方小口面で、導水部際の円周に3.3cm幅の凸帯をめぐらせている。もう一方面ですれを受けける形に小口面を作っている。導水部の円筒は、直径18.0cmでどの個体も同じ大きさである。

石管は凝灰岩から作られているが、水に非常に強く、崩壊や剥落あるいは溶け出すことはない。表面には粗い加工痕が無数に見られ、タガネのような先の鋭利な工具で削っている。連結面は研磨によってきわめて平滑に仕上げられている。しかし、凸部のコーナーは平滑に仕上げながら、その内部は粗く工具痕を残している。また、凹部が平滑に仕上げにくい部位であることから、どうしても隙間が生じてしまい、連結した時の隙間を少なくして樹脂の厚みで隙間を埋める目的と考えられる。

導水部はほとんど直線的で、歪みなく仕上げられている。内部をよく見ると、入り口から30cmほどまでは工具痕が見えないくらいにきれいに仕上げられているが、それより内側には工具の底跡が細長く石管主軸方向に見られ、長い柄の付いたノミのような工具を用いて彫り抜いたことがわか

る。

b) 石管設置以前の遺構

石管を取り上げて敷石を除去し掘り方を精査すると、掘り方にちょうど重なるように土坑を確認した。一つは、S X 01のほぼ下に相当する位置で人頭大よりも大きな川原石を敷きつめた土坑であり、もう一つは、それより50cmほど石川門よりにある方形の土坑である。

当初、近代遺構であるS X 01設置の基礎の範囲がかなり大きかったのであまり気をとめずにはいたが、S X 01と敷石面との間に間層が入ることや土坑の範囲が石管下にまで及んでいることから、近世の遺構であることが判明した。この部分には前項でみた排水溝と考えられるS D 06がその横に位

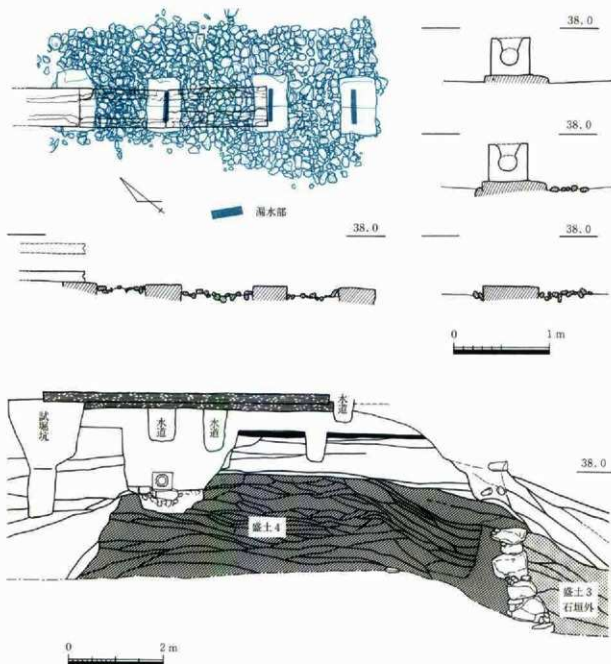


Fig. 198 石川門調査区辰巳用水石管出土状況 (上1/40) と土層関係 (下1/80)

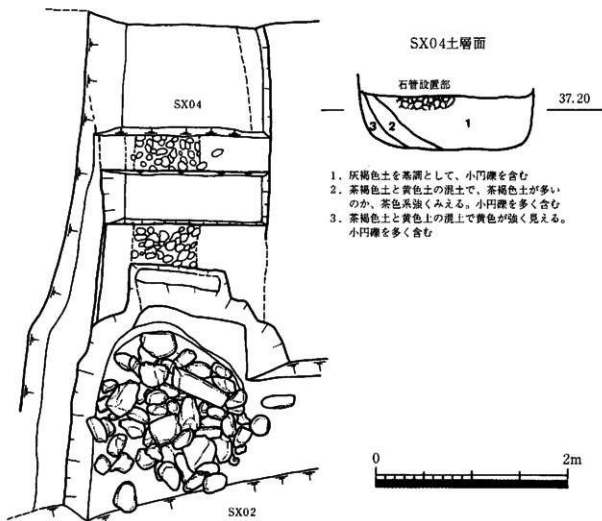


Fig. 199 石川門調査区辰巳用水石管下のSX02とSX04 (1/80)

置していることから、それらに関わる何んらかの遺構とも考えられる。よくいわれるのは、逆サイホン原理に最下部底に溜まる砂を抜く装置が必要であり、その装置の基礎の一部とも理解できようか。さらに近代の溜め構であるSX01がそこに作られた理由として、もともとそこに前身的施設が存在していたためとも考えられる。

また、調査区壁際で検出した方形の土坑は、幅約180cmでほとんど石管掘り方と同じであり、調査区壁で丸く土坑壁が回りそうなので230cmほどの長さであると推定できる。底は平らで、石管設置面から54cmの深さがある。土坑壁はほとんど凹凸のない斜面で同じ傾斜で落ち込んでいるが、底面と丸く接している。土坑の埋土は、褐色系の砂礫土で一気に埋められた状態である。遺物の出土は皆無で土坑の性格はよくわからない。

しかしながら、もし盛土1上面から掘られたものであるとすると、深さ180cmにも及ぶような深い穴となる。盛土4上面からとしても1m近くの深さである。このような深い穴が、石川門への通路という場所でも目的もなく掘られるはずがない。しかも穴は土樋通路の中心にあり、最も通行の妨げになるところでもある。重要な目的を持って掘られてすぐに埋め戻されたに違いない。

単なる推測に過ぎないが、辰巳用水は天保年間に木樋から石管に変えられたといわれており、石管に取り替えられる前の木樋関連の遺構ではないかと考える。盛土5で確認した木樋建設と廃棄が17世紀第1四半期を中心とする時期に考えられ、盛土4施工を17世紀中頃以前と考えたが、城内への導水がインターバルなくおこなわれたとすると、再度設置された木樋の遺構があろう。その木樋

を石管に置き換える時には木樋を除去する必要がある、その遺構が方形土坑と考える。

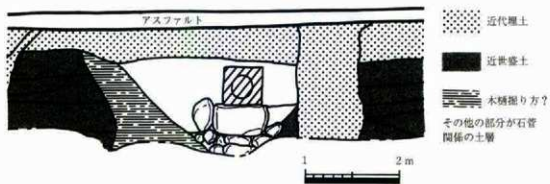


Fig. 200 兼六園側水道管調査石管出土部分土層区分図 (1/40)



Fig. 201 遺物整理風景

第8章 兼六園調査区

第1節 盛土の構成

近代の埋土と基本土層

現石川橋通路下には、石川門調査区と同じように明治の石川橋建設に伴う埋め立て土があり、その層の途中に辰巳用水石管がある。本調査区からわずか1mほど兼六園側では明治の工事掘削が及んでいないので、二つの土層を比較すると興味深い。埋め立て土は、石川門側と同じような、礫と褐色粘質土を混和させたような締まりのない礫土である。石垣から m も離れた地点で川原石の層である石垣裏込め石が始まる。明治の間知積み石垣には、こんなに幅の広い裏込め範囲は不用であり、明治の百間堀石垣裏込めに伴うものと考えられる。

この川原石の続きが石川橋通路下まで及び、百間堀石垣の裏込めには不自然である。石川橋裏込めに礫が使われているが、その可能性があらう。その礫の横に、黄色砂土があり、明治の石川橋の埋め土になる可能性が高い。また、紺屋坂上石垣の破壊痕跡を確認し、これも近代にかかるものである。

江戸時代盛土の關係は、石川門側調査区と基本的に同じである。上より、紺屋坂近世石垣を作っている盛土、木桶掘り方を埋めている盛土、それを掘り込んでいる盛土、金沢御堂土橋の版築された盛土、の4つに区分した。それぞれ、上より、盛土4、盛土5、盛土6に対応する。石川門調査区で確認した盛土2・3は、本調査区で見られない。これは、盛土2・3が白鳥堀照曲部を作り出すための特別の盛土であったということである。

盛土4（その1）

当初盛土1相当と考えたが、石川門調査区盛土4に対応する白鳥堀石垣ののる面が、兼六園調査区検出石垣がのる面にしか考えられないので、盛土4相当と考えた。ただし、石垣構築前と後で大きな工程差があることや、盛土4相当でない可能性も捨てきれないので、本章ではその1、その2として記述する。

大部分が明治の石川橋建設に伴って破壊されている。水道管切り直し調査区で確認した辰巳用水石管の設置状況から、現在の地表面は、幕末当時の地表面とほぼ同じであろうことは、第6章第2節で指摘したとおりである。つまり、盛土1の厚みはほとんど幕末頃のものであり、多少の削平を受けているはずであるが、それほど大きなものではない。

盛土最下部には、黄色粘質土と白色粘質土の混合土が10~20cmの厚みで見られる。この土が兼六園側につづく白鳥堀石垣のベースになっている。水道管切り直し調査区で確認した石垣根石の状態では、根固めや特別な基礎を施さず、盛土の上に直接石材をおいている。本調査区の石垣は既に破壊されているが、盛土最上層（5）が礫層となっており、石垣の裏込めとすると1.5mくらい石垣高となる。

残されている盛土4（その1）の部位は、石垣の背後にあたるということもあって、断面形が播鉢状になっている。灰褐色砂質土やそれに黄色ブロックを含むもの、あるいは礫を含むものなどの土を盛り上げている。水平に積み上げているが、上にいくほど石垣の方（外方）に向かって下がっている。水道管調査区で確認した石垣裏込め石が非常に狭く、根石部分で最大幅50cmほどしかない。しかも裏込め石が直に入り込まずに傾斜をもっていることから、盛土積み上げと同時に石垣構築をおこなったものと考えられる。この石垣構築は、石川門調査区確認の白鳥堀石垣と同じであり、金沢城における石垣構築方法の一つのパターンとして認識できる。

水道管調査区では、盛土は、基本的に水平に積み上げられている。そして、石川門調査区よりも細かい土層状態を確認している。ここでも辰巳用水石管を境にして、南側（百間堀側）では黄色や赤色を呈する色調の砂礫土を中心とし、北側では灰黄色系の砂質土、粘質土が主体である。また、

南側の盛土の方がより細かく分層される。これをたんなる盛土の違いと認識できるのか、それとも盛土1積み上げ後石管設置前に石垣の補修がおこなわれた痕跡と考えられるのか、現状で判断できない。二つの可能性があることを提示しておきたい。

盛土4（その2）

厚さ1m程度の盛土である。土構の主軸中央部分は土饅頭のように積み上げ、一段広がる部分は、斜めに土を堆積させている。このように大きく異なる盛土が見られる。

まず、木掘り抜き痕跡があり、そのうえに暗灰色系の粘質砂礫土や粘質土があり、掘り抜き遺構を北側から覆うようにしてみられる。そして粗い砂混じりの暗灰色粘質土や灰色砂礫土などが厚く覆っており、分層が難しく石川門側と対照的である。この段階で高さ0.7mの土饅頭を作っている。その上に、基本的に水平に土を盛り上げて土饅頭を高くしている。灰黄色系や灰色、褐色系の砂礫土を主とするが、粘質土中には有機物を含むものが多々あり、注意を要する。Fig.204-15上部には、有機物が見られ黒灰色粘質土で旧江戸町推定地の整地土を連想する土がある。盛土中に有機物が見られるには、この部分のみであり、近くの居住地の生活面を削った土を盛土に使っているであろう。

一段広がる部分は、大きく南側から土を入れている。つまり、土饅頭の土構の端から土を入れて平坦面を拡張しているが、土層が調査区外に伸びているので、下端がどこになるかよくわからない。2～5cmの隙ばかりの層があったり、灰色系の砂礫土、砂土が比較的厚く見られる。また、旧表土系の土である黒色砂質土や基盤層の土がみられるなど、盛土4の中では異質である。これは、白鳥堀石垣がのる層や先の有機物を含んだ土でもそうである。石川門調査区盛土4では、砂礫や粘土などを混和させる土を多用しているが、兼六園調査区では、これら以外にあまり手を加えない土も多く使っているという特徴もある。土の供給源が付近の近いところであった可能性と共に、作業エリアが石川門側よりも狭かったために、資材を置く場所が少なかったために土の輸入と盛土使用との時間的な差が短かかったと考えられる。

盛土5

兼六園調査区で確認した盛土5の盛土段階は3ないし4と考えた。石川門調査区と工程数は同じでも、内容が異なる。

まず第1段階として兼六園調査区にも広がっていた遺構面を埋める。本調査区は断面調査を主としていたのでどのような遺構であったかわからないが、木杭や掘り込み、整地面が認められ、白鳥堀調査区で確認した鋳造遺構あるいはそれに関連する町屋的な遺構などの可能性が考えられる。断面に木製品や木屑などが見られ、白鳥堀調査区と同じように木製品の残りは良好である。なお、第二分冊の報告書で当該遺構面について再び触れることにする。

第1段階の盛土は、黄色砂土や炭混じりの暗灰褐色砂質土、灰褐色砂礫土など小さな単位の盛土を水平につんでいる。黄色砂土が目立ち盛土に使う土管選定に際してある程度の注意が払われたようである。しかし、白鳥堀調査区でみた遺構面の埋め立て状況の域を越えるものではない。本調査区と石川門調査区との違いは、斜面の埋め立てよりも遺構面の埋め立ての方が早いということである。

第2段階の盛土は、盛土6からの埋め立てである。暗黄色あるいは灰褐色系の土に砂礫や焼土、炭、灰などを多く混入させており、斜面に流し込んでいる。この段階は盛土6よりも約0.8m高くしているが、その高くする具体的な盛土方法はわからない。第3段階は、さらに土構を拡張する盛土で、大量の上砂が使われている。砂礫土から粗い砂土が主体で、細かな分層は不可能であった。一気に埋め立てられたものである。なお、盛土5上面は水平堆積しているので、たたき締めて地表面を整える工程があったと考えられるが、紺屋坂方（北側）でそれが不明瞭となる。したがって、たたき締めていない部分が実際人間の通る通路であったかどうか疑わしい。

石川門調査区の盛土5と土の状況を対比すると、必ずしも一致しない。そして第1段階の盛土が違うことや、斜面を埋める土の違いがあるなど、異なる要素が多い。これは、城側・兼六園側の両

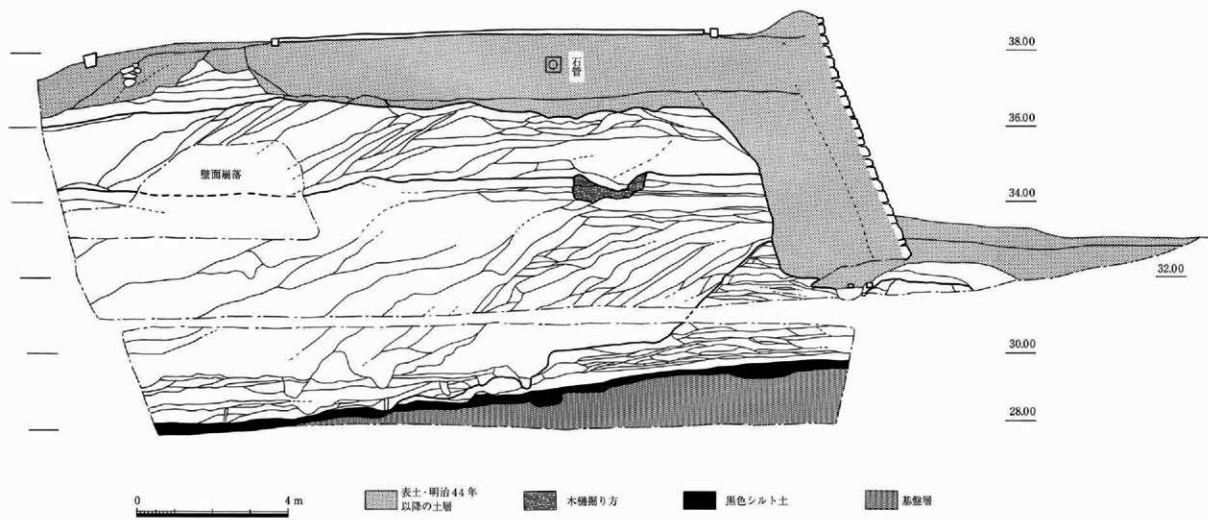
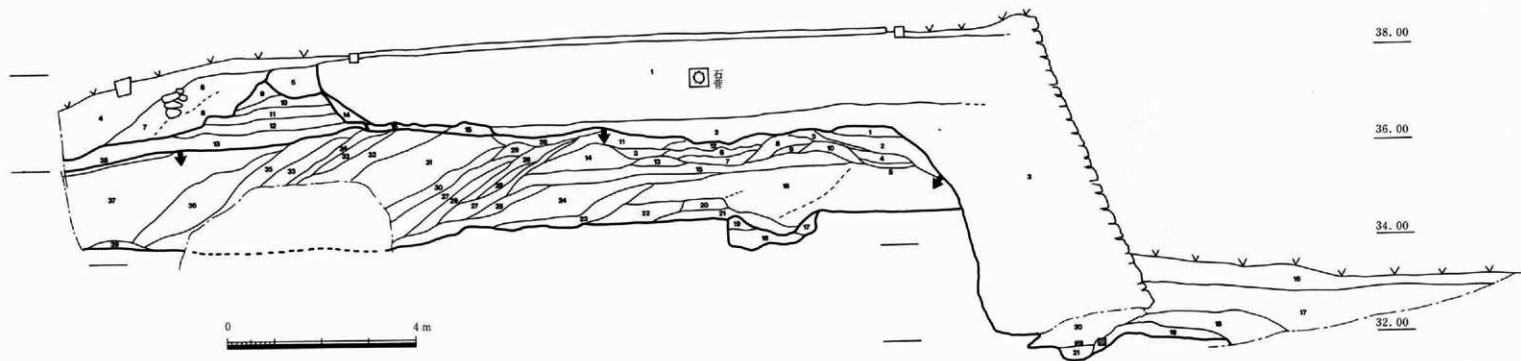


Fig.202 兼六園調査区土層全体図 (1/100)



1. 明治44年の羅土
2. 礫層
3. 礫層
4. 表土 (客土)
5. 礫層
6. 9に近い土だが裏込めの礫多く含む
7. 黒灰色粘質土 (旧表土と考えられ部分的に礫含む)
8. 黒褐色粘質土
9. 1.0の土に黄色砂質土 (地山土) 含む
10. 灰褐色粘質土 (キメ細かい)
11. 暗灰色粘質土
12. 灰褐色礫層
13. 黄色粘質土と白色粘質土の混合せ (地山の盛土)

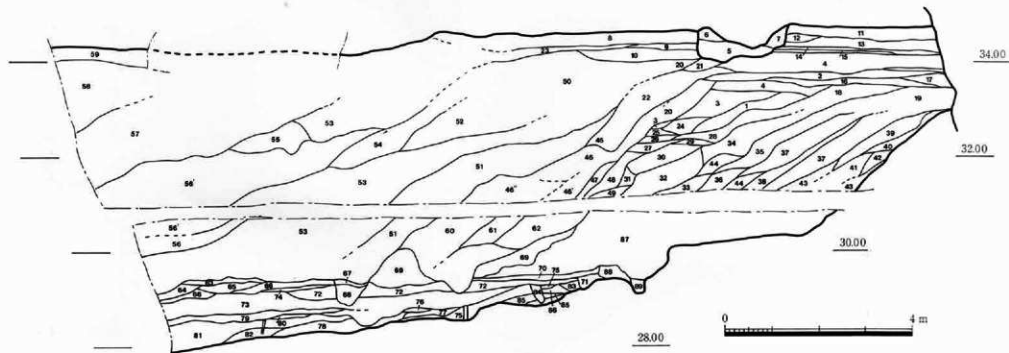
- この土の上に立会調査で検出した石垣がある
14. 黄灰色砂土 (炭粒含む)
15. 1.4よりも砂粒小さい
16. 表土
17. 黄褐色砂礫土 (この層は現石垣の外か下かよくわからない)
18. 淡灰色粘質土 (礫多く含む) 非常にかく根固めの盛土
この土より瓦出土
19. 礫砂土 (灰色~灰黄色、部分的に赤く酸化している)
20. 礫砂土中に小児頭大の石多くあり

全体的に土が汚れているので分層は不可能

21. 20よりもちみつ
22. 暗灰色粗砂土
23. 灰黄色砂礫土
24. 暗黄色砂礫土
25. 黄褐色砂礫土 (粘質土含む)
26. 黒色粘質土 (木片等含む)
27. 明灰色粘質土
28. 緑灰色粘質土 (結まりがない)
29. 砂礫土
30. 暗灰色粘質土 (有機物含む)
31. 35より粘土分多く、粒子も細かい
32. 33よりも明るい
33. 灰褐色砂礫土 (層は1.0cm前後)
34. 緑灰色粘質砂土
35. 24の土に砂礫含む土
36. 黒灰色粘質砂土 (粘土分多く、見欠容の盛土を連想する~有機物や砂礫土が部分的に見られ、分層可能だが現状で無理)
37. 暗灰色砂土
38. 淡灰色砂土
39. 淡灰色砂礫土 (粘性あり)
40. 39よりも暗い
41. 暗灰色粘質土 (砂礫、地山ブロック含む)

42. 暗灰色砂礫土
43. 暗灰色粘質砂礫土 (礫は人頭大)
44. 灰色砂礫土
45. 淡緑灰色砂質土 (礫多く含む)
46. 黒灰色粘質土炭まじり
47. 淡赤灰色砂礫土 (非常に細かい)
48. 砂土 (2~5cmの礫)
49. 黄灰色砂土
50. 暗黄色砂土
51. 灰色砂土 (固く、礫多く含む)
52. 淡灰色砂礫土
53. 5.5と同じだが、よりうすい色である (固く炭を含む)
54. 5.6より黄色っぽい
55. 黒色粘質土 (礫含む、旧表土系の土)
56. 灰褐色砂土
57. 黄灰色粘質土 (地山盛土)
58. 灰褐色砂礫土 (よく見ると分層可能だが、傾斜にあっていよう)
59. 暗褐色粘質土 (塊土、炭を多く含む)
60. 緑灰色砂土

Fig. 203 第六圃調査区盛土4層関係土層図 (1/80)



第六層 盛土5

1. 黒灰色粘質土 (砂土含む)、25と同じ
2. 1の土に崩土ブロック含む
3. 灰色粘質砂土、1よりやや明るい
4. 3の土に砂礫多く含む
5. 淡灰色砂礫土 (粘性あり)
6. 5よりも暗い
7. 淡灰色砂土
8. 暗灰色粘質土礫混り
9. 6の土に砂礫含む
10. 暗灰色砂礫土
11. 緑灰色砂礫土
12. 暗灰色粘質土 (礫混り)
13. 灰色粘質土 (砂土)
14. 緑灰色砂土
15. 明灰色砂質土
16. 灰色砂礫土 (粘土混り)
17. 暗赤褐色砂礫土
18. 緑灰色粘質土
19. 赤褐色砂土
20. 黒灰色砂質土 (粘性強い)
21. 灰色粘質土
22. 灰色粘質土と礫含む
23. 暗灰色粘質砂土
24. 灰色粘質土に25の土をブロック状に含む
25. 黒褐色粘質土 (砂礫多く含む)
26. 淡緑灰色砂土 (礫少々含む)
27. 淡緑灰色砂土 (緑灰色粘土ブロックを含む)
28. 27の土に礫多く含む
29. 黒灰色粘質土 (炭、灰を含む、礫も多く含む)
30. 淡緑灰色砂土

31. 48よりも砂質土である
32. 27と同じだが、礫粒の基礎が細かい
33. 32より砂粒が細かい
34. 赤褐色砂礫土 (黄白色粘土ブロック含む)
35. 34よりも黄白色粘土ブロック多く含む
36. 38と同じだが礫の入る量がより多い
37. 黄灰色砂質土 (粘性高くシルト的)
38. 淡黄灰色砂土
39. 淡灰色砂質土
40. 39よりも艶色強い
41. 43の土に灰白色粘土小ブロックを多く含む
42. 40の土の上に大きな粘土ブロック (黄白-灰色) を含む
43. 灰色細砂土
44. 赤褐色砂礫土
45. 暗灰色粘質土 (砂礫含む)
46. 45よりも粗い
46. 46よりも粗い
46. 46よりも粗い
47. 45よりも砂分細かい
48. 淡緑灰色砂礫土 (部分的に灰色粘土含む)
49. 暗灰褐色粘質土
50. 暗灰色粘質土、緑灰色砂礫土、灰色砂礫土 etc [との混合で木器、植物等を含む正確な分層は、この日程中には不可能 分層不可]
51. 暗灰色粘質土 (砂礫含む) 一暗灰色赤土
52. 53よりも暗い
53. 56よりも砂粒粗く、粘性もある 一暗灰色赤土
54. 53、56の土の互層
55. 56よりも黄味強い
56. 暗灰色粘質土 (あまりしまりない) 一暗灰色赤土
57. 53、56の互層だが、54よりも土が均質な感じ

緑灰色砂土系の土が、
酸化したために、赤
化したものと考えら
れる

58. 暗灰色粘質土 (砂多く含む、やや汚れた様子)
59. 黒色粘質土 有機物多く含むようだ
60. 46と同じ
61. 46と同じか?
62. 46と同じか?
63. 灰色シルト (砂っぽい)
64. 灰色粘質土
65. 明灰色砂質土
66. 65の土の中に灰色シルト含む
67. シルト
68. 砂土
69. 暗緑灰色砂土 (部分的に粘土含む)
70. 褐色粘質土 (黄白色粘土ブロック礫状に含む)
71. 緑灰色シルト (砂粒多く含む)
72. 灰褐色粘質土 (砂、白色ブロック含む)
73. 灰褐色粘質土 (72より粗く、ブロックの入り方が少ない)
74. 灰褐色粘質土 (シルト的で72に近い感じ)
75. 緑灰色砂礫土 (礫の粒子細かい)
76. 黄灰色シルト
77. 明灰色細砂土
78. 明灰色砂土
79. 73よりも明るく灰味強い
80. 灰色砂質土
81. 黒褐色粘質土 (上面に木片や炭化物あり)
82. 灰色粘質土 (シルトを礫状に含む)
83. 暗灰色粘質土 (大きな白礫含む)
84. 灰色粘質土 (砂粒多く含む)
85. 暗灰色シルト (炭粒、灰の層である)
86. 暗青灰色粘質土
87. 暗褐色-灰色 粘土、シルト、砂土、礫土
88. 灰色粘質土
89. 灰色粘土 (礫混り)

暗灰色系土

よく似ている

Fig. 204 第六層調査区盛土5土層図 (1/80)



Fig. 205 兼六園調査区盛土6土層図 (1/80)

側から盛土工事がおこなわれたためと考える。

盛土 6

兼六園調査区で確認した盛土 6 の土横は、その背後を検出したことになり、池側のついでには発掘調査が及んでいないので具体相は不明である。基本的な盛土状況や使われている土は石川門調査区と同じであるが、土層観察時の認識が、石川門調査区の時と違うこと、本調査区盛土 6 が近世の石垣普請と近代の石垣構築によって大きく破壊されているので、直接的な対比は困難である。なお、石川門調査区と同じように黒色土、黄色土、混合土が主体として使われている。

谷の埋土上には、砂を多く含む褐色粘質土層が厚く見られ、石川門調査区の第 1 段階盛土に相当する。兼六園調査区は、比較的地盤がしっかりしており、そのために第 1 段階の盛土方法が異なるのであろう。また、兼六園調査区の際はすぐ近くまで丘陵が迫っていると考えられ、石川門調査区のような長い作業路を必要としない部分でもある。第 2 段階の作業路も違う。まず背後に黒色土を盛って凹みになった作業路に混合土や黄色土を埋めて次の作業路としました黒色土を盛るという工程である。その盛土単位が高さどれほどまでにおこなわれているかわからない。また、石川門調査区で見た土横の地表面の丁寧な盛土との関係はわからない。

土横背後は、石川門側と異なって急斜面となっており、しかも凹凸が激しい。本地点は山が迫っている関係で、その方からの雨水の流入が多かったと考えられ、それゆえ盛土がある程度削られたのであろうか。また、黒色土層にある溝を雨水溝と考えると、この付近まで盛土 6 が及んでいると考えられる。

第 2 節 辰巳用水石管と木樋遺構

兼六園調査区で検出した辰巳用水石管は、明治 44 年の石川橋建設後に再度埋納されたものであり、木樋遺構についても、抜かれているので江戸時代の様子を知ることはできない。

木樋遺構は、幅 1.9m、深さ 0.6m の溝である。石川門調査区では、もう一回り幅が狭く、深さは約 0.9m である。地形的に兼六園側が石川門調査区よりも高いようなので、削平の度合いが大きいのであろう。溝の底面は凹凸があり、特に北側の凹みが著しい。掘り方下部には暗灰色粘質土があり、淡灰色砂土がその上にある。下部の土は木樋埋設当初の埋め土と考えられるが、淡灰色砂土が当初からのものかそれとも木樋抜き取り後のものか判断できない。石川門調査区では、木樋掘り方掘削土をそのまま埋め戻しているので、ここでも同じ方法であるならば、淡灰色砂土は抜き取り後に入った上ということに理解される。

木樋に関しては、石管と対比する必要もあるので、第 10 章で改めて論じる。

第9章 石川門前土橋の石垣

第1節 石垣調査の方法

石川橋建設工事によって道幅が広がるので、現状の石垣を部分的に撤去し、一部復原する必要があることは第1章調査に至る経緯と経過で述べたとおりである。現在の「百間堀通り」は、百間堀を埋め立てて作られた県道であり、その通りに面する石垣は明治43~44年の建設工事に積まれたものであることは明白である。

工事によって影響のする石垣部分を記録保存する必要を認めるものの、明らかに明治の積み直しについては除外することとした。一方、石川橋両側の石垣は、橋本体の橋脚の掘り方部分の石垣もまた積み直しされた部分である。そこで、道路に面していない部分の石垣の実測調査をおこなうこととなった。兼六園側石垣は、整備な間知積みで一見して新しい印象を受けるが、百間堀を埋め立てる前の兼六園側の石垣に関する写真記録が皆無の状態なので、それを検証することはできない。したがって、当該部分も調査をおこなうこととなった。

石垣の調査は、写真実測によるものである。測量業者から上がってくる図化素図の校正は、対象遺構が非常に密であること、図化技師と調査者の目指す表現方法が自ずと異なっていることから、通常の校正方法では無理である。そこで、図化素図の上にマイラーベースをかけて新たな図面を作るという校正方法にした。そしてそれをトレースした。

校正作業は、平成4年度の現地調査の終了後の冬場におこない、写真を適宜立体鏡をのぞいておこなった。石材表面には、各種の刻印が刻まれていることはよく知られたことであり、今調査でも雪の溶けた4月上旬になって石垣にのぼって一個一個の刻印の形状を確認した。

調査した石垣は、百間堀通りを境に石川門側と兼六園側に分かれ、さらに江戸時代の堀名である百間堀、白鳥堀という区分けもできる。したがって、それぞれの地点を組み合わせて、石川門側百間堀石垣、同白鳥堀石垣、兼六園側百間堀石垣、同白鳥堀石垣とする。

第2節 百間堀の石垣

a) 石垣の構成

石垣の高さ約8mをはかる。当該石垣は、何回か補修の積み直しがおこなわれたようであり、それによって石垣の傾斜角度も変わっているほかに、石垣の孕みによって中膨れしている部分も多い。明治の石川橋建設に伴う石垣の積み直し範囲は、第1章のFig.14で示した。これは、石川橋橋梁近くは小さく削った石材の間知積みとなっているが、地表近くになって交互に落とし積み手法も見られる。しかし、近世の石垣に連続させるために、一見してそれと違和感の無い積み方をしている。どこまで明治期の積み直し範囲か識別し難いが、石の保たせかけるような置かれ方して発掘調査中におぼろげに記憶している橋梁裏込め範囲から推定したものである。

調査区土層断面図で確認した石垣の補修掘削落ち込みの、補修をおこなった石垣の高さは、No.8の断面から見ると、標高33.4mの根石から上4目目から補修していると考えられる。これは、ちょうど現状床面表土以下の石垣が石垣構築当時のままであることになる。この部分は、根石の根固めの盛土や石をおいている部分であり、それが現在にいたるまで機能しているのである。そこで、発掘調査で確認した根石から上3目目までの石垣を見てみたい。

普請当時の石垣

普請時の石垣は、幅9m、高さ1.5mである。根石ののる胴木の状況は、本節b項に記した。この石垣と修築された石垣の間は、石垣解体時に調査担当のミスで石材を欠失させてしまったので、二つの石垣の構築の不連続性を具体的に検討することはできない。印象として、二つの石垣の構築方法に大きな違いはなく、違和感のないものである。ただし、普請当時の石垣石材の控えの長さが

150cm近く有り、それより上の石材よりも長い傾向にある。

根石は、石材小口面を外にした時に最も安定した面を下にしているわけではなさそうである。となりの石材に保たせかけるように不安定におかれた石材もある。これらは、あいた空間に石をおとしこんでいるかのようである。つまり根石をおく時に、複数箇所からおかれたことを示す。また、必ずしも大きな石材を根石として使っているわけではなく、小口面で幅50cmの小さい石材も見られる。根石を埋め込む意図をもっているためであろうか。

根石は、胴木から10cmほど面をだしてあり、胴木外に約2m間隔に打ち込まれた杭に前端をのせている。これらの杭は、掘り込みの後に打ち込まれたものではなく、盛土6に直接打ち込んでいる。調査区断面で確認される盛土6への石垣構築に伴う掘り込みは、胴木から15cm程度の幅しかなく、ほとんど根石と掘り込み面が接する状態である。掘り込みが小さいほど埋め込み量が少なくなり、より安定したものとなる。したがって、最小限の掘削に押さえるための、掘り込み掘削掘り付けのための杭であり、同時におそらく水系を結びつけて石垣の根石前端を合わせる石垣構築掘り付けの目的もある。

石積みは、水平積みを基本とし、間詰め石があまりない。しかし、石材の並びからすると、石材の高さに凹凸が見られ、この点である程度の石の上端を揃えている修築後の積み石と異なる。また、同じ刻印が近くにまとまる傾向にある。反対に、白鳥堀石垣では各種の刻印が見られ、共に本来的な刻印の姿を示すものとして、白鳥堀石垣とともに重要である。

現状の石垣

現在の石垣は、幾度かの補修が加えられているはずである。第7章第2節で確認した石垣の補修がある。文献から石川門周辺の石垣修築・補修記事を拾うと、明和二年（1765）の石川門橋台石垣の修築、天明三年（1783）の石川門石垣積み直し、寛政十一年（1799）の大地震、文化二年（1805）の石垣修理、安政二年（1855）の大地震、がある。これらの記事が、石川門前石垣のどの部分であるか本報告では具体的に明確にし難いが、文献記事に残されていない小さなものなどを加えると、さらに多くの補修があると思われる。

さて、工事で積み直しとなる石垣撤去の時に、江戸時代の石垣天端の様子を観察すると、方形のホゾ穴をもつものが、約2.5m間隔で3個確認できた。さらに当初全く意識しなかったが、石垣解体中に、石材の中に平らにされた一面にホゾ穴を穿ってあるものがあった。石材打割のためのホゾ穴かと考えたが、きれいに成形していることや1個のみの穴なので、その可能性はない。土橋の両側の石垣際に木を立てて紐等を通して欄にしているものと考えた¹⁹。

石垣の積み方を記述するにあたっての筆者が観察したポイントは、次の通りである。石積みは、基本的に水平になるよう積み上げているが、石の配列はどうしても波をうっているようになる。ところどころそれが不自然にとぎれる部分がある。横目地崩しというように意識的に目地を通さない方法もあるが、しかし、ここでいう不自然さとは、石の大きさが異なったり、落とし込むようにしていたり、石を縦位にしていることなどを指している。また、縦方向の目地が異様に目立つ部分も



Fig.206 石材上に掘られたホゾ穴



Fig.207 石材上に掘られたホゾ穴

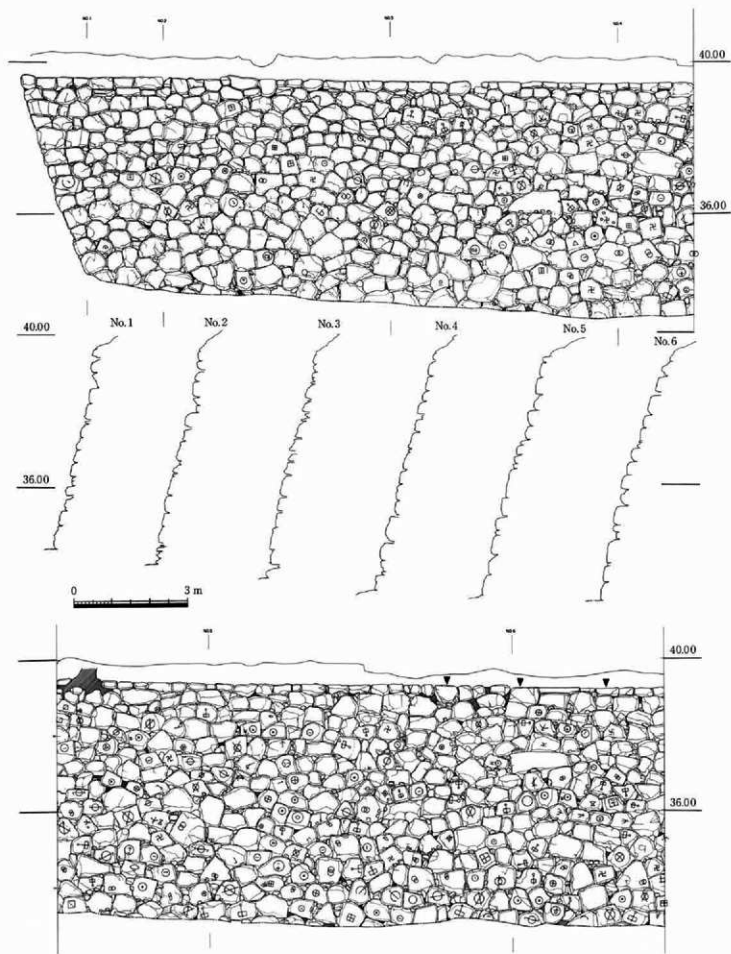


Fig. 208 石垣 百間巖石垣1 (1/100)

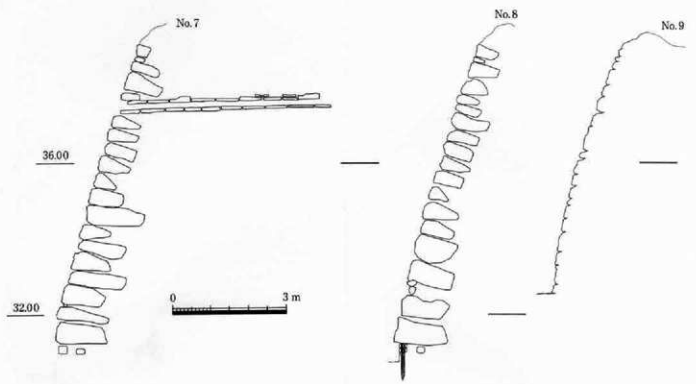
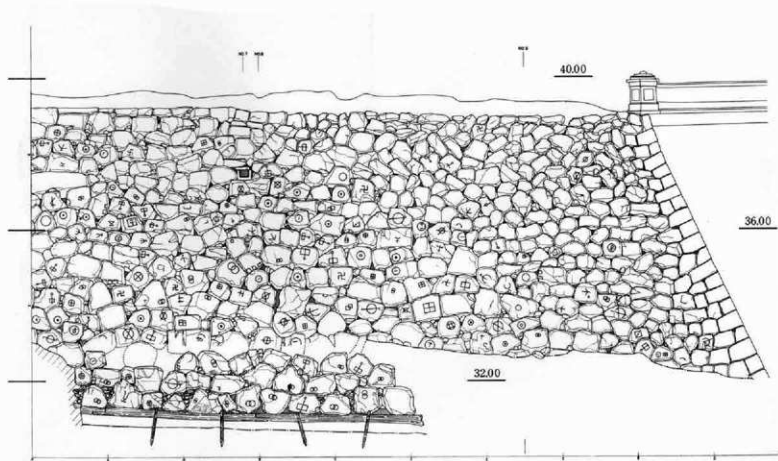


Fig. 209 石垣 百間堀石垣2 (1/100)

不自然な部分といえよう。

このような観点で百間堀石垣を見ると、7ヶ所ほどの不自然な部分を確認できた。Aの部分は明治44年築造の石川橋建設に伴う掘削部分であり、石垣の積み直しがおこなわれた部分である。石材は、石川門側に重心をかけるように保たせかけており、積み直しと考える。また、SD06出水口から真下に縦目地がとおる（矢印）。石垣の他の部分の縦目地よりも広く趣を異にしており、この部分（B）も明治期の積み直しがなされた可能性がある。したがって、これ以外の積み直しと考えられる部分は、全て近世におこなわれたものである。

Cでは縦目地が顕著であり、左右からの石の並びがCの中央部分で乱れている。そして、Iも斜め方向の石の不連続がCに連続する。D、E、Fでは落とし込むような積み方である。特に、落とし込みの下から2～3段は、その範囲の中心に向かってさがった石積みとなっている。Gについてはよくわからないが、石材が若干落ちこんでいる。Hでも大きな石材が下に2段分落ちこんでいる。Jでは石の並びが石川門側よりも乱雑で縦目地が目立つ。Kは石材C下の石のおき方が不自然であることから推定した。

これがどこまで妥当であるのか本報告書で検証できないが、先に見たように、石川門周辺での石垣修築記事が多く見られることから、その可能性は少なくないと考える。石垣の下部からの石垣の修築となると、下部周辺では石材が落ちこむような状態となって積まれるが、上になるにしたがって安定した積み方となっており、それまでの積み方と違和感なく積まれてしまう。したがって、上にいくにしたがって補修の痕跡を見出しにくくなるので、分かりにくくなるのである。

石垣の石材は、築石面には大きいもので1m近くもある石を用いているが、多くは60cm前後のものである。控えの長さは、120cmほどのものが最も多く、小口面2尺角、控え4尺という単位があるようである。大きな石材でも控えが150cmもあるのは稀であり、長さに関してはある程度のまとまりがある。上から3分の1より上の石垣石材の控えの長さが極端に短くなって、80～100cmである。これを積み直しと考えるのか、それとも土橋上部の石垣圧力が下にかからないようにする意図なのかかわからない。つまり、石川門前土橋のみで

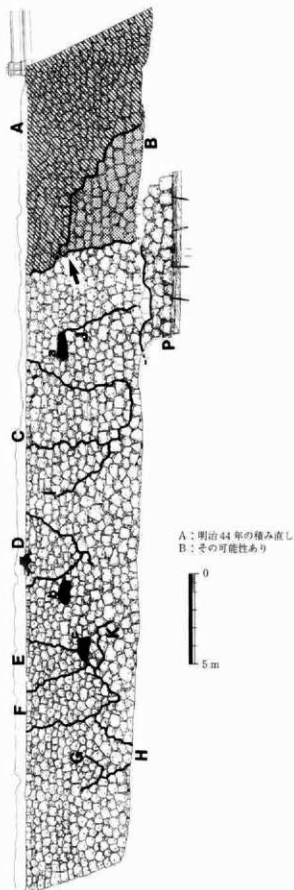


Fig.210 百間堀石垣積み石状況 (1/200)

見られるのか、それとも金沢城の他の石垣でも見られるかである。

このような石材を水平に積み上げているが、横置きにこだわっていないようで、縦位置に使われている石材も多い。そして、川原石の間詰め石の目立つ部分とそうでない部分とがあり、石材の使い方によるものである。普請当時の石垣には石材の間に空間が大きく見られ、間に石が入っているが、手で簡単に取れるものもあり、間詰め石になるものと、ならないものがありそうである。割石の石積みでは、石の端よりそれよりやや内側にあった石が1番石として石材固定に重要であり、その点で間詰め石を見る必要がある。石材の規格があるようだがかなり個性をもった形と大きさである。同じような積み方である車橋門跡の石垣2とは違うものとなっている。

石垣には、わざと大きな石を配する方法があり、陰陽石ともよばれているが、本石垣にもa、b、cの3つがある。いずれも長さ150cmもあるが、aの控えは以外と短いことを石垣解体時に確認した。石川門前石垣の石材の控えの長いものは150cm近くもあるが、短いものは1m未満である。aは短い部類に入る。bも手を入れてみると短いことがわかる。一般的には、表面に見えている部分の2~3倍の長さの控えが必要と言われており、それゆえa~cは不安定な石材と考えられよう。しかし、控えの短い石を積むことを可能にする技術をもつものであり、大手門石垣に鏡石を配する技術に通じよう。

陰陽の石垣にすると、横置きのおおきな石の数が少ないことや規則性をもって陰と陽の配石となっていないので、違う要因で組まれているものと考えられる。よく見ると、補修の痕跡に位置するかどうかは石の近くであることがわかる。このような長い石は、控えが無い分組み方が難しいであろうが、半面築いたあとに目立つという効果がある。つまり、構造上の弱さや技術的な困難さを克服してまで横長石を使うのは、目立つという機能を重視したためであろうか。補修痕との関わりで考えると、その位置を明示するものとして機能していると考えられる。

刻印について

金沢城には数多くの刻印が認められている。この中には、相似形であるが大きさにかんがいのばらつきがあるものもある。また、刻む時に丸を意識したのかそれとも四角を意識しているのか判別し難い。また、同じような刻印でも、巧いものと下手なものもあり、一見すると違う種類と思ってしまう。したがってそれを別種と考えるとかなりの刻印種類になってしまう。また、風化や欠損によって刻印の一部が判別し難いものも多々ある。したがって、刻印を記す工人がどのような刻印を意図して作業をおこなったか、という型式学的な認定をおこなってはじめて刻印の種類が確定できると考える¹⁸⁾。

石垣修築には、全て新しい石材を使うはずがないだろう。崩落した石材を引き上げて使えるものは再利用して不足分を補充すると考える。そして、石垣の再構築に用いる石は、小規模なものであるが、崩落前の範囲のどこかにおさまると考えられよう。このような視点で刻印の分布を見ても必要かもしれない。今回のせた刻印の分布がどのような意味をもつかわからないが、一つの情報として報告する。

b) 根石の構築

百間堀石垣の根石は、9m近くの長さを検出した。根石は複数本の胴木の上のり、約2m間隔に打込まれた杭を石垣の前端にしている。根石部分は盛土6を掘り込んで作られており、胴木は掘り込んだ盛土に直接おかれているようである。ただし、兼六園調査区壁面で確認した胴木下には、礫土とともに細砂土が入り込んでおり、当初の構築状態であるかどうかかわからない。

胴木の築石面側は一辺20cm四方の角材で、全容のわかる1本の長さは4.6mである。控え側の三本目と胴木の継ぎ手部分と同じ位置にくることから、いずれもほぼ同じ長さで規格化されたものと理解できる。胴木は全て心材を用いている。胴木の一端を長さ40cmにわたって半分切り落とし、もう一端を逆の半分を切っている。そこに直径12cmの穴をあけている。胴木の連結は、半分に切り落とした継ぎ手同士を重ねて、二つの重なり合う胴木の穴に長さ1mの杭を打込んでずれるのを防いでいる。

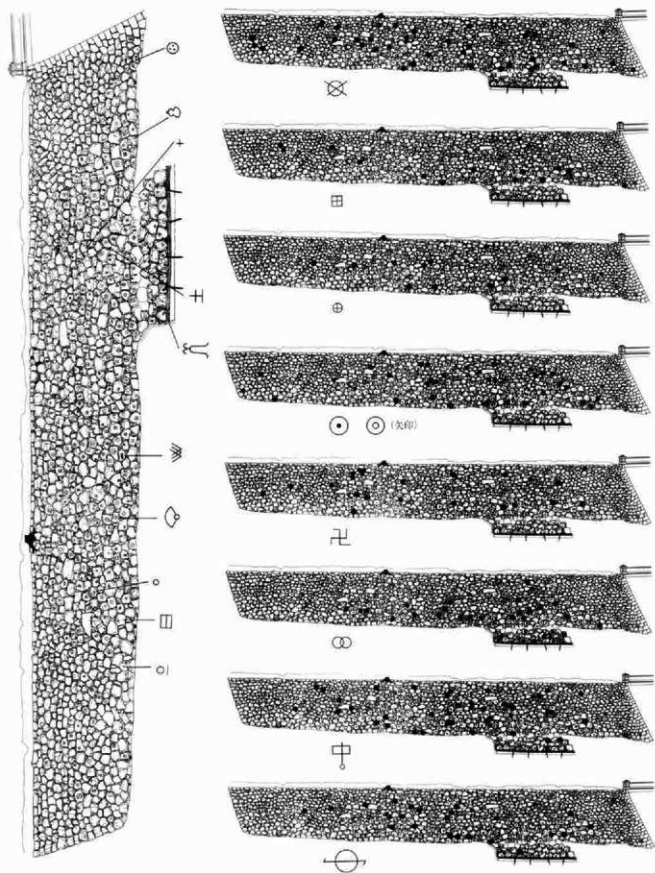


Fig. 211 百間堀石垣刻印の種類と分布(1)

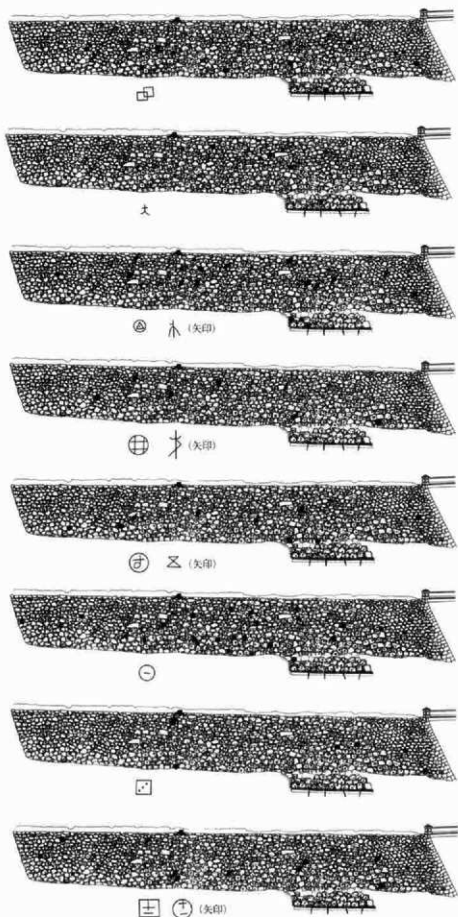


Fig. 212 石間堀石垣刻印の種類と分布(2)

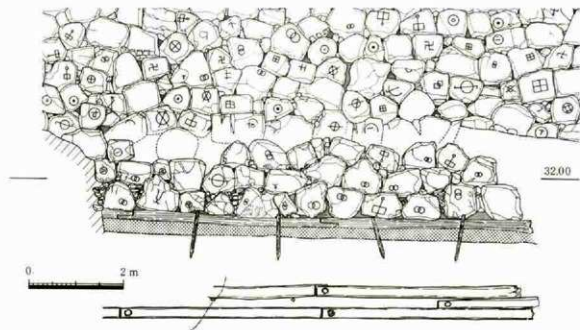


Fig. 213 普請当時の百間堀石垣と駒木 (1/80)

築石面にある駒木は、角材の四面ともきれいに加工した木材であるが、内側の駒木は上下のみ平滑に整形し側面未加工にしている。厚みも約16cmと薄くなっており、自然と勾配がでるように工夫されている。石川門側から7mほどで駒木が3本となり、互いに密に接するようになる。この付近より旧地形の谷の埋土が厚くなって地盤が軟弱になるので、根石設置面強化のために3重の駒木になったと考えられる。

駒木の設置は、根石の前半分しかかかっておらず、控えの方には栗石を下に敷いている。上からの石垣の力がかかっても以外と栗石がめり込んでいないので、盛土6の地盤の強さを物語ると同時に、石垣控えには以外と力がかからないのかもしれない。また、裏込め範囲も盛土6中では非常に狭く、根石部分では幅2.5mほどの広さという人が作業できる最低必要限の空間しか確保されていない。

駒木から少し離れて直径6cm、長さ1mほどの木杭を2m間隔で打込んでいる。いずれも築石面きわに接しており、石垣設置の基準になるものであろう。具体的には、木杭に水糸をつけて根石の前端を揃えるものである。

根石周辺は、土とともに裏込め石と同じ川原石が隙間に埋め込まれ、いわば根石が川原石で巻かれているようである。そして、根石から少なくとも2石までは、後世に補修された痕跡は見られず、築造当初の状態を保っている。これは、根石から二石までは盛土中に埋め込まれる状態となるため



Fig. 214 百間堀石垣の駒木の杭



Fig. 215 百間堀石垣の駒木の接続

に、根固めがしっかりしており非常に安定した石垣となったことによる。

なお、石垣際からの遺物の出土は皆無である。わずかに珠洲焼甕体部のみ1片出土しているが石垣の築造時期を示すものではない。また、百間堀石垣も白鳥堀石垣と同じように盛土構築と同時に石垣普請されたと考える。

c) 調査区断面で確認した百間堀石垣補修痕跡

第6章で記述したが、重複するものの確認する意味で要点のみ記述する。

百間堀石垣裏込めの内側に、築石面によって縦に走る落ち込みの埋め戻し痕跡を確認した。石垣補修掘削痕跡は、盛土1が盛られる以前の表土から掘り込まれたと考えている。したがって、盛土1は石垣補修落ち込みを埋める目的と、土橋のかき上げする目的の二つがある。前者が第1段階、後者が第2段階とする作業工程で、埋め立て作業は石垣普請と同時に並行でおこなわれた。

第1段階は、まず落ち込み底から2m近く水平に灰褐色礫層を主体とするが赤褐色礫が層となって途中に入る土(22)を盛っている。この土の横方向の土の動きである。これより上は土橋側から土を入れている。まず灰褐色砂礫土(9~12)を入れている。この層の単位はかなり大きき。これによって、落ち込み土がほぼ水平になり、工程の第1段階が終了する。第2段階も石垣構築と同時に並行であるが、土橋全体に土を盛り上げている。下部には灰褐色砂礫土(6)、上に赤褐色砂礫土(4、5)があり、ほぼ水平にしている。これでほぼ石垣修築の大部分が完了する。この修築がどの程度の範囲でおこなわれたか全くわからない。また、その時期についても、盛土4構築後、辰巳用水石管導水前という大きな時間幅の中で考えねばならない。

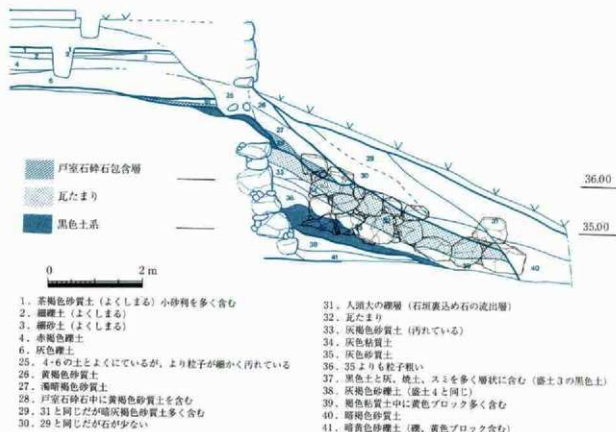


Fig. 216 石川門調査区白鳥堀近世石垣屈曲部と石垣外の堆積合成図 (1/80)

第3節 白鳥堀近世石垣

a) 石垣の埋土状況

石垣は完全に土中に埋まっていた。この石垣が見つかるまでは、白鳥堀側の近世石垣は明治の石川橋建設によって完全に壊されたと考えていた。しかも盛土3の掘り下げ中に検出されたので、遺物取り上げと土層の混乱など矛盾する点があるかも知れない。

白鳥堀土手の表上下には、人頭大の川原石からなる層があり、暗灰褐色砂質土～粘質土が石と混在し、その入り方で分層している。この層は、石垣裏込め石と考えられ、白鳥堀石垣崩壊時に流出したものである。この層よりも土橋側（内側）には、黄褐色砂質土とそれよりやや暗い土となっており、表土系の上である。さらに下には、戸室石の砕石層が石垣上から外側に堆積している。この砕石層は、盛土3上面に部分的に見られた戸室石砕石層とよく似ている。調査時において、この下に瓦溜まりと焼土、黒色土層があったために盛土3と同一層と理解した。

石垣天端が不揃いなことや、黄色砂質土が50cmの厚みで見られ石垣上面を覆っている。この土を盛土1の下面の上というよりも、盛土4を構成する土と考えられる。それは、黄色砂質土より上にある暗褐色粘質土が薄くあり、盛土4上面の土の堆積状態と同じであること、盛土4上面が裏込め範囲で約20cm落ち込んでいることから、そのように判断した。すなわち、戸室石層は石垣天端の崩落に伴って裏込め石が飛出し、上にある土層が落ち込んで外に流出したものである。

さて、この戸室石砕石層は、石垣積み上げる時に石を削って調整した残り層である。その層が盛土上面近くに分布するという事は、天端の石に細かい調整がおこなわれたことを示し、石垣の屈曲するコーナー故に多く堆積したと考えられる。

近代の石垣崩壊層とその下の近世石垣崩落土の下に、盛土3のような堆積土がある。瓦溜まりの下に灰褐色砂質土や灰色粘質土、灰色砂質土が比較的均一にそしてかなりの厚みをもって存在する。しかもその下に灰、焼土、炭を多く層状に含む黒色土があり、盛土3よりも層の単位が大きいという特徴がある。これらは、もしこれが石垣崩壊に伴う内部の盛土3の流出を考えた時に、土質の均一さから、この考えは否定される。石垣外側の土層図と白鳥堀屈曲部石垣とを重ねると、次のようなことが指摘できる。それは、石垣が残っている範囲は、ほぼ盛土3に相当する層の範囲に合致する、ということである。石垣が土の存在によって崩壊から免れているのであり、根固めとして機能していることがわかる。

盛土4と盛土3の土層関係を知ることができたが、明治期の石川橋躯体掘り方によって土の連続する部分が破壊されてしまっていた。土層を検討することによって盛土相互の関係を知りえなかったので、論理的に土層関係を解釈することができない。その結果、このような結論になったが、石垣を構築してそれをほとんど埋め込むという矛盾するかのような行動である。しかし、土手の上に石垣を築くという、いわば不安定な部分に石垣を構築するという点で、このような方策が取られたと考える。

b) 石垣の構造

近世の白鳥堀石垣は、途中から一段広がった平面形態をしており、検出した石垣は、この広がる屈曲部を検出したことになる。大きさは、屈曲部で長さ4.7m、白鳥堀に面する石部分で長さ1m、高さは2mである。石垣の先端は欠損しており、隅角部までさらに延びる。そして、石垣は盛土4の構築と同時に作っていることがわかる。盛土2、3は盛土4と同一時期構築盛土と考えられ、白鳥堀の一段広がった部分の盛土である。検出石垣は、これらの崩壊を食い止める施設として百間堀石垣とともに普請されたと考える。なお、記述の便宜上、屈曲部から白鳥堀方向を石垣屈曲部、石川門方向を白鳥堀石垣部と区別する。

屈曲部石垣は、13度ほどの傾斜面に作られている。先端の2石はややずれたような状況だが、概ね築造当初の姿を保っている。根石下には、百間堀石垣で見られたような胴木のような施設は見られず、盛土上に直接おいている。根石は、灰褐色砂礫土や砂質土の上においている。この土は、盛

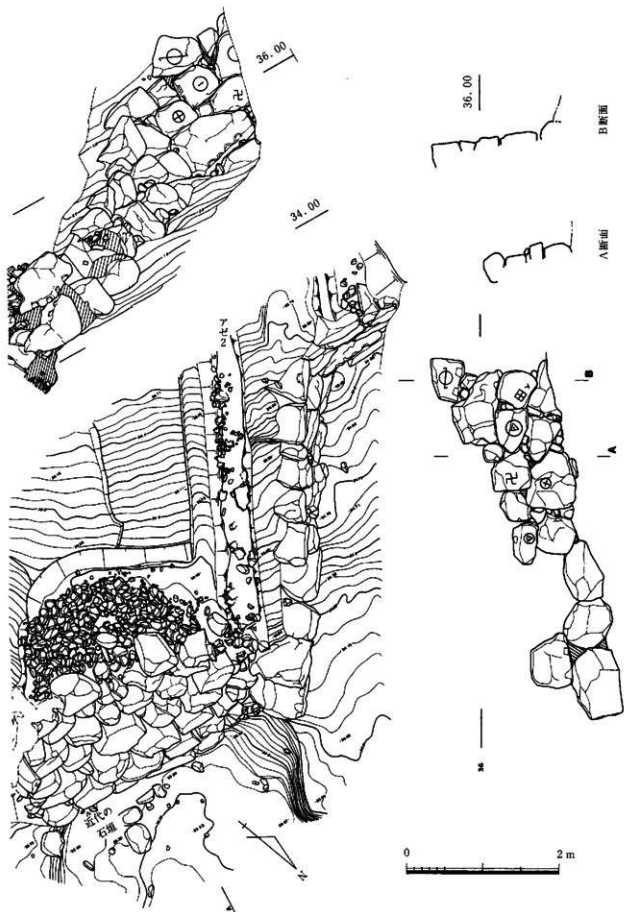


Fig. 217 石川門調査区白鳥堀近世石垣図 (1/50)

土4と同じ土であり盛土構築とともに、石垣据える位置の造作と見てよい。さらに、礫を多用して根石の安定をはかり、盛土3と同じ土を用いて根石が半分以上隠れるくらいまで埋め込んで根固めしている。先端部の4石ほどの根石が露出しているが、根固めの土が流出したものと考えられる。

積み上げ方はほぼ水平に段を作ることができるように石を配置しており、地形的に低い方から石をおいている。したがって、低い方では2段目の石でも土構の方では根石になる。それより上の石垣の石のおく順番はよくわからないが、低い方からおくということはなさそうである。現状の根石の高低差は50cmほどあり、石積み2段で高低差を解消しているが、既に破壊されて現存しない先端の隅角部との高低差がどれほどあったかわからない。

入り隅部の角度は、130度の鈍角で屈曲してほぼ現在の土構と並行する。より正確には、もう1回緩やかに屈曲することによって、完全に並行する。築石面の積み方については、わずか1mの狭い範囲なので、その特徴はよくわからない。屈曲部石垣の積み方と基本的な積み方の変化はないものと思われ、水平を意識した布積みである。入り隅部は、角度が鈍角であることや、石の組み込み位置が石材の大きさによって左右されるために、直線的な隅角とならない。隅角の強度を強めるために両方からの石材を互い違いに組み込んでいる。

石材表面には刻印が見られ、ほとんどが百間堀石垣に共通する。積み直しはないようなので、築造当初の姿である。刻印の配置に規則性はないようであり、

石垣の裏込め範囲は、根石部分でわかる。築石面から2.5mまでで、長い石材で1mあることから、裏込め範囲は1.5m程度と思われ、地表に近くなるほど狭くなる。石垣は、盛土4の盛り上げとともに構築されており、土構内側に核になるような土の盛り上がりがある。それで石垣裏込め石の溜まる落ち込みを人為的に作り出し、石材をおいて裏込め石を入れる、という順序の反復である。

まず根石部分を埋め込み、次に3石目までの単位で土盛り裏込めをこなしている。当該部分までの盛り土の単位は20~30cmあるいはそれ以上もあるように、比較的大きな単位である。それより上の石材に対応するもりどの単位は非常に小さく、10cm強の厚みしかなく、しかも一つの土の単位が小さく、こまめに土を盛てるようである。裏込めの範囲も急激に狭くなり、50cm前後になる。これは、細かな単位となる盛土が裏込め石外側を固める役割を持っているためであろう。

なお、百間堀石垣も白鳥堀石垣と同じように盛土構築と同時に石垣普請されたと考える。

第4節 近代の石垣

㊦ 白鳥堀近代石垣

白鳥堀の近代石垣は、川原石を多く用いるなど他の面の石垣と大きく異なっている。しかし、SD01の排水口の石垣が川原石であり、この点に限って共通する要素である。また、途中で戸室石の間知積み（Fig.218の網部分）が見られたり、幾度かの掘削改修がある。おそらく、白鳥路公園地の土地利用に大きく関わるものであろう。

石垣は、明治の橋梁掘削部を一段下がったようになって高さ3.5mあるが、あとは高さ1m内外の石垣が細長く続いている。石垣をよく見ると、橋梁掘削部の石垣は戸室石を用いる隅角部近くと、戸室石を用いながらそれに保たせかけるようになっている石の不連続がある（矢印A）。さらに、石垣が下がり始まる部分で石垣の崩れがあり、これ以降川原石によって構築し、先の指摘した石垣補修がある。このように、狭い範囲ながら各種の石積みが見られる。

隅角部の石積みは、他の面の石垣と同じ間知積みであるが、根石に大きな川原石を用いている。よく積み方を見てみると、隅角部の石間に隙間が見られ、緩んだようになっており、これが石垣の経年変化によるものかそれとも積み直しによるものかわからない。根石の状態が違うので、積み直しの可能性も大きい。

この石垣に保たせている石垣の根石もまた川原石だがより小さい石材（石垣石材よりも小さい）を使っている。石垣には戸室石を用いて水平に積むことを指向しても非常に乱雑な積み方で部分的に谷落とし積みも見られる。下方ほど小さな石材を用いる傾向で、石積み職人が入念に積み上げた

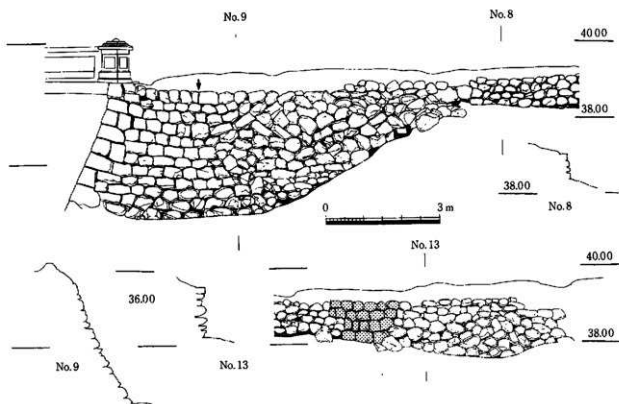


Fig. 218 白鳥堀近代石垣 (1/100)

石垣にはほど遠い。

一方、川原石主体の石垣は丁寧な積み方をしている。基本的に間知の積み方がなされている。この石垣の下50cmで川原石を横に並べた遺構を確認した。当該部分の調査区断面は重機掘削時に荒されてしまったが、盛土1を掘り込んでいるようであり、明治の石川橋構築直後の石垣根石であろう。

b) 兼六園側石垣

石川橋を挟んで兼六園側にある石垣で、広坂側2面と、紺屋坂側1面の計3面を実測した。

紺屋坂側の石垣は規模が小さく、長さ5.5m、最大高2.5mをはかる。地中にある程度埋まっていると考えられるが、石垣の規模からそれほど深くは入込んでいないと考える。紺屋坂への接続部分は、階段などの補修などに伴って幾度か手が加えられているようで、使われている石材が非常に小降りであったりコンクリートが石材間に入り込んでいることからわかる。石垣天端は水平ではなくてかなり兼六園側に向かって下がっているのは、紺屋坂への接続のためである。隅角部の石材のみやや大きめのものを使用しているが、これは広坂側の石垣でも同じである。また、石垣表面に刻印は見られない。

広坂側の石垣は、最大高6.5m、入り隅角部でも現状で5mをはかる。石垣表面には、刻印がところどころに認められ、近世の石垣を壊した時に石材を再利用して石垣を構築したものと考えられる。長さ50cm前後、幅30cm前後の石材を多く使って、水平に積み上げる間知積みによって構築している。

石垣下部の方がより大きめの石を多用するようで、上部に行くにしたがって小降りの石を用いている。これは、間知積みの場合、石垣の控えの長さがせいぜい60cm程度しかないので、高石垣になると小さな石垣では上からの力に耐えられないためであろう。また、土輪は約4度の緩やかな傾斜をもっており、その傾斜に石垣を合わせるためにも、小形の石材を使用している。入り隅部は、両方面の石垣石材が、互い違いに組み込んだようになっているが、組み込み幅は小さく通り面する石垣でその端が認められるものも多々ある。以上のような特徴は、百間堀通りに面する石垣面でも同じであり、基本的に積み直しはないものと考えられる。

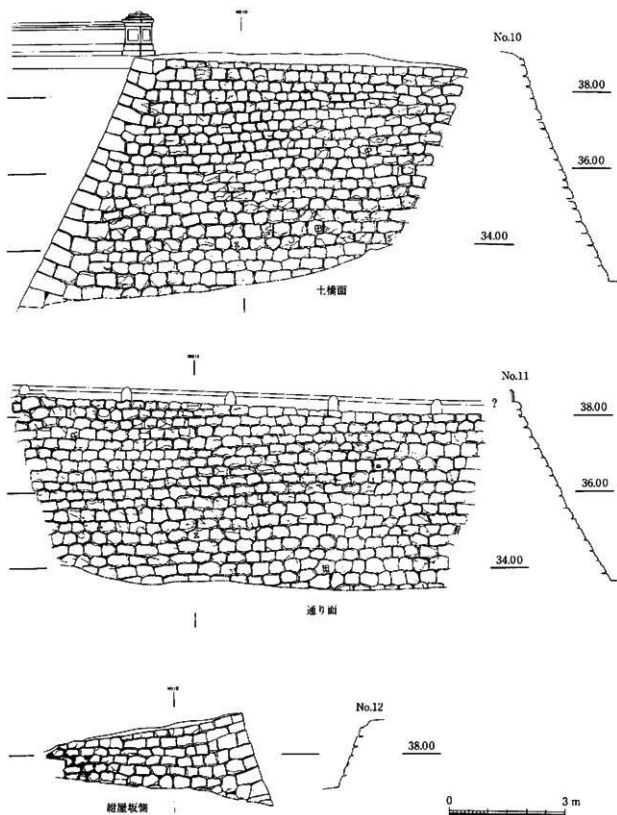


Fig.219 石垣 兼六園側石垣 (1/100)

第10章 ま と め

第1節 土橋の復原

a) 土橋復原の方法

金沢城がある丘陵と小立野台地を結ぶ土橋は、少なくとも16世紀中頃に作られて現在に至っている。この土橋は、作られてから明治政府に引き渡されるまで3つの大きな局面を迎えている。それは、正確な時期はよくわからないが、金沢御堂の土橋のかさ上げが第1の局面であり、17世紀第1～2四半期ごろのかさ上げが第2の局面であり、最後の局面は18世紀ごろの最後のかさ上げである。それぞれに重大な動機があろうが、ここでは深く触れないこととして、土橋の変遷の具体的な姿やそこに土橋が作らねばならなかった要因など、考古学が得意とする現象面を確認する方法で土橋の歴史的意義についてアプローチしたい。

本調査では、石川門側と兼六園側の二つに調査区が分かれた関係で、断面で確認した土橋の土層をつなぐことによって、断面という線の把握を面の把握を可能にする。しかも、二つの調査区は約50m以上も離れており、その長さは現在の土橋の約半分以上も占めるので、土橋の概略を掴むことができよう。また、旧百間堀や白鳥堀周辺にあけた試掘データを活用することによって、さらに大きな面の広がりを作ることができ、その概略は報告本文中に記した。そこで本報では、この点に焦点を当てていきたい。

b) 土橋の築成年代と4つの様相

金沢御堂の土橋

中世末に作られた盛土6にともなう土橋である。幅18m、高さ m程度と考えられるが、谷の深い部分になるともっと幅が広くそして高くなる可能性がある。盛土に使われている土は、黄色粘質土と黒色シルト、そしてその混合土で、強度を必要とする箇所に、黄色粘質土と混合土を多用している。具体的に、土橋南側と土橋表面である。土橋南側は南に作った池からの漏水を防ぐためであり、土橋表面は重量物の通行をも可能にするためである。使われている黄色土は地山土の掘削土であり、黒色土は谷の埋土の掘り上げ土を使っていると考えられる。また、版築を随所に使っているのもこの盛土を特徴づけている。

土橋は、今の土橋よりやや斜交していることが北側で確認できた土橋の裾から分かることができるものの、南側についてはよくわからない。現状の地表面は沈床園地表面よりも約1m以上も高いことから、兼六園側の方が元々高い地形であったことが予想される。そして、兼六園調査区の南隅で標高 mの地山の上がりを確認し、この地山の傾斜を利用する形で土橋が構築されている。上面の幅を確保するのに比高差が小さいほど裾の広がりが小さくすむので、土橋の裾は小さくなる。石川門調査区で確認した上面の幅6mを確保した時の土橋がFig.221である。

この土橋によって南側に広い池を作ることができた。水は、後述する金沢城方向から湧き出す水であり、沈床園調査区で年間数cmの泥土の堆積となっていることを確認している。池の水をオーバーフローする施設があると思われるが、どこになるかわからない。一般的に考えると、地形の最も低い部分となり、谷筋にあたる箇所の盛土の上部に水門施設があった可能性は高い。土橋北側には鍛造遺構群が存在し、谷とどのような形で展開するのかよくわからない。谷を隔てた兼六園側にも何等かの遺構群が存在していることは断面調査で確認したが、面的な広がりなど詳細はわからない。これらを含め鍛造遺構群については、本報告書第2分冊で詳しく見ることにする。

築成年代については、よくわからない。沈床園調査区第6、7層は土橋構築によって堆積した土である。白鳥堀調査区の遺構群は、土橋との間に溝を作って雨落ち溝を作って区画していることから、土橋と同時併存していることがわかる。つまり、土橋はこれらの遺構、遺物の年代を上限とする。沈床園調査区の中国製陶磁器や国産陶磁器は、小野正敏氏のいう第5期に属しており、16世紀

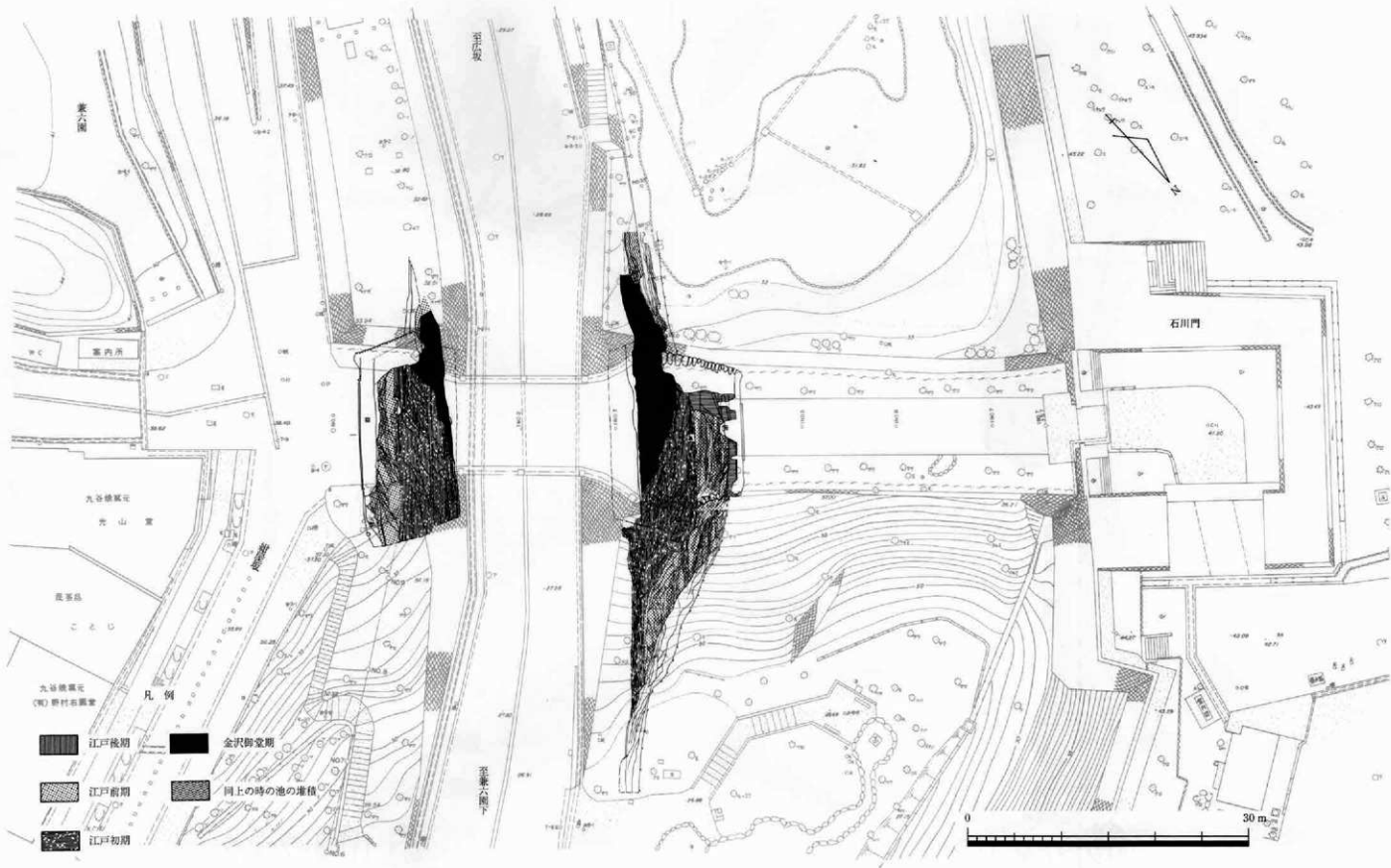


Fig. 220 石川門前土牆と現地形合成図 (1/400)

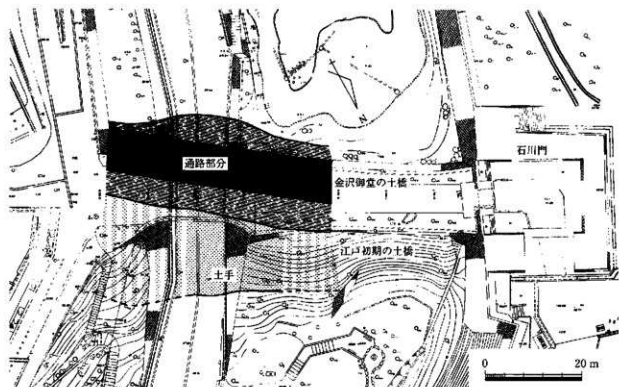


Fig. 221 金沢御堂の土橋と江戸初期の土橋 (1/800)

中頃の年代が与えられている。そして、17世紀第1四半期ごろの遺物を包含する層が、第4層であることを考えると、池は遅くとも16世紀中頃には作られていることがわかる。

さらに金沢御堂の土橋は江戸時代の土橋の構築方法とまったく異なり、それぞれの技術的背景を異にしていることがうかがえる。

江戸初期の土橋

第2段階の土橋は盛土5に対応し、天正8年(1580)の金沢御堂陥落から文禄2年(1592)の石垣普請までの間に構築されたと考える。それは、盛土方法が盛土6と全く異なって近世に盛られた盛土4等の技術に共通することや、銚造遺構群の廃絶が17世紀まで入りそうにないこと、これらの理由から金沢御堂の頃に盛土された可能性は極めて低い。また、東京大学図書館蔵の「加州金沢城図」は慶長頃の金沢城を描いたものといわれているが、水の手門から石川門にかけて石垣の表現がある。文禄2年(1592)の石垣普請は大々的なものであり、その時の石垣普請された箇所を描いている可能性が高く、土橋を含めた石川門周辺の整備が文禄2年(1592)までに終了していることになる。金沢城主が佐久間盛政から前田利家に代わったのは、天正十一年(1583)であるものの、盛土をおこなったのはどちらか、考古学的方法から知ることは極めて困難である。

盛土5の土橋は、かなり広範囲に及んでいる。高くすることよりも、横に広がっていることにその特徴を見出すことができる。石川門調査区でかろうじてその端を捉えたが、兼六園調査区では全くわからない。石川門調査区で推定した土橋の通路部分の広さは、幅15m程度でありそれぞれの二倍以上の広さとなっていることになる。このような広い通路が城郭に必要であったかどうかは別として、結果的に盛土5によって通路部分の拡幅がおこなわれたことになる。

別な見方をすれば、盛土5は、白鳥堀調査区に展開する銚造遺構群をちょうど覆う形になっているものの、全てを上橋土手中に埋めこんでいるわけではなく、その半分のみ土手中に入れて、残りの半分は埋め込んでおいただけである。土橋土手に不必要な部分までを埋めこんでいることを大きく評価するならば、意図的な盛土といえよう。それは、前川要氏が述べているように、前代の権力を全面否定するためのものであり、新たにその地を支配する為政者にとって必要なことでもある⁸⁾。このように考えると、佐久間盛政が普請した可能性が高いともいえよう。

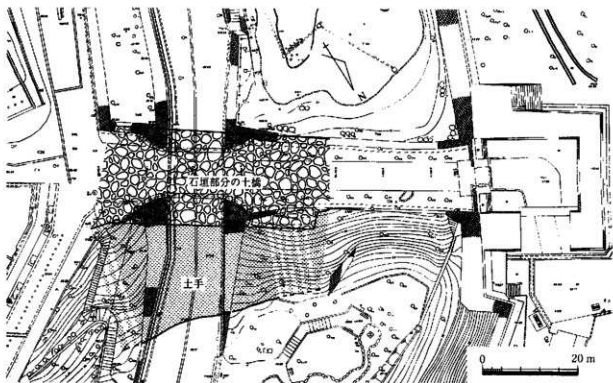


Fig. 222 江戸前期の土橋 (1/800)

16世紀末は金沢城が作られつつある時期でなので、城作り全体の中で盛土の意義を考えねばならない。

江戸前期の土橋

第3段階は1620～40年頃に盛られた盛土2～4に伴う土橋である。この段階で石垣で作られた土橋となり、幕末までの土橋の原型となった。検出石垣を合成したのがFig. 222である。百間堀石垣は、根石の位置がわかるのでそれを結んだラインとした。白鳥堀石垣は、水道管切り直し調査区の断面位置と百間堀石垣を並行させたが、その延長が石川門調査区で検出した屈曲部石垣の内側に入ってくる。白鳥堀石垣の根石のレベル差がはなはだしく、兼六園側で標高36.8m、屈曲部で標高34.1～35.0mの幅がある。根石と石垣天端との高さが開けば開くほど石垣の勾配の関係で内側に築石がくことになる。このために石垣延長ラインがずれるのである。

盛土は、盛土5と同じような方法で施工されている。使われている土もよくにており、技術的に近いものを想定することができる。そして、焼上や炭、灰を主体とし大量の瓦を埋めこんでいる盛土3が特徴的である。盛土3の面的な広がりにはわからない。現状で確認できる使われ方が石垣の根固めと、石垣背後という石垣に関係する部分である。しかも、兼六園調査区での石垣背後に盛土3が見られないことを考えれば、石垣屈曲部にしか使っていない可能性が高い。このような残土を、良い土にまぜて使わずにプライマリーな状態で使用していることもまた、非常に特殊な使い方である。

また、この盛土から出土する遺物のうち、使われた盛土の中にはじめから入っていたものと、後から意識的に入れたものと2者がある。前者は、明染付けや肥前陶磁、瀬戸美濃をはじめとする生活用具からなっており、後者には、瓦と土師器皿がある。土師器皿も大量に出土しているが、出土箇所は限られて、特殊な小型の一群もやや離れて集中するという作務的な出土状況である。その他の土師器皿についても同時期に大量に作られたものが一気に廃棄されたものであり、これもまた特殊な事例であろう。しかも良く使いこまれて灯明油痕がべつとりとついた個体が半分近くを占めており、具体的な使用状況がどうであったか問題となるところである。

このような特別な状況が随所に認められる盛土3を、普通の盛土と考えるにはあまりにも特異で

ある。盛土3の使用部位が石垣コーナーという位置にあること、一部の土師器皿に祭祀的意味合いが濃いこと、そして、瓦や土師器皿を土と混和させることもなく純粋な形で埋めこんでいることから、盛土自体に祭祀的要素が強いと考えることもできよう。すなわち、石垣が崩れないようにという地鎮的な祭祀行為である。それを石垣の最も特徴的である部分におこなったと考えたい。

盛土中の遺物で土橋の年代を考えてみる。明染付けでは、芙蓉手碗の出土が多くことに気づく。華南産彩繪陶器など、大坂城でいう豊臣後期（1598～1615）の資料群に共通する。また、祥瑞・古染付様式と思われる染付けもある。肥前唐津では、胎土日積みのものが皆無で砂目清緑皿も目立つ。3代藩主利常夫人である珠姫輿入れの時の付き人の居住地といわれている江戸町は、元和八年（1622）の珠姫死去後に付き人が江戸に帰ったために廃絶したといわれているが、その推定地から出土した資料群には胎土日唐津が主流で砂目唐津は僅かであった²⁹。したがって、盛土3資料はそこまで年代的に上らないことがわかる。

また、初期伊万里を盛土3で碗2点、盛土4で皿1点が出土している。碗は、腰の張った筒碗で、肥前皿Ⅰ期に類する器形である。皿については小破片なので良くわからない。この他に、砂目唐津清緑皿がある程度の数の出土があり、明染付け祥瑞もまた初期伊万里の同時代資料として評価できよう。肥前皿Ⅰ期の生産地での年代は、1600～1630年と想定されている。大坂では、元和六年（1620）の層から初期伊万里が出土しており、消費地としてはかなり早い出土例として知られている³⁰。金沢で初期伊万里がいつごろ使われるかよくわかっていないが、江戸町資料からすると、大坂よりも遅れて流通すると考えられる。しかし、日本海ルートとの密接な流通があり、早くから肥前陶器が圧倒的に普及していることからすれば、大坂より僅かに遅れる程度と考えたい。したがって、おそくとも寛永頃（1624～1643）には普及していたと考えたい。

そして、盛土3の炭、灰、焼土をどこからもってきたか、ということが問題になろう。盛土3を作るために火を焚いたのであろうか。あるいはまた、火災によって生じた焼土などをあつめて使ったのであろうか。前者と考えると、非常に不合理に思えるし、後者にしても火災を受けた遺物が少なく、土をかきあつめた場合、混入すると思われる小さなゴミのような遺物や焼失部材などもまた少ない。このような調査所見から、いずれとも決め難い。火災と考えると、寛永八年（1631）の金沢城をほとんど焼きつくす大火を連想する。

いずれにしても、江戸前期の土橋の築成年代を、1622年を上限とした1630～1640年頃を考えたい。そして、寛文八年（1668）の「金沢城図」の土橋には盛土4施工の上橋の形になっているので、年代の下限をそこに求めることができよう。

なお、幕府に謀反の疑いありとされた行動として良くいわれている原因は、身体健強な了弟を小姓とし、大坂の陣の追賞したことがよく挙げられる。しかし出典である「三竈聞記」中に城の堀や石垣普請などもありと述べている³¹。つまり、1630年頃に至っても城普請が進行しつつあり未完成な城であったことがわかる。同時代資料ではないが、江戸初期の加賀藩の様子を記す唯一の文献であり、大いに参考になろう。

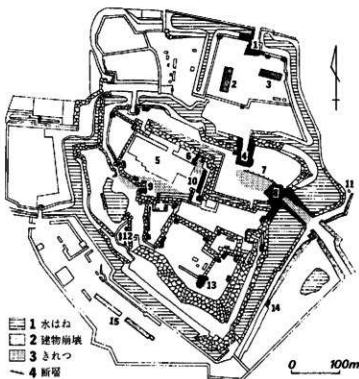


Fig. 223 寛政11年大地震の被害状況（註22より）

江戸末期の土橋

最後の段階は、盛土1に伴うもので、百間堀石垣再構築を伴う大々的な善講である。それを示す文献は残されていないようであり、参考になる遺物の出土もないので、年代比定は困難である。盛土1に伴うと考えられる瓦たまり1には施軸梅鉢文軒丸瓦が出土していないので、幕末にまで下る可能性はない²⁵。寛政十一年(1799)に金沢にM6.6の規模の地震が記録されており、寒川旭氏によってまとめられている。それによると、石川門から西に断層が生じてその周辺の被害も大きいという²⁶。石川県史第7巻には、森田修陳自記に、「一、石川御門前通、左右石垣大半崩る」とある²⁷。石川御門前通を土橋に当てることのできるかどうか検討を要するが、石垣崩落と石垣補修の因果関係を自然災害に求めるのがより自然である。それ以前に石川門周辺で壊滅的破壊を受ける災害の記事がないので、盛土1の年代を、寛政十一年以降に求めたい。

c) 旧地形と金沢御堂

金沢御堂の土橋は、天文十五年(1548)に建立説が有力視されている。そして、金沢御堂に至る道として作られたものと考えられる。金沢御堂の本堂は、本丸付近にあったといわれ、また、そこが現地形でも旧地形でも最高所にあたるという認識がある。車輪門跡の発掘調査で16世紀末の石垣を検出し、自然地形の下がりを石垣裏込め肩にしていたので、丘陵が本丸に続いていたことは確実である。

試掘調査の結果百間堀の北側半分が谷地形を呈していることがわかった。この範囲は、三の丸下部分の一段広がった所に相当する。谷筋は、Fig. 224で示したとおりで、沈床園調査区と車道の間から兼六園下交差点にかかるところである。白鳥堀調査区で検出した井戸は僅か2mしか掘っていないが井戸として十分利用できたのは、谷筋という水脈にあたるためである。谷底には黒色シルトが堆積している。石川門調査区の北端ではそれが約10cmの厚みしかなく、兼六園調査区でもかなりの急角度で地山が上がっているものの、黒色土も僅かながら存在する。その高さは標高28.5mであり、少なくとも29m付近まで低湿な状態であったと考えられる。その範囲を、Fig. 38で見ると、No. 8とNo. 9試掘坑の間になる。

谷筋の最深部は極端に深くなっているようで、ボーリング調査によって谷の黒色土の厚みを2m以上も確認されている。したがって、当時は人が歩いてわたれない状態であったと考えられる。金沢御堂頃は水の手門下に「おちよぼが池」という井戸があったといわれており、2代藩主利長の頃(慶長頃)まで井戸を使っていたという伝承がある。どこまで事実かわからないが、井戸のあるあたりは谷筋にあたり、しかも軍隊で使用していた井戸も谷筋にあたる。つまり、谷はずっと金沢城内深く入り込んでおり、それなりの水量があったものと考えられる。それゆえ沈床園調査区で確認された土橋際の泥土の堆積が早いスピードで見られるのである。

また、白鳥堀部分のNo. 16試掘坑は、谷の黒色土が見られずすぐに礫層になっており、一段高くなっていたと考えられるが、谷筋のすぐ際にあたるが、鍬遺構群の展開は北の方に伸びており、No. 16の試掘坑から北西に向かって地形が高くなっていると思われる。つまり谷筋は北に向かうにしたがって東の方に向きを変えているものと考えられ、今の紺屋坂上り口あたりになるのか。

このような谷の把握は平面的であって、立体的に考えてみたい。石川門調査区で確認した地山の傾斜をそのまま延ばすと、石川門石垣犬端あたりにくるのは偶然であろうか。石川門北の張り出し下には土手斜面になっており、この張り出しを旧地形をかなり利用したものとして重要視すると、石川門は旧地表面近くに建てられている可能性が高いと考える。そして、谷の存在は、本丸のある高まりと石川門のある高まりの間にそれが入っていることを示す。すなわち、本丸北側の崖が谷につづくものと考えると谷の繋がりにもちょうどよい。

そして、本丸が一番高く、二の丸、三の丸、藤石衛門丸へと続く丘陵だが、二の丸を中心に三叉状の配置で、三の丸と本丸の間に谷が入るのではないかと想像する。また、本丸は兼六園から続く丘陵の続きであるが、どれほどの高さをもっていたかわからない。本丸の地に本堂が立っていたとすると、ほとんど同じ高さであったならば城郭寺院として体をなさない。かなり低い部分でなかっ

右図は喜内敏精（1986）
より転写

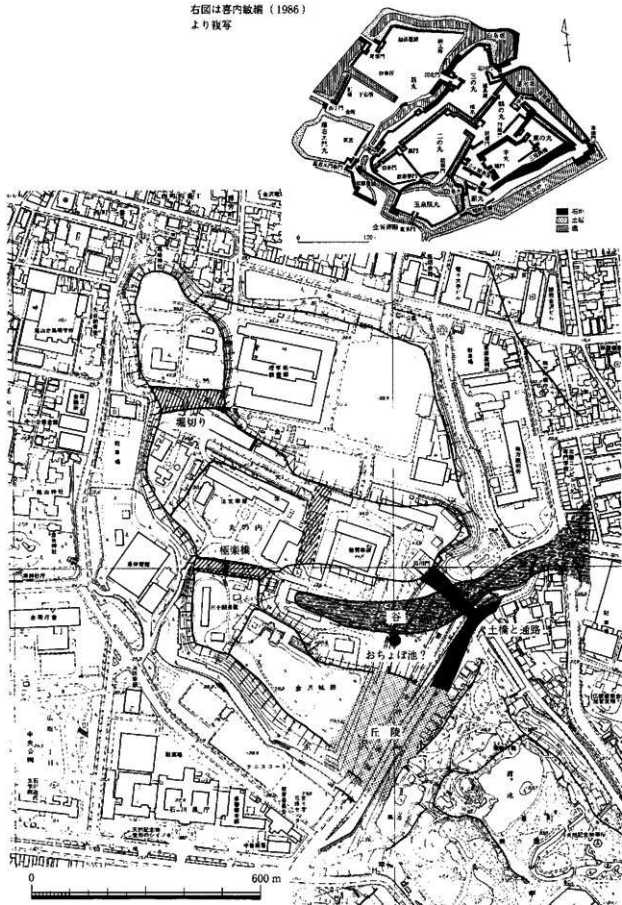


Fig. 224 旧地形と金沢御堂、金沢城 (1/5000)

たかと想像する。

本丸、二の丸、三の丸、藤右衛門丸のある丘陵周囲は断崖であり、自然地形に極めて近いことが予想される。本丸附段にかけられている極楽橋は金沢御堂の頃の名残りといわれており、そうすると二の丸と本丸の間に堀切があり、谷がそれに繋がっている可能性が高い。さらに三の丸と二の丸を分ける堀や二の丸と藤右衛門丸の間の堀も近世金沢城が金沢御堂のものを利用して作っているかもしれない。つまり、堀切の存在や谷を入れて水を確保していることなど、自然地形を利用した中世城郭の様相を呈しているのではないかと考える。

そして、本丸が鞍部になって接しているので当該箇所が最も防禦線が弱く、それゆえ金沢御堂を攻めた佐久間盛政は小立野方面（東側）から攻めて落としたと思われる。攻撃に最も容易な方法である。

このように金沢御堂を考えると、土橋の性格が見えてくる。つまり、本堂に至る通路であるが、唯一の通路である。寺院という性格だけならば本堂に直結するように、そして町屋との繋がりを密にできるように通路が設定されねばならず、今回発掘した土橋の必要はないだろう。大手門（河北門）の位置からの通路については不詳であるが、確認できた金沢御堂に至る唯一の道が土橋である。このように城郭として金沢御堂を見ることも必要ではないかと考える。

d) 小結

金沢御堂の時の土橋は通路として構築され、御堂の防御の一角を担ったものであろう。その入り口は、西に向かって入っていく形態であり、西方極楽浄土に通じる思想的背景を重視できるかもしれない。このように想定すると、寺内町の位置が問題となる。土橋の前面に位置するとは考えられないので、その周囲に求めるしかない。違った見方をすれば、想定される金沢御堂は広大な敷地を有し、その中の施設が寺院のみとは考えにくい。加賀一国の支配中枢センターであったとしても、全てがその関連施設でもあるまいつまり、石山本願寺や山科本願寺のように、寺内町を取り込んだ形で

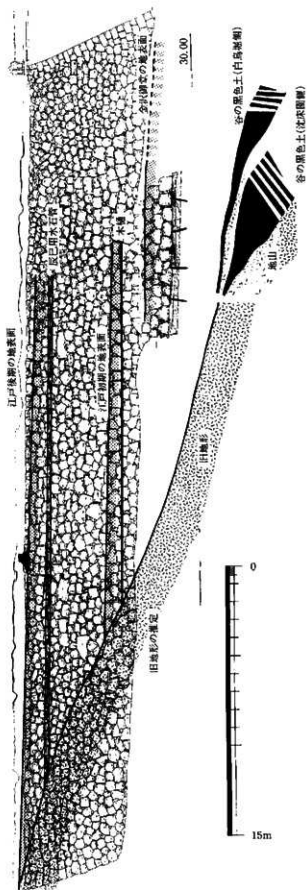


Fig. 225 土橋からみた旧地形 (1/200)

金沢御堂が展開する可能性が高く³³、現在の金沢城を中心に周辺の遺構遺物分布とともに地形の展開もまた詳しく観察する必要がある。

江戸時代以降の土橋は通路の性格を前面に出し、盛土による土橋の改造は、主に嵩あげが目的である。現在も兼六園側から石川との比高差は約1.5mもあり、その差を少なくするように努力している。すなわち、土橋の中間部分は谷の最深部で鞍部になっており、それのできる土橋の傾斜を緩やかにしているのである。

江戸初期の土橋は幅が広がっているが、これは、絵図によって小さな門の表現のある部分にあたる。本格的な軍事施設として作り替えられたものであり、「馬出し」的な施設と考えられようか。佐久間盛政が金沢御堂を落としたのはこの方面からであり、城郭としての最弱点と認識していたはずである。城主にとって、その強化が大きな課題であったに違いない。江戸初期の土橋は、依然として戦間的な性格の強い物である一方、江戸前期の土橋は、かなりその性格を薄めている。

木樋は江戸初期の土橋に埋設されたが、すぐに撤去して、上に江戸前期の土橋を構築している。この動きは両者不可分の関係と認識したい。すなわち、木樋によって水を通しながら目的とする位置にまで水を上げることができなかったために、その傾斜を緩くしたのであろう。同時に石川門周辺を石垣によって整備したのであろう。

金沢御堂の時には谷地形が入り込んで水源を確保している形態となっていることを確認したが、織田方が占拠した後はそこを埋め立て、水源がない状態である。その状態を開闢するために水を引いたのであろう。このように考えると、石川門周辺の変化は、当該箇所のみならず城全体のレイアウトを変化させるような動きに繋がるのであろう。

百間堀周辺のみ限定すれば、江戸前期の土橋を作り、なおかつ車橋門を作ることによって百間堀を水堀とすることができ、それまでの池状の水の溜まりの排水

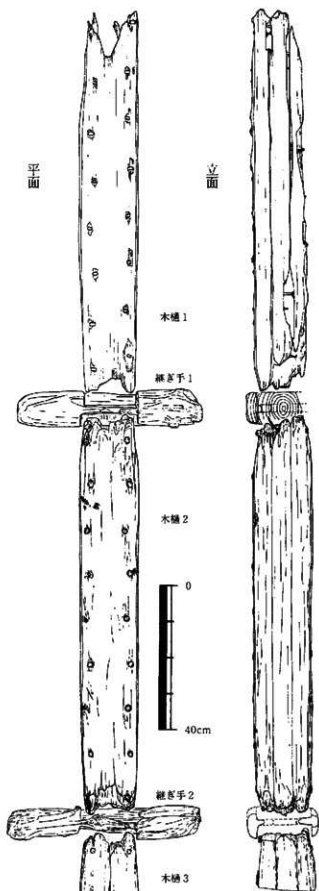


Fig. 226 石川門調査区出土木樋連結復原 (1/16)

は、本丸下の金沢城南からおこなっていないことは、車橋門跡発掘調査で確認したので、北側の白鳥堀方向への水の切回しとなる。しかし、水堀にすることによって南への排水ということになって、いもり堀に水を流す。すなわち、これらの水の流れが変わることによって周辺の土地利用が大きく変わることも予想される。

元和の頃までに城内から家臣の屋敷を城外に出して、3代藩主前田利常にいたってようやく城下が完成されたといわれている。このような動きは城下町ばかりでなく金沢城についてもあてはまることを確認した。

第2節 寛永9年敷設の辰巳用水をめぐる

a) 木樋と石管の土橋上における比較

木樋と石管は、平面的に見ると、同じようなルートを通っていることがわかるが、土橋に並行した断面で見ると、全く違う状態となっている。石管は、木樋から変えたといわれており、木樋の痕跡は全く見られなかった。しかし、盛土状態から辰巳用水の石管と辰巳用水木樋が同じところに通されている可能性が高く、石管を「辰巳用水」と同義で使いたい。

平面的に見てみる。土橋上のNo点は、工事用の基準ポイントで、現在の土橋の中心に設定してある。石管は、現在の土橋の中心にやや斜交し、両調査区で出土した石管は直線と繋ぐことができ、石川門の中心を通過して城内に引き入れられている。木樋の方は、兼六園側は石管よりも少し南側を通過しており、矢印の部分で屈曲して石管とほぼ並行になる。すなわち、矢印付近で流路が曲るために途中でクロスし、石管のやや北側を通ることになるが、そのまま真っ直ぐ木樋が続くとすると石川門通路の北端を通ることとなり、不都合である。流路は、石管のように門通路中心を通らねば、掘り方掘削や木樋埋設に不都合であり、この点からも下層の木樋は今の石川門（石垣の礎台を含む）に伴うものでないことがわかる。

石管は、土橋のほぼ中心を意識して埋設されたと考えられる。これは石川門中軸を通る最も合理的なルートである。木樋はどうであろうか。盛土5の上に木樋が作られているわけだが、当時の土橋の両側を前節で推測したとおりである。土橋表面として意識されている部分を石川門側と兼六園側とを繋ぐと、ほぼ木樋の方向と一致することがわかり、木樋もまた土橋の中心を通過して敷設されたと考えられる。このように、石川門が基礎から作り直されている可能性の極めて高ことがわかるのである。

土橋の縦断面で見える。幕末頃の地表面を兼六園側から石川門方向に延ばすと、今の石川門のところで50cm近くの段差ができてしまう。傾斜をより大きくすることによってその違和感が解消されるので、調査地から門側は約4度の傾きとなって続いていると考えられる。石管の傾きは、石川門調査区の石管敷石高が壁際で標高 \quad mで、石管1本あたり2度づつ高さを減じている。これは約1度の傾斜であり、兼六園側に向かって緩やかに低くなっている。しかし、兼六園側の方が地形的に高いので土橋のどこかで高さの変換点があるはずである。土橋のほぼ中間地点に排水溝（SD06）がある。逆サイホン原理で作られた辰巳用水の最下部に作られた砂抜き溝といわれており、ここに石管最下部を求めた。推定される石管底面におけるジョイントの高さは標高37.45mで、兼六園側石管とほとんど同じである。

木樋は土圧によって支持受けから落ちこんでいたので、木樋の設置高はわからないが、継ぎ手は高さを変えていないものと考えられ、木樋との連結部下面を基準にして高さを求めた。兼六園側は、知る手がかりはないが、掘り方下層の土が木樋設置面と考えそれを木樋高とした。木樋は約2度の傾きで石川門側に落ちており、調査地点が土橋地表面の最下部でないということがわかる。

二つの導水管の違いは木と石という素材の違うものを利用しているが、石垣補修度の中から三和上に小砂利をいれた管が数多く廃棄されていた。調査中は関心なく気にも留めなかったが、報告書をまとめたが、もしかすると石管に置き換える前に使われた導水管で、寛政十一年（1799）の大地震の時に壊れたので廃棄したのではないかと、考えるようになった。これについては類例に乏し

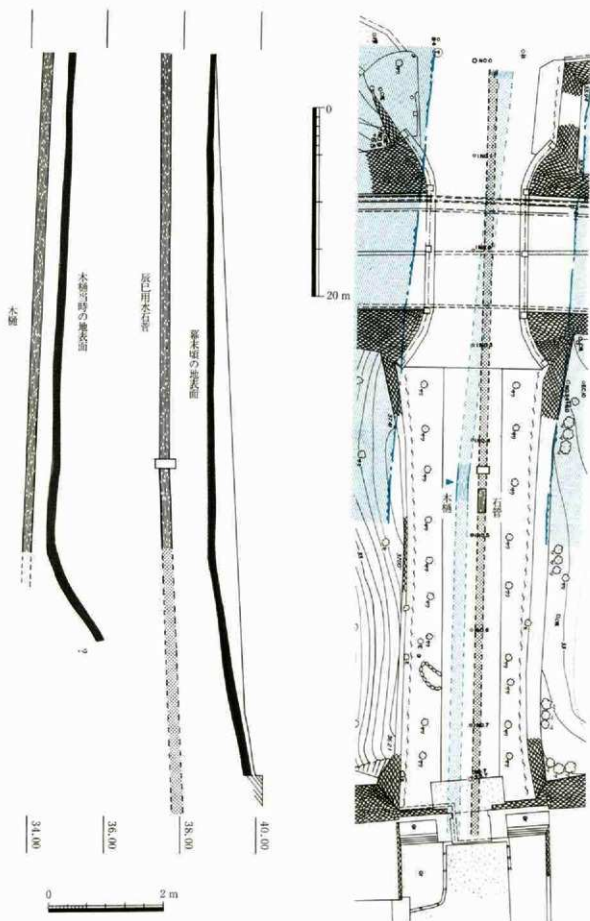


Fig.227 木樋と辰巳用水石管平・断面図 (1/400, 断面図の高さのみ1/100)

く説得性に欠けるが、一つの可能性として提示する。

b) 木樋の年代と土橋

木樋の作られた土橋の盛土は16世紀末に善論されているが、木樋が通されたのは、木樋下から出土した砂目唐津によって、1620年以降という年代が与えられる。一方、木樋上にある盛土4も1630年代（ただし可能性として1622～1668年までの間）を想定した。上にある層ほど新しい層である、という層位論からすると妥当な遺物の出土である。しかし、寛永九年（1632）に作られた辰巳用水に比定できるか、となると別の問題がある。それは、考古学的手法で歴史的な事実や人物を厳密に特定することが困難であるからであり、慎重にならねばならない。考古学では、遺物の形の変化や遺物総体で見た時の組み合わせの変化で、時間の流れを把握するが、この場合の大きな問題点は、数年という短い時間幅で遺物の対比が可能なのかという方法論の問題でもある。

盛土3の資料と木樋下出土遺物は極めてよくにているが、盛土3や盛土4で明祥瑞様式染付けや初期伊万里様式の染付けが3点、それによく共存する肥前砂目溝線皿などが出土していることに注目すると、より新しい要素を見ることが出来る。その年代は前節で示したとおり、寛永以降と考えられる。すなわち、木樋が寛永九年の辰巳用水に比定すると、盛土3と同じ寛永の施工ということになり、考古学の遺物の対比ではほとんど不可能である。金沢城の歴史をどの様に捉えるかという歴史的視点の違いによって、各種の解釈が生まれてくるものと考えられる。

木樋下出土陶磁器の年代が、一般的には17世紀第1四半期頃といわれており、それを年代の上限とすることができる。しかし、木樋出土土器は、盛土3などの資料に比べて発掘量が大きく違うので、当然得られる資料数も大きく異なり、出土遺物の単純な比較は危険である。一方、盛土3出土の初期伊万里は、先に見たように17世紀第1～2四半期頃といわれており、これも年代の上限として使うことができる。最も時間幅の許容範囲を狭くとると、1620年頃～1640年頃の間には木樋を作ったと考えることができる。ただし、盛土3の資料群は、同時代性の資料が非常に多く纏まってあるので、年代をあまり下げることができない。つまり、木樋の年代を下げると盛土4と時間的に接近する。したがって、木樋が寛永九年に作られたとされる辰巳用水に考えることもできるし、あるいはまた否定することもでき、二つの可能性を提示する。

より大きな問題となるのは、木樋を通してすぐに抜き取り、再度土橋をかきあげて水をもう一度通すという一連の造作が、どのように歴史的に位置付けできるかということである。ここでは、板屋平四郎が作ったものであるか否か、ということも重視する必要はない。従来いわれているように、辰巳用水は、寛永八年の大火を契機として城内の水の確保に建設の目的にある、という事実関係を一度白紙にする必要を感じる。この頃に城も大改造をおこなったようで、百間堀を水堀にするために車橋門を作ったり、石垣を大々的に善論している。このような造作と、木樋建設盛土施工が何の脈絡もなくおこなわれたとはかんがえられず、金沢城がどのような過程で完成されていったか大きな枠組みの中で検討する必要がある。漠然と、3代藩主利常のときに外総構堀の建設によって金沢城が完成されたということでは、城と城下町との構造を知るうえでも不十分あり、寛永という時代をもう一度考え直す必要があると考える。

木樋を敷設する時の土橋の形状、主に高さに関する形状の違いによって、傾きの構造が違ってくるのが木樋と石管との対比で明らかになった。石川門周辺の高さは、基本的にあまり変わらないと考えているので、土橋が低ければ低ほど石川門の水の通過が困難になる。それを可能にするには、水圧を上げるか、それとも導水管の設置高を上げるという方法がある。水圧を上げるには、逆サイホンの始点を高くするか、同じ高さで石川門に近づければよい。設置レベルを高くするとそれまでの導水部は改良しなくてもよいことになる。

木樋が設置後すぐに廃棄されていることに注目すれば、作ってもすぐに必要なくなったことを示す。盛土4の土橋かさ上げ工事を有機的に関連づけると、後者の方法、すなわち水を通すために導水管の位置を高くしたと考えたい。もちろんこれは、城作り全体での位置付けが必要だが、前項で確認した谷の埋め立てによる水の確保が困難になったことも無関係ではあるまい。

註

- 1 (40頁) 金沢市教育委員会1993『平成4年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 2 (40頁) 石川県立埋蔵文化財センターが平成8年(1996)に発掘調査をおこなった。調査成果については、調査担当者である橋木英道氏と安中哲徳氏のご教示を得た。
- 3 (41頁) 金沢市教育委員会が平成8年(1996)年に発掘調査。本報告編集段階での奈良時代の瓦にともなう遺構の全容は不明である。この発掘成果によって金沢城南の旧地形がある程度類推可能となってくる。調査成果については、調査担当者である楠正勝氏のご教示による。
- 4 (41頁) 石器の実測および観察については、同僚の本田秀生氏と布尾和史氏のご援助を得た。感謝します。
- 5 (41頁) 吉岡康輔1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 6 (41頁) 未報告ながら、松任市乾遺跡の17世紀前半の近世墓から珠洲焼壺体部片等が出土しており、珠洲焼の同時代の使用も捨てきれない。④石川県埋蔵文化財保存協会がおこなった乾遺跡の平成3年(1991)の調査担当者である藤田邦雄氏のご教示による。
- 7 (42頁) シジミやタニシが管の中で消息できるのは、激しい水の流れが無かったためであろうか。管の下に2cmの厚みのある泥土から考えると、一定期間水が溜まった状況と思われ、管の腐蝕と密接にからむものであろう。
- 9 (109頁) 遺物取り上げ地区設定は、細かいことにこしたことはないが、大きな地形の変換とアゼの位置を考慮して、それぞれほぼ同じ大きさになるように設定した。a-cのように細分してあるものは、遺物の出土状況からやや遅れて細分設定したものである。このような方法によって、グリッドで取上げるよりもより実際の地形と遺物との関係を把握することができる。
- 10 (109頁) 藤田邦雄1996『北陸における肥前陶磁』『考古学ジャーナル』410 ニューサイエンス社
- 11 (110頁) 池地点の遺構埋積土中から大量の土師器皿である「かわらけ」などの土器類とともに白木の箸、折敷、木札を中心とする大量の木製品も出土している。この中に寛永六年(1629)の紀年銘のある付札と思われる木製品があり、同年4月におこなわれた將軍徳川家光の「御成」に関係するものと理解されている。その時の宴会儀礼で使われた道具を一括廃棄する場として「池」が選ばれ、そして埋め立てて整地している。この遺構自体が祭祀的意味合いが強いわけではないだろう。しかしながら、非日常的な「場」を作りだしてそこで使われたものである点で、盛土3出土土師器皿と共通性を見つけることができよう。
- 12 (136頁) 貞末発司・前田清彦・児玉剛1989『金沢城の発掘—1986年— 黒門横北側懸崖部発掘調査報告』『日本海文化』15 金沢大学文学部 日本海文化研究室
- 13 (181頁) 伊藤雅文・滝川重徳1995『金沢城跡石川橋・兼六園出土土師器皿の検討』『北陸近世遺跡研究会会報』2 北陸近世遺跡研究会
- 14 (199頁) 辰巳ダム関係文化財等調査団1983『加賀 辰巳用水』(石川県教育委員会)の中で松所使用についての文献資料を紹介している。
- 15 (214頁) 絵図等の参考は、石川県立歴史博物館『金沢城』を主に使用した。これによると、欄と思われる表現が見られるものが多い。金沢大学附属図書館蔵『加賀藩儀式風俗図絵』には、縦木を等間隔にたてて横に木を差し渡しして固定する欄の表現から見られる。なお、この絵には、百間堀石垣出ている排水溝(調査ではS D 06としたもの)から水がでている表現がある。
- 16 (220頁) 刻印の形は、子細に見ると実に多様である。同種の刻印であっても大ききの点で格差が大きく、それによって表現が多少異なる場合があるほか、受ける印象も異なってくる。刻印は家臣の合印といわれており、同種の刻印を刻む時の工人が多数かかわる場合があり、同時に一人の工人が複数の刻印を刻むことも多いと考えられ、一つの刻印を江戸末期まで使い続けている。このように不特定多数の工人が刻むという前提にたつ必要がある。さらに石面の破損によって刻印の一部が欠失したため型式の認定が困難になる時もある。このような視点で刻印の型式を見るべきである。

- 17 (233頁) 前川要1991『都市考古学の研究』柏書房
- 18 (235頁) 伊藤雅文他1992『特別名勝 兼六園 (江戸町跡推定地) 発掘調査報告書』石川県立埋蔵文化財センター
- 19 (235頁) 横山洋1996『関西における肥前陶磁』『考古学ジャーナル』410 ニューサイエンス社
 大阪での初期伊万里の年代が次第に明らかにされており、森毅氏によって1920年頃という年代が提示されて以降、横山洋氏によって近年まとめられている。これによると、初期伊万里の出現は1620年代の中後半頃であり、1610年代には廻りえないとされた。
- 20 (235頁) 石川県史第2巻の276頁5～8行で「三壺記」を引用している。そして、横山康玄の弁明にも前年の大火の補修であるというように説明している。
- 21 (236頁) 木立雅郎のご教示によると、釉を掛けた瓦はひかり瓦といい、19世紀頃には生産を始めているとのことである。
- 22 (236頁) 寒川旭1986『寛政11年 (1977年) 金沢地震による被害と活断層』『地震』第2輯第39巻
- 23 (236頁) 石川県史第2巻の299頁16行。
- 24 (239頁) 岡田保良・浜崎一志1985『山科寺内町の遺跡調査とその復原』『国立歴史民俗博物館研究報告』8国立歴史民俗博物館
- 25 加賀藩における「寛永の危機」とは次のようなことである。3代藩主前田利常は、寛永八年(1631)の8月に国元に帰り家臣の子弟の身体強健なものを小姓にし、10月に大阪の陣で戦功のあったものを調査して追賞し、他国から船舶を購入して、4月におきた大火で破損した城郭の修理をおこなった。このような一連の行動が幕府に「加賀前田氏に謀反有」と疑われたのである。そこで前田利常は、12月に江戸に入ったが將軍の引見は許されなかったとのことである。家老である横山康玄が老中土井利勝の詰問に弁明することによって許されることとなった。

参考文献

- ・青木治夫1993『辰巳用水にみる先人の匠』能登印刷
- ・有田町1988『有田町史』古竈編
- ・石川県立埋蔵文化財センター1992『特別名勝 兼六園 (江戸町跡推定地) 発掘調査概要報告書』
- ・石川県立埋蔵文化財センター1996『金沢城跡 車橋門発掘調査報告書』
- ・石川県立歴史博物館1994『金沢城』
- ・井上鋭夫1969『金沢城址の発掘』金沢大学金沢城学術調査委員会
- ・海老沢有道1958『高山石近』吉川弘文館
- ・大橋康二1989『肥前陶磁』ニューサイエンス社
- ・小野正敏1985『出土陶磁よりみた15・16世紀における西期の素描』『MUSEUM』416号
- ・金沢市教育委員会1995『本町一丁目遺跡』
- ・金沢御堂・金沢城調査委員会1993『金沢城跡—金沢城跡遺構実態調査概要報告書』石川県教育委員会
- ・金沢御堂・金沢城調査委員会1991『金沢御堂・金沢城調査報告書』I 石川県教育委員会
- ・北垣聡一郎1987『石垣普請』法政大学出版局
- ・青内敏編1986『金沢城と前田氏領内の諸城』『日本城閣史研究叢書』第5巻
- ・久保智康1989『越前における近世瓦生産の開始について—武生市小丸城跡出土瓦の検討』『福井県立博物館紀要』3
- ・鶴橋俊夫1994『平安京出土土師器の諸問題』『平安京出土土師器の研究』動古代学協会
- ・『世界陶磁全集14—明』1976 小学館
- ・高槻市教育委員会1984『摂津高槻城』
- ・多治見市教育委員会1993『美濃焼の焼物』
- ・辰巳ダム関係文化財等調査団1983『加賀 辰巳用水』石川県教育委員会

- ・田淵実1975「石垣」法政大学出版局
- ・中国上海人民美術出版社1983「中国陶瓷全集19 景德鎮民間青花磁器」美乃美
- ・土山公仁1989「岐阜城の瓦についてⅠ」『岐阜県立歴史博物館』3
- ・土山公仁1990「信長系城郭における瓦の採用についての予察」『岐阜県立歴史博物館』3
- ・坪井利弘1976「日本の瓦屋根」理工学社
- ・東京大学遺跡調査室1990「東京大学本郷構内の遺跡 医学部付属病院地点」
- ・日置 謙19「加能郷土辞彙」
- ・日置 謙1938「石川県史」第壹編
- ・日置 謙1939「石川県史」第貳編
- ・森 毅1992「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『龍波宮址の研究』9 郡大阪市文化財協会

イノ川 船形出土土器物類調査表

群	353	群別	種別	器種	調査区	遺構	出土位置	法遣	器形・文様の特徴	胎土・色調	備考	発掘番号	
57	1	中国期	磁器	片花罎	石川門	表土	口徑10.6		器形・文様の特徴	明灰色の裏層	百人	A-136	
	2											A-57	
	3											A-48	
	4				白鳥塚	表土						A-149	
	5	志乃	陶器	皿	石川門								A-148
	7	肥前	磁器	罎	石川門	表土	口徑8.8		鉄軸で文様	白い石灰釉	百人、陶器質	A-142	
	8				五輪	石川門	表土	底台径3.3	一重圓口文	透明部のない釉	釉の生掛け	A-128	
	9	瀬戸美濃	磁器	罎	石川門	表土	口徑9.5、器高4.4、底台径3.3		小さな高弁	黒褐色灰色		A-144	
	10	肥前	磁器	罎	石川門		口徑、器高、					A-140	
	11					表土					百人	A-131	
	12	瀬戸美濃	磁器	罎	石川門	表土			見込み深く下がる	陶胎染付け		A-150	
	13								欠縁、身			A-139	
	14				徳科	石川門	表土		11輪筋部やや玉縁	海苔の長頭	刺繍転写	A-153	
	15	徳島陶器	磁器	罎	石川門	表土	口徑10.5、器高4.9、底台径6.2				重隆川武部	A-127	
	16											A-130	
	17				鉢	石川門	表土	口徑16.6、器高4.3、底台径7.5			「木志乃」	A-146	
	58	18		土器	皿	白鳥塚	たちちり 2				胎土1類	灯明加蓋、焼成良好型	D-79
19					石川門	北側表土					い	D-345	
20						表土						D-51	
21						北側表土						D-361	
22						表土						A-133	
2			陶器	罎	石川門	表土	アゼ1					A-129	
3			陶器	罎	石川門	表土	調査区					D-22	
4			陶器	罎	石川門	表土	調査区					D-21	
5		瀬戸美濃	磁器	罎	石川門	落ち込み 1						A-85	
6		肥前	磁器	罎	石川門	落ち込み 2						A-68	
7				宮	石川門	落ち込み 1	口徑15.6				A-142		
8				瓦罎	石川門	落ち込み 1				製作り	A-141		
9	肥前	陶器	鉢	石川門	落ち込み 1					体置花文罎	A-134		

イノ川 柳川 土 埴物 観覧 表

大分	館名	種別1	品別2	器種	調査区	遺構	出土位置	法量	器形・文様の特徴	胎土・色澤	備考	文庫番号				
58	10		陶器	鉢	石川門	落ち込み 1					鉄軸で文様	A-66				
					石川門	落ち込み 1									D-200	
					石川門	落ち込み 2										D-161
					石川門	落ち込み 2										D-323
					石川門	落ち込み 3										A-69
					石川門	落ち込み 5										A-64
					石川門											A-21
					石川門											A-124
					石川門											A-119
					石川門											A-61
					石川門											A-20
					石川門											A-152
					石川門											A-18
					石川門											A-55
					59	10		陶器	鉢	石川門	落ち込み 1					
石川門	落ち込み 1															
石川門	落ち込み 2															
石川門	落ち込み 2															
石川門	落ち込み 3															
石川門	落ち込み 5															
石川門																
石川門																
石川門																
石川門																
石川門																
石川門																
石川門																
石川門																
60	10		陶器	鉢						石川門	落ち込み 1					
					石川門	落ち込み 1										
					石川門	落ち込み 2										
					石川門	落ち込み 2										
					石川門	落ち込み 3										
					石川門	落ち込み 3										
					石川門	落ち込み 5										
					石川門											
					石川門											
					石川門											
					石川門											
					石川門											
					石川門											
					石川門											
					63	10		陶器	鉢	石川門	落ち込み 1					
石川門	落ち込み 1															
石川門	落ち込み 2															
石川門	落ち込み 2															
石川門	落ち込み 3															
石川門	落ち込み 3															
石川門	落ち込み 5															
石川門																
石川門																
石川門																
石川門																
石川門																
石川門																
石川門																

イノ川 桐子出土遺物調査表

図録 図号	発掘 時期	発掘 場所	種類	器種	調査区	遺構	出土位置	法目	器形・文様の特徴	胎土・色調	備考	図面番号
83	5	肥前	陶器	埴輪2 輪	丸塚園	遺構	4層 高台径4.7	法目	ときん状の高台内面	構が溶けている	とりに再利用で解離あり	A-29
	6	中国	明	陶器	青花繪	丸塚園	4層 高台径4.8		陶器で高台内面も盛り上がる		スワトウ「大明年造」	A-27
	7			陶器	青花画	丸塚園	4~5層 口径10.4、底径2.3、器高2.8		外周に蕉文、波線文：中央に十字花文	青味の輪	若簡底、漆繪が	A-28
	8			陶器	青花画	丸塚園	4層 口径10.4、高台径8.3、器高2.4		玉鬚了文		カンナ削り、	A-26
	9			陶器	青花画	丸塚園	4層 口径6.9、高台径7.4、器高18.3		外周に蕉文	青味の輪	3715	A-1
	10	肥前	陶器	皿	丸塚園	4層	口径11.1			外周に輪割高		B-151
	11			陶器	小林	丸塚園	4層 口径7.4、高台径5.4、器高3.8			白色に要質	破損か?	D-31
	12			陶器	天目繪	丸塚園	4層 口径10.4					D-28
	13			陶器	黒	丸塚園	底径4.5					D-35
	14	瀬戸	天徳	陶器	黒	丸塚園	高台径5.8				面施輪、貫入	D-152
	15	肥前	陶器	皿	丸塚園	4層	高台径4.7				砂目	D-34
	16			陶器	黒	丸塚園	高台径6.2				砂目	D-32
	17			陶器	黒	丸塚園	口径9.8、高台径3.4、器高2.7			緑色の灰輪	断土目	D-33
	18	予備?	磁器	内輪皿	丸塚園	4層	口径6.0		見込みとの境に段	小石裏、輪むらあり	陶器質、砂目録	D-153
	19			陶器	黒	丸塚園	口径36.4		茶~黒褐色の裏輪			D-29
84	1	越前	陶器	器り鉢	丸塚園	4層	口径36.4		皿縁内面に凹輪	長石、石英		D-7
	2	肥前	陶器	器り鉢	丸塚園	4層	口径16.1			緑色の灰輪	外周に輪	D-6
	3	肥前	陶器	鉢	丸塚園	4層	口径16.1			長石、石英	底面に土質	D-8
	4			土器	黒	丸塚園	口径5.1、器高1.9			石英：淡赤灰色		D-27
	5				丸塚園	4層	口径8.9、器高1.7		滑い	カクセン石		D-26
	6				丸塚園	4層	口径3.7、器高2.0		口径縁部つまみ上げ	石英、金雲母		D-40
	7				丸塚園	4層	口径18.8、器高2.6		黒灰色			D-36
	8				丸塚園	4層	口径18.2、器高1.8		石英、カクセン石：灰白色			D-37
	9			土器	黒	丸塚園	口径13.6、器高2.3			打噴油痕		D-23
	10				丸塚園	4層	口径12.6、器高1.5			カクセン石裏		D-38
	11				丸塚園	4層	口径11.3、器高1.9			カクセン石、石英、長石		D-39
	12				丸塚園	4層	口径11.8、器高1.9					D-24
	13				丸塚園	4層	口径14.0、器高2.4			断土2類、灰白色	金雲り、脈状斑痕、打噴油痕	D-1
85	1			土器	とりに 折口	丸塚園	4層	口径5.3、器高2.4		黒く着色		D-25
	2				丸塚園	4層砂土	口径7.8		先周は輪に対して割め		破損付否	D-11

石川橋出土：磁物観察表

資料番号	種別	種別2	器種	調査区	遺構	出土位置	位置	形状・文様の特徴	胎土・色調	備考	火周番号
85	3	土器	胎口	伏床区	4層砂上	口径10.1					D-10
	4	土器	胎口?	伏床区	4層砂上					内型か? スワトラ、摩羅	D-12
87	1	中国 明	青花碗	伏床区	5層	口径12.3、器高8.1、高台径10.7	外面：芭蕉文、内面：系地粗く横間あり 十字花文				
	2					高台径8.4	見込み輪割ぎ、高台内面とぎん伏				A-10
	3					口径3.4	外面芭蕉文				A-7
	4					口径11.7	口縁施反				A-71
	5					高台径6.8					A-70
	6					高台径8.1、	特麗な取り画1				A-101
	7	越前	陶器	伏床区	5層		白磁胎				D-41
	8						長石：淡褐色				D-42
	9										D-8
	10	土器	ペンデュロ	伏床区	5層	口径9.5、器高3.7	外面花文				D-247
91	1	中国 明	磁器	伏床区	6層	口径11.1	香味の輪				A-5
	2					口径10.1	朝灰色の系地				A-69
	3					高台径5.1	灰体の系地				A-3
	4										A-24
	5					口径2.5	内面花文				A-8
	6					高台径5.2	外面牡丹草				A-4
	7					高台径5.8					A-2
	8					口径1.0					A-8
105	9	中国	磁器	伏床区	6層						A-11
	10	土器	青磁	伏床区	7層	口径9.3、器高2.7	長石、石英：淡褐色				D-3
	11	中国 朝	土器	伏床区	6層	口径2.5、器高1.8	石英、長石				D-2
	12	土器	磁器	伏床区	6層	口径7.7、器高1.9	石英：淡赤灰色				D-4
	13					口径8.1、器高1.8	赤色鉄、石英、長石：淡褐色				D-5
	14	中国	陶器	伏床区	7層						D-246
	1	中国 朝	磁器	石川門 盛上1	白鳥側	口径10.8	石英、長石				A-120
	2					口径4.3	高台内面下がる				A-82
	3						軸の置き取り				A-167
	4										A-78
	5										A-81
	6	越前	土器	石川門 盛上1	石宮南	口径19.2	胎土は灰色				D-205
	7					口径3.7	内外面施青輪				D-204
8					口径14.2、器高2.0、口径6.5	石英				D-73	
9					口径11.9、器高1.3、口径7.9	長石、赤色鉄、淡褐色				D-75	
10					口径11.0、器高2.8、口径5.5	赤灰色				D-77	

石川橋出土遺物観察表

年 26号	編號	特別注 士器	器種	調査区	遺構	出土位置	法量	高形・文様の特徴	胎土・色澤	備考	火焼番号
105	11		皿	石川門 遺上1	遺上1	白鳥欄	口径11.0、器高2.8、底径6.7 口径12.2、器高2.8、底径6.7	内面に単体の片梨 長石、石英、麻線骨針；赤 灰色			D-74 D-76
114	1	中田 朝	磁器	石川門 遺上2	遺上2	アゼ2	口径12.5 底径5.3	口縁部歪み11		入谷手 入谷手	A-122 A-121
	2				遺上			外面歪			A-119
	3										A-79
	4										A-138
	5			石川門 遺上2	遺上2	石川門 遺上2	口径12.4 口径14.1	外面歪		片梨があった輪	A-96 A-17
	6										D-288
	7			石川門 遺上2	遺上2	角皿	口径8.4、高台径6.1	外面歪、内面牡丹唐草			A-163
	8			石川門 遺上2	遺上2	皿	口径5.5、器高1.7				A-95
	9			石川門 遺上2	遺上2	皿		外面凹、内面平		葉地は黄白色、白色の長石 志月か？	D-213 D-182
113	1	中田 朝	磁器	石川門 遺上2	遺上2	アゼ1下	口径12.8	外側に1本の凸帯			A-180
	2			石川門 遺上3	遺上3	アゼ6区	口径13.2	外面焼文		四人	A-181
	3			石川門 遺上3	遺上3	アゼ8区	口径14.4	外面歪			A-89
	4						口径12.5	蓮菊文			A-160
	5						口径12.0				A-87
	6						高台径5.2	カンナ柄り		大朝成口造	A-184
	7			石川門 遺上3	遺上3	8区	高台径4.3			無文	A-159
	8			石川門 遺上3	遺上3	8区	高台径6.3				A-187
	9			石川門 遺上3	遺上3	アゼ1下	口径7.3、器高4.3、高台径2.3	龍文、アルファベット		輪の跡み	A-83
	10			石川門 遺上3	遺上3	8区	口径13.7				A-159
	11			石川門 遺上3	遺上3	アゼ1下	口径6.5	端反り、外面			A-85
	12						口径6.2、器高3.8、高台径2.1	端反り、外面水花			A-115
	13						口径8区	端反り、外面			A-86
	14						口径11区	端反り、外面			A-108
	15						口径10区	端反り、外面			A-157
	16						口径3区	良湯み夜折花		陶加心	A-84
	17			石川門 遺上3	遺上3	石川外	口径14.4	内面牡丹唐草			A-83
	18			石川門 遺上3	遺上3	8区	口径10.8	葉気文		水を受けている、 片梨	A-103
	19			石川門 遺上3	遺上3	石川外					A-60
	20			新倉町9	新倉町9		口径4.7、器高2.1、底径3.3				A-58

石川 朝日 土 遺物 発見 調査 表

表号	表別1	表別2	表種	表名	調査区	遺構	出土位置	法尺	形状・文様の特徴	胎子・色調	備考	表番
119	21	肥前	磁器	白磁	石川門	壺土3	4、7、8区	口径9.6、器高7.2、高台径6.0		緑がかる	薄れ砂、輪の生掛け	A-12
	22						石川外 壺有径5.6					
120	1	肥前	陶器	釉	石川門	壺土3	壺9区	口径8.8、器高8.5、高台径4.0	削り出し高台		輪の生掛け	A-112
	2						壺8区 底径4.7		高台に砂目跡	高台全面に灰釉		D-15
	3						壺2区 口径8.8					D-170
	4						7ヤシ、口径11.3					D-173
	5	瀬戸支遣	陶器	釉	石川門	壺土3	壺8区 高台径5.2		削り出し高台	全面に緑色の釉	全面釉施	D-183
	6	肥前	陶器	面	石川門	壺土3	壺8区 口径13.8					D-189
	7						壺5区 底径4.8		削り出し高台	緑色の灰釉、輪の光沢剥著	砂目	D-171
	8	不明	陶器	青釉	石川門	壺土3	壺1区 底径5.8		削り出し高台、外面全面まで	底面に印「高?」、同	一側体口縁あり	A-77
	9	肥前	陶器	面	石川門	壺土3	壺下3区 口径13.2				青緑面	D-188
	10						壺10b 口径12.7				青緑面	D-175
	11						壺下3区 口径13.2		口縁やや青緑状			D-174
	12			林	石川門	壺土3	壺8区 口径			四重状口縁		D-192
	13			皿	石川門	壺土3	3、4区 口径14.0、器高4.0、高台径4.3		四角形の口縁、口縁に鉄釉の幾何文			A-192
	14						8区 口径26.7、器高6.8、高台径7.3	削り出し高台			砂目跡	D-19
121	1	肥前	陶器	面	石川門	壺土3	7ヤシ上 口径22.3				砂目跡、高台に切りこみ	D-14
	2			白磁	石川門	壺土3	壺上層 口径16.2		口縁小さな青緑	輪の掛け分けの文様		D-177
	3			面	石川門	壺土3	石川外 口径25.6、器高7.1、底径3.7			輪が溶けてざらざらしている		D-187
	4						8区 口径24.4				液熱で輪がとける、砂目跡	A-16
	5						石川外 口径38.5					D-197
	6				石川門	壺土3	口径32.9、器高11.2、高台径10.8	高台削り出し			鉄灰津、砂目	D-176
122	1	肥前	陶器	磁鉢	石川門	壺土3	6区 口径34.8		口縁受け11	口縁灰釉		D-157
	2						7ヤシ 口径34.0					D-182
	3						8区 口径34.7		口縁凹状	口縁鉄釉		D-158
	4	越前	陶器	磁鉢	石川門	壺土	壺面 底径10.5		削り出し高台(反母計面あり)	底石		D-189

石川橋出土遺物観察表

群	種別1	種別2	品種	調査区	遺構	出土位置	法量	形態・文様の特徴	粘土・色調	備考	実測番号	
122	5	瀬戸文型 陶器	瓶	石川門 壺上3	壺上3	5区	口径9.3		黒空受けて少し軸が折ける	大口	D-186	
	6		所縁皿	石川門 壺上3	7区	アゼ1下	口径10.4		黒色の軟物	黒瀬戸	D-184	
	7		壺	石川門 壺上3	アゼ1下	石川外	口径11.2		外面の軟物	粗空受容1縁	D-182	
	8				3区	アゼ1上	口径12.0, 壺高2.7, 底径5.0	内面当て貝殻状の取あり	黒色の軟物	口縁縁なし	D-187	
	9	壺中瀬戸 陶器		石川門 壺上3		3区	口径12.0, 壺高2.7, 底径5.0	筒印花, 身付底	黒褐色～黒色の軟物	見込み印花	D-20	
	10						口径12.2, 壺高2.9, 底径5.4	筒印花, 身付底	黒色の軟物	見込み印花, 重ね焼痕	D-19	
	11						口径11.4, 壺高2.9, 底径5.4	身付底	黒色の軟物	見込み印花	D-18	
	12						口径28.9, 壺高11.4, 底径16.8	外面ラクロイ溝者, 軟物	粗い灰石, 石灰, 瀬戸回転糸切り	底面回転糸切り	D-249	
	123	1	瀬戸 陶器	陶器	石川門 壺上2	アゼ1上	アゼ1上	口径28.9, 壺高11.4, 底径16.8	筒印花, 重ね焼痕の段	石灰, 灰石, 内外面鉄錆輪	瀬戸底	D-183
	2						アゼ1下		赤褐色			
	3	肥前 陶器	陶器	石川門 壺上3	壺上3	8区	底径10.5		回転糸切り, 身付底	底面回転糸切り	D-189	
	4						底径10.3		灰石小粒		D-180	
5								筒筒色の軟物	内面当て貝殻	D-185		
6	朝鮮 陶器	徳科	石川門 壺上3	壺上3	段8, 9区			肩部に二本の灰線, 内面当て貝殻	軸の掛け分け	D-186		
7						5区		内面当て貝殻				
8						口径9.1, 壺高3.3		外面灰色, 内面赤褐色	軟物	D-184		
9						口径9.9, 壺高1.6, 天井径5.3				D-188		
10										D-80		
11						口径4.7				D-141		
12						口径5.7				D-139		
13						口径4.5				D-140		
124	1	土器	土器	石川門 壺上3	壺上3	1区	口径13.9, 壺高2.1, 底径9.9		地上1期, 海緑青片	底面	D-137	
	2						口径12.2, 壺高2.4, 底径6.9				D-307	
	3						口径13.5, 壺高2.4, 底径9.5				D-334	
	4						口径12.7, 壺高2.5, 底径8.2				D-306	
	5						口径18.5, 壺高2.3, 底径6.9				D-308	
	6						口径13.5, 壺高2.3, 底径7.9				D-333	
	7						口径14.6, 壺高2.4, 底径5.6				D-364	
	8						口径12.7, 壺高2.7, 底径5.0				D-318	
	9						口径14.4, 壺高2.7, 底径7.5				D-273	
	10						口径13.4, 壺高2.4, 底径8.5				D-272	
	11						口径15.0, 壺高2.9, 底径5.9				D-271	
	12						口径8.0, 壺高2.1, 底径1.8				D-272	

石川郡出土・埋物観察表

表号	地区	種別	器種	調査区	遺構	出土位置	法量	形状・文様の特徴	粘土・色澤	備考	火海番号
124	13	土器	甕	石川門	盛土3	5区	口径3.4, 高さ2.0, 底径2.2				D-348
	14						口径3.6, 高さ2.1, 底径1.8				D-347
	15						口径10.0, 高さ2.3, 底径4.3		粘土3層	灯明油皿、磨状圧痕	D-277
	16						口径10.6, 高さ2.3, 底径				D-349
	17						口径9.1, 高さ2.4, 底径2.5				D-346
	18						口径10.6, 高さ2.2, 底径6.6		粘土3層、小礫多い、カクセン行番		D-98
	19						口径、高さ、底径		粘土2層?、金葉母、カラモン石	灯明油皿	D-97
125	1	土器	甕	石川門	盛土3	5区	口径13.4, 高さ2.5, 底径7.8		粘土12層	灯明油皿、磨状圧痕	D-95
	2						口径12.7, 高さ2.7, 底径6.5		粘土1層?	灯明油皿	D-278
	3						口径12.8, 高さ2.2, 底径7.0		粘土3層	灯明油皿	D-96
	4						口径12.8, 高さ2.3, 底径6.0		粘土1層	灯明油皿、磨状圧痕	D-99
	5						口径13.5, 高さ2.4, 底径6.8		粘土2層、2~3層の礫、カラモン石	磨状圧痕	D-100
	6						口径13.0, 高さ2.3, 底径6.4		粘土2層	焼成甘く軟質	D-101
	7					6区	口径8.0, 高さ2.0, 底径3.2		粘土2層、カクモン石		D-383
	8						口径10.0, 高さ1.8		赤褐色、金葉母、海綿状片		D-90
	9						口径11.0, 高さ、底径		粘土3層		D-384
	10						口径13.3, 高さ2.0, 底径7.0		粘土3層		D-385
	11						口径13.1, 高さ2.4, 底径5.8		粘土2層、カクモン石	磨状圧痕	D-283
	12						口径13.4, 高さ2.5, 底径8.0		粘土2層	灯明油皿、内面に磨痕	D-382
	13					黒色土灰	口径14.2, 高さ2.0, 底径9.2		粘土2層、カクモン石		D-280
	14					黒、6区	口径12.8, 高さ2.7, 底径6.4		粘土3層	灯明油皿	D-279
	15					6区	口径12.2, 高さ2.6, 底径7.5		粘土3層		D-94
	16					黒色土灰	口径13.7, 高さ2.6, 底径8.5		粘土3層	灯明油皿	D-85
	17					黒、6区	口径12.8, 高さ2.4, 底径7.2		粘土3層	灯明油皿、磨状圧痕	D-83
	18					6区	口径13.8, 高さ2.7, 底径8.3		粘土3層	灯明油皿	D-81
	19					黒色土灰	口径12.7, 高さ2.7, 底径5.8		粘土3層	灯明油皿、磨状圧痕	D-84
						黒、6区					
126	1	土器	甕	石川門	盛土3	6区	口径13.4, 高さ2.3, 底径5.6		粘土2層?	灯明油皿	D-282
	2						口径13.6, 高さ2.8, 底径5.5		粘土2層、カクモン石	灯明油皿	D-82
	3						口径13.5, 高さ2.7, 底径8.5		粘土3層	灯明油皿	D-82
	4					アゼ1, 7区	口径13.6, 高さ2.4, 底径4.0		粘土2層、	灯明油皿、磨状圧痕	D-925
	5					7区	口径12.5, 高さ2.4, 底径6.2		粘土3層	灯明油皿、磨状圧痕	D-106
	6						口径11.4, 高さ2.4, 底径4.8			灯明油皿	D-105
	7						口径13.5, 高さ2.6, 底径7.4		粘土3層	灯明油皿	D-122

石川橋出土土遺物観察表

大塚333号	種別	母形?	器種	調査区	遺構	出土位置	法量	器形・文様の特徴	胎土・色調	備考	実測番号
126	8		土器	調査区 石川門	遺構 壘T3	出土位置 7区	口径13.8, 器高2.6, 底径19.0		胎土3類	灯明油皿	D-104
	9					7-41下 7区	口径12.8, 器高2.6, 底径8.7		胎土3類	灯明油皿、磨状圧痕	D-322
	10					7区	口径13.5, 器高2.8, 底径10.0		胎土2類	灯明油皿	D-117
	11					7, 8区	口径13.2, 器高2.4, 底径9.0		胎土2類、カタセソ石	灯明油皿	D-337
	12					7区	口径13.7, 器高2.8, 底径10.3			灯明油皿	D-129
	13						口径13.6, 器高2.5, 底径10.2			灯明油皿	D-103
	127	1	土器		壘T3	7区	口径13.2, 器高2.6, 底径9.1		胎土1類、海綿骨片		D-121
	2					7-42	口径11.8, 器高2.1, 底径8.3				D-107
	3					6, 7区	口径12.8, 器高2.2, 底径9.3		胎土2類?	磨状圧痕	D-323
	4					7区	口径13.1, 器高2.8, 底径9.2		胎土2類?, カタセソ石		D-113
	5						口径12.9, 器高2.2, 底径8.9		胎土3類	磨状圧痕	D-102
	6						口径16.6, 器高3.4, 底径13.0		胎土2類?		D-118
	7					8区	口径13.9, 器高2.2, 底径10.0		胎土3類	灯明油皿	D-127
	8						口径17.6, 器高3.4, 底径13.5		胎土1類	灯明油皿、磨状圧痕	D-281
	9						口径13.4, 器高2.5, 底径9.4		胎土2類	灯明油皿	D-114
	10						口径13.3, 器高2.3, 底径9.3		胎土2類、カタセソ石	灯明油皿	D-292
	11						口径13.5, 器高2.1, 底径9.8		胎土2類、海綿骨片	灯明油皿	D-110
	12						口径12.6, 器高2.4, 底径7.3		胎土2類	灯明油皿	D-109
128	1		土器		壘T3	8区	口径13.4, 器高2.9, 底径9.6		胎土2類	灯明油皿、磨状正痕	D-112
	2						口径13.5, 器高2.8, 底径9.8		胎土2類	灯明油皿、磨状正痕	D-123
	3						口径13.2, 器高2.8, 底径9.1		胎土2類	灯明油皿、磨状正痕	D-113
	4					黒色土灰 層、8区	口径12.2, 器高2.4, 底径7.7		胎土2類	灯明油皿、磨状圧痕	D-279
	5					8区	口径13.5, 器高2.7, 底径9.3		胎土2類	灯明油皿	D-357
	6					黒色土灰 層、8区	口径13.1, 器高2.8, 底径8.7		胎土1類?, 海綿骨片	灯明油皿、磨状正痕	D-289
	7					8区	口径13.6, 器高2.8, 底径9.5		胎土2類、カタセソ石	灯明油皿	D-115
	8						口径12.5, 器高2.7, 底径8.8		胎土4類?	灯明油皿	D-351
	9						口径13.2, 器高2.8, 底径9.8		胎土1類、カタセソ石	灯明油皿	D-353
	10						口径13.2, 器高2.8, 底径9.5		胎土2類	灯明油皿	D-126
	11						口径12.6, 器高2.6, 底径8.6		胎土3類	灯明油皿	D-124

石川橋出土遺物観察表

資料	発掘	種別	器種	調査区	通橋	出土位置	法量	器形・文様の特徴	胎土・色調	備考	実測番号
128	12	土器	■	石川門 壺13	8区	口径13.4, 器高2.4, 底径3.7		胎土2期, 陶線青片	灯明油瓶		D-128
129	1	土器	■	石川門 壺13	8区	口径13.2, 器高2.8, 底径3.7		胎土3期	胎土2期, 陶線青片	1ヶ所の灯明油瓶、高D-118	D-118
	2					口径13.6, 器高2.3, 底径3.3		胎土2期, 陶線青片	灯明油瓶		D-188
	3					口径13.3, 器高2.6, 底径3.3		胎土2期	磨状片磁		D-129
	4					口径13.2, 器高2.6, 底径3.7		胎土1期, カクセン石	灯明油瓶		D-283
	5					口径13.3, 器高2.7, 底径3.8		胎土2期, カクセン石、陶線青片	灯明油瓶		D-281
	6					口径13.8, 器高2.4, 底径10.0		胎土2期, カクセン石	灯明油瓶、磨状片磁		D-274
	7					口径15.0, 器高2.6, 底径3.8		胎土1期			D-287
	8					口径13.2, 器高2.6, 底径3.7		胎土1期			D-327
	9					口径14.3, 器高2.3, 底径10.0		胎土2期, カクセン石	磨状片磁		D-292
	10					口径13.7, 器高2.3, 底径3.7		胎土1期			D-303
	11					口径14.8, 器高2.2, 底径3.8		胎土2期, カクセン石	磨状片磁		D-288
	12					口径13.3, 器高2.4, 底径10.0		胎土1期			D-81
	13					口径13.6, 器高3.3, 底径8.4		胎土1期			D-111
130	1	土器	■	石川門 壺上3	8区	口径10.5, 器高2.2, 底径7.4		赤灰色、淡褐色、胎土2期?	二次的盛焼		D-128
	2					7.4, 8.1	口径12.4, 器高2.0, 底径10.0				D-355
	3					8区	口径12.7, 器高2.8, 底径8.5				D-387
	4					0	口径13.6, 器高2.5, 底径8.5		赤灰色、胎土2期?、カクセン石	磨状片磁	D-326
	5					0	口径12.3, 器高2.5, 底径8.1		胎土2期	灯明油瓶	D-313
	6					0	口径12.7, 器高2.8, 底径8.3		胎土3期	胎土2期	D-321
	7					0	口径13.5, 器高2.7, 底径8.3		胎土3期, カクセン石	内底面にまで油瓶、磨状片磁	D-320
	8					1.0a区	口径12.8, 器高2.5, 底径8.4		胎土2期	灯明油瓶、磨状片磁	D-312
	9					1.0a区	口径12.8, 器高2.6, 底径9.3, 7.4		胎土2期	灯明油瓶、磨状片磁	D-311
	10					1.0a区	口径13.3, 器高2.4, 底径8.2		胎土2期, カクセン石	灯明油瓶	D-315
	11					1.0a区	口径12.8, 器高2.8, 底径7.8		胎土2期	灯明油瓶、磨状片磁	D-310
	12					1.0a区	口径13.4, 器高3.2, 底径8.3		胎土1期		D-314

石川橋出土遺物観察表

種別	種別	種別	調査区	出土位置	法量	形状・文様の特徴	胎土・色調	備考	収蔵番号
130	13	土器	石川門	4, 5, 8, 10 区	口径13.4, 器高2.7, 底径8.3		胎土1類	横口庄底	D-349
	14								
131	1	土器	石川門	アゼ1	口径14.7, 器高3.2, 底径9.2		胎土2類		D-335
	2				口径7.7, 器高2.2, 底径3.8		赤灰黄色、胎土1類に似る		D-146
	3				口径7.6, 器高1.5, 底径4.4		胎土2類、カクセン石目立つ		D-132
	4				口径8.1, 器高1.8, 底径4.5				D-147
	5				口径8.2, 器高2.3, 底径4.7		胎土2類、カクセン石、金葉母		D-343
	6				口径7.3, 器高2.2, 底径4.8		胎土2類、カクセン石、金葉母		D-340
	7				口径7.6, 器高2.6, 底径3.7		胎土2類?	物っぽい	D-341
	8				口径8.6, 器高1.8, 底径3.7		胎土2類?		D-342
	9				口径9.6, 器高2.3, 底径4.2		胎土2類		D-319
	10				口径10.2, 器高2.7, 底径6.4		胎土2類	灯明油瓶、磨状庄底	D-286
	11				口径12.6, 器高2.2, 底径8.4		胎土2類	灯明油瓶	D-238
	12				口径13.1, 器高2.5, 底径9.3		胎土2類	灯明油瓶、磨状庄底	D-233
	13				口径13.4, 器高2.8, 底径9.9		胎土3類、海綿骨片	灯明油瓶1ヶ所、磨状庄底	D-300
	14				口径11.4, 器高2.3, 底径7.9		胎土1類		D-339
	15				口径11.3, 器高2.5, 底径8.2		胎土1類	外面に磨面、磨状庄底	D-276
	16				口径13.6, 器高2.3, 底径9.3		胎土1類? 金葉母、カクセン石	灯明油瓶	D-288
					口径12.6, 器高2.9, 底径8.1		赤灰色、胎土1類?、金葉母	二次的磨面か	D-295
132	1	土器	石川門	アゼ1下	口径13.4, 器高2.6, 底径9.2		胎土1類、海綿骨片	灯明油瓶、磨状庄底	D-328
	2				口径13.5, 器高2.8, 底径9.2		胎土1類、海綿骨片	灯明油瓶、磨状庄底	D-317
	3				口径13.3, 器高3.2, 底径9.2		胎土2類	灯明油瓶、磨状庄底	D-297
	4				口径12.8, 器高2.6, 底径9.3		胎土2類	灯明油瓶・底面指ナデ	D-144
	5				口径12.6, 器高2.5, 底径9.2		胎土2類	灯明油瓶	D-330
	6				口径13.7, 器高2.8, 底径9.8		胎土2類	灯明油瓶	D-318
	7				口径9.7, 器高2.4, 底径5.4		胎土3類	灯明油瓶	D-331
	8				口径10.8, 器高2.3, 底径5.8		胎土3類	灯明油瓶	D-301
	9				口径10.2, 器高2.4, 底径6.1		胎土1類	内面に磨面	D-332
	10				口径13.4, 器高2.8, 底径8.7		黒褐色、カクセン石、石莖	内面に磨面	D-344
	11				口径10.6, 器高2.3, 底径5.4			灯明油瓶	D-133
	12				口径10.6, 器高2.1, 底径5.8			灯明油瓶	D-143

石川佛出土遺物観察表

行列	種別1	種別2	器種	調査区	遺構	出土位置	法台	高形・文様の特徴	胎土・色別	備考	実測番号
132	13	土器	皿	石川門	溝土3	アセ1	口径11.8, 器高2.2, 底径7.7		胎土2類	灯明油皿	D-142
133	2	土器	皿	石川門	溝土3	アセ1	口径13.4, 器高2.6, 底径8.6 口径13.9, 器高2.6, 底径8.9		胎土2類	灯明油埴・磨状圧痕、 ナデによる歪み激しい	D-130 D-135
	3						口径13.1, 器高2.6, 底径8.4			灯明油皿	D-134
	4						口径12.7, 器高2.5, 底径8.7			灯明油皿	D-131
	5						口径13.3, 器高2.7, 底径10.0		胎土2類	灯明油皿	D-136
	6						口径13.5, 器高1.9, 底径9.6		胎土2類?、2~3mmの磯、 カクセン石目立つ	灯明油皿	D-145
	7					アセ2	口径13.3, 器高2.8, 底径9.2		胎土2類	灯明油皿	D-324
	8						口径12.3, 器高2.3, 底径8.2		胎土1類	磨状圧痕	D-360
	9						口径12.8, 器高3.1, 底径7.0		胎土2類	灯明油皿	D-302
	10						口径13.1, 器高3.6, 底径7.0		胎土1類		D-281
	11						口径14.1, 器高2.7, 底径8.6		胎土1類、海綿骨片	磨状圧痕	D-252
	12						口径13.8, 器高3.0, 底径8.9		胎土1類、金雲母		D-258
	13						口径13.2, 器高2.8, 底径8.4		胎土1類、海綿骨片	磨状圧痕	D-253
	14						口径14.7, 器高2.9, 底径8.7		胎土1類、海綿骨片	磨状圧痕	D-254
	15						口径14.4, 器高2.9, 底径8.6		胎土1類	磨状圧痕	D-259
	16						口径14.2, 器高3.0, 底径9.6		胎土1類		D-257
	17						口径13.4, 器高2.6, 底径8.0		胎土3類		D-260
134	1	土器	皿	石川門	溝土3	石田外	口径13.2, 器高2.5, 底径7.6		胎土2類、カクセン石、 雲母	灯明油皿	D-256
	2						口径13.6, 器高2.4, 底径8.3		胎土2類、カクセン石、 雲母	灯明油皿、磨状圧痕	D-286
	3						口径13.6, 器高2.2, 底径8.7		胎土3類、海綿骨片	非在地的器形、磨状圧 痕	D-255
	4					溝土	口径13.0, 器高2.6, 底径7.5		胎土2類、カクセン石	灯明油皿	D-68
	5						口径11.1, 器高2.5, 底径7.0		胎土3類?、海綿骨片	灯明油皿	D-68
	6						口径13.3, 器高2.7, 底径8.5		胎土3類	灯明油皿	D-98
	7						口径11.9, 器高2.2, 底径7.7		胎土3類	灯明油皿、磨状圧痕、 雲母	D-269
	8						口径13.2, 器高2.4, 底径8.3		胎土1類	灯明油皿	D-287
	9						口径11.4, 器高2.2, 底径6.9		胎土2類	灯明油皿、磨状圧痕	D-356
	10						口径13.6, 器高2.2, 底径7.2		胎土3類	灯明油皿	D-280
	11						口径13.5, 器高2.7, 底径8.7		胎土1類?	灯明油皿	D-264
	12						口径、器高、底径		胎土1類		D-366
	13						口径12.9, 器高2.2, 底径8.7		胎土3類?、カクセン石		D-358
	14						口径11.6, 器高2.5, 底径7.4		胎土3類	内外面に埋	D-82
	15						口径13.7, 器高2.3, 底径10.0		胎土3類		D-87

石川 輪 出 土 遺 物 観 望 表

期別	33区	32区	株別1	株別2	器種	調査区	遺構	出土位置	法量	器形・文様の特徴	胎上・色調	備考	実測番号
174	16	15	上器	土器	甕	石川門	盛土3		口径13.7, 高さ2.8, 底径5.7 口径12.3, 高さ2.5, 底径5.1 口径13.0, 高さ2.8, 底径5.8 口径15.3, 高さ2.1, 底径12.7	胎上2期、 胎上2期、カクセン石 胎上3期 赤灰色、胎上2期?カクセン石、石変	胎上2期 胎上2期 胎上3期	灯明陶器 筒状土甕	D-252 D-258 D-254 D-265
177	1	小田原	明	磁器	甕	石川門	盛土4		口径12.8 口径11.8	口縁部受口		裏面手 裏面手 文面手 文面手 文面手 裏面手 裏面手 製作り	A-123 A-89 A-176 A-125 A-126 A-90 A-118 A-92 A-110
	7				甕	石川門	盛土4	アゼ1	底径5.2	外面直文 カンテ彫り			A-56
	8				甕	石川門	盛土4	アゼ1等	底径8.8 口径15.2	外面直文 外面直文			A-182
	9				甕	石川門	盛土4	アゼ1	底径11.0 高さ径7.7	内面水鳥			A-87 A-89 A-84
	10				甕	石川門	盛土4		底径7.5				A-54
	11				甕	石川門	盛土4						A-18
	12				甕	石川門	盛土4						A-117
	13				甕	石川門	盛土4						A-116
	14	肥後	磁器	甕	甕	石川門	盛土4						A-93
	15	中国	明	磁器	角皿	石川門	盛土4						A-13
	16				甕	石川門	盛土4						A-109
	17				甕	石川門	盛土4						D-188
	18				甕	石川門	盛土1, 4						D-184
	19				甕	石川門	盛土4						D-190
	20				甕	石川門	盛土4						D-181
178	1	肥後	陶器	甕	甕	石川門	盛土4		口径14.0, 高さ3.0, 底径5.3 口径7.8, 高さ8.6, 底径5.3	被花 龍の肥子, 口縁外面直文			A-53
	2	唐, 支那	陶器	甕	甕	石川門	盛土4		底径4.4				A-108
	3				甕	石川門	盛土4	アゼ1	口径10.0				D-186
	4	肥後	陶器	甕	甕	石川門	盛土4		口径15.5				A-91
	5	青磁	磁器	甕	甕	石川門	盛土3, 4		口径18.3				
	6	中国	明	磁器	小器	石川門	盛土4						
	7	肥後	陶器	甕	甕	石川門	盛土4						
	8	中国	明	陶器	甕	石川門	盛土4		口径5.7				
	9				残片	石川門	盛土4						

子ノ川村出土土器物類調査表

号数	墓所	種別	器名	器種	調査区	遺構	出土位置	法量	器形・文様の特徴	胎土・色調	備考	実測番号														
178	10 横前	陶器	火鉢	石川門	盛土4	遺構	口徑16.9	底徑20.8	外部鉄片輪	灰石 石灰、灰石		D-195														
													口徑11.1, 器高2.6, 底徑6.1													
													了又上下													
													口徑8.2, 器高2.0, 底徑5.7													
													口徑12.8, 器高2.7, 底徑7.4													
													口徑8.0, 器高1.8, 底徑6.3													
													口徑11.3													
													白灰													
													口徑15.3													
													口徑14.7													
													口徑30.5													
													口徑5.9													
													182	1 中国 明	陶器	土器	石川門	盛土4	遺構	口徑4.7	底徑23.0, 底徑19.5	内面鉄輪, 外面灰輪	緑褐色の輪調、灰白色、すが入る		D-198	
																										口徑2.0, 底徑19.5
口徑2.7																										
口徑7.0																										
口徑5.4																										
口徑11.5																										
下部																										
口徑13.1, 器高2.4, 底徑8.3																										
口徑9.7, 器高2.3, 底徑6.1																										
底徑5.3																										
底徑8.4																										
底徑8.2																										
185	2 肥前	陶器	土器	石川門	未掘	遺構	口徑13.0, 器高2.5, 底徑8.8	口徑12.7, 器高2.2, 底徑8.0	赤褐色	赤褐色	輪+3層															D-250
													口徑13.8, 器高2.3, 底徑8.8													
													口徑11.5, 器高3.0, 底徑7.8													
													口徑13.0, 器高2.5, 底徑8.8													
													口徑12.7, 器高2.2, 底徑8.0													
													口徑12.3, 器高2.8, 底徑8.3													
													口徑13.8, 器高2.3, 底徑8.8													

報告書抄録

ふりがな	かなざわじょうあと いしかわもんどばし はつくつちょうさほうこく							
書名	金沢城跡 石川門土橋（通称石川橋）発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	伊藤雅文							
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒921 石川県金沢市米泉4丁目133番地（Ⅸ 0762-43-7692）							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
金沢城跡	金沢市丸の内	17201	01215	36度 33分 42秒	136度 39分 56秒	1992.10.2 — 1994.8.4	3.100	都市計画道路 路寺町今町 線道路整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
金沢城跡	城跡	安土桃山時代 江戸時代	土橋の盛土 辰巳用水石管 木樋導水遺構 白鳥堀石垣 百間堀石垣根石	輸入陶磁器（青花、 色絵、赤絵、祥瑞、 交趾三彩）、肥前陶 磁器（唐津 絵唐津、 二彩唐津、初期伊万 里など）、信楽窯、 瀬戸美濃系陶器、越 中瀬戸皿、刀装具、 キセル、瓦類、下駄、 箕、曲物、漆桶、木 樋、石管		土橋に構築に大きく6つの盛土 層を確認し、16世紀中頃の土橋、 16世紀末の上橋、17世紀前半の 土橋、18世紀末の土橋の、四つ の姿を確認し、近世の金沢城に ともなう遺構は後三者である。 前二者は金沢御堂に伴うもので ある。木樋は1632年の辰巳用水 の年代にきわめて近く、上の盛 土からは初期伊万里がでている		



P L A T E

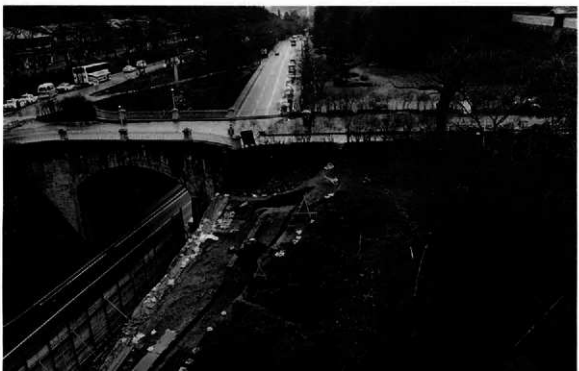




百間堀石垣
(沈床側側)



百間堀石垣
(兼六園側側)



白鳥堀石垣と
平成4年度調査区



百圓堀石垣(部分)



百圓堀石垣(部分)



百圓堀石垣(部分)



百間堀石垣(部分)



百間堀石垣(部分)



白鳥堀石垣(部分)



白鳥堀石垣(部分)



百間堀石垣(部分)



百間堀石垣(部分)



白鳥堀石垣



調査前の状況



第4層除去全景



第4層除去と土構



5 層除去全景



土橋盛土6の
版架の様子



7層除去



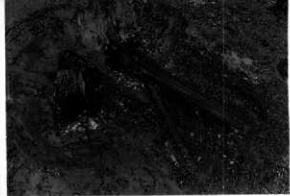
7層除去全景



7層除去全景



漆碗等



漆碗等



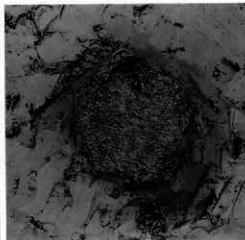
下駄



白磁



箕
7層出土遺物



わらじ



沈床園の堆積と
金沢城



調査区土層



百間堀石垣と
石垣外の状況



百間堀石垣
根固め状況



S D02と S X01



S D01と S X01



S D02-4と S X01



白鳥堀近代石垣



S D03 (05) と
S D06



(左) S D06
(右) 同蓋石除去



盛土1・2全景



瓦溜まり1
出土状況



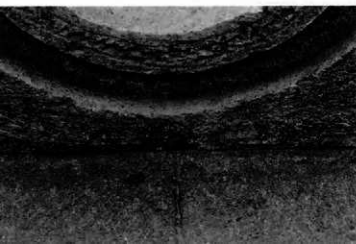
盛土2の土層



辰巳用水石管



石管と敷石細部





石管取り上げ
敷石状況



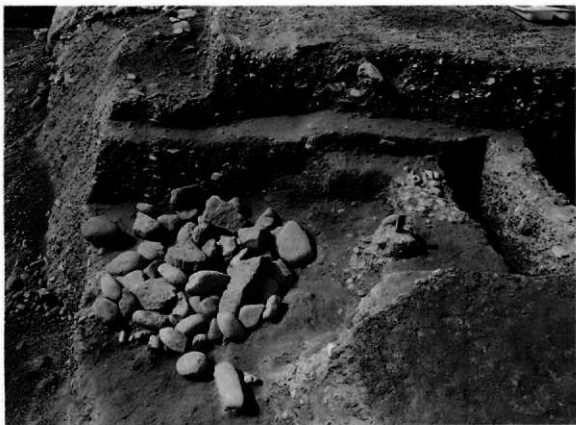
S X02と04



漆喰製土管の半截



S X02全景



S X04



(左) S X02土層
(右) 漆喰土管



盛土3上面全景



盛土3上面(部分)



盛土3上面(部分)



盛土3瓦溜まり
全景



盛土3瓦溜まり
(部分)



盛土3瓦溜まり
(部分)



盛土3瓦溜まり
(部分)



盛土3瓦溜まり
(部分)



盛土3瓦溜まり
(部分)



盛土4上面と
盛土3堆積状況



盛土4上面



盛土4上面



盛土4 全景



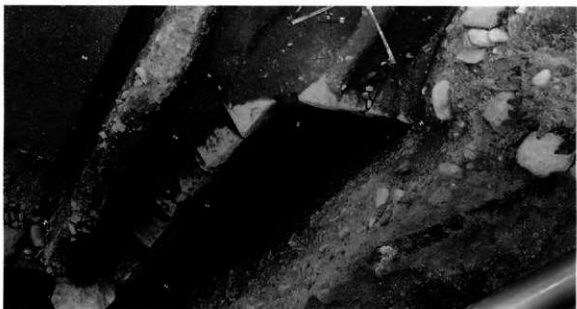
白鳥塚石垣と
盛土3



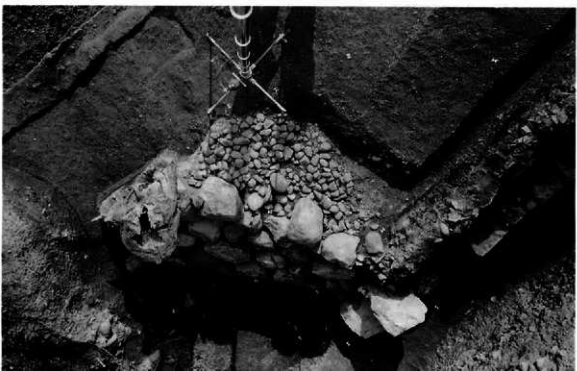
白鳥塚石垣と
石垣外の堆積



白鳥堀石垣全景



白鳥堀石垣
(上から)



白鳥堀石垣
(上から)



白鳥堀石垣(部分)



白鳥堀石垣(部分)



白鳥堀石垣(部分)



土橋断面



土橋断面
(白鳥塚石垣部分)



あぜ1断面



木樋出土状況



木樋全景



木樋全景



木樋掘り方



木樋と土橋1



木樋と土橋2



盛土4



掘り方遺物出土状況

支持受け



支持受け組み合わせ状況(1)



支持受け組み合わせ状況(2)



木桶 1 裏面



木桶 2 裏面





継ぎ手の状況



継ぎ手1



継ぎ手1



継ぎ手下の敷石



木樋下の
支持受けと枕木



木樋2下の枕木



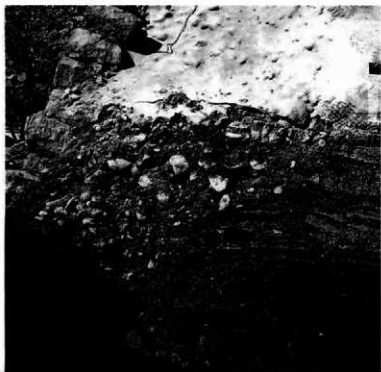
木樋1 継ぎ手
周辺



百間堀石垣根石



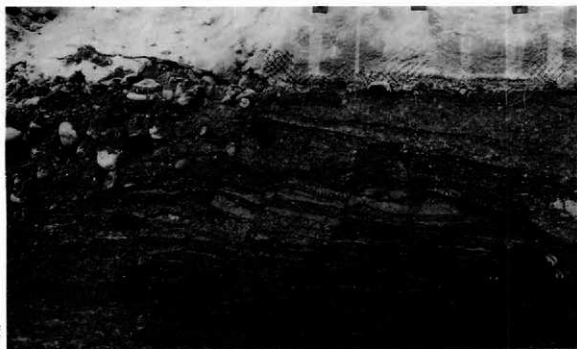
百間堀根石
(横から)



(左)根石付近
裏込め
(右)刷木



調査区壁面



盛土6上面



あぜ1盛土4



百間堀石垣裏込め
(部分)



盛土 5 下部 (部分)



盛土 5 下部 (部分)



盛土 5 下部 (部分)

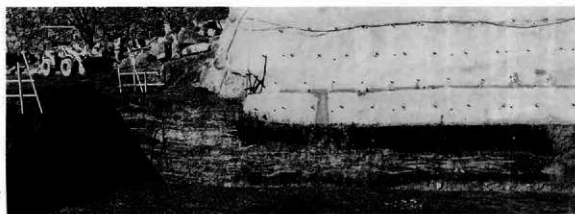
盛土6



盛土6



盛土6 石垣下



盛土6



盛土6 (拡大)





盛土 6



盛土 6 と 基盤層



谷の堆積土と
基盤層 (沈床園側)



谷の堆積土と
基盤層 (白鳥塚側)



土層断面(1)



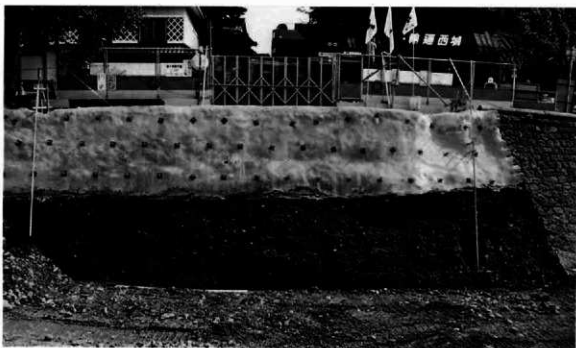
土層断面(2)



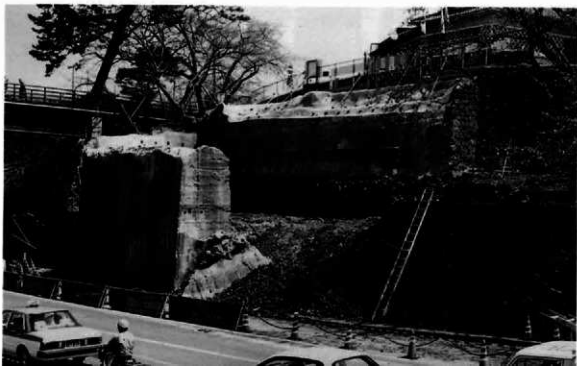
土層断面(3)



土層断面(4)



土層断面(5)



兼六園調査区
削削状況



土層断面(6)



土層断面(7)



百間堀石垣
相当部分



出土嗣木



土層断面(8)



旧地形の状況



基礎層と盛土6



基盤層(1)



基盤層(2)



基盤層(3)



調査区全景



たちわり2土層



瓦たまり



盛土と瓦たまり



16世紀包含層と盛土



仮構々台3



辰巳用水石管



石垣(南より)



石垣(北より)

金沢城跡石川門前土橋(通称石川橋)
発掘調査報告書Ⅰ

平成9年3月20日 印刷
平成9年3月30日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地1号
〒921 電話 (0762) 43-7692 番机

印刷 北國書籍印刷株式会社

